
IS インフィニット・ストラトス ~ 紺碧の烈風 ~

玉露飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～紺碧の烈風～

【Nコード】

N83680

【作者名】

玉露飴

【あらすじ】

突然降って湧いた転生チャンスに、されるがままに転生を果たした主人公『神城春馬』。とりあえずはデンジャー＆スリリングなIS学園生活の中で様々なイベントを体験し、青春(?)を駆け抜ける！

第一話 転生の準備が完了しました。（前書き）

ついに始まったIS二次創作。どうぞ宜しくお願いしますね。

第一話 転生の準備が完了しました。

「やあ少年。初めまして。いや、二度目ましてかな？」

俺の目の前で、この状況を楽しむように首を傾げている女性（見た目から判断した）。

身長は俺の背丈とほぼ変わらない、もしくは少し低く、全身まっ白のスーツを着ていた。しかしそれはところどころ着崩していて、スーツ特有の固い雰囲気は一切感じられない。手に持っている自分の顔ほどの大きさがある手鏡でリズムよく肩を叩いている当たり、俺にどこか抜けているような印象を与えた。

「いや『二度目まして』って。俺はあんたみたいな知り合いは居ないはずなんだが？」

「ありや冷たい。まあ仕方ないか。だって、君は全て忘れているもの」

当然だね、と一人勝手に納得して、何度も頷く女性。正直、さっぱりまるっとワケが分かん。

とりあえず目の前のワケ分からない女性ひとは置いておく。君子危うきに近寄らず、だ。よし、とりあえずここがどこか確認しよう。

前を確認、白一色。後ろを確認、白一色。上下左右、以下同文。

「なんじゃこりゃ」

俺は思わず大きな声で呟いた。視界に入る限り一面が白。トンネルを抜けたら銀世界だった、なんてレベルじゃない。トンネルを抜けたら異世界だった、のほうはまだ分かる。

「残念、異世界ではないのだよ。時間軸は一緒だからね。そうだなあ、分かりやすく言えば……神域？」

待て、なんで事情を知ってそうなお前が疑問系なんだ。ていうかお前がここに連れてきたんじゃないのか。ああもう、人差し指をあとに当てて可愛い子ぶって首をかしげるな。

「てか、神域だって？ ……じゃあ何だ。お前は神とでも言つつもりか？」

思わず俺の声が怒気を含む。こっちは突然ワケの分からない状況に陥っているのに、対して女性のほうは相変わらず飄々としてる。

こんな中で平常心など保っては入られなかった。

しかし、そんな苛立つ俺の様子など横に流すかのように、目の前の女性の雰囲気は全く崩れない。あごに当てていた指を離すと、ビシッと音が付きそうな勢いで俺の方を指差した。

「おお、察しが良くて助かる。これで説明の手間が省けたね。それじゃ本題だけど」

「いやいやいや待てい。おい、だから『どうしたの？』みたいな顔をするな。お願いだから説明を省かないでくれよ」

未だ自分の置かれている状況がさっぱり掴めていない俺は、足早に話題を移ろうとしていた神一（自称）を慌てて引き止める。本題というのも気になるが、とりあえずは状況説明だ。早くこのどこにいるか分からない不安な気持ちから開放されたいしな。

俺が全く察していなかったことに気づいたらしい女性、もとい神

（自称）は、何度が咳払いをして声色を調節すると、一転してだるそうに喋り始めた。

なんか、話の腰を折ったみたいで、すみませんでした。

「ま、とりあえず基礎のキソから。……輪廻転生って、聞いたことがある？ ハイって言え」

「ハイ」

何かものすごく色々言いたかったが、神（自称）の目が据わっていたので諦めた。俺でも一応輪廻転生くらい意味は知っているし。わざわざ説明させるのも無駄だろう。

「よし。その輪廻転生を管理してるのが私。そして君はその転生する前の魂。おK？」

「あ、ああ」

「異論は認めん」と神（自称）の顔に書いてあった。勿論、そういう雰囲気だったということだ。本当に書いてあったらビビる。

「君の顔に書いてやろうか。マッ〇ーで」

「すみませんでした。続けてください」

さすがにそんなことを油性で書かれたら嫌だ。当分は他の人に顔を見せられなくなる。神（自称）は手に持っていたそのマッ〇ーらしきものにフタをすると、残念そうに懷へしまった。

「基本的に魂は死を迎えると同時に私によって浄化され、もとのキ

レイな状態に還る。そうだね、牛乳瓶のリサイクルに近いかな」

人の魂を牛乳瓶と同じ扱いて。いいのか神（自称）よ。

「そうしてもとに戻った魂は別の肉体に憑依して、転生完了と。これが輪廻転生のおおまかな流れ。ほかにも色々人間には輪廻転生の定義があるみたいだけど、これが現実」

「そして本題に入るのだよ」と神（自称）は再び俺の方を指差す。なんだ、人のことを指差すのが趣味なのかコイツは。あ、俺は今アイツの話によると魂なのか？ よく分からん。

「君、今の説明で感じたことはない？ 制限時間は5秒。あいस्ताーと」

「えっ。えと、そうだなあ……神様は大変そうだなとおm」

「あい時間切れ」。そして不正解。ぼっしゅーとです」

知るか。ていうか正解とかあるのかよ。これって俺に今の説明についての感想を聞いたんじゃないのか？ ぼっしゅーとお前見てるのかよ。

俺は思わずため息を吐くが、相変わらず神（自称）はそのどこか抜けた雰囲気絶やさない。見た目からして歳は大体20前半だろうか。黙っていればそれなりにモテそうな感じではある。

「残念ながら神に時間という概念は通用しないのですよ。分かりやすく言うなら、アナログ時計の針の支点部分だね」

「さっきからさりげなく人の心を読むな。それに話が逸れてるぞ」

「あ、そうそう。ようするに輪廻転生は流れ作業ベルトコンベア。回収して洗って配達する。単調な仕事なのだよ」

確かに言われてみればそうかもしれない。死んでしまった人間の魂を集めて浄化し、再びその綺麗な魂を肉体に憑依させて生を与える。これはこれですごいことなのだが、ぶっちゃければそれだけなのだ。それ以外の行動は許されない。ベルトコンベアで流れてきた牛乳瓶にコーラを入れたら、それは欠陥品なのだから。

牛乳瓶はベルトコンベアで流れてくるのかは知らないが。

「お、その様子だと分かつちゃった感じかな？ よしよし。それで続けるけど、いい加減飽きちゃったワケ。変わることに無いこの作業に。人だって変化のない日常ほど、辛い事はないでしょう？」

「人間は元々神のなりそこないだしね」と後付けると、神（自称）は小さく笑った。その意外なまでに可愛らしい微笑みに一瞬目を奪われた俺は、すぐ気を取り返し首を振る。

おそらく見抜いているのであるう神（自称）は、いたずらが成功した子供のような笑みを浮かべる。何故か悔しい。

「今の君は最低限の知識と記憶だけを残して浄化された状態。もう自分の名前なんて分らないし、親族の顔も思い出せない。でもそれによって可能になることがあります。何でしょう、制限時間は5秒れでいごー」

「またかよ……。ええと、要するにアレだろ」

それが意味するのは、違う肉体への憑依。もとい転生。それ以外にない。

「正解。時間ギリギリだね。そう、君には今の知識と記憶を引き継いで転生してもらおうってワケよ。魂はたくさんあるんだもの。一つくらい問題ないのさ」

「でもなんで俺なんだ。そういうのってもっと他の、たとえば偉人とかにすればいいのに」

偉人の知識と記憶を持った人間が現れたなら、恐らく世界は大きく変わるはず。それが良い方向か悪い方向かは分からないが、俺みたいな一般人に対する処遇にしては特別すぎる気がした。

そんな俺の言葉を聞くと、目の前の神(?)は突然目元を押さえ上を向く。明らかに呆れているようだった。何か変なことを言った覚えはないのだが。

「あのね。私にとって人間の世界なんて知ったこっちゃないのよ。そっこののは別の神の仕事。これは私の私事みたいなものだから、私が自由に決める」

「じゃあ再度聞くけど……、どうして俺？」

「適当に選んだら君だった。以上」

なんつーありがたみの欠片もない話だったとは。少し神的な祭事を想像していた俺がまるでバカみたいじゃないか。

意気消沈する俺を尻目に、神(多分)はどこからか白紙の紙とマッ◯を取り出す。それ、さっきしまったマッ◯か？ キュポンと気味のいい音を立ててマッ◯のフタをとると、何かサラサラと流れるような速さで紙に何かを描いていく。

「神が紙に文字を書く……ぷ」

何故か俺の右手が目の中の神（多分）に向けて振り上げられていたのに気づいて、慌てて左手で抑える。今一瞬俺の中で何かが暴れた。そうに違いない。

神（多分）がそのA4サイズくらいの紙に書いていたのは、恐らくお札的な何かだろう。正月の神社で見かける文字がちらほらと書かれている。

「さて、どこに転生したい？　ちなみに、元々の世界は却下だよ。死んだはずの人間が生きてたら気持ち悪いからね」

「ああ、そんなだろうと思ってた。……ちなみにどんな世界があるんだ？」

突然、「転生の準備が完了しました」などといわれても普通の人間なら困る。どうやら俺も漏れなくその人間の一人のようだ。全くもって検討がつかない。

「そうだねね……。ベタな所で小説の世界とか」

「行けるのか？」

「もちろん、^{オリジナル}原作の世界は無理だよ。上からの指示でね。色々とパラドックスが出て面倒なんだってさ。代わりに原作に近い ^{レベル} ^{モメンタ} 平行世界なら問題無」

俗に言う『二次創作』の世界ってことか。そういう類を読んだかどうかは覚えてないが、どんなものかという知識だけは残っている。ちなみに記憶によれば生きているころの俺は結構小説を読んでい

たらしい。まあ、全部がライトノベル軽小説なのがアレだったが。

「じゃあ……そうだな。とある」

「あ、これとか面白そう。よし、これに決定ー！」

俺の意見をぶった切って、神（ふざけんな）はさっきのお札に何か書き足した。空白の中心を囲うようにして文字が配列されたそれには、マッ◯で大きくこう書かれていた。

『IS インフィニットストラトス』と。

「ふつ。完璧」

「人に振っておいて結局は自分で決めるのかよ」

「だって私による、私のための、私だけの暇つぶし目的なんだもの。君はその知識と記憶を持ったままもう一度生を受けるんだから、贅沢言わない」

そう言われるとなんとも言い返し難い。ここで我を通すと転生先で一生、罪悪感というトラウマに駆られそうだったので大人しく従うことにする。

しかしISか。ずいぶんとまあスリリングな人生になりそうだな。

「もちろん俺はISに乗れるよな？」

「そりゃね。普通に人生を真つ当されてもつままないし。それなりオプションの付加は付けるよ」

神（認めざるを得ない）は持っていたお札を、汚れ一つ無い白い床へと投げつけた。それが引き金^{トリガー}になったのか、魔方阵のようなものがお札を中心に一瞬で展開される。魔方阵はそれまで白一色だった床に紫色の模様を薄明るく浮かべ、ゆっくりと回転している。

「私はこの手鏡で君の人生を見ているからね。かといって手出しはしないし、口出しもしない。何か事故が起きて死ぬようならそれでゲームオーバー。助けてくれる、なんて期待はしないでね」

「もとよりお前がそんなことしてくれるとは思ってねえよ」

俺はそう言うと、神（なんだろうなあ）に勧められる通りにその魔方阵の中心に立つ。ていうかその鏡は浄玻璃鏡だったのか。閻魔なのかコイツ。

「禁則事項で」

「ネタで使っな。怒られるぞ」

ギリギリで神（ミハー）の言葉を遮る。いや、もうアウトっぽかったが、言い切られるよりかはマシだろう。俺の中で無理やり結論付ける。

俺が遮ったことに対して特に何か言うでもなく、神（未来人では無い）はボソボソと何かを呟き始めた。恐らく呪文かなにかだろう。今から転生すると思うと、何故か緊張してきた。

「ん。これでよし。後は私が指を鳴らせば転生するけど、最後の質問とかない？ もうここには意識を持ってはこれないだろうし」

「質問、ねえ」

今の俺は転生に対する期待と不安で正直もう緊張で頭が回らないのだが、せっかくだし何か適当に言っておこう。俺は数秒考えて、そういえば、と言葉を続ける。

「俺はなんで死んだんだ？」

「私が知るか」

パチン。

その神が鳴らした音は、鈴の音のように澄み切った音を響かせ、それと同時に俺の意識は遠くなっていく。

つか知るかってなんだよ。お前が聞いたんだろうが。

真っ暗な意識の向こう側で、いたずらな笑みを浮かべている神を見たような気がした。

「頑張ってね。転生者君」

第一話 転生の準備が完了しました。（後書き）

実はさりげなく自分の一人称練習の作品だったりします。
上手く書けていればいいのですが。

誤字脱字、感想やご意見等、気軽に送ってやってください。

でわまた〜ノシ

第二話 紺碧の烈風（前書き）

書き溜めていたものを放出。
どうぞ読んでやってください。

第二話 紺碧の烈風

俺がISの世界に転生してから早15年が過ぎた。

いや、別にこれといって話す事もなかったし、強いていれば原作の主人公の唐変朴オブ唐変朴ズこと、織斑一夏と面識を持った。

これもこれで小説のなかの人物と面識を持つこと自体がすごいことなのだが、今の俺にとってはここが現実。フツーに友達が増える感覚となら変わりはしないのだ。でもまあそれでも、最初はすこし緊張したかな。

そして俺はその時の転校生として織斑と知り合ったのだが、と。まだ俺の名前を言っただけだったな。俺の名前は神城春馬（かみしろ あずま）。よく「はるま」と呼ばれるが間違いだ。ここは強く主張しておく。あと「かみじょう」でもない。

そして両親はどうやらIS関係の研究者で、その仕事柄か、よく転勤する。それもまあ仕方ない気がする。ISは今や世界各国の注目の的なのだ。そしてIS関係の資料やデータは非常に少ない。それはISの生みの親『篠ノ之束（しのの の たばね）』の突然の失踪が原因でもあるのだが。

両親の名前は父親が神城聖（かみしろ ひじり）、母親が神城絆（かみしろ きずな）だ。この二人には感謝してもし切れない。

前世の記憶や知識を持って生まれるということはそれだけのアドバンテージがあるというわけで、俺は他の誰よりも主に脳の成長スピードが早かった。まあ、中学までの知識ならはつきりと覚えてい

るし、この辺りは当たり前なのだが。

なぜ中学までの記憶と知識しかないのかは分からない。

そして故に俺は、『天才』とか『神童』とか、そんな身に覚えの無い称号を親戚に付けられた。何回か新聞にも載ったことがある。大きい枠ではなかったが。

そんな俺に対して、この二人はとても良くしてくれた。それは自分達の転勤で振り回してしまっていることに対しての負い目から来るものかもしれないが、それでも家族の温もりを覚えていない俺にとっては身に余る程だった。

すこし話が逸れたな。えーと、確か一夏と会った時だっけか。

俺が一夏が通う小学校に転校してきたのは小学5年生の頃。確か原作では束の妹、篠ノ之箒（しののほづき）はその姉の影響で引っ越してしまっていたはずだ。うーん残念。ちらっと顔くらいは見ておきたかった。

しかしそれによって、もう一人の主要人物とも知り合いになれた。何とも言わず、鳳鈴音（ファンリンイン）その人だった。

そう、彼女も時間軸的にはこの時期に一夏の通う学校に転校してきている。だが、まさか同じ日に同じクラスになるうとは思ってはいなかった。これもお前の仕業か、神（今なにしてるんだ？）よ。

そして鈴のことで色々が一夏が頑張った後、中学1年生の時に鈴より早く転校した。あ、もちろん鈴の一件の時は俺も一夏に加わった。ただ見てるってワケにはいかなかったし。この無駄に事に突っ

込む辺り、一夏に当てられたかもしれないな。

だがその転校する事が決まった数ヶ月前、小學校生活もあと少しと言ったところでいきなり鈴に俺だけ呼び出された。あれ、なんで俺だけ。俺何か鈴に悪いことしたっけかな。と考えながら向かった俺に待ち受けていたのは、衝撃の出来事だった。

『料理の腕が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』

これには流石に驚いた。その場で「え？」と言って固まったほどだ。ずっと原作通り一夏に想いを寄せていると思っていたからなおさらだったし。

しかし今になって考えてみればこれはそんな意味ではないはずだ。俺がそんなモテるとは思えないし、第一俺はそこまで活躍していない。一夏のサポートやらなにやらをただただで、彼女に対して特別なにかした、というわけではないのだ。

恐らくこれはあの時の一夏の解釈が正しい。これは『鈴の料理の腕が上達したら毎日酢豚をおごってくれる』が正解だ。うん。

鈴が一夏以外に想いを寄せるなど考えられん。ましてや俺なんかには特にだ。まあ、貴重な体験したなーとだけ心に留めて、そして転校した。

転校先はアメリカ。今まで蓄えていた軍事力が全てISによってパーになって大騒ぎしている国だ。両親も当分はそこでISの開発や研究などをするつもりらしい。まあ、これで原作の主要キャラには会えなくなっただけだが、どうせIS学園で会えるだろうし、今はいいか。両親の手伝いをしながら気長に待とう。そうしよう。

あ、そういえば弾とも知り合いになったな。忘れてた。

「そして、現在に至る……と」

そして現在、俺はアメリカにあるとある研究施設で両親の手伝いをしている。そして驚くことに、俺は未だにISを動かしたことが無い。

いや、俺だつて信じられなかったさ。ここに来て何度か量産型ISに触れる機会はあったが、その度に触ってもうんともすんとも言いやしない。おい、どうなってんだ神（バカヤロウ）。お陰でISに触るたびに女性陣に笑われただろうが。

たいていならここで『ISを動かして一躍有名に！』とか『ISが動かせるのを知ったアメリカに利用される！』とかそんなことを期待していた俺がバカみたいじゃないか。くそ、俺の夢はここで儚く散ったってわけか。

まあ、一応両親の手伝いをする以上、ISには関わられるのでよしとするか。いや、やっぱ諦め切れん。今度はアプローチを変えて抱きついてみるか。

そしてそんな、“ISが動かせるはずなのに動かせない状態”が現在進行形で起こっている。

「どうしたの？ そんな信じていたものに裏切られたような顔をして」

「……ずいぶん的確なツツコミをいれるんだな。ティナ」

そんな俺の憂いた表情に気づいたのか、ここの研究所のテストパイロット、ティナ・ハミルトンは飲んでいたスポーツドリンクから口を離して、備えつけのベンチに座ったまま淡白な物言いで俺に話しかける。

ちなみにテストパイロットといってもそんなに大げさなものではない。ただでさえISの操縦者が少ない世の中だ。学生の身分であっても多少の才があればそこかしこへと引つ張られる。ティナもISに慣れるということとここに連れてこられたらしい。

しかしティナ・ハミルトンね……。居たような気がするなあ原作に。どんなキャラだったかは覚えてないが。

「それで。次はどのISに乗ればいいの？」

「ああ、それを伝えに来たところだ。ええーと？」

ちなみに余談だが、両親が主任を任されているこのIS研究所には男が少ない。いや、居るっちゃ居るんだが。俺と父さんが。

やはりIS関係になると現代の男は不利になる傾向にあるらしく、男がISに関わると言ったらいていISの部品運搬かそのISの作成作業などの力仕事だ。俺のようにISを研究するなんて男は珍しいらしい。

あいつも変わらず、この世界は男にとって生きずらい世の中ってことらしい。

そして再び余談なのだが、今だいぶ俺は目のやり場に困っている。目の前のベンチに腰掛けているティナはISから降りたばかりのIS用スーツのままで、今回は試験運転したのか、その頬が若干くらい上気していて、中々に色っぽい。

(……これは予想以上に来るものがあるな)

俺だってなんだかんだで健全な15歳男子だ。年頃の女の子の、しかも金髪碧眼の美人さんがこんな格好をしていたら、色々といばいいっぱいだ。そう色々と。

「……春馬？」

その姿を写そうとする自分の眼を必死に逸らす。それはでもまあ男とはまた悲しい生き物で、チラッチラッと視線がある一点に集中してしまう。それに気づいたのか、ティナは怪訝そうな視線で俺をじろつと睨むと、おもむろに両腕で胸を隠す。

バカ、そんなことをしたら逆に強調されるようになって俺の眼福に……げふんげふん。もとい、目の毒になるじゃないか。いや目の毒は言いすぎか。

「ん、んん！ おし、次にティアにデータ取りをしてもらうのはアズールカラミティだな！」

「……まあいいけど」

その後ブツブツなにか呟いていたが、俺にそれを聞き取るような余裕はない。この男の性を押さ^さえつけるので手一杯だ。

ティナはそんな様子の俺を横目でじとと睨み続けながら、手に持っていたスポーツドリンクに再び口をつけ、それを飲みきる。やつぱり運動した後とか汗かいた後にそれを飲むとすぐに飲みきるよな。

「アズールカラミティ
紺碧の烈風ねえ。あれって確か一度も起動したことないんでしょ？ 欠陥機じゃないの？」

事実、ISについてのデータが少ない今、たびたびISが起動しないなどのトラブルはある。たいていは機体設定不備や稼動エネルギー過多などが原因であるのだが。

「いや、母さんが言うにはカラミティのシステムに不備はないはずなんだ。何度も検査したし、稼動シュミレートもして、理論上は問題なかったんだが……」

「やつぱあの機能が邪魔なんじゃない？ えーと、名前は忘れたけど」

「まさか。ちゃんとあれもシュミレータでは動いてる。ISの起動を邪魔するようなことはないさ」

ティナの言ってるシステムについてはまた今度説明しようとおも

う。いいからティナ、ISの所に行くか、せめて上に何か羽織ってくれよ。今まで俺はティナの方を見ずに喋ってるんだぜ？

「まあいいわ。動こうと動かまいと私のせいじゃないし」

ゴミ箱よろしく、とティナは飲み終わったスポーツドリンクを俺に手渡し、そのまま奥の方へ通路を歩いていった。どーでもいいがやっぱり何かカッコいいよな。正面からみるとアレだが、ああいうスーツの後姿は操縦者って感じで。

俺はティナに押し付けられたスポーツドリンクの空きペットボトルをゴミ箱に投げ入れる。うし、一発でホールインワン。いや、一発だからホールインワンだったっけか。

「アズールカラミティ、か」

俺は父さんの手伝いをしている時にチラッと設計図とテストモデルは見たことがある。やや黒味をおびた青色の機体色。不固定浮遊部位アンロック・ユニットで小口径二連装レールガンが両肩に付いているのが印象的だった。

だって完全に空中に浮いてるんだぜ。初めて見たときは手をかざしてみたり指で押してみたりとかなり熱中したな。

そして背部にある大型特殊推進翼も、カラミティの機体の特徴の一つだ。通常時は折りたたまれていたが、完全に展開すれば並みの推進翼よりも早く飛ぶことが出来る。他にも機能を担っているが、また今度にしよう。俺の精神はもう色々と疲れた。

「俺は本当に……ISを動かせるのか？」

俺は一瞬の不安に駆られ、それを振り切るように歩き出す。これからテイナの乗るカラミティのデータ取りを手伝うためだ。また動かなかったとしても、それがデータを取らなくていい、という事には繋がらない。

そして俺が父さんの待つ研究室のドアに手をかけた時だった。急に通路の天井に設置されているスピーカーから、けたたましい緊急アラートと共に合成音の警告が鳴り響いた。

緊急事体発生、緊急事態発生。第01ISS保管庫にて侵入者を感じ。緊急事態発生

「第01保管庫ってたしか……くそ、そうだった！」

俺は思わず手にかけていたドアから離れ、全速力で第01ISS保管庫へ向かう。そう、そうだったのか。始めに父さんから説明を受けて何となくだが予想はしていたが、その時期を明確に知らなかったせいで警戒が薄れていた。

「くそっ！ 亡国企業の野郎、アラクネを盗むつもりかっ！」

第二話 紺碧の烈風（後書き）

ヒロイン未定と言いながら、何となく匂わせておくという罫
ま、これでもまだ未定とか言っちゃうんですがね。

今回は亡国企業さんの登場です。ファンの方、お楽しみに。

それでわ次回ノシ

第三話 吹き抜ける烈風（前書き）

若干くらい文が荒いかもしれませんが、
改稿する可能性ありなのでご注意を。

第三話 吹き抜ける烈風

第01保管庫へと通じる通路を無我夢中で走っていると、突然研究所が大きく縦に激しく揺れた。

その突き上げられたような衝撃に俺は思わず足をもつれさせて転びそうになる。それをなんとか壁に手をつけて防ぎ、荒れる呼吸を整える。

第2世代型IS【アラクネ】。それは父さんと母さんが初めて開発の全工程を任された、いわばオリジナル機であり、俺もまさか自分の両親がそれを作り上げるとは思ってもいなかった。原作では亡国企業に奪取され、それを駆るオータムと第二形態移行した白式と一夏が戦っていた。

両親が開発したアラクネは原作で読んだままのアラクネだった。先端に機銃を内蔵した8本の装甲脚に、強靱なエネルギーワイヤー。特にエネルギーワイヤーは捕らえればISもそこから逃れることは難しい。おそらく先の揺れはアラクネが保管庫の厚い壁を突き破った時のものだろう。このままでは確実に逃げられる。

「させて……たまるかよっ」

走り続けたおかげで激しく脈打つ心臓を押さえながら、俺は再び無理やりに走り出した。たとえ俺が現場に行っても状況は何も変わらないだろう。ISをなぜか動かせない今の俺は、世の一般男性と同じ無力な存在でしかないのだから。

アラクネの機銃に晒されれば恐らく即死。エネルギーワイヤーも

その形状はエネルギー体だから、ISのシールドバリアーを施されていない生身の人間が被れば結果は見えている。

「それでも、父さんと母さんが、苦勞して作ったISなんだ！」

ISを盗まれたなどとアメリカにばれば、どうなったものか分かったものじゃない。でも二人の経歴に傷がつくのは明らかだ。俺はそれが許せなかった。

二回目を生きている俺なんかどうでもいい。それより、こんな俺を育ててくれた二人に恥をかかす訳にはいかない。あの二人をこんな所で立ち止まっちゃいけない。俺の両親はもつと高みへ行くべき人たちのだから。

「ぐああっ!？」

また不意に、今度は地面へ叩きつけられるような振動が通路を襲う。俺は溜まらず壁に手をつこうとしたが、消耗しきった体力では間に合わずにそのまま地面に叩きつけられた。

その視界の隅、通路のひび割れた窓の向こうにISが見える。あれは研究所護衛のために配備された拠点防衛型ISだ。あれは火力が高い分機動力が犠牲になっている。8本の装甲脚に独立したPICを展開している『アラクネ』の複雑な動きにはついていけないだろう。

そうこうしている内に、そのISが『アラクネ』のエネルギーワイヤーに捕らえられ、地面へと落ちていく。当然の結果だ。父さんたちが開発したISが、量産型に負けるはずが無い。

もう全てが終わったんだ、そう思ったときだった。落ちていくI

Sに乗っていたパイロットを見て血の気が引いた。

「ティナ……？」

考えれば簡単なことだった。確かにウチの研究所には拠点防衛型ISが一機配備されているが、そのパイロットは特定していない。だから唯一ISを研究所内でまともに動かせる人間、ティナ・ハミルトンが出撃したのだ。勝てないと分かっているとしても、戦えるのが自分しかないと思ったから。

「ふざ……けんなやつ！」

俺だつて戦える。戦えるんだ。その筈なのに、先の転倒による脳震盪と疲労によつて身体は言うことをまるで聞いてくれない。重い甲冑を着込んでいるような気分だった。

ついにティナはそのまま地面と衝突する。ISのシールドバリアーによつて身体のダメージは低いだろうが、あそこには確実に『アラクネ』がいる。オータムの性格を考えて何かされる可能性が高い。最悪は

俺の中で最低なビジョンが浮かび、それを振り切るように身体に力を入れる。だが俺の体は電池切れのおもちやのようにピクリとも動かない。もはやどうすることも出来なかった。

「俺は……見ていただけしか出来ないのか………畜生」

「貴方は、力を欲しますか……？」

絶望に目を瞑^{つむ}った時、ぼんやりと、頭の中に女の人の声が響いた。

それはどこかひどく懐かしくて、ひどく悲しいような、そんな声。

「欲しいさ……。この状況を、黙って見ていられるかよ……。！」

『それで、力を得た貴方は、何を成すのですか？』

そんなこと、聞かれなくても分かっている。聞かれる前からずっと胸の中にあつたものだから。聞かれる前から、決まっている。

「俺はティナを、両親を……。みんなを、守る！ もう二度と、失つてなるものか！」

刹那、俺の体が青く輝き始め、ふわりと宙に浮き上がった。

だんだんと輝きは強くなり、周りの大気が渦を巻く。窓ガラスは砕け散り、風景をまっ白に塗りつぶすようなその輝きが外へと放たれていく。

『では参りましょう。貴方の仲間を守るために』

バサアッ、とそのまっ白に塗りつぶされた世界から、一對の青い翼が現れた。そして一気に、雛が卵の殻を割るかのようにその世界から青い翼が勢いよく飛び出す。

『この力は、貴方を守る力でもあるのだから』

「
！
なんだ！？」

突然鳴り響いた爆音に、オータムは空中から周りを警戒する。今日のIS強奪作戦は無事終了、というかあっけなく完了し、追撃してきたISを難なく落としてこれから戻ろうとしていた時だった。

自分から見て右、保管庫へと通じる通路から、濛々と煙が上がっている。恐らくあそこで何かが起きたのだろうと予想し、面倒が起きる前にこの場から離れようとスラスターを点火した時だった。

警告！ 下方部よりIS反応あり。ロックされています。

「何だあっ！？」

オータムは即座にその場所から離れる。8本の装甲脚のPICにより舞うようにふわりと移動したその横を、大気を焼き切る音と共に超高速の銃弾が掠める。

おかしい。確かこの研究所にはこの『アラクネ』と先ほど落とした量産型ISしか居ないはずだ。いるとすれば、それは驚異的な性能を誇りながらも一度として起動したことが無いとして戦力外にされていたIS。『アズールカラミティ』ただ一機。

そして今飛来した銃弾は、カラミティが装備している不固定浮遊部位の電磁加速砲と同じものだった。アンロック・ユニット レールガン

「クソが！ 動くなんて聞いてねえぞ！」

オータムは苛立たしげに怒鳴る。あのISは起動しなかったから戦力外視されたのだ。決して『アラクネ』で勝てるから戦力外視したものではない。あのスペックのISの前では、『アラクネ』は逃げ切ることが出来るかさえ怪しいほどに、だ。

戦闘態勢のISを感知。操縦者アンノウン。ISネーム『アズールカラミティ』。戦闘タイプ近距離強襲型。特殊装備有り。

「アンノウンだあ！？ 一体誰が……」

オータムはハイパーセンサーから伝わってくる情報に驚愕した。操縦者が分からないなんてありえない。突然動き出したとでもいうのか。それを確認しようとハイパーセンサーが示す方向に目を向けると、そこには青い機体が浮いていた。

青というには少し黒い、海の色を連想させるような紺碧の機体色。その背部に生える大型の特殊推進翼。間違いない。資料で見たものと同じ、『紺碧の烈風』だ。アズールカラミティ

そして驚くことに、その青い機体に包まれているパイロットは女の姿ではなかった。

「はあっ！？ 男だと！？」

ハイパーセンサーによつてズームされたその顔は、まさしく日本の男子のもの。オータムは一気に混乱した。

動くはずの無いISが起動。アンノウンのパイロット。そして、そのパイロットは男。

「くくく……。そうかよ、上等じゃねえか！」

オータムは8本の装甲脚を展開し、その独立したPICによつて複雑な軌道を描きながらカラムティに向かつて突進する。それはさながら、巣に引っかけた餌に這い寄る蜘蛛のように。

半狂乱に陥ったオータムがカラムティに今まさに強襲を掛けようとした時だった。突然『アラクネ』の開放回線オイブン・チャネルに回線が入る。

「時間を掛ける気は無い。父さんの機体を落とすのは気が引けるが、お前に渡すくらいなら落としたほうがマシだ」

警告！ 敵ISの内部より超高エネルギー反応。発動まで残り1秒。

オータムはハイパーセンサーが感知した情報の原因を思い出すと、とつさに突進を中止に、後ろに引く。だが、回避しきるには若干だけ距離が近すぎた。

「CLB、CA・LI・BER・システム、起動」
キャリバー

刹那、アズールカラムティの大型特殊推進翼から赤く輝く粒子が膨れ上がるように溢れだした。

機体はその青さを増し、手に持つ展開型エネルギーブレードはその長さを増す。翼から流れ出す赤い粒子はその量を増し、ゆっくりとその大きな青い翼が広がる。

「チイツ！ 喰らって、たまるかよお！」

オータムは『アラクネ』のもてる全推力を展開し、その場から離脱をはかる。もしCA・LI・BER・システムが資料で見たものと同じ能力なら、発動されたらもう勝ち目はない。

そして、おそらく今から放とうとしているものは恐らく

「イノセンス・レイ 粛清の光、発動」

轟！ と。アズールカラムティから放たれた白い光は、周りにある全ての物を飲み込みながら、驚くほどのスピードで広がっていく。大気を食い潰しながら、その轟音と共に白い光はオータムのすぐそこまで迫る。

「くっそおおおお！」

後ろにある装甲脚の一本が白い光に触れ、バラバラと崩れていく。しかし突然、その光はふっと消え失せ、アズールカラムティの反応も薄くなった。恐らくエネルギーが切れたか何かしたのだろう。

どちらにせよ運が良かった。

そのままオータムはその空域から離脱する。先ほどの無理な加速がたたったのか、生き残った7本の装甲脚とスラスターが悲鳴を上げていた。

「あの野郎……。次ぎ会ったときは必ず……」

オータムは軋みを上げる『アラクネ』を何とかもたせながら、無事離脱を果たした。

第三話 吹き抜ける烈風（後書き）

無事オータムさんはアラクネをお持ち帰りできました。
機体説明などは原作部に入る直前で入れたいと思います。

でわまた次回ゝノシ

第四話 春馬のその後（前書き）

ふ、不定期って言ったもん！

……いえ、更新が遅れてすいませんでしたorz

ちびちび書いていたものを放出します。そのため若干長い感もしますがご容赦をば。

第四話 春馬のその後

さて、まあとりあえずは今の俺の周辺の状況を説明しよう。

俺の両親が設計、開発したオリジナルIS、『アラクネ』は亡国企業のメンバー『オータム』により奪取され、その反応も完全に途絶えた。

『アラクネ』の開発コンセプトは完全なる隠密行動、及び敵地での偵察行動だ。

よってアラクネには高い電子戦性能ともし見つかった場合に速やかに撤退するためのエネルギーワイヤーが装備されている。

このエネルギーワイヤーは伸縮性に優れ、今各国が配備している量産型ISでは恐らくだが捕らえられれば脱出は難しい。ティアがオータムの迎撃時に装備していた『拠点防衛型IS』も、アメリカの中の量産型ではハイパワーな方だし。

そう考えれば、この結果も不思議に思うことはない。むしろ『アラクネ』のその性能の高さが実戦によって証明されたと、誇つてもいいくらいだ。まあそれが強奪という深刻な事態でなかったならばの話だが。

アメリカ政府はテスト途中であった『アラクネ』が亡国企業に強奪されたことは公表しない方針らしい。まあ当たり前の話だな。誰だって自分にとって損な情報は出来るだけ隠したいだろうし。

もちろん政府はそれでお終いにするはずもなく、現在、鋭意搜索

中だ。もつとも、『アラクネ』は先も言った通り隠密・潜伏性能が極めて高い。相手側もそれを分かって獲って行ったのだろうし、その機能をフルに活かして撒きに掛かるはずだ。くやしいが、完全に撒かれたらもう打つ手はないだろう。

そんな嫌なニュースとは打って変わって、アメリカ政府には飛び切りの良い知らせ、俺にとっては複雑な事が同時に起きた。

それはもちろん、男である俺がISを起動・迎撃を行ったということ。

俺はこちらの世界に来る前に紙……いや神にそのことを頼んだ張本人なので大して驚きもなかった、むしろ「やっとか……」という安堵感を抱いていたが、周りはそのような乾いた反応で済むはずがない。

事件後、俺がISを起動できることを知って半狂乱な両親や、どこで嗅ぎつけたかアメリカ政府の役人が来たりと研究所はまた別の意味で忙しくなった。

アメリカ政府に連れられてなんか重役な人たちの会議に参加させられた俺は、とりあえず俺の処遇に関しての事を知らされた。

一つ、まあ大体予想はしていたが、このままアメリカ代表候補のISパイロットに着任して欲しいとのこと。深刻なIS操縦者の不足の中、数少ない、いや奇跡とも言つべき男性のISパイロットはその存在だけでも貴重らしい。後に織斑一夏というもう一人のIS

パイロットが出てくるとは、俺以外は夢にも思っていないだろうし。

二つ、アメリカ代表候補のISパイロットに着任するに当たって、その存在を隠すためにもう一人代表候補をつけること。俺がアメリカ代表になったことで世界がアメリカに注目し、『アラクネ強奪事件』が他国に漏洩する可能性を踏まえてのことらしい。

そこで俺は何となくティナのことを進言しておいた。これは日ごろの感謝も込めて、という意味もある。態度はあれだが、なんだかんだで世話になることが多いのだ。アメリカに来て初日、現地の英語という奴を教えてくれたのもティナだしな。代表という肩書きはやはりそれに値するほどのものだと思っ俺は思っ。

確かどっかのイギリスの代表が鼻にかけていたし、なっ困るほどのものでもないだろ。多分。

そして三つ。オリジナルIS『アズールカラミティ』のテストパイロットとしてこれのデータ取りを行うこと。

要するに、「お前の専用機は『アズールカラミティ』だ。異論は認めん。データ取りのために頑張ってくれよ」ということである。政府の欲が丸見だな。

俺が起動したIS、『アズールカラミティ』は今まで一度たりとも起動をしたことが無く、データはコンピュータによるシミュレーション止まりである。『アズールカラミティ』、長いので『カラミティ』と略称するが、近距離強襲、及び高速機動による攪乱戦をコンセプトに設計されたISだ。

『アラクネ』が電子戦に優れた支援タイプとするなら、『カラミティ』は火力、推力共に近距離戦闘を前提にされた、いわば格闘タ

イプ。

その特質した近接攻撃性により量産化は不可能だが、単体としての戦力は並みのISをはるかに上回る。それは火を見るより明らかだ。

そして何より、政府が欲しているだろうデータは、俺の両親が開発した『カラミティ』に試験的に装備されているシステム、『CALI・BER・(キャリバー)システム』だ。

通称CLB、正式名称をCapacity Limit Bur
st systemという。直訳すると『能力限界開放機能』だ。

「ISの全て攻撃用のエネルギーに回すことで、一時的にISの能力を爆発的に上昇させるシステム。シールドバリアーに回すエネルギーを全て攻撃に回すため、被弾すれば絶対防御が発動する諸刃の剣でもある。しかしその欠点を補うほどの攻撃力、機動力、推進力の上昇は絶大であり、さらにCLB中に使用可能になる全方位攻撃“インセンススレイ粛清の光”は、ISを中心に発生するエネルギーを直接相手にぶつける事で従来の攻撃を覆すほどの威力を持つ」

と、父さんが政府の重役に説明していた。俺もちよろつと見たことがあり、というか発案は俺であり、開発を手がけたのが両親だ。まさか本当に作ってしまうとは思ってもみなかったが。

……話が逸れた。これで俺への具体的な政府の処遇は全部だ。他にも色々言っていたが、まあ任せたぜ父さん、母さん。

「春馬？」

「おう悪い。少し考え事してた。で、何か用か？」

「やっぱり聞いてなかったのね。カラムィティフォーマット フィットティングの初期化と最適化、今から第05実験室ですらって絆博士が」

「おう、了解」

俺は軽く返事を返すと、ムスツとした表情でティナが早く行つてこいとはかりに手をヒラヒラと振る。ま、いつものことだ。

『アラクネ強奪事件』から2週間経つた。未だに搜索は続けられているが、手詰まり状態は変わらず、相手側も今は息を潜めているのか、全く手がかりは掴めずにいた。

母さんは「いい実戦データは取れたし、まあ起きちゃったことは仕方ないじゃない？」とそれほど気にしてはいない様子で、父さんも同じ感じ。いいのかそんなので。必死になった俺がバカみたいじゃないか。

カツカツとリズムよく靴音を鳴らしながら部屋へと向かう。『力

ラミティ』が待っているであろうその部屋に。

そういえば、ティナのその後は言っていなかったな。まあ、動けそうにないティナを俺が抱えて安全地帯にまで運んだだけだが。

その後、そのことを知ったらしいティナにお礼を言われたときは驚いた。いや、普段そんな光景に出くわさないものだから純粋に驚いてしまったのだ。

そうしたら何故かティナに殴られてしまったが。ぐう。人間、驚いて何が悪い。

「っと、通りすぎるところだったぜ」

第05実験室と書かれたプレートを確認し、ドアについているキーに認証カードを差し込む。

プシュッと短く圧縮空気が抜ける気持ちの良い音がしてドアが自動で開く。

「あ、やっと来た。遅いよハル。私はまだこの後も色々と詰まっているんだから」

「え、ああごめん。じゃささと終わらせて俺も手伝つよ」

母さんはチラッと俺が入ってきた事を確認すると、今まで向かっていたモニタに再び目を戻す。そのモニタから伸びたケーブルは床を這い、一つの機影に辿り着く。

「まあ、もう一度よろしくな。カラミティ」

そして俺はゆっくりと『カラミティ』に手を触れ、あの時の感覚を思い返しながら起動した。

第四話 春馬のその後（後書き）

よし、これで次は入学編だぁー！とテンション高め。どうも作者です。

ISのアニメ情報も次々と更新され、新年が待ちどおしいですね。少なくとも自分はその一人です。

マクロスFのスタッフさんが手がけるといふことで、マクロスファンの自分はそういう点でも見逃せません。

さあ、次話を書かなくては！

でわまた ノシ

第五話 主人公補正？ 何を寝ぼけたことを……（前書き）

入学できなかったorz

次回こそは……と言おうとしたら、毎回これを言っている回では出ていないことに気づき、敢えて言いません。

フラグが折れないなら、立てなければいいのさ（キリッ

第五話 主人公補正？ 何を寝ぼけたことを……

時間は回って3月中旬。ついにこの時がやってきた。

受験会場である市立施設にて迷子になり、その行き着いた先にあった、彼を待つ運命の扉。それを何の考えもなしに開いてしまった相応の報いがこの結果だ。

「なーんてな」

「何を言ってるの？ それにしても……」

今俺たちの目の前にあるテレビに映し出されているのは、中学生の引越以来久しく見ていなかった友人の顔。

その大分凛々しくなった顔つきは、まさに「イケメン爆発しろ」と言いたいくらいのもものになっていた。

「何を物騒なこと言ってるの？ 頭大丈夫？」

「おっと、口に出していたか」

織斑一夏。ついにこの時が来たか。

俺以外の男性ISパイロット。確か小説では一夏が受験会場に行ったのは2月くらいだったはずだから、この情報を外に出すか出さないかと日本のお偉いさんが揉めたのだろうか。

まあ今頃本人はそんなこともしらないで悠々と新学年に向けて準備しているんだろうけどな。

そういえば、なんと言いかやっぱりなというか。俺のIS学園入学が決定した。多分『アラクネ』が完全に消息を断つたのと同様していると思う。アメリカが全力で探しても引つかからないのなら、アメリカでの記録を消せば元々いなかったことになる、という考えらしい。

まあ、それでも小説だとまるっとバレてたりするんだけどな。やこしいし黙っておいた。

というかアメリカが全力挙げて数ヶ月搜索したのに見つからないってすごいな。この場合、『アラクネ』がすごいのか『アラクネ』を隠し切った亡国企業がすごいのかははっきりしないが。

その数ヶ月の間、俺も何の考えもなしに過ごしていたわけでもない。というか、両親と研究所のみんな、そしてティナがそれをさせてくれなかった。

「アメリカの代表候補生になったんだから、みつともない格好は許さない」というのは、ティナの言葉。まあ他のみんなも同じような事を言っていたが、やっぱりすごいな。代表候補生ってやつは

無事『アズールカミティ』フォーマット フィッティングの初期化と最適化を終え、数え切れないくらいの機動テストを経て、データを取り、それを元にして改良を加える。

ちなみに俺もその改良に参加した。操縦する本人の声はやはり貴重というか、母さんに「見てるだけっていうのも関心しないね」と

言われ無理やりに……。あれ、俺って意思が弱い？

ティナとの標準ISを用いた模擬戦もしたりした。もちろん俺が連戦連敗。今まで血の滲む努力をしてきたであろうティナに勝てるはずも無い。その時の俺には主人公補正なんて言葉は無いに等しく、「ああ、俺って凡人なんだな」と思ったりもした。

しかしその連敗する模擬戦のなかで、ふと感じた違和感があった。俺の気にしすぎかもしれないが、とりあえず報告しておこう。

時折、ティナの動きが止まって見えるのだ。

いや、正確に表すならば、『異常なまでにスローに見える』という感じが。

ティナとの模擬戦に使用したのはアメリカで最も多く配備されているISの標準装備。ライフルと実体剣だ。背中には後付装備でよくグレネードなんかをよく装備するらしいが、模擬戦では不必要としてこの2つだけだ。

ティナはよほどISの操作に慣れているらしく、初めは俺の攻撃など掠りもしなく、まさに一方的だった。

だが俺とティナには明らかな差があった。いや、身体能力とか特殊能力的な意味ではなく。こう、意思的な意味で。

考えてもみて欲しい。俺は転生前の記憶はもうほとんどおぼろげだが、恐らく、こんなゲームの世界に飛び込んだような体験はしていないはずだ。

要するに、俺はこの状況が楽しくて仕方が無かった。模擬戦中に声を出して笑ったほどだ。

ハイパーセンサーから流れてくる情報から推測して、相手の予測位置を割り出し、銃弾を放つ。そしてそれを避けるパターンと被弾するパターン、もしくは反撃されるパターンを即時に構築。そのどれをとってもすぐに行動を起こせる体勢に組みなおす。

恐らくISの補助がないと出来ない所行だろう。しかし、俺はそんな所そこの凡人ではなく、直々に神に転生させてもらった身だ。あの神は恐らく俺のこの体に何かしら仕掛けたのだろう。とてもスムーズにこれができる。

そう、ティナの動きが時折スローに見えるようになったのは、そんなことを考え初めてからだ。

そうして俺がISの操作に驚くほどのスピードで上達する様を見て、ティナは「何か、私の今までの努力がバカみたいね」とあきれ果てていた。なんかゴメン。

しかしやはり経験の差というものは実在するらしく、ギリギリではあるものの俺は一勝もできずにいた。

そして今はその模擬戦を終えて一息ついている休憩室の中。現在に至るという訳だ。

「……え、……ねえ、ちょっと、また自分の世界に飛ばないでよ」

「なんだそれは。俺はちゃんとティナの話を聞いていたぞ」

ふと気がつくと、そこには無視されていたのが気に食わなかったのか、完全にむくれたティナが目の前に立っていた。

俺の言い分にピクツと反応したティナは、腰に手を当ててビシツと指をさし高圧的な態度になる。

「じゃあ、今まで私が言っていたことを一字一句、間違わないで言ってみて」

うえ、なんだその『何時何分何秒の地球が何週回った頃?』みたいな無理難題は。

「えーと、確か……。『織斑一夏ねえ。春馬よりかは凛々しい顔してるじゃない。まあISをどこまで操れるかは目に見えてるけどね。どうせいい看板になるとかの日本政府の見せつけでしょ。そういうえは春馬はどういう待遇なんだっけ? あれ、ねえ春馬? おーい。ねえ、ねえ、ちょっと、また自分の世界に飛ばないでよ』で合ってるか?」

「相変わらず頭は良いのよねえ。ム力つくわ」

「ええー……」

そないなと言われましても。

そうか、この頭の回転の速さは親の影響か? あの二人も結構な感じだし。親が優れてるとその子供も優れてるって、どこかで聞いたことがあるな。

あれ、俺、今自分のことを間接的に『優れてる』って言わなかったか? うわぁ恥ずかしい。

「ま、とりあえず模擬戦も終わったし、私はシャワー浴びてくるわ。春馬はどうする?」

「そうだなあ。カラミティの様子でも見に行こうかな。確か明日には日本に護送されるはずだし」

そう、俺がIS学園に入学するということは、俺の専用機にとなった『カラミティ』も日本に送られることになる。入学式までには若干気が早い感じもするが、現地では『カラミティ』の日本到着。その後の機体チェック、調整、『カラミティ』の後付装備イコライザする武装の搬送など、結構掛かる。

もちろん、俺の両親は他にも仕事があるのでついていく訳にもいかない。結果的にその助手やらがそれらの行程を行うのだが、何分『カラミティ』は例のCLB搭載の性質上、通常ISと若干整備に時間がかかる。

どこぞのISのように、大事な時にギリギリ間に合わせて戦闘中に調整、なんて器用なことは俺にはできない。試したこと無いけど。

そうして俺たちは一旦別れることにした。ティナは備え付けのシヤワールーム、俺は『カラミティ』が収納されている第02IS保管庫だ。第01は例の事件で大破し、現在も修復中だ。

「あと少しでIS学園入りか……。想像はしていたが、ワクワクするな」

代表候補生、専用機、そして小説の登場人物との生活。それを得て楽しくないわけがない。

「一夏がどんな顔するかも楽しみだな」

そんな心が身体に表れたのか、スキップまではいかないが、普段より明らかに早い速度で歩いていく。

IS学園入学まで、あと少しだ。

あ、一つ言い忘れていたが、IS学園での入試とやらは、俺も例

外なく受けた。まあ、どっかの誰かみたいに教官は壁に突っ込んでくれることもなく、20分もの激闘の末に敗北した。

入試で貸し出された『打鉄』の戦闘スタイルを引き出せるような戦い方でいったんだが、やっぱり経験という差は頭では埋まらないか。

くう、俺も「女子ではってオチじゃないのか」って言うてみたかったぜ……。

第五話 主人公補正？ 何を寝ぼけたことを……（後書き）

押し寄せる課題に音を挙げつつ、こんばんわ自分です。

ISの参考に、と買ったアーマードコアf aにどハマリ中。テラカニス（．．．）

そして気づいたこの小説とA C f aとの被り点。A A E……

え、モン○ン？ 多分来年あたりにやるんじゃないかなo r z

でわまた ノシ

第六話 日本を目指して11時間（前書き）

書き溜め放出パート2。そこに若干加筆にて投稿します。

長めにしてみました。

第六話 日本を目指して11時間

「いやー、楽しみだな。日本、美しい国、ニッポン！」

「うるさいわよ。こっちは準備とかで疲れてるのになんで春馬はそんな元気なのよ」

もう何度目か分からないティナの俺への文句を右から左へ聞き流しつつ、俺は飛行機の窓のカバーを上げて外を見る。

未だ眼下にはまっ白な雲海が広がっており、日本到着まであと3時間くらいある。ちなみにアメリカから日本まではおよそ11時間だ。その間俺は一切睡眠をとっていない。ぶっちゃけ楽しみすぎて眠れない。

横でティナが眠っている間も、俺は持ち込んだ電話帳……じゃなかった。入学前の参考書を読み返す。これも、もう何度目かは分からない。

だってそうだろう？ 人間、興味があることや楽しいことは率先してやるものだ。今の俺の中では、これを読んでいることと新しく買ってきたゲームの説明書を読んでいるのとは一緒に、楽しくて仕方無い。

「ククツ」

「……ねえ、本当に大丈夫？ 時差ボケでおかしくなったんじゃないでしょうね？」

なんかいつもより声のトーンが違って、そろそろ本気で心配されているようだ。む、いかな。なんと答えようか。

「いや、本当に楽しみです。……えーと、ほら、俺って小さい時から両親の都合でよく引越してたからさ。入学から卒業まで一貫してしたことないんだ」

「で、それが出来ると元々わかっているIS学園を楽しみにしている、と。なるほどね」

ティナはようやく俺の異様なまでの期待感に合点がいったらしく、ポンと手を打つとそのまま椅子に腰掛けて目を瞑る。また眠るらしい。

「そうか、やっぱり参考書を読んでニヤニヤするのってヤバイよな」
だがそれでも、楽しみで仕方がないのだ。どうしよう、マスクでもするか？ いや、そんな都合よく持ってきてないし……。

「しゃーない。トイレで読むか」

「アホかつ」

いつの間にか復活していたティナは俺の持っていた参考書をひったくって、俺の頭をひっぱたいた。

くそイテエ、ぐぬああああ。

「アメリカの代表候補生がそんなことして、母国に恥をかかせるな」

「いや、俺の生まれは日本だし……」

とティナに頭をさすりながら反論したらまたひっぱたかれた。だからそれでやるなぐぬああああ。

「ふん。分かったらバカな真似はしないように」

と言ってティナは再び目を閉じて眠りに入る。くそっ、女尊男卑め……。ここでティナに仕返ししようものなら周の女性からちよっかいを出されるに決まってる。

悔しいがティナの言うとおり、俺にはアメリカ代表候補生という肩書きが出来てしまっている。あっちでも「目立った行動はしないように」と言われているし。ああ世知辛い。

「あと2時間30分くらいか……。どうしようかねえ」

参考書を読んだら恐らく無意識にでもニヤニヤするだろう。しょうがない、ここは一つ、俺の豊かな想像力を発揮するか。

「秘技、エア参考書読み！」

「だからアホなことをするなっ」

ばすこーん。ぐぬああああ。

「あー、何か無駄に疲れたわ。主に春馬のせいで」

「ふっ、そうでもない」

「なんで誇らしげなのよ……。ああもっ、こっちは時差ボケで疲れてるのに、春馬はなんで平気なわけ？」

「平気なわけないだろう。俺も不眠と時差ボケでダウン寸前だ」

「気力で立っているってことね。はあ、とりあえず、指定されたバスに乗りましょ。それでIS学園まで行けるはずよ」

そう言つと、ティナはだるそうに旅行鞆を引きずって歩き始める。む、ここで俺がさりげなく荷物を持ってやれば好感度が上がるやもしれん。テンション高めの俺の頭脳がそう囁いているぜ。

「なあ、ティナ。その荷物俺が」

「わあゝゝ！？ その人、どいてどいてゝゝ！」

ん？ どこからか切羽詰った声が聞こえてくるな。まあここは空港だし、乗り遅れそうになった人たちが必死になつてそんなことを叫ぶのかもしれない。まあ、間に合うよう頑張つてく」

ドカン。

「ぐうおおおおお！？」

「あ、春馬！？」

あれ、なんだろう。身体に何故か嫌な浮遊感が。おかしいなあ俺は空港を歩いていたはずなのにぐぬああああ。

急な衝撃と身体に走る刺すような痛み。顔面からの見事な着陸の瞬間だ。

「ぐつ、母さん。俺、顔面で着地できたよ……」

「わわわつ。大丈夫ですか？ 衝突^{ぶつ}けちゃったのは謝るんですが、この人、何かヤバいことをほざいてます！」

あれ、何か謝られているのか^{けな}貶されているのか分からないぞ？

「ああ、それはいつものことだから安心して。それより春馬、立てる?」

「大丈夫だ。問題ないぜ……」

「その割には膝が生まれたてのヤギみたいですが。あと鼻血出てますよ。マゾヒストなのですか?」

「誰が跳ね飛ばされて興奮して鼻血出すか!　ぐ、ティナ、ティッシュもないか?」

ティナはポケットからティッシュを取り出し、差し出してくる。俺はそれを受け取り、鼻血をかんだ。あれ、鼻血ってかんでいいんだっけ。まあいいや。止まってるみたいだし。

俺の目の前に立っているのは恐らく俺を跳ね飛ばした女の子。その証拠に、彼女の傍には明らかに人を引き飛ばせそうな旅行鞆がある。大方、キヤスターが操作不能になって暴走したのだろう。いい迷惑だ。

見た目から判断して日本人ではないようだ。とすると観光客かなにかかだろうか。

輝くような銀髪。もしくは白に近いいわゆる白銀の髪を、腰近くまで長くおろしている。毛先までよく手入れをしているらしく、梳いたら指に引っかかりそうにない印象を抱かせる。

そして嫌でも目を引く、右目に黒い眼帯をしていた。医療用の痛々しい雰囲気ではなく、ハードな黒眼帯だ。悪役のボスなどが好ん

でつけそうなのは、一見して彼女には不釣合に見えた。

眼帯をしていない開いた目の色は碧色。銀髪碧眼といったところか。ティナと比べて背丈は低い。見た目は元気そうな小動物だ。

「む、なんですかそんなにマジマジと。……もしか、一目惚れですかっ!? うわうわダメですっ! 私は使命を背負う女。色恋沙汰にかまけている暇など……」

何かすごい焦った様子でそう早口にまくし立てると、突然もじもじし始めた。なんだこりゃ。

「なあ、ティナ。これはどういう状況なんだ?」

と横にいるはずのティナに聞いたはずなのだが、返事がない。ふとティナがいた場所を振り向いてみると、誰もいなかった。どうやら呆れて先に行ってしまったらしい。本当にアイツは……。

未だ少女はもじもじしている。さてよ、これは逃げれるかもしれん。今だ、俺。度重なるIS模擬戦で培ったこのパターン構築を発揮するんだ。

あずま は どうする ?

はなしかける

たたかう

かばん

にげる

うまく にげられた ！

「さすが俺。今までの努力は伊達じゃないぜ」

「いや、ちょっと。何にげてやがるんですか」

なぜか おいつかれた ！

少女は俺を逃がすまいと服のそでをがっちりと掴んでいる。これは逃げれそうにないな。くう、俺のパターン予測を上回るとは。恐ろしい子……ッ！

「いや、すまん。よく分からんが、チャンスだと思って」

「なんのチャンスですか。どちらにせよ、私も同じ方向に向かいますし無駄ですよ？」

うん、そうすると誰かと待ち合わせでもしているのか。ああ確かに。こんなちっちゃい子が一人で観光は危ないよな。可愛い子にはなんとやらと言うが、やはり限度ってものがあるか。

「今、失礼なことを考えやがってなかったですか？」

「いや、別に？」

しかしまあ、どうせ一緒の方向に向かうなら仕方ない。逃げるのは諦めよう。毒喰らわば皿まで、てか。

「また何か失礼なことを……」

「いいから。ほら、荷物持つぜ」

「あつ」

先ほど俺を華麗に離陸させやがった旅行鞆を少女から取り上げる。なんだ。見た目よりかは軽いじゃないか。でもまあ、高校男子が軽いと思うものを、見た目中学生くらいの子が持つには酷だよな。

「いや、でも仮にも私は貴方を華麗に跳ね飛ばしてしまったのだし……」

「……なんか悲しくなるな。でもま、大丈夫。慣れてるからさ」

研究所にいた時によく手伝いで機材の搬入とかやってたしな。他にもIS操作のために筋トレとかもしていたし。効果があるかは知らなかったが、父さんがやれて……。あれ、俺って意思が弱い？
パート2。

「それは助かりました。私では少しきつかったですし。やっぱり男の人は肉体労働に限りますね」

なんだろう。心にドスつときた。

おそらく悪気は無いのだろう。その無邪気な表情からはそんな邪な感情は読み取れない。ただ、黒眼帯が異様に目立つだけで。

空港の出口に着くのにそう時間は掛からなかった。出口にはバスターミナルが広がっている。どうせだからバスのところまで荷物を持ってやるよと言ったところ、

「はい、私もそのつもりでしたし。気が合いますねー」

と言われた。泣きたい。本当に世知辛い世の中になったものだ。

「それにしても、貴方は……えーと？」

少女は何かを聞こうとして口ごもる。そういえば、自己紹介をしていなかったな。ここまで来たのも何かの縁か。別に名前の一つくらい構わないだろう。

「神城、神城春馬だ。字は神様の神に城壁の城、春の馬と書いて『あずま』だ。適当に呼んでくれ」

「分かりました。えと、ハルで良いですか？」

うわ、よりによって母さんと同じ呼び方かよ。それのお陰でみんなから『はるま』だと思われて訂正するのに苦労してたんだが。しかし適当に呼んでくれて言ってしまったし、自業自得か。

「ああ、別に構わないぜ。で、お前の名前」

「あ、見えましたよハル！ あのバスです！」

タイミング悪く被ってしまったか。まあいいか。バスが見つかったならそこまでの付き合いだし。それでえーと、その目的のバスとやらは……と。

「こっちですよ、早く早く！」

「いや待てよ。お前足はやいな！？」

おまけに走りよって行った先は随分と先にあつたバスだ。ここからあの米粒みたいなバス標識が見えたとも言うのか。どんだけ視力がいいんだよ、羨ましい。

仕方なくキャスターで引つ張っていた2人分の荷物を肩に抱え、なんとか追いついた。荷物をその場所に置き、少女の目的地であるバス標識を何となく確認する。

「へ？」

固まった。いや、肩がじゃなくて。純粹にその目的地を見て。

IS学園行き

「IS学園行きをご利用の方ですか？」

バスの乗り口に立っていた運転手らしき人が俺の元にやってきた。いや、俺はそうなんだが、少女のほうはまさか……。

「はいっ。お願いします！」

マジか……。てつきり観光客か中学生だと思っていたが、ISパイロットで高校生だったのか。しかし、高校生にしては小さめの身長なんだな。いや、この場合は小柄というべきか。

「えーっと、そこのお兄さんですか？」

「あ、はい。よろしくお願いします」

そういうと、運転手は若干驚いたような顔をして、すぐにまたもとの営業スマイルを浮かべる。そりゃ驚くよな。一夏と違って俺は公にされてないんだから。

「へ？ ……うえええええええ！？ ハルもIS学園に行くんですか！？ 血迷ったんですか？ さっきので狂ってしまったんですか？」

「どれもちげーよ。つか狂って無いわ。ま、IS学園には行くけどな」

運転手に荷物を渡して軽くなった手をプラプラとふりほぐす。衝撃的であるう事実にはポカーンとしている少女は文字通り目を丸くしていた。

「ほら、邪魔だからさっさとバスに乗るぞ」

動き出しそうにない少女の背を押しながらバスに乗り込む。バスに乗った瞬間、すごい視線が俺に向けられた気がしたが、無視。今は先に乗ったであろうティナを探すことに集中する。

「お、いたいた」

バスの後ろ辺りの窓側の席にティナはいた。となりの席が空いている辺り、取っしておいてくれたのだろう。ありがたい。

ちょうど後ろの席が空いていたので、とりあえず未だ帰ってこない少女を座らせて、俺も席に座る。バスの座席ってやけに落ち着くよなー。飛行機るときもまずまずだったが、やはりこちらのほうが落ち着き感が違う。

「はっ。あれ、私はどこに？」

「バスだよ。バスの中。騒ぐなよ？」

ようやく我に返ってきた少女は了解すると、静かな寝息を漏らしているティナの顔を後ろから覗く。

「この人もIS学園に入るんですか」

「そ。俺とアメリカからはるばるとな」

ちなみにティナは代表候補生ではなく、普通の生徒だ。前にも言ったとおり、『アラクネ』は完全に行方不明。アメリカでは重要なデータを抽出したあと、それを凍結、その他はすべてキレイに抹消済みだ。

アメリカ側からしてみれば「ほら、これで面倒が少なくなったぞ」ところなんだが、正直あまり嬉しくない。ようするに父さんと母さんは『アラクネ』を作っていなかったということになったからだ。抹消とは、そういう意味である。

さて、これで少女との付き合いは伸びたらしいし、こちらの質問にも答えて貰いましょうかね。

「んで、さっきから聞いてなかったけど、お前の名前はなんていうんだ？」

「ん？ 私？ ああ、そういえば言っただけでしたね。そうですね。ハルだけ名乗って私が名乗らないのも不自然です」

そういうと、少女はんつと喉を咳払いをし、ビシッと俺を指差して名乗りあげた。どうでもいいが、近いんだから指さすな危ないって。

「私の名前はセレナ。セレナ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生ですよ！」

なんというかまあ、驚いたさ。

だってそうだろう？

俺の知ってる原作には、『ボーデヴィツヒ』を名乗るドイツ代表候補生は一人しかいないんだから。

第六話 日本を目指して11時間（後書き）

やってきたぜ日本。これで勝る！（、・・、）

というわけで、オリキャラ2の登場です。まあ、これでオリキャラは最後なのですが。

IS学園入学と同時に空気になっていくティナ。いかん、どうにかしないと……。

でわまた ノシ

第七話 二万五千個の鎮魂歌（前書き）

書き溜め放出だー。どうぞゆるりとお楽しみ下さいまし。

第七話 二万五千個の鎮魂歌

「お、良かった。一夏と一緒にのクラスか」

静かな寝息をたてて熟睡中だったティナと、その後ろで豪快に大口を開けて眠っていたセレナを揺り起こして、バスを降りた際に教員と思われる人に渡されたクラス表を見て安堵する。

まあ、どこから見てるか知らないが、間違いなくあの神の仕業だろう。いや、今回は案外俺の運が良かったりするのか？ うーん、紛らわしいな。

「春馬、クラスどこだった？」

「ああ、ティナの隣のクラスだったはずだぜ？　じゃ、さつさと向かいますか。えーっと……」

と学校の地図を探して……やめた。やっぱり手探りでいくか。なんかこう、この方が新学生みたいで楽しいし。

どっかの誰かみたいに迷子になった先にサプライズがあるかもしれないしな。いや、流石にないよな。ないない。

と、歩き出す俺たちの後ろで盛大にずっこける音が聞こえて、思わず振り返ってしまった。まあ、そこにはついさっき知り合いになった奴が、物言いたそうな表情で俺を睨んでいるわけだが。

「私にはノータッチですか！？」　「ああ、ティナの隣のクラスだったはずだぜ？　じゃ、さつさと向かいますか」　「じゃないですよ！

あるえ？ 私は！？」

「うるさいな……。じゃ、セレナはこのクラスなんだよ」

もったいぶっても仕方ないので、というか面倒くさいのでさっさと訊くことにする。ティナも早くクラスに向かいたいらしく、見えない程度ではあるがめんどくさがっているようだし。

そんな俺たちの気持ちなど何処吹く風といった感じのセレナは、「聞きたいですかあ？」とこれまた盛大にもったいぶってくれた。ああなんだろう。イライラする。

「仕方ないですねー。それでは言っておきましょうかね？」

「ティナ、昇降口はこっちらしいぞ」

「そう、反対の方向へ行くとところだったわ」

うん、そうだ。無視しよう。面倒なのに引つかかったらこれに限る。なんで最初からこうしなかったのだろう。俺もまだまだなあ。

「あわわわわ、待って！　すぐ、すぐ言いますから」

と、無視したらついてきやがった。なぜか涙目で。なんだろう、やっぱり見た目とあいまって年齢より幼く見えるな。いや、幼いのは精神のほうか。

「一緒ですよ。ハルと一緒にのクラスです！」

どや。

今のセレナの表情と態度を総合して表現するならば、この二言が一番ふさわしい。おめでとう。この二言は君のものだ。

「じゃ行くか」

「ええ」

「ふわああ、待ってくださいってばー！」

お、ここは右に曲がってみるか。

「全員揃そろつてますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生。やまだまや　おー、やべえ本物だよ、本物。マジモンだー。

原作でどう表現してたかは忘れたけど、うん。まんまだと思う。さっきまで俺の後ろにピッタリとくっついて来た誰かみたいに年齢よりは幼く感じるな。いや、若く見えるって言った方がいいのか。

うん、どうやら『子供っぽい』と思ったのはお前だけじゃないぞ、一夏。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「お願いしまー……………あ……………」

「……………」

ええー、俺だけかよ。気まずじゃないか。

いや、新しい学校に新しいクラスメイト。そして見慣れないのが二人もいたら、そりゃ緊張するだろうけどさ。ちょっと緊張しすぎじゃないかい？

もっとう、新しい空気ってのはワクワクするものだと思うんだ。なあ、そうだろう、一夏？　篝？

「……………」

目を逸らされた。

一瞬目が合ったとき、一夏は「今は自分のことでいっぱいいい」て目をしてたな。うん、まあそうだろうな。一番前の席で、しかも真ん中なんだし。視線が集中してるのは見なくてもわかる。

そういう俺もさっきから背中がむずがゆい。なんだろうな、あせも汗疹かな。

箒のほうは「お前誰だよ」って目だったな。そうか、すれ違いになつてたのを忘れてた。くそう、テンション高くて頭が回ってないぜ。

（お、一夏が箒にヘルプを送ってるな。見事にかわされてるが）

と言うことはそろそろ一夏の自己紹介か。くくく、なんか楽しみなな。

「織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

おお、声が裏返ってる裏返ってる。さっきから呼ばれてたのに気づかないからだ。それを伝えない俺も俺だけど。

そう、俺の席は一夏の隣だ。まあ『お』の次は『か』だしな。そうなるのが当たり前なのだが。どうもあの神がほくそえむ顔が頭を過ぎよってしまう。

おどおどする先生をなんとかだめて、一夏が後ろを振り返る。その背中に受けていた視線を真正面から受けたからなのか、一瞬引きつったような表情を浮かべたが、すぐにいつもの顔（緊張をプラスした）に戻って、重い口を開いた。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願います」

カクツと頭を下げて、バツと上げる。うん、なんとという礼儀正しい礼だ。授業の号令でそれをされたら、先生は気持ちよく授業ができるだろう。

だがここは自己紹介の場。そんな儀礼的な礼は逆効果だぜ、相棒。俺が行く先々の転校先で実証済みだ。

よし、ここは親友らしく助け舟を出してやろう。受け取れ、一夏！

「えー、一夏。いつものヤツやってくれないのか。」

おし、俺ナイスアシスト！ 歴代に稀にみるプレーだぜ。ほら、クラスのみんなが一夏の方にすごく集中してるし。大成功だぜ。

「えつ……いや、その……ええー」

いや、どもるなよ、そこで。せつかくのチャンスが逃げていくぞ。さあ、いつもやっていたアレをみんなに見せてやれ！ アメリカではあんなにバカウケだったじゃないか。

……ん、アメリカ？

ああ、そうか。あれ一夏じゃねえじゃん。やべえミスった。すまん一夏。俺も上がってるらしい。

「い、以上です」

がたたつ。後ろの方で数人がずっこける音が聞こえた。うん、悪いみんな。一夏は悪くないんだ。どちらかと言えば俺のせいだし。いや、完全に俺のせいだな。後で謝るところ。

「あ、あのー……」

あ、そういえばここで来るんだったな関羽チョップ。もとい出席簿アタック。よし、ここが罪滅ぼしだ。一夏にこの主に脳細胞に迫る危機を知らせてやろう。

「一夏、避ける！」

パンツッ！ いきなり頭に衝撃が走った。

「ぐぬああああ　！？」

なんだ。いったい何が起こったんだ。まさか俺と一夏の痛点が繋がったとでもいうのか。いや、一夏はさっきと同じように俺の頭の上を見て……。うん、頭の上？

おそろおそろ後ろを振り返る。まず始めに目に入ってきたのが黒のタイトスカート。そして同じように黒のスーツ。すらりとした長身で、洗練されたボディライン。組んだ腕。狼を連想させるような鋭い釣り目。

「いよおっ、関羽！」

パアンツ！ さっきと同じところぐぬああああ……。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者が」

ああ、聞こえる、鳴り響くドラの音が。いや、実際は頭の中で出席簿に叩かれた音が反響しているだけだが。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

くそう、同じトコ叩くとはやりよる。しかも俺が背後をやすやすにとられるとは。何奴。

いや、普通に織斑一夏の姉。織斑千冬さんなのだが。ああ、まだ痛みがががが。一夏、お願いだから合掌しないでくれ。悲しくなる。

「諸君、私が織斑千冬だ」

「諸君、私は戦争が好きだ」

パアンツ！ クリティカアアアルぐぬああああ。

「誰が大佐か、馬鹿者が」

あれ、知ってるんだ。意外な発見だなあ。

「邪魔が入った。私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ」

そこから先は聞き取れなかった。いや、叩かれた痛みが後からきたもので。二度あることは三度ある。この言葉を考えた人は予言者だと思う。テレビにでたら一躍有名人だぞ。

頭に鳴り響く警鐘の中、かすかに女性との黄色い声が聞こえた。どうやら大佐……じゃなかった。千冬さんの演説が終わったようだ。そんな声援を鬱陶しそうに眺める千冬さん。なんだろう。ゾクゾクした。

おそらく鬱陶しいと口に出したのだろう。さらに声援は増して、すっかり俺の頭の中の警鐘も引っ込んでしまった。叩かれた部分は引っ込まないが。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パンツ！ うわぁ、こうして見るとすごい痛そうだな。事実痛いんだけど。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

と、この一夏の発言を皮切りに教室がざわめきはじめる。まあ要するに姉弟なのがバレたわけで。不要人だなあ一夏は。まあそこが案外女性を引きつけるポイントだったりするのかもしれないが。

なんとなく一夏が俺の家がある国に対して失礼なことを考えいるような気がしたが、まあ気のせいだろう。

そんなことを思っていたら、チャイムが鳴った。あ、俺自己紹介できてない。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「イエッサー！ 千冬大佐ぐぬああああ」

パンッ！ あれ、音が遅れて聞こえてきたぞ？

あ、小声で「本当に面倒な奴は春馬だな」って言っただ。いえ、テンション高めでおかしくなってる俺の頭脳が悪いんです。本当ですってば。

「春馬、まあなんだ……ほどほどにしとけよ」

「お前は席に着け、馬鹿者」

ひーふーみー……。あ、俺の脳細胞が5000×5だから、25000個死んだ。お前らのこと、俺は忘れないぜ……。

第七話 二万五千個の鎮魂歌（後書き）

む、大分原作と被ってしまった……。

全く一緒だと面白みに欠けるだろうと春馬にバカやらせました。その代償はサブタイトルどおりです。

誤字脱字報告、ご感想など、何でも待ってます。

でわまた ノシ

第八話 落ち着いてきた。気分的な意味で。（前書き）

ああ、年賀状が描き終らない……っ。

第八話 落ち着いてきた。気分的な意味で。

「驚いたな……。やっぱり、あの電話帳を数十回読み直した成果が出たってもんだぜ」

1時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。俺は椅子に座ったまま背伸びをする。背中がパキパキと音を鳴らす。猫背だからなー俺。直そうと思ってもいつの間になってるし。どうしたものか。

「あー……」

その隣、我らが織斑一夏はこの世の終わりだとしても言いたげな表情で突っ伏していた。たしかIS関係のことはサッパリなんだっけか。それじゃキツイわな。

俺はさっきも言ったとおり事前に渡された参考書を何十回も読み直してたし、父さんや母さんの手伝いをしていたから、このくらいはなんとも無い。『アズールカラミティ』の改良にも参加させられたし、恐らくIS関係で比べたら一夏よりは早く触れていた。

「それにしても、おい一夏。廊下見てみろよ、お前目当てのお客さんがいっぱいだぜ」

「いや、少なくとも俺だけじゃなくて春馬もその目当ての中に入ってるぞ」

はて、俺にそんな興味が沸くのだろうか。俺はISが操作できる以外は凡人であって、織斑一夏のように惹きつけるようなものは全

くと言っていていいほど持つてはいないはずだ。

……自分で言っけてなんか悲しくなってきた。

「そういえば春馬っていつ帰ってきたんだ？　しかもISを使えるなんて。俺なんかニュースで報道されたのに」

「あーいや、なんと言っかな。ちよつとゴチャゴチャしてるから説明は却下だ。割とどーでもいい無いようだからな」

ぶつちやけ、自分の失敗がみんなにばれるのが恐くて大きな声で言えない子供、といった感じだしな。簡単に言えば。

それにしてもそんなに男性がめずらしいのだろうか。となりの新一年生に混じって上級生もちらほらと見える。

確かに一夏の言うとおり、俺目当ての人もいるようだ。ニュースではやっていなかった、二人目の男性IS操縦者。入学式で明らかになったその事実、人を引き寄せるには十分なネタだし。まあ人の噂はなんとやらというし、すぐに無くなるだろう。

俺は一夏と違ってイケメンじゃないしな！　くそう。

一夏がちらつと俺とは反対側の女子を見ると、それまで向けていた視線をパツと逸らす。だが『話しかけて』という雰囲気はそのまま。本当に羨ましいよ。

「……ちよつといいか」

「え？」

突然一夏に話しかける女子が現れた。まあ言わずもがな、一夏のファースト幼馴染、篠ノ之箒だ。

話しかけられた瞬間、ピンと張り詰めた感じの空気が俺と一夏の間に広がる。恐らく箒が俺に対して警戒しているのだろう。間違つて面識もないのに目線を送ってしまったしな。あれは失敗した。そうしか言いようが無い。

「廊下でいいか？」

一夏の後ろ、つまり俺のほうをチラチラと見てくる辺り、俺が聞いていてはマズイ話なのだろう。というか一夏との話に邪魔をするなよ、と言っているようにも取れる。

「早くしろ」

「お、おう」

急に喋りかけてきた幼馴染の態度に戸惑いながらも、一夏はいそいそと椅子から立ち上がる。廊下って今は人が結構いるが、大丈夫なのだろうか。

そして一夏が廊下に出て行ってしまった後、教室に残された俺は暇を持て余すわけで。

「ふふう、お久しぶりですねハル」

すぐに暇はなくなってしまった。そういえばセレナと同じクラスだったのを忘れていた。主に頭を叩かれた衝撃で。

「そうそう、すごい勢いで叩かれてましたね。あんなに叩かれてもなお懲りないその様子から察して、やっぱりハルはマゾヒストで」

「誰がマゾじゃ誰があゝ！？」

いい加減このまま放っておくとマゾマゾと言いまくってきそうなので、トラウマになるようにセレナの頭にこれでもかと言うほどに拳骨でぐりぐりと締め付ける。

セレナのきれいな銀髪がそれに巻き込まれてくしゃくしゃと跳ねるが、気にしない。

「いやああっ！？ ハル痛いです、ごめんなさいでしたー！」

「うるせえっ！ 初対面の時からナメた口利きやがって、甘んじて受け入れろっ」

セレナの頭が俺の拳骨から逃れようと右に左にと揺れるが、そんなもので俺のロックが外れると思ったか。このままチャイムが鳴るまで締め付けてやる。

「うぐう、ギブギブギブ！ もうしませんでー！」

「そうか、だがチャイムが鳴るまでこれはやめん」

残念だったな、と言おうとした時だった。5回も関羽チヨップを喰らって腫れ気味だった俺の頭に衝撃が走る。ぐぬああああ。

その衝撃で俺のロックが外れたらしく、やっと拳骨から逃れられ

たセレナはフラフラとその場から離れ、ペタンと床にへたりこんだ。どうやら結構なダメージを食らっているようだ。これなら効果はあっただろうか。

それにしてもくそ、一体誰だ。俺のウィークポイントを的確に突いてきやがった輩は。そいつも許すまじ。

と、若干殺気立った俺が振り返った先には、なんとというか予想外の人物が立っていた。

「さきほどの先生への態度といい、今の暴力的な行動といい、貴方は立場というものを弁えていますの？」

ティナと同じように地毛であろう鮮やかな金髪。白人によく見られるブルーの瞳が、非難するようなやや釣りあがった目つきで俺を見ている。

ロールがかった髪はいかにもな高貴な雰囲気を放っていて、最近よく見るようになった『現在』の女子を表すような感じ。

「訊いています？ お返事は？」

「え？ ああ悪い。ちゃんと訊いてるぜ」

俺がいつものようにそう答えると、目の前の女子はやはり気に入らなかったようで、わざと教室中に聞こえるような声をあげる。

「まあ！ なんですのその返事、その態度。私が直々に注意して差し上げてるのに、それ相応の応対があるのではなくて？」

うん、絶好調だな。原作の初見と同じ、面として話すとけっこ頭にくる。だが落ち着け俺。ビークールだ。ここでキレても事態を悪化させるだけ。チャイムが鳴るまで耐えるんだ。

「それは申し訳ない。俺はそういうのに疎いんでね。君のことも知らないし」

実際は自己紹介できっちり聞いていたんだが、若干皮肉を混ぜてみくなったのだ。それと、例のセリフも聞きたかったし。

「知らない？ わたくしを？ イギリス代表候補生にして入試主席のこのセシリア・オルコットを！？」

よし、目標達成。あとは戦略的撤退だ。得にならないなら長居は無用ってね。

「……分かった。君の事も、今の注意も心の片隅に置いておくさ」

キーンコーンカーンコーン。

よしチャイムだ。時間合わせて若干間を空けたが、案外それもセシリアには気に食わなかったようだ。しかしそこは代表候補生。ぶつくさいながらも席に戻っていく。セレナはいつの間にか復活したらしく、頭を抑えながら机の上でダウンしている。あれ、これだと復活してないな。

俺も席に座りなおすと、廊下から一夏と篝も戻ってくると同時、千冬さんが教室に入ってきた。さて、次の休み時間はどうしようか。絶対また来るよな、セシリア。

なぜかブーツとしていた一夏が千冬さんの関羽チヨップを喰らった後、2時間目が始まった。あ、そうかこの展開だと次に狙われるのはたしか……。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、逸脱したISの運用は刑法により罰せられ」

やべえ、教科書を見なくても続きが分かるぞ。読み返しすぎだろ俺。大分この状況に慣れたからか、幾分俺の頭はいつもの状態を取

り戻していた。

でも一応ノートはとる。というかそれ以外やることがない。席は一番前だし、先生は目の前で黒板を書いてるし。落書きも出来やしない。

しかし読み返すだけでこんな量の文章を覚えられるものかね。やつぱりあの神め、俺の能力スペックいじりやがてるな。いや、今は助かってるからいいけどさ。

ふと隣をみると一夏が俺の方を注視していることに気づいた。なんだ、俺の顔になにかついてるのか？

「そついやあ春馬は小さい時から勉強できたよな……」

いや、そこで頭を抱えられても。そもそもこれは神の仕業であつて、俺の元々のスペックは多分お前以下だぞ、安心しろ一夏。

「そんなことないぞ。ほとんど丸暗記に近いからな」

「普通は丸暗記なんて簡単にできないって……」

一夏は俺の言葉にため息を吐くと、再び黒板の方へと向き直る。だよなあ、普通できないよな。でも今の俺はできるんだな。すまないが。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

どうやら俺と一夏のやり取りは山田先生に聞こえていたらしく、わざわざ気を利かせたのか一夏に優しく訊いてきた。

「あ、えつと……」

一夏は机の上に広げている教科書に視線を落とすが、アレは完全に目が泳いでいる。あ、全部わかってないなコイツ。

「分からないことがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

おお、それはなんとも頼もしい。その容姿には不釣り合いですが。いや失礼だな。でもなんか子供が背伸びをしているように見えてしまう俺がおかしいのだろうか。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

「ブツ」

思わず吹き出してしまった。すまない一夏。そういう性格なのはしっていたが、まさかそんな直球を投げてくとは思わなかったのだ。やばい、なんかツボった。笑いがとまらない。

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階でわからないって人はどのくらいいますか」

山田先生は拳手を促すが、やはりというか、教室は沈黙したままだ。それもそのはず。彼女らだって凄まじい競争率のこのIS学園

に入学できた猛者達なのだ。この程度ではつまづくことすらないだろう。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の後ろ、端のほうで控えていた千冬さんが一夏に敵かに訊く。
おい、一夏、まさか……。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「ブッ」

パンッ！ パパンッ！

1発目が一夏。2発が俺だ。つか今笑ってたから変に多段ヒットしてぐぬああああ。

「お前は笑いすぎだ馬鹿者」

そういつて出席簿を納める千冬さん。あれ、俺だけ注意されるのか。なんかシヨック。

「後で再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「いや、一週間あの厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

うわ、すごい鬼軍曹っぷりだな。流石は千冬さん、としか言いようが無いぜ。というか一夏はこんな人と2人で暮らしていたのか。俺だったら胃に穴が開くこと必至だな。

パアンツ！

「なぜっ」

「どうも馬鹿なことを考えている気がしてな」

そんな、クツ。俺の思考が外部に漏れているとでもいうのか……。

千冬さんは一つ咳払いをして雰囲気切り替えると、再び俺と一夏に視線を向ける。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

イエッサー大佐。肝に命じておきます。というかそこら辺りはアメリカで体験済みなのだが。主に模擬戦という俺のフルボッコで。

「特に、かつて神童と呼ばれたお前なら分かっていると思ったのだが」

うげ、千冬さん、よりによってそれを掘り返しますか。いい加減俺はそれを忘れたかったのに。ほら、お陰でなんかざわざわしはじめるし。

「織斑、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

え、なんでバレた？　といったげな表情をする一夏。すげえこの人。読心術でも持つてるんじゃないか。なんか千冬さんなら冗談に聞こえなくて怖い。

「望む望まざるに関わらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めるんだな」

容赦ないな、相変わらず。でも千冬さんが言っていることは正しくて、恐らく真実だ。本当にこの人は年齢以上の歳を生きているんじゃないかってくらいこと言うな。

そんな言葉を浴びせられた後だからだろうか。少し黙った一夏をフォローしようとして山田先生があたふたとしている。それに一夏が返事をする、千冬さんは黙って教室の後ろに戻っていく。

やばい、カッコいいわあ。

と、明らかに男を凌駕する格好よさを醸し出す千冬さんの背中に目を奪われていたら、何か山田先生の方は変な事態に進行していたらしい。一夏に向けられる視線がすごく痛い。

「あー、んんっ！　山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

我に返ったらしい山田先生が教団に戻ってきて　こけた。

なんだろう。さっきの千冬さんのがあるんだろうけど、すごく先
行きが不安だ。

俺は一夏斗と同じような顔をしていることに気づかず、そんな様
子の山田先生を見ていた。

第八話 落ち着いてきた。気分的な意味で。（後書き）

どうも作者です。全然進んでません。スイマセン。

しかもまた原作に近く……いや、いいんですけどね。逸脱しまくっているよりかは。

そういえばそんな設定を最初に書いた気がするな、という春馬の転生後の過去を千冬さんが暴露。彼女なりの仕返しだと思ってください。

誤字脱字、ご感想など、なんでも送ってくださいまし。

でわまた ノシ

第九話 うまい話には裏がある。大抵うまくいかない。(前書き)

いつもの通り書き溜めを放出。でも書き溜めも底をつきそうなのはここだけの話。

第九話 うまい話には裏がある。大抵うまくいかない。

よし、現在の状況を説明しようか。

なんだかんだあつた2時間目も終わり、休み時間。やっぱりいうか、何と言うか。一夏はセシリアに捕まっていた。まあそのきっかけを作ったのは誰でもない俺なのだが。

授業が終わり、休み時間の開始を告げるチャイムと同時に、俺は即行でクラスから離れた。セシリアが一時間目の休み時間の続きを仕掛けてくる気がしたからだ。そしてそれは案の定的中し、隣に座っていた一夏に飛び火したようだ。

クラスのドアの外からその様子をやがんで伺いながら、セシリアの注意が完全に一夏に向いていることを確認し、ホッと胸を撫で下ろす。

「こんなところで何をしてるんですか？」

不意に背後から話しかけられた。といっても知っている声だったからわざわざ振り向きはしない。現在進行形で身代わりになっている一夏の様子を見ながら答える。

「何って、一夏の様子を見てるんだよ。曲がりなりにも身代わりにしちまったからな。見届けておかないと」

「へえ、ハルも罪悪感を抱くことがあるんですか……」

何をコイツは失礼なことを。いや、それは前からだったか。とい

うか、なんか頭の上から指を鳴らす音が聞こえるんだが。

「じゃあさっきの私への拳骨にも、もちろん罪悪感をもってますよ……ねっ！」

「うぐっ!？」

突然首に腕を回され、左手を引つ張られる。まあいわゆる関節技だ。しかも中々キツイ感じの。というかなんか手つきが慣れてるなおい。

「さっきはすごく痛かったんですよ！　ちゃんと反省してください
」！」

「ばっかお前、あれは自業自得だろうが！」

「あんなのでキレルハルの方が悪いんですよ！」

ギリギリと俺の左腕は確実に捻り上げられていく。正直シャレにならん。何となく脳裏に「動いたら折れちゃうけどオーケー？」というセリフが浮かんだ。

やっぱりコイツ、軍関係者か？　ボーデヴィツヒの姓を名乗ってたし、いい加減その関係を調べないとな。

俺の呼んでいる限りでは、原作ではラウラに姉妹らしき人はいなかった。すなわちコイツは俺と同じ予定外イレギュラーの者だ。もしかしたら、コイツも神に送られてきた人かもしれん。

「あれ、なんか大人しくなりましたね。伸びちゃいました？」

すこし力がゆるくなったのを見計らってその腕から脱出……出来なかった。

やっぱりお前、軍とかの関係者だろ。なんでそんな相手の隙を誘うのが上手なんだよ。

「なあセレナ。すこし話がしたいんだが、離してくれないか」

俺の声色がいつもより違うのを感じ取ったのか、しゅしゅといった様子で解放してくれた。あーマジで折れるかと思った。

「話というのは？ 場合によってはまた固めますよ？」

「いや、あのだな。うーん……何と言ったらいいか」

いざセレナにそのことを訊こうとして、困った。「お前は転生者か？」なんて訊いたら、自分の正体をばらしているのと変わらないし。かといって他に選択肢は思いつかないし。

……あ、そうだ。これも変わった質問だが、まだマシな質問だろう。よっしゃ。では早速。

「神様って、居ると思うか？」

「へ？」

素っ頓狂な声を出して固まったセレナ。あれ、そんなにおかしかったか？ 俺も確かにこの状況で訊くには不自然だなとは思っていたが、ここまで驚かれるとは予想外だぞ。

「いや、神様だよ。カミサマ。存在すると思うか？」

とりあえずごり押しでセスナに問いかける。これで怪しげな雰囲気を感じ取ったら黒だ。我ながらなんとも適当なやり方だと思う。

しかし、そんな俺の考えとは裏腹に、セレナが浮かべたのは満面の笑みだった。

「はい、神さまはいると思いますよ。突然のワケわかんねえ質問ですが、答えるならそうですね」

それは歳相応とはかけ離れた、小さい子供がするような無邪気な笑み。世の中の汚れに染まることをしらない、純白のような笑顔。

そんなセレナの表情に……不覚にも俺は一瞬ドキッとしてしまった。くそ、なんでこんなヤツに。

「ああそういえば、ハルはアメリカの代表候補生でしたよね。そんな質問をするのは、やっぱりキリスト関係だからですか？」

「いや、俺は入信した覚えはないぞ」

父さんと母さんもそこらへんは知らないけど、確か俺とおなじはずだ。ティナは知らん。そんなことをわざわざ訊くような機会はなかったし。訊く気もないし。

と、俺のかま掛けが外れたところで、休み時間終了のチャイムが鳴った。俺たちはそのままクラスに入って、席に着く。俺の席付近で一夏と対峙していたセシリアも大人しく退散したようだ。

「お疲れ様と言ったところか、一夏」

「あ、春馬。なんだよ、見てたんなら助けてくれよ」

「いや、お生憎。俺もどちらかといえば被害者だ」

それだけいうと俺は三時間目の準備を始める。一夏も俺の言葉で大体察したらしく、「なんだかなあ……」と漏らしていた。

ふと、しまっていた筆箱を再び机の上に出した時だった。不意に先ほどセレナと交わした会話が再生される。

『ハルはアメリカ代表候補生でしたね。そんな質問をするのは、やっぱりキリスト関係だからですか？』

いや待て。俺は確かにセレナに自己紹介はしたが、あの時はアメリカ代表候補生だとは言っていなかったはず。

じきにばれるだろうとは思っていたが、こんな早くにばれていたのか？ どういうことだろうか。

まあでも、別に隠すことでもなかったし別にいいだろうと俺は区切りをつけて、続けて教科書を取り出す。教壇にはすでに千冬さんが立っている。

そして俺は忘れていた。入学初日の3時間目、なにがそこで起きるのかを。

慣れた手つきで黒板にチョークをあてたところで、千冬さんは何

かを思い出したように俺たちに向き直ると、その言葉を口にした。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

あ、そうか。さっきのセレナとの会話でさっぱり忘れていた。このイベントの存在を。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更は出来ないからそのつもりで」

千冬さんの説明で、ざわざわと教室が騒ぎ出す。ようするに面倒所をやってくれる良いヤツはいないか、ということだろうが、俺は別の意味に聞こえた。

代表者になればクラス対抗戦で強い人とも、生徒会とも関わりを持つことが出来る。

なんとも言うが、俺はもともとこの世界の住人ではなく、神により色々オプシオンを付けられて加わった転生者だ。そんなゲームみたいな燃えるイベント、見過ごせるわけが無い。

「安西先生……じゃなかった。千冬さん、俺、対抗戦に出たいです」

「だが神城、お前の専用機は調整が終わっていないと聞いているが」
え、まじでか。ああ、そういえば俺がなんとなく考えた案のせい

で調整に手こずってるんだっけか。そんな、ないわあ。

「まあいい。まずは一人だ。他にいるか？」

その後はお察しの通り我らがイケメン、織斑一夏が推薦されて、一夏がみんなの視線を集める。くそ、これが凡人とイケメンの差か。爆発すればいいのに。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

そして立ち上がったお嬢様、セシリア・オルコット氏。パンツと机を叩いて勢いよく立ち上がる。なんというか、期待を裏切らないよな、みんな。お兄さんは嬉しいぞ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

すごい剣幕だな。これはよほど男性が嫌いに見える。いや、実際嫌いなんだっけか。おい一夏、早くフラグ立ててくれよ。俺はどうも女性の甲高い声が苦手なんだ。

「實力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

なんとなく思ったんだが、今のセリフを俺が俺なりの口調で言ったら説得力あったんだろうな。アメリカだし。イギリスも十分島国ですよ、とはここでは言うまい。

あれ、でも一応俺は日本出身だよな。じゃあ意味無いか。という
かよくもまあそんなにボロボロと言えるものだな。よほど俺と一夏
のでストレスが溜まっっていると見える。でも、それ以上いうと流石
の一夏もキレちまうぞ。

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一マズイ料理で何
年覇者だよ」

あ、言ってる傍から。おい一夏、愛国心高いやつにそれは地雷だ
ぞ。俺もアメリカで何度か踏んじまって後悔してるからいうけどな
心の中で。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

やっぱり爆発したか。がんばれー一夏。確かこの後決闘だろ？
俺はそのあとジャンケンとかで決めてくれればいいや。

「決闘ですわ！」

あ、そうだ。ここでどちらが勝つか賭けをしてみてもいいかもし
れない。クラスみんなに掛けてもらえば、セシリア分は俺の儲け
だ。よし、千冬さんが居なくなったら即実行だ。

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
いえ、奴隷にしますわよ」

というか俺、完全に空気だよな。まあ構わないけどな。下手に突

っ込んで自爆するよりかはずっといいし。

いや待て。これくらい空気だと、この二人、俺も立候補してるのを忘れてるんじゃないだろうか？ うわ、それはそれで悲しいな。でも千冬さんが黒板に俺の名前書いてくれてるし、心配ないのか？

と俺が思考の海に潜っていると、クラスがドツと笑いの渦に包まれた。どうした、俺はまだボケてないぞ。

ああそうか、一夏がハンデをつけるか否かで話していたのか。さぞかし悔しいだろうな。同じ男として同情するぜ。でもなぜか俺の扱いはアメリカではまあまあだったけどな！ 両親のお陰だろうか。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、神城はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業をはじめる」

どうたら一夏の決闘イベントは終わったらしい。結構時間がたったな。さて俺は賭けの準備を考えておくか。金を入れるにはやっぱり箱があるか、一夏とセシリアと神城。この3つ分のちょうどいい箱をどこで調達するかね。

「つて、俺も含まれてるー！？」

「騒ぐな神城。もう授業中だ。」

思わず立ち上がってしまった俺を、千冬さんの鋭い眼光が俺を射抜く。あ、スイマセンでした。……じゃなくって！

「なぜ二人の決闘に俺も参加するんスカ！？」

「お前も代表に立候補したではないか。当然だ」

何を当たり前なことを訊いている、と言いたげな顔で千冬さんは答える。くそう、俺の懷を温めるチャンスがあ。別に今懷が寂しいってわけじゃないが。

「それに、お前は戦いたいのだろうか？　今度は『専用機』で」

そういつてニヤリと千冬さんが笑う。そう、何を隠そう俺の入試テスト相手は千冬さんだった。手加減してくれているのはバリバリ伝わってきて、「ほら、どうした？」とでも言っているようなあの戦闘はトラウマものだ。もう二度と戦いたくない。

そして千冬さんは俺が『カラミティ』で戦闘したことがないと思っている。実際、戦闘と呼べる行動を取ったのはあの『アラクネ強奪事件』だけだ。データ取りでは戦闘は行われていない。すべてC LBの調整と燃費改良だ。ティナとの模擬戦は、貸し出されたISを用いたものである。

要するに、今の千冬さんの言葉は見事に俺の心境を射ていたわけだ。俺は反論できずに黙って席につくしかなかった。

勝てるのかな俺。セシリアにも、そして主人公補正を持っている一夏にも。

隣で突然真剣に授業を聞き始めた一夏をぼんやりと見て、俺は静かにため息を吐いた。

第九話 うまい話には裏がある。大抵うまくいかない。（後書き）

このペースだと一巻分が終わる頃には20話とか行きそうだなあ。
玉露飴です。

自分のセスナイメージはラウラのほとんどを裏返した感じです。人懐こく、明るい。そんな感じ。そのうち挿絵とかで描きたいです。

セスナにも専用機がありますよ。『黒』を冠したISが。出てくるのは当分先の話ですが。

誤字脱字、ご感想などなんでも送ってくださいまし。嬉々として返信させていただきます。

でわまた ノシ

第十話 放課後の過ごし方（前書き）

年賀状がががが

第十話 放課後の過ごし方

「はい、織斑一夏とのコンタクトに成功しました。抜かりありません」

今は放課後、IS学園の生徒達はその日の授業を終えていた。

寮にもどる者、部活に行く者、居残って勉学に励むもの。

それぞれが思い思いに過ごすその時間の中で、誰もいない学園の屋上に静かに風に吹かれながら、今のセレナは居る。

転落防止用のフェンスを乗り越えた、その外側に腰を下ろす。

脚は完全に宙に出ており、特に怖がる様子も無くプラプラと意味もなく振りながらセレナは淡々と告げる。その口調は彼女が学園で見せてきたものとは思えないほど冷めていて、乾いていた。

「今日のところは特筆するような事象は確認されませんでした。はい、はい。では予定通り“偵察”を続行します」

彼女は頭に手を当てて、誰に話しているでもなく喋り続ける。そのコア・ネットワークのプライベート・チャンネルを開いている様子には、この場所では誰かに気づかれることはない。仮に気づかれても見つけることが出来る、セレナが選んだ絶好の場所だ。

「了解。それでは、通信を終了します。失礼します……ラウラ少佐」

そう言うと、セレナは今まで当てていた手を頭から離してコンクリートの床に手をつく。この場所からならばIS学園の大部分が見

渡せる。ハイパーセンサーを使えばさらに詳しい地形情報が分かるだろうが、それは禁じられている為に行えない。セレナは目視で見える限りの景色を眺める。

しかし、それは眺めるといふには少し違った見方だった。例えるならば、遙か上空から茂みに隠れ息を潜めている野ウサギを狙う鷲のように、鋭く、迷い無い目。

「……敵地にいるわけでも無いのに、私はなにをしてるんでしょうか。馬鹿馬鹿しいったらないですね」

ここは安全地帯。IS学園の敷地内だ。他国が侵攻してくることも、攻撃してくるわけでもない。それでもセレナはやめることは出来なかった。それが彼女の使命であり、全てだからだ。

太陽も西に傾き、普段より強い風がセレナの頬を掠め、銀髪を弄もてあそぶ。ただ強く冷たく吹くそれに身を任せながら、セレナは眼下に広がる校庭で部活動に励む生徒達の姿を、見据えている。

その眼帯に覆われていない、透き通るような蒼い瞳はとても鋭く冷たく、無機質で、悲愴に満ちていた。

「私は、何をしているのでしょうか」

「うつ……」

「ほらへたるなって。気合だ気合」

全ての授業が終わり放課後。少しは減ったかなと希望観測するしかない生徒の山。もちろん全員女生徒だ。上級生が少し減ったのは部活のお陰なんだろうか。ほら新入生、先輩を見習って部活に行きなさい。

あ、まだみんな入ってなかったっけか。

「意味がわからん……。春馬はともかく、俺には無理だ……」

「自己を謙遜しすぎだぜ、一夏。人間諦めたらそこまでだ。諦めま

せん勝つまでは！」

「それ、違うからな」

あれ、そうだったか。ニュアンス的には一緒だと思ったんだがなあ。と、段々ヤケ気味になってきた一夏を隣から励ます。

セシリアと俺との勝負が決まってから後の授業の一夏は、隣で見えて関心するほどに集中していた。なんとなく受験間近の浪人生を連想してしまった俺は、悪くないと思う。

しかし予備知識もなにもない一夏に、ISのことは厳しかったようだ。なにせページを一枚開いただけで専門用語のオンパレードだ。きつと、初めて参考書を開いた時の俺みたいに、豆鉄砲を食らった鳩みたいな顔をしていただろう。経験したからか、容易に想像できた。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。良かったです」

神城くんも、と付け足して放課後の教室に現れたのは副担任の山田先生だ。何かの書類を片手に持って立っている。というか先生、俺はついですか。

「くつ、これが主人公イケメンと脇役ノーマルの差か……！」

「はい？」

「先生、春馬のことは置いておいて下さい。それで何か用ですか？」

そりゃねえぜ一夏。と、本当に放置した先生に、少し悲しくなっ

た。これは女尊男卑より響くかもしれん。

「えっとですね。二人の寮の部屋が決まりました」

そう言つて俺と一夏に部屋番号の書かれた紙とキーを渡す。俺が一夏と一緒に居残つていたのはこのためだ。帰りたくても部屋が分らない。鍵も無い。これは家の鍵を忘れた小学生のように家の前で待っているしかないと考えて、大人しく教室にいたら案の定だつたわけだ。

やったー部屋だー。一人部屋だー。そんな風に内心ウキウキしていた俺はキーと紙に書かれた部屋番号を確認する。『1031』か。

一夏の部屋番号を聞こうとして、何か一夏と山田先生が耳打ちしていたのでそれが終わるまで待つ。近いといいんだけどなー。これからの絡みめに。

「あ、いやっ、これはそのっ、別にわざととかではなくてですねっ……！」

そして何か知らないが山田先生が突然顔を真っ赤にしてあたふたしはじめた。うん、やっぱり一夏は男の敵。再確認した。

「それで、部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

む、この声、この独特な気配は……っ。

「いよおっ、関」

「同じネタを二度も使うな。新鮮味に欠ける」

「パンツ！ はい、師匠おおおお。」

頭を抱えて床に倒れた俺に顔を引きつらせながら、一夏は千冬さんとの会話を進める。なんだよもお。俺のことは全面無視かよ。イジメ反対。ダメ、絶対。

「だ、大丈夫ですか？ 今日はすごい叩かれていますけど……」

ああ、山田先生の優しさが眩しい。でも先生、今ちよつと痛みが引くまで喋れそうにありません。ごめんなさい。

「放っておけ。それは無駄に丈夫だし、頭も良い。そう簡単に壊れないだろう」

「ありがとうございます」

「春馬、それ褒められてないぞ」

山田先生の優しさに泣けてきた俺は机を支えにして無理やり立ち上がる。俺は強い子元気な子。研究所に籠っていても、もやしでは無い事を、見せてやる！

「春馬くんも復活したようですし、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂でとってください。」

ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……。えっと、その、織斑ちゃんと神城くんは今のところ使えません」

「「え、なんですか？」」

お、被った。やっぱり日本人って好きだよな風呂。アメリカではずっとシャワーだったから久しぶりに入りたいなあ。

「アホかお前達は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「俺は構いません」

パアンツ。ナイスツツコミーぐぬああああ。

というか、なんかこの流れが自然になってきてないか。まずい。不変は飽きをもたらす。このままでは生き残れんぞ俺！

「お、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ だっ、ダメですよー！」

「い、いや、入りたくないです」

ふっ、紳士振りやがって一夏のやつ。男は皆羊の皮を被った獣。そこで遠慮をしているのは男が廃るってもんだぜ。

「ええっ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のようない……」

む、俺の頭脳が嘔いている！　これは変革のチャンスだと！

「そうか……一夏もだったのか……」

俺はゆらりと立ち上がり、その様子に驚いた様子の一夏に近づく。
ふ、動けまい。蛇に睨まれた蛙と言ったものだな。

「おい、春馬……？」

「ならもつ、隠すことはないっ！　さあ、俺と一緒にやら」

「変にボケるな。拾いづらいだろっ」

左足を軸足として、上半身をぜんまいのように柔軟に捻り上げられた身体を一回転し放たれた一撃は、俺の無防備な横腹に直撃した。

ゴスッ。ぐぬああああ。

「回し蹴りだと……。新しい……。惹か……。れる……。な……」

「え、えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。織斑くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだダメですよ」

そして無視である。もうこの流れは変えられないのか……。

「春馬、なんか千冬姉すごいノリいいけど、何かしたのか？」

「すまん一夏、今本気で痛いんだ」

俺の身体的ダメージと、クラスの外で騒いでいる女子達の会話の

内容が。全て俺が原因だが。

「……先に部屋、戻ってるからな」

「おう、分かった……」

千冬さんは空手かなにかやっていたのだろうか。内臓にもしっかりダメージが効いている。

俺が部屋に戻るために立ち上がったのは、それから15分も経ったあとだった。

「織斑……一夏……」

シャワーから出るお湯を頭からかぶりながら、セレナはその名を口にする。

織斑一夏。織斑千冬の弟。男で唯一ISを扱えるとして大題的に報道された人物。そして、今回自分に任せられた偵察の“ターゲット標的”。

本来セレナは偵察などをする役回りには向いていない。彼女のISは偵察型というよりは殲滅よりだ。それはセレナ自身も自覚しており、初めは訳が分からなかった。

そう、初めは普通に代表候補生としてIS学園に通うものだと思っていた。少佐にその任を任せられるまでは。

「お姉ちゃん……、そこまでして……」

織斑千冬。かつてシュヴァルツェ・ハーゼ、通称『黒ウサギ部隊』を師事した人物。実験の失敗により軍で出来損ない扱いを受けていたセレナとラウラ・ボーデヴィツヒに、再び輝きを取り戻させてくれた恩人だ。

千冬教官には感謝してもし切れないほどの恩がある。それゆえの姉の暴走だった。

千冬教官から栄光を奪った元凶として織斑一夏を恨むラウラは、代表候補生に決まったセスナに“偵察”をするよう指示した。恐ら

くラウラも、何とかしてこちらに来る気だろう。彼女にとっては怨敵を討つ、またとない機会なのだから。

その虎視眈々とした様子は、ドイツの冷水 と呼ばれていたあの頃にそっくりで、今思い出しただけでも寒気がする。

「見ていた限り、彼に非があるとは思えないけど……」

何処にでも居る、平和に囲まれて育ってきた青年へと変わろうとしている少年。まっさらなその姿に、自分がここにいることが場違いなのではと思うことが何度あった。

「……ッ」

シャワーのお湯の温度を上げる。そうしないとひどく寒いような気がする。先より遥かに熱めのお湯を顔に浴びる。それは白く輝く銀色の髪を伝って、身体へと流れ落ちていく。

私達は変わったはずだ。あの時のように孤独ではない。

「そうだよね……？ ケーニツヒ」

シャワーの傍にある台に置いておいたレッグバンドに向かって、消え入りそうな声でそう呟いた。

第十話 放課後の過ごし方（後書き）

いつの間にか春馬と千冬さんがボケとツツコミをしていた件。

どうも玉露飴です。

全然進んでませんね。すいません。これからはもっと精進します。

ちよつとだけセレナの状況を入れてみました。姉の来日はまだちよつと先です。

誤字脱字、ご感想などなんでもお送り下さいまし。参考&励みにさせていただきます。

でわまた ノシ

第十一話 ラッキーすけべ。言い訳には向かない。(前書き)

新刊の盾無さんの表紙と巻頭カラーの差分は俺得すぎでした。

第十一話 ラッキーすけべ。言い訳には向かない。

「あー、横っ腹が軋む……。あの人の前だと命がけだな」

千冬さんのツッコミという名の洗礼を喰らった後、俺は痛みが大
体引いたのを見計らって何とか歩いている。目指すはもちろん自室
だ。

部屋の番号は『1031』。俺が中段回し蹴りに沈む前に山田先
生が渡してくれた紙に書かれた。結局、一夏の部屋の番号は聞きそ
びれちまったな。まあ夕飯の時に聞けばいいか。

「『1031』……、『1031』と」

今の俺は教室から直接来ているため鞆一つの手軽な状態だ。恐ら
く大きい荷物はすでに運び込まれているだろう。そうでなかった
らいくら俺でも泣く。

「……で、一夏。そんなところで何をしているんだ？」

「……いやちょっと、な」

そこには、ところどころに穴が空いてボコボコになった状態のド
アの前で（どうやら自室と見られる）立ち尽くしている一夏の姿が
あった。

「……まさか、誰かと相部屋なのか？」

「……筈だった。しかもタイミングが非常に悪かった」

一夏の顔には若干の恐怖の色が映っていた。ていうかそのドア、たしか箒が竹刀で空けたんだっけか。そりゃ怖いわ。木で木を貫くってなによ。箒は『強化』でもできる人間なのか。

とりあえず一夏に親指を立てて『グッドラック』と無言で合図を送る。一夏も無言で頷いて、満身創痕なドア越しに中の様子を伺っているようだ。

さすがというか何と云うかな。飽きがこないような人生を送っているようで。俺はその一種の修羅場を通り過ぎると、目当ての『1031』号室に着いた。

ついさつきチラツと一夏の部屋の番号を見たら『1025』号室のようだったので、近くて何よりだ。これ以上は望めんだろう。俺はポケットの中突っ込んでいたキーを取り出すと、鞆を持っている手で鍵穴に差し込む。

「あれ、開かない？　なんだ、元から開いてたのか」

どうやら閉まっていると思っていたドアは元々施錠をなされていなかったらしい。俺が自分で鍵を閉めてしまったということだ。気をとりなおしてもう一度鍵穴にキーを差し込み、今度こそ開錠する。

「おお、すげえ。こんな広いのかよ。願ったり叶ったりだな」

代表候補生、専用機、IS学園への入学。随分とまあ怖いくらいにうまくことが進んでいる。別にそれがどうということではないが、ここまで嬉しいことが重なると、人間はどうしても言いようのない不安に駆られるものだ。

「ちゃんと俺の荷物もあるみたいだな。ほら、なんか見たことのあるでかい荷物もある……し……？」

ベッドの横に置いてあった俺の旅行鞆。それはいい。問題なし。だがその横においてあるとつても見覚えのある旅行鞆はなんだろう。

「あ、ルームメイトの人ですか？　ち、ちょっと待ってて下さい？」

「え、ちょっと待つ」

この声、シャワー室からか？　それよりもこの声がするということは、とても嫌な感じがする。先ほどとは別種の、本能的な不安が警鐘をうるさいくらいに響かせる。

キュツと、シャワー室から聞こえていた水音が止まる。まずい、早くこの場から脱出しなければ。でもどうすれば。だって出口に向かうにはシャワー室の横を通らなければいけないのだから。

そして無常にもその時は早くにやってきた。

「すみませんっ、お風呂いただいてました。私の名前はセレナ・ポーデヴィツヒで」

「セ、セレナ……」

そこには、赤みを帯びた体から湯気を漂わせ、一糸纏わぬ姿で立ち尽くすクラスメイトの姿があった。

どうやら言葉通り風呂に入っていたようで、慌てていたのか、同

じ女性だと思ったのか。セレナはバスタオルも纏わずに完全に全身を晒してしまっている。ちなみにポーズも表情も先ほどから固まって動かない。

俺の方もどうしようがない。出ていこうにも先ほどいったとおりセレナがマツパで立ち尽くしているので通れないのだ。いとも簡単に退路は断たれてしまった。唯一の救いはドアを閉めていたので外にこの状況が知られていないことか。いや、それは逆にマズインじゃないだろうか。

そんな一瞬の間の後、セレナの顔がみるみるうちに赤く茹立っていく。水を含んだままの絹糸のような銀髪はその毛先から水滴をたらし続けている。

「あ、あーその、セレナさん？ これは俗に言う『事故』ってやつでしてね？ わざと出来る芸当ではなくて」

「……ですか」

「え？」

俺の最後の抵抗である弁論を跳ね返すように、セスナの真つ赤に俯いた口から呟かれた言葉が俺の言葉を遮った。しかしよく聞き取れなかった。ていうか早く服をきてくれないか。いくら目を逸らすといっても限界がある。おもに男心的な意味で。

「わ、私の裸は、『事故』なんですかっ！ ハルにとっては『事故』で終わるほどありふれた事なのですかっ！？」

「お前落ち着けっ！ そんな事故が多発してたまるかっ」

いや、それはそれで嬉しい……て何を場違いなことを考えてるんだ。今はこの茹でセレナをなんとかしなくては。

「早く服を着ろっ！ 湯冷めするぞっ！？」

あれ。なんか注意する部分が違う気がするが、この際どうでもいい。早くこの事態を治めなければ誰かに気づかれてしまうかもしれない。そしたら俺の社会的立場は絶望的だ。精神的にもダメージは大きいだろう。

「なっ！？ ハルにとっては私の裸は見るに足りないモノなんですなっ！？ ふざけんなっ、結構自信あるんだぞっ！？」

「ああもうめんどくさいなあっ！」

恥ずかしさゆえに暴走して止まらなくなったセレナに走りよって押し倒す。別にした心なんてものはない。俺の手には部屋にあったベッドのシーツが握られている。それを無理やりに暴れるセレナに撒きつけてなんとか見えてはならない部分は隠すことができた。これで前を向いて話すことができる。

「へ、あの……、ハル……？」

「ふう、これでよし。ん、落ち着いたか？」

それから大分シーツの中でセスナは暴れていたが、ようやく落ち着いてくれた。その間俺はシーツがまた剥がれないように上から押さえっぱなしだ。つまり俺がセスナの上に馬乗りになっている状態だが、今の俺にはそれを恥じるような余裕はない。

いままで殴る蹴るされていたのだ。しかも見かけによらず重く痛い。セレナも格闘技を習っていたのだろうか。なんだ、千冬さんといい女子は格闘技を習得しているのがデフォなのか？

「は、はいっ！　ですから、早くどいてください……」

どうやら本当に落ち着いたようで俺はすぐにどいてやる。爪に引っ掻かれたりのか、腕には生傷が何箇所か走っていた。ヒリヒリして痛いな。

「ふ、服を着てきますから、とっとと出て行ってくださいっ！」

「鳩尾っ！？」

と、落ち着いたと思ったらこんどは文字通り部屋から蹴りだされてしまった。ドアはすぐに閉まり、カチャッと施錠をした音までする始末だ。

運がいいのか悪いのか、廊下には誰もいない。俺は鳩尾を手で押さえながら立ち上がると、制服についたホコリを払い落とす。

「何か、今日は随分と身体的なダメージを食らってる気がする」

頭を叩かれること10回、関節技1回、中段回し蹴り1回。そして今の鳩尾が1回。いいサンドバックっぷりだ。模擬戦でのティナとの戦闘を彷彿とさせるイジメられっぷりだ。

「そつえばティナ、結局顔を見せなかったな」

ま、あつちはあつちでクラスになじむのに努力しているのだろう。そう俺は自己解釈して、今さっき蹴り出されたドアを静かにノックすることにした。

「……どうぞ」

なんともムスツとした声がドア向こうから聞こえた。一旦いまのは置いておくことにして、俺はドアを開いて中に入る。

セスナは言われたとおり服を着てくれたようで、頭にタオルをかけていた。うん、自然体に戻ってくれたようだなにより。これで落ち着いて話ができるってものだ。

「ん、ん。で、よりによってハルがルームメイトになりやがったですか」

「ひどい言いようだなオイ。まいいや。さっきは悪かったな。てつきり一人部屋だとばかり思っていた」

そう、一夏の惨状を見て気づくべきだったのだ。俺にはそんな主人公的イベントは起きないと思い込んでいたのが裏目にでた。ここはIS学園。本来は女生徒しか居ない場所だ。これからは気を引き締めていかないと今度は本気で死にかねない。割と本気で。

セレナは先ほどの光景を思い出したらしく、再びボンツと顔が耳まで茹で上がる。あ、なんかやつちまった感がバリバリするぜ。

俺がもう何度目かになる衝撃に備えて身体を強張らせるが、その衝撃はこない。恐る恐るセレナの様子を見てみると、なんか真っ赤になりながらブツブツいつていた。

「……なんでそんな普通にいられるんですか」

「いや、そんなことは……」

別に見慣れてしまっているわけではない。そんな羨ましい状況に俺は身をおいたことはないし、これからもないだろう。どっかの誰かは別にして。

「もういいです。このことは私も忘れますから、ハルも忘れてください。いいですか？」

命令ですよ、と強い口調で話すセスナだが、いかんせん顔が真っ赤なままなので説得力に欠けすぎる。もちろんこれを本人に伝えたら俺がどうなったことが分からないので黙って頷いておく。その返事をみてセスナも納得したらしく、「これからよろしくです」と一言早口でいうとさっさと私物の整理を始めてしまった。

「なんだよ、根に持ってるんじゃないか？」

「うるさいバカ！」

目覚ましを思い切り投げつけられて、ついに俺の意識はそこでぶつつつりと途切れた。

「……でも、少し助かつちやっただかな。嫌な考えも飛びましたしい。ゆえに最後にセレナが言った言葉は聞いていないし、俺は知らない。」

翌日。朝だ。

俺はやっとこさ調整が終わった。『カラミティ』を待機モードにして身に付け、教室へと向かう途中だ。

『アズール・カラミティ』の最終調整が終わったのが昨日の深夜。その連絡があつたのは今日の早朝だ。「春馬さん、後はよろしくお願いしますー」といってぶっ倒れた父さんの助手を見て、思わず敬

礼してしまった。でもこれでクラス代表決めの勝負に間に合うというものだ。

『カラミティ』のCLBはその機能的に一夏のIS、白式の単一ワンオフファビリティ仕様能力零落白夜に近いものがある。シールドエネルギーを犠牲にして攻撃に転化するなんてまさにそうだ。

ということは、弱点も似通っているということだ。しかもその点CLBは単一仕様能力でないし、起動し始めたらそんなに細かく使用を停止できない。固形燃料と液体燃料のような差だ。

そこで俺が冗談半分で提案した案があっただが、まさか実現して、試験装備までできる段階までくるとは夢にも思わなかった。だがそれで拡張領域バースロットを結構使ってしまったが。

結局『アズール・カラミティ』が近接攻撃型であるのは変わらない。射撃武器もあるが決定打になるものではなかった。銃で牽制しつつ近接で持っていく、これが鉄板だろう。

「放課後にはテスト起動だな」

『カラミティ』はもちろん、改良後になって初めて起動するCLB共に。

決戦の時は、着々と近づいてきていた。

第十一話 ラッキーすけべ。言い訳には向かない。（後書き）

イヴですねー。どうも玉露飴です。

なんか今回の文面は若干に支離滅裂な気がします。でも投稿する。それが玉露クオリティ（おい

次回はいい加減にIS戦にしたいなあ。そしてズレにズレた春馬のキャラ修正だ

誤字脱字、ご感想など何でもお送りくださいませ。糧にさせていただきます！

でわまた ノシ

第十二話 烈風はアリーナに吹いて（前書き）

アニメ放送開始の影響か、ISの二次創作が増えましたね。嬉しいです。

さて、玉露飴もみなさんにならって頑張りますよっ！

第十二話 烈風はアリーナに吹いて

時間は飛んで、ついにやってきた一夏とセシリアとの決戦の時。

いや、だって別に面白いことは起きてないぜ？ 一夏の周りはそりやにぎやかで楽しいだらうけどさ。え、セレナ？ ……それは後で。

『登録操縦者、神城春馬を認識。アズール・カラミティ、起動します』

カラミティから響く聞きなれた電子音と共に、俺の体に合わせて装甲が閉じていく。接合部分からエアロック特有のカシユツ、カシユツという乾いた音が鳴ると、俺とカラミティが『繋がる』。

『ハイパーセンサーと操縦者の脳波を同調開始。チューニング終了。各部位と生体電気との同調開始。終了。ハイパーセンサーを展開します』

俺の視界が、自分の肉眼のそれからカラミティのハイパーセンサーへと変わる。一気にクリアになった感覚は視界から順に下へと伝わっていき、足のつま先まで行き渡る。

これはカラミティが俺の筋肉に伝わる生体電気の伝達効率を上げてくれているお陰だ。これで操縦者は通常反応できないはずのミサイルなどを容易くたやす避けることができるようになる。なんとも便利なものだ。

『カラミティ、操縦者を中心に展開完了。各部位をチェック。終了。』

不良部位は見当たりません」

当然だ。なに俺が入念にチェックしたんだからな。これでエラーメッセージとか出たら泣けてくる。

ちなみに、ティナが研究所のテストパイロットの時にはこの段階の前にアウトだったらしい。まず起動もできないところから、このカラミティの電子音の声も聞いたことがないんだろうな。

『戦闘待機中のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルーティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り』

「懇切ご丁寧に、どうも」

俺は誰もいないハッチに生真面目に状況を報告してくるカラミティに、返事はないと分かっているながら一人呟く。

一夏とかは今頃、筈や山田先生、千冬さんに白式についてレクチャーを受けている頃だろう。別に羨ましいってわけではない。決して。

「べ、別に羨ましいわけじゃ、ないんだからねっ」

「キモいぞ春馬。ついでにキショい」

うつ、今を見られていたか。しかもこのだるそうな声から察すると、アイツ以外思い当たらない。

「ティナ、それはひどいぜ。まあ確かにキモいっちゃあキモいけどさ」

「いいから準備ができたなら行きなさい。相手を待たせるな」

いい感じに無気力に声を張り上げると、それと一緒に拳を突き出す。ああ、なんだかんだで応援しに来てくれたのか。天邪鬼なやつめ。

「オーケー。行ってくるぜ」

俺もカラミティに包まれた右手を握ると、ティナが突き出した握りこぶしと軽くぶつける。俺たちの中のハイタッチみたいなものだ。

『CLB及びECの作動準備完了。通常稼動状態によりECのみを発動します』

ECとはEnergy Compressorの略称。エネルギー圧縮機構のことだ。これで出力するエネルギーを圧縮し、少量のエネルギーでISを稼動させるシステム。俺が冗談半分で発案し、両親が開発。アメリカが独占研究し、現在で試験稼動中として積んでいるのはカラミティだけだ。

余談だが、両親曰く「ちよつと中国の技術を取り入れてみた」らしい。おい、許可なく使うなよ。いいのかそれ。

アメリカの見事なジャイアニズムを披露したところで、そろそろアリーナに行こうと思う。ティナは言いたい事はいい終えたのか、すでに観客席に戻ってしまっているし。

今俺とカラミティがいるハッチには、防御壁の向こうにご丁寧に本格的な電磁式滑走路が繋がっている。これで格好よくアリーナに

レールカタバルト

飛び出し、戦闘開始というわけだ。

俺は防御壁を開いてカタパルトハッチに移動した。すると、所定位置についたことをカタパルトが感知したのか足元に接続具が滑り込む。

『電磁滑走路との接続終了。^{コネク}カウントダウンタイミングは操縦者に譲渡されます』

やべえ、なんかドキドキしてきた。さっきから心臓がうるさいほど高鳴って仕方がない。

「あー深呼吸、深呼吸」

すーはー、すーはーあー。……よし！

『カウントダウン開始。3……、2……、1……』

ホログラムで目の前に表示された赤のランプが、一つずつ緑に反転していく。さあ、行くぞ！

「GO！」

そして、カタパルトから撃ち出される様にして、俺とカラミティはアリーナに飛び出した。

「あら、逃げずにきましたのね」

気持ちよくアリーナに飛び出した先にいたのは、気持ちいいくらいに高飛車なセシリア・オルコットだった。

というか今のは一夏に向けられた言葉か？ 俺に向けられた言葉なのか？

セシリアが搭乗するISは『ブルーティアーズ』。射撃を主体とした機体で、第3世代兵器「BT兵器」と言われる武装のデータをサンプリングするために開発された実験・試作機。そのために、実弾装備が一切なくて、一夏に勝つのが困難。っと、ここまでが俺の覚えていた知識だ。

今のセシリアが握っている2メートルを超す長銃、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』は、発射から着弾までおよそコンマ4秒。ISの補助があつてようやく回避できるスピードだ。

ちなみに、すでに試合開始の鐘はなっているので、俺が攻撃してもなんら問題はない。

『搭乗者の武器選択を感知。ツイントルネードを展開します』

俺の両手に感じる、二つの感触。二九口径の短銃、『ツイントルネード』だ。実弾であるこれは、もちろん対IS戦闘用にチューニングされてある銃なので、対人用とは訳が違う。

まあそれでも威力も射程距離もイマイチなので、けん制用にしかないのだが。

『警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認』

さあ、そろそろだ。

「そついうのはチャンスとは言わないな」

「そう? 残念ですわ。それなら」

セシリアが言い終わる前に、俺はとつさに横に加速する。恐らく照準は一夏だが、いつまでもじっとしているのもつまらない。

さあ、お前の“速さ”を見せてやれ、カラミティ!

＊

「お別れですわね！」

横にいた春馬が移動した直後、キュインツ！ という耳をつんざくような独特な音が響く。それと同時に走った閃光が刹那、俺の体を打ち抜く。

白式のオートガードに守られたが、成型途中だった右肩の装甲が吹き飛ぶ。遅れてやってきた衝撃波で左腕がねじ切られるように引つ張られ、そして瞬時に自動姿勢制御を行う白式に振り回された俺の意識は、痛みと気持ちの悪い重力感でブラックアウトしかけた。

バリアー貫通。ダメージ46。シールドエネルギー残量、521・実体ダメージ、レベル低。

「大丈夫か！？ 一夏！」

先ほどこれを予測して回避したと思われる春馬が俺に呼びかける。しかし今の俺は白式から流れてくる情報で手一杯。頷く以外なかった。

「さあ、踊りなさい！ わたくし、セシリア・オルコットと、ブル
ーティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

絶え間なくセシリアの弾幕が降り注ぐ。春馬も短銃 ツイン
トルネード と一致 で応戦しているが、互角というわけではな
さそうだ。

「あら、アメリカ代表候補生とあろう方がこの程度なんて、笑い種
ですわね！」

「言ってる！」

春馬はツイントルネードの特性である速射をフル活用しているみ
たいだが、それがセシリアに当たる気配はない。お互い円を描くよ
うにその中をビームと実弾が飛び交う。

「装備、俺の装備は!?!」

白式に問うと、現在展開可能な装備の一覧が表示され……て、一
覧？

「一個しかないんだが……気のせいかな？」

『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されない。バグか？
ここでバグなのか？

「ええい、ままよ！」

指を咥えて待っているよりかは断然いい。俺はそれを呼び出し^{コール}、
展開する。

高周波の音と共に俺の右手に展開された片刃のブレード。渡り1・6メートルはある長大な『刀』が俺の武器らしい。

俺は得物を右手に構えて、遠くで戦っている友と、セシリアを見る。

「やってやるさ」

引くわけにはいかない。そうこころで呟いた後、俺は戦場へと飛び出した。

「うおおおお！」

「っ！」

春馬に気を取られていたセシリアに、気合一閃、真横から水平に刀を振り切る。しかしそれはセシリアが身を捻って俺の頭上へと回避することによって空を斬った。

「中距離射撃型の私に、近距離格闘装備で挑もうなんて……笑止、ですわ！」

「なら、近距離強襲型の俺の攻撃、当たらなくて当然だよなあッ！」

セシリアは今俺と向かい合っているため、その横から春馬の声が聞こえた。俺がその方向を見ると、俺の『刀』とは全く違う、細長い鉄の板を構えている春馬のISがあった。

春馬はその大きい両刃ブレード ミストラルmk?と一致を両手で斜に構えて、猛スピードで突っ込んできた。

「なっ！？ 真正面からなんて、正気ですよ！？ 行きなさい、ブルーティアーズ！」

セシリアは自分の横に待機させていたフィン状のパーツ、『ブルーティアーズ』に命令を出すと、ブルーティアーズは小さいフィン状の機体を一回転させ、突っ込んで来る春馬に襲い掛かる。

ちなみにこのフィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いていて、その特殊装備を積んだ実戦投入一号機だから機体にも同じ名前がついているらしい。

今、その『ブルーティアーズ』に命令を出しながらセシリアがその口で説明していた。講演ありがとうよ。

「こいよファンネルもどき。カラムティの軌道についてこれるなら、な！」

そういうと、春馬は急に突っ込んできた軌道から真上へと直角に上昇する。って、直角！？

「な、なんですって！？」

セシリアは春馬のこの動きは想定外だったのか、慌てたようにスターライトmk?を構え、狙撃する。しかしそれは春馬のトリッキ―な動きによって、次々に回避されていく。

「す、すげえ……」

俺はこの戦闘に参加しているのを忘そうになるくらいに、春馬の

動きに見入っていた。白式のロックオンカーソルがカラミティの動きに振り回されている。出たら目なスピードだ。

その時、カラミティに引き離された一つの『ブルーティアーズ』が、いきなり俺の方向へ飛んできた。どうやら休憩は終わりらしい。

「なら、俺もやってやるさ!」

俺は春馬の軌道をイメージしながら、白式を加速させた。

「まだいけるか、一夏?」

二十七分。俺は金魚のフンのように付きまとう『ブルーティアーズ』をかわしながら、一夏の白式に問いかける。

「ああ、だが正直厳しいな……」

それは当たり前だ。一夏の白式は未だ初期化と最適化が終わっていないのだ。要するに初期設定のまま戦っていたのだから、よく持ちこたえたと褒めてあげてもいいくらいだ。

カラムティはまだ目立ったダメージは負っていない。それはセシリアも同じで、一夏の経験値不足は目に見えて明らかだった。

「さあ、^{フィナーレ}閉幕と参りましょう?」

セシリアは最もダメージを負っている一夏の白式に狙いを定め、『ブルーティアーズ』に命令をだす。多角的な直線機動で、『ブルーティアーズ』文字数が多いので以下ビット が接近する。

「一夏ッ!」

「くっ!」

一夏の上下に回ったビットが、その先端からレーザーを放つ。俺はとりあえず自分の得物を構えて、飛び出したい衝動を抑える。

ここで俺が飛び出してしまつたら一夏のセシリアフラグ建設に関わるかもしれないし、第一に一夏の成長に支障がでる。それが考えられないほど、俺はバカではない。

俺が思考にふけていた時、それは起きた。一夏がビットを一機落としたのだ。観客席からワアアアと歓声が広がる。いいなあ、さすがは主人公。

そして少しの間を空けて間合いを取った後、一夏を追っていたもう一機のビットも斬り落とす。

「さて、そろそろ鳥肌シーンだな……」

俺の視線の先では、一夏が近接ブレードを持っていない手を閉じたり開いたりしていた。

「獲った!」

一夏は振り下ろしたブレードでビットを叩き落とし、そのままIS独自の無重力機動で最後のビットを回し蹴りで吹き飛ばす。

セシリアのスターライトmk?の銃口は間に合わない。絶対に一撃が入るタイミングだ。

しかし、戦闘では絶対という言葉はあまり過信しない方が良い。

「かかりましたわね」

にやり、とセシリアの顔が笑みに歪む。一夏はすでにブレードを振り始めており、とても回避できる体勢ではなかった。

「お生憎さま! ブルーティアーズは6機ありましてよ!」

そのビットは今までのレーザー射撃を行うものではなく、『弾道ミサイル型』だった。

赤色を超えた、白いその爆発と光に一夏と白式は包まれた。

★

「はっ、主役は遅れてやつてくる。アメリカではお馴染みだな」

今まで黙って見ていただけだったカラミティの操縦者、神城春馬が勝利を確信したセシリアの横に降りてきた。

「そんなことを言っていられますの？ 次は貴方の番……！？」

セシリアの注意が、一気に春馬から未だ爆煙が晴れない場所に移る。それと同時に、爆煙が光の粒子とともに吹き飛ばされ、その中心にいたISが姿を現す。

純白に彩られたIS。その名は『白式』。

今、織斑一夏専用機となった機体だ。

「ま、まさか……一次移行！？ あ、貴方、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！？」

セシリアの顔色が、先ほどの勝利を確信した笑みから驚愕の色へと塗り替えられる。横にいた春馬はそっとその場から離れると、再びアリーナの片隅へと移動した。

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

ゆっくりと、純白の武人はその手に持つ得物 雪片式型 を構えて、唱えるように話す。

「俺も、俺の家族を守る」

「……は、貴方、何を言っ
て」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

セシリアは未知なるISに変化した白式に、焦ったように弾頭を再装填したビットを2機、飛ばしてくる。

再びあの多角形直角機動。しかしそれを先ほどの白式の動きではなく、まるでその機動が見えているかのような動きでかわす。

そしてその回避行動の流れを殺さず、セシリアに向かって突撃する。その右手に握られた雪片の刀身が光を帯び、その眩い光は白式の動きと共に尾を引いていく。

「うおおおッ！」

先ほどよりも早い一夏と白式の動きに反応できず、セシリアの行動が遅れた。その隙を見逃さずに懐に入り込んだ一夏は、下段から上段への逆袈裟斬りを放つ。

が、その光を帯びた刃先はセシリアに当たる前にフツと輝きを失い、同時に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『織斑一夏、脱落。残りセシリア・オルコット。及び、神城春馬』

「やっと俺の出番……かな？　なんか弱つてるところを突くみたいで気乗りしないが」

俺は呆氣に取られたままアリーナから退場した一夏の後ろ姿を見ながら、同じく呆氣に取られているセシリアに近づいていく。

結局、セシリアも俺もそんなにダメージは食らっていない。

「……はっ、だ、誰にもの言っていますの？　わたくしにとってこんなもの、準備運動ストレッチ以下ですわ！」

そういうセシリアのスターライトmk？を持つ腕は、カタカタと小さく小刻みに震えている。よし、これで一夏フラグは立ったな。

「それは俺との戦闘のためか？ そりゃありがたいことだな」

「何を。貴方だつてその範囲ですよ？」

一夏が落とし損ねたビット達が、セシリアの周りに集まり始める。あくまでもセシリアは俺との連戦を希望らしい。ビットの操作で疲れているだろうから、明日に持ち越しても良かったのに。

「ありゃ、そうですか。……じゃ、初っ端から本気^{クライマックス}つてことで」

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は2分04秒です』

約2分か、上等だ。マツハで蜂の巣にしてやんよ。

「っ！ 貴方、何を」

カラミティのCLBに気づいたのか、セシリアが俺から距離を置く。それと同時にビットも起動するのを忘れずに。

しかし、それは失策だ。CLB中のカラミティをビットが追って攻撃をするなんてことは、特に。

「俺を見逃すなよ？」 『準備完了。Standby, Ready?』

刹那、俺とカラミティは一陣の風となった。

＊

「なっ、何なんですのあのスピード!？」

カラムティの背部ユニットである大型特殊推進翼からのエネルギー出力が爆発的に上がったと『ブルーティアーズ』のハイパーセンサーが読み取ると同時に、カラムティはその場から瞬間移動さながらの機動で上昇し、ビットに追われている。

いや、あれはビットが追いつこうと食いついている？

「こんな、こんなバカなことが……!」

セシリアはスターライトmk?のスコープで、カラムティに狙いをつける。ことができなかった。カラムティの動きに、ロックオンカーソルがついてきていない。常にカーソルの前を疾走している。

「でもっ!」

負けられない。セシリアはオートサイティングからマニュアルに切り替えて、狙撃を始めた。しかし、一向に当たる気配がない。

ビットの方は、カラムティに追いつこうと最大出力で接近する。しかし一向に差は縮まらない。すでに射撃を始めているが、それも当たることなくアリーナの地面に小クレーターを作るだけだった。

「ほらどうした狙撃者! スナイパー 強襲者に当たってないぞ! アタッカー」

その時、アリーナの壁で直角機動で曲がったカラミティの動きに追いつけず、曲がりきれなかった一機のビットがその壁に無様に突っ込んで爆散した。

その後も、全て鋭角な挙動で動くカラミティに、それに反応しきれずふらついたビットと曲がろうとしたビットがぶつかり、交通事故故よろしく爆発した。

「あと一機だ！」

セシリアはその声に焦りを隠せなかった。先ほどの白式よりも明らかに早い、出たら目な動きをするカラミティに自分のビットがいつも容易く落ちていく。

その焦りからでた狙撃は、掠ることもなくはるか彼方へと飛んでいく。

そして突然、急停止したカラミティは自分の横に自分の得物、ミストラルmk?を構える。しかし刃を水平にしたままのそれは、振るわれることはなかった。

その刃めがけて、フルスロットル最大出力でつつ込んでいく最後のビット。カラミティのような機動をとれないビットにとって、そつと置かれたそれは自分に迫る断頭台。

猛スピードでつつ込んだビットは真ん中から真っ二つに裂かれ、その勢いでカラミティのはるか後ろに飛んでいき、爆発した。

「さて、これで残りはセシリアさん。お前だけだ」

大型特殊推進翼から放たれる赤い粒子エネルギーは先ほどアリーナの端でこちらを見ていた時の数倍にもまし、装備しているブレード、ミストラルmk？はその刃に赤い光をまとっていた。

「ま、まだですわ！ わたくしが貴方なんかに　！」

セシリアはスターライトmk？を構え、カラムティに向けて放つ。しかしそれはビームが避けているのではないかという動きで捌ききると、あっというまにセシリアの懐に入り込んだ。

「ひっ」

大型特殊推進翼が、ガバツとその翼を広げる。赤く透き通る光が収縮し、目を焼くほどに輝きが大きくなっていく。

「いくぜ、インセンス・レイ粛清の光、きど　」

その時だった。今まで膨れていた赤い光球はフワツと霧散し、ミストラルmk？の刃からも光が失せる。

「あ、やっちゃった……」

スターライトmk？を手からこぼれ落とし、とつさに顔の前で両腕をクロスさせていたセシリアに、そんな間の抜けた声が聞こえた。

「神城春馬、脱落。試合終了。勝者　セシリア・オルコット」

「……え？」

涙目のセシリアの耳に割れんばかりの歓声が聞こえたのは、目の

前にいたはずのカラミティが地面に降り立った後のことだった。

第十二話 烈風はアリーナに吹いて（後書き）

マツハで蜂の巣にしてやんよ（´・`・´） どうも、玉露飴です。

今回は長めになっております。いかがだったでしょうか。このくらの長さが良いという方はぜひご連絡を。

これで決闘は終了。フラグの行方は一夏と春馬、どちらの手に？

……なんとなく、予想はつきそうですが。

誤字脱字、ご意見ご感想など、お待ちしております。

でわまた ノシ

第十三話 烈風は想いをはらんで（前書き）

他作者様のIS作品のISがまた他の作者様のISと戦闘する、いわゆるクロスなんです、あつたら面白そうだなーと思う今日この頃。

同じ考えの人、いませんかー（・・3・）？

第十三話 烈風は想いをはらんで

「よくもまあ期待させておいてこの様か。大馬鹿者め」

試合が終わって、アリーナからハッチに帰ってくると、そこには千冬さんが待っていた。相変わらず男より男らしい女性だ。凜とした背筋がそう感じさせる。

「いや、俺だつてこんなつもりじゃあ」

スパアンツ！ 今はISをまだ展開しているので痛みは少ないが、少しヨロツとした。すごいな、関羽チョップ。

「つもりだと？ 甘えたことを。現にお前はセシリアに負けたのだ。さつき一夏にも同じ事を言ったが、明日からはさらに訓練に励め。アメリカでのことは知らん。今この結果が全てだ」

うわあ、すげえ結果主義だな。それも千冬さんらしいが。

「何にせよ、今日は休め。以上だ」

「分かりました。っはあ。いけると思ってたんだがなあ」

『アズール・カラミティ』を待機モード 青いリストバンドにして、今日の戦闘データを自分なりに分析する。これはISの補助など使わずに俺の頭の中で、だ。

すると、すでにハッチの出入り口である自動ドアの前まできてい

た千冬さんがふとこちらに振りかえる。やべ、未練たらしいとぶたれるか？

さつと構える俺の様子に、すこし苦笑した千冬さんは教師の表情から友人の姉のそれに変わっていた。

「まあ、悪い動きではなかったがな。励めよ、学生」

そして、今度こそ千冬さんはハッチから出て行ってしまった。いまの千冬さんの言葉に啞然としている俺を残して。

「……まさか、デレた？ デレたのか？」

いや、そんなことあるものか。普段人の頭をホコリを落とすように叩きまくるあの人に限って、それはない。

そんなこんなで、俺が自分の部屋に戻るころにもう日はとくに暮れてしまった。

「『アズール・カラミティ』。今まで一度も起動しなかった欠陥 I S……か」

セレナは今日試合があつたアリーナの観客席から部屋に帰つてきたと同時に、自分のベッドに倒れこむ。そして録画しておいたその映像を、脳内で再生する。

ついに織斑一夏は専用機、『白式』を手に入れた。それはすでにラウラ少尉には連絡済みだ。しかし、この情報はまだ伝えていない。

ちょうど織斑一夏の『白式』がシールドエネルギー切れで退場したのと同時に、映像を止める。そこにはセシリア・オルコットの『ブルーティアイズ』。そして件の『アズール・カラミティ』とその操縦者、神城春馬。

トクン、と。セレナの胸が脈を打つ。

この部屋に彼が初めて来た時、自分の裸を見られた時から、セレナの様子はどこかおかしい。彼を見るたびに恥ずかしいわけでもないのに赤面し、声をかけられるときこちない返事しかできない。

「……なんなんですかね。この心境は」

ゴロンとベットの上で寝返りをうつて、仰向けになる。そしてそつと、右目の黒い眼帯を外す。そこには爛々と輝く黄金の瞳、無機質な輝きを放つ眼があつた。その瞳は、かつてドイツで I S 補佐用ナノマシンを移植された忌々しい証拠。

セレナとラウラは遺伝子強化試験体、いわゆる作り出された存在であり、戦うための道具として育てられてきた。ありとあらゆる兵器の操縦方法や戦略、戦い方等を体得させられ、自由という文字が微塵も感じられない生活。

そして実験は失敗し、後遺症としてセレナは右目、ラウラは左目が金色に変色してしまった。それから、軍で出来損ない扱いをされ続け、セレナとラウラは存在の意味を見失いかけた。

そんな時だった。日本から来たIS師事者として織斑一夏の姉、織斑千冬が来たのは。

彼女が来てからは、全てが一変した気がした。ラウラは再び部隊最強の座に上り詰め、セレナはドイツ最高火力をもつIS、『シュヴァルツェア・ケーニツヒ』を与えられた。

「変わったはずなのにね……。ラウラ、お姉ちゃん……」

もうそう呼ぶことができない、上官になってしまった姉。そしてそれは今、復讐の暴徒と化して暴れている。

どうすることも、できなかった。

「あー疲れた。こりゃエネルギー効率を少しいじった方がいいかもなー……。セレナ？」

思考に耽っていたのが原因か、寸前までこの部屋の同居人、神城春馬の接近に気づかなかった。彼はセレナの顔を上から窺うように見ている。

……視線は、セレナの右目に集中していた。

「なっ、ハ、ハル!？」

「おう、ただいま。お前も見てたか？　一夏とセシリアの試合」

春馬はセレナが飛び起きる前に、すでに制服の上着をハンガーにかけるため移動していた。しかしそんなことはどうでもいい。

（見られた。しかもはつきりと）

普段隠してあった右目を見られたのだ。セレナは予想外の事態にあたふたする。しかしそんなことは他所にとうの見た本人は「シャワーお先にー」となんと普通通りの反応を見せ付けてくれている。

そんな反応の春馬にセレナは、意を決して訊ねてみた。

「……ハルは、ハルは私の右目を見て、何とも思わないのですか？」

シャワー室に向かっていた足取りが、ピタッと止まる。ああ、終わった。今度はこの学園でも軍と同じ差別が起きるのか。そう覚悟したときだった。

「いいんじゃないの？　綺麗だぜ。左の碧い眼も、な」

そう言っ、また普段通りにシャワー室に入っていく、ドアを閉めた。呆然として固まっているセレナを置いて。

「綺麗……？　この右目、が……？」

今のセレナには、そう眩くのが精一杯だった。両目からなにか熱いものが溢れてくる。それは視界をばやかし、つつつと頬にすべり落ちる。

初めてだった。この右目のことを蔑んだり、罵ったり、怖がったりしない人は。織斑千冬を除いて。

シャワー室から鼻歌が聞こえる。それはひどく音痴で、音程なんか無視されているようなものだったが、今のセレナにとっては賛美歌のようにも聞こえた。

「は、ははっ……。綺麗って、言ってくれた……？ 私の、右目を……？」

伝わる涙は途切れることなく、シャワーのように流れ落ちる。ポタポタとベットのシーツに淡く黒いシミができていく。

“嬉しい”

唐突に、そんな単語が浮かび上がってきた。どうして？ 彼はただお世辞で言っていただけかもしれないのに。裏では悪口を叩いているかもしれないのに。

否。その考えはいとも早く否定された。彼は、春馬はそんな人間ではない。少なくとも、今まで会ってきた軍の輩共とは違う。

この学園で過ごしたのはまだ一週間ほどだが、彼の人物像を知るにはそれだけで十分だった。

「……変わってるね、ハルは。そう思わない？ ケーニツヒ」

そう待機状態のケーニツヒに問いかける彼女の顔は、眩い笑顔に満ちていた。

試合があつた翌日。俺が予想していた通りのイベントが繰り広げられていた。

「では、1年1組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、1繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。それに比べられるようにクラスの女子も喜んでいる。無論俺も。落ち込んでいるのは一夏だけだった。

「先生、俺は昨日の試合に負けたんですが、なぜにクラス代表になつているのでしょうか？」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

挙手して己の疑問を質問した一夏に、後ろの席に座っていたセシリアがガバツと立ち上がってそう答える。もちろん腰に手を当てたポーズで、だ。

「まあ勝負は貴方の負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしが相手だったのですから、それは仕方がないことですわ」

一夏が反論できずに震えている。まあ仕方がないかな。一夏という人物像を知る者からすれば当然の反応だ。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして……。い、“一夏さん”に譲ることにしましたわ」

おめでとう一夏。今セシリアがお前を名前で呼んだことで、フラグ成立は明らかだ。これであの甲高い声から解放される。

セシリアの発言に、クラス的女子達が賛同していく。よしよし、これで次は鈴の登場イベントだ。どうやって紛れ込もうかねー。

一夏との最初の再会はすこし気まずい感じだったはずだし、アップローチを変えたほうが良さそうだな。例えばこう、迷っているところに話かける、みたいな。

いや待て。別に好かれているわけでもないのに、そんなアプローチしても無駄なんじゃ？ これは考えものだな……。

「そうですか。一夏さんには篠ノ之さんが。では……“春馬さ

ん”？」

そうだ、思い切って会わずに見ているっていう手も……。いやいや、そんな変体まがいなことは

「つて、へ？ 何、俺？」

「一夏さんにはすでに篠ノ之さんが就いているようですし、わたくしが貴方のIS操縦を教えて差し上げてもよろしくてよ？」

なんだ、この展開。こんなの俺は聞いてねーぞ？ あ、そうか。これはいつものやつだな？ ならば適当にはぐらかして

「ごめんねセシリアさん、生憎もう私がその役を貰ってるんですよ」

そうそう、この前セレナに頼んだからもう必要ない、つて、えええ！？

「あら、わたくしは春馬さんに聞いていますの。決めるのは春馬さんではなくって？」

「うっ。でも、ハルは私が良いって言っています！ ね、ハル！」

「そうなんですの、春馬さん？」

え、本当にこの状況。本来なら一夏の教導役についてセシリアと篝が口論して、それを千冬さんが出席簿アタック、もとい関羽チヨップで仲裁して、それで……あれ？

すくなくともこんな部外者であるはずの俺が巻き込まれるシナリ

オでは……。

「座れ、バカ共」

バシン、バシンと頭を叩かれて、低いうめき声を上げて席に着くセシリアとセレナ。なんかワケがわからんが助かった。

しかし千冬さん。今の関羽チョップは経験者である俺が解析するに、威力が30%ばかり少なかったですよ？

男女差別か？ 男女差別なのか？

「男女差別なのk」

「うるさい、黙れ」

スパアン。ぐぬああああ。

「お前もその得意げな顔はなんだ、やめろ」

スパアン。うおおおお。

俺の横でなぜか得意げな顔をしていた一夏も、俺と同じ威力の関羽チョップを見舞われた。これだ。関羽チョップはこうでなくては。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は10代の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ」

いつもの冷めた口調でそう告げると、キッと俺の方を睨む。な、

なんすか。別に『昨日「まあ、悪い動きではなかったがな」とデレた同一人物とは思えない』と思っただけじゃないですか。やましいことを考えたワケじゃないでしょう。

「ほう」

スパアンパアン。

「本当すみませんでした」

「分かればいい」

分かった。千冬さんは絶対に読心術を会得している。これは原作では語られなかった事実だ。注意しよう。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

ま、俺がやりたかったが、仕方ない。原作通りになったただけだし、このクラスの団結した返事を聞けば、俺がなった時には恐らく聞けなかったものだろう。

ただし、その団結した返事に当の本人は含まれていなかった。深い深いため息をついて、とても残念そうな顔をしていた。

……まあ、頑張れ。声かけてくれれば俺も手伝うさ。

それにしても、セレナはなんでセシリアに反論したんだ？ いまだにそれが分からない。人間の心は移ろいやすいと言うが、乙女心はさらに分からない。

席が近いのだから、仲良くして欲しいものだ。なんだかんだで巻き込まれるのは、主人公の一夏で十分。俺はそれを見て楽しむ。それだけだ。

そういえば、一夏はセレナのフラグをいつ立てるのだろうか。楽しみで仕方がない。

第十三話 烈風は想いはらんで（後書き）

唐変朴オブ唐変朴ズ。この“ズ”は所有格ではなく複数形だと思うんだ……！

どうも玉露飴です。

本当は第十二話であるこのお話。でも予想外に長かったので二つに分けさせてもらいました。自分の文才の無さが露見してますね。お恥ずかしい。

次回は玉露飴待望の、あの娘が登場です。……ですよね？ 頑張ります。

鈴音！ 鈴音！ りん（殴

で、でわまた ノシ

第十四話 鈴、来日。（前書き）

感想でも指摘されましたが、これからは週に一話のペースで更新していこうと思います。

また何かありましたら玉露飴の活動報告にて連絡するので、よろしくお願いします。

第十四話 鈴、来日。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

赤く燃える太陽も地平線の向こうへと沈み、今は夜。IS学園の正面ゲート（いわゆる校門）の前に、小柄な体に不釣り合いな大きいポストンバックを持った少女がいた。

四月の暖かな夜風になびく髪は、左右それぞれ頭の高いところで結んである。肩にかかるかかからないかというその髪は、金色の髪留めがよく似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ……？」

上着のポケットからグシャグシャになった紙を取り出す。それは少女の大雑把な性格と活発さを体現しているかのようなだった。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよっ」

ただ漠然としか書かれていない案内書に文句をたれつつ、多少のイライラと共に持っていた紙をポケットに押し込む。中でグシャツと潰れる音がするが、もちろん気にする素振りはない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつぶつ言いながら、少女はすでに歩き出していた。思考よりも行動。それは古くに友人が言っていたことだ。もっともその友人は、少女が転校する前にいなくなってしまったけれど。

今頃どうしてるんだろ。元気にしてるかなあ……って、違う。何考えてんのよ、あたしは。

ぶんぶんと、浮かびかけた顔を振り払うように首を振ると、それに伴って左右の黒い髪が揺れる。

少女は日本人に似ているが少し違う。その鋭角でありながらどこか艶やかさを醸し出す瞳は、ジャパニース チャイニーズ 中国人のものだった。

とはいえ、この少女にとって日本は第二の故郷であり、思い出の場所であり、因縁の場所でもあった。先ほど少女の脳裏に浮かんだ顔も、この日本で出会ったものだ。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

学園内の敷地を分らないなりにふらつきながら、キョロキョロと人影を探す。とはいえ時刻は八時を回ったところ。どの校舎の明かりも落ちているし、生徒は寮にいる時間だった。

（あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな……）

と、そんなことを考えて、やめる。あの『あなたの街の電話帳』3冊分くらいあるうかという学園内重要機密書を思い出したからだ。転入の手続きが終わっていないのにISを起動させたらどうなるか、それは政府高官がやたら強調して説明していたことだ。

（あんな顔で頼まれたら仕方ないわよねー。私は重要人物だし、自重しないとねー）

その時の政府高官の必死な顔を思い出して、少女の気分は少し晴

れた。

昔から少女は『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』や『男っていうだけで偉そうにしている子供』が嫌いだったのだ。

でも、アイツらは違ったなあ。

日本の学校で出会った、とある二人の男子を思い出す。その二人は少女が日本へと帰ってくる理由になっている思い出だ。

ほんと、元気かな。アイツら。

ふと、夜空を見上げる。ちらほらと輝く星々は、昔と変わらない輝きを放っている。

「あーくそ、何で俺が……」

ビクツと、不意を突かれた少女はその場で足が止まる。

男の声　それも知っている声にすごくよく似ている。いや、間違いない。同一人物だ。

しかし、なぜ、と少女の思考が一気にパニックに陥る。おちいアイツが転校していったのが三年前。転校先は教えてくれなかったが、おそらく帰ってきたのであろう。

「えーと、ココアでいいんだっけ？　これでいいんだな、っと」

ピツと自動販売機のボタンを押し、ガシャンと乱暴に落ちてきた飲み物を取り出す。辺りが自動販売機の明かりだけだからか、彼は少女の姿に気づいていない。

あたしってわかるかな、三年振りだし。いや、アイツ頭良いし、きつと覚えてる！

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせながら、ポジティブ思考で歩みを再会する。

「ああ、春馬！」

「え？」

そう呼ばれた彼は驚いたような表情で、こちらを振り返って固まっていた。

*

「ああ、春馬！」

「え？」

俺の名前を呼ぶその声に、思わず振り返ってしまった。そうか、今日が鈴が転入するイベントがある日だったのか。

俺はティナとのジャンケンに負けてパシリいや、おつかいを頼まれてここの自販機に来た。しかもティナはこの一番遠い自販機にしかないココアを頼みやがった。三分で買って来いとテンプレ付きで。

ここまで走ってきて一分。あれ、案外いけんじゃね？ とか考えていた時だった。

「お、よう。鈴じゃないか。帰ってきてたのか？」

ま、三分なんて目安だろう。アイツは早くきても遅れてきても、「ありがとねー」で済ませる奴だ。研究所での三年間は伊達じゃない。

「まあね。っていうかアンタ、三年間どこ行ってたのよ!？」

「え、アメリカ。父さんと母さんの手伝いをしてたけど？ 言ってなかったっけか？」

「聞いてないわよ!」

おおう。鈴が何かすごい剣幕で怒り始めた。俺がなにかしたっていうのか。

「三年よ、三年! その間にも連絡しないなんて、信じらんない!」

「え、いや、あそうか」

目の前で珍しく取り乱す鈴を見て、やっと気づいた。簡単な話だ。俺は鈴たちがどういうことをして、どんな状況が分かる。原作を知っているから当然だ。

でも、鈴たちは俺の状況が分からない。当たり前だ、この世界の

人間なのだから。

「そうか、すまん。俺が全面的に悪かった」

「え、いや、そんな簡単に謝らないでよ……」

バツと頭を下げると、俺の潔さに驚いたのか鈴があたふたし始めた。さっきまでの剣幕は一瞬で引っ込んでしまっている。

「そうだな……よし。お詫びにというか、飲み物おごるさ。何がいい？」

小銭がさっきのティナの方で切らしたので、千円札を入れる。ついでだ。俺の分も買っておこう。

「いや、あたしはそういうつもりじゃ……」

「いいから。何がいい？」

なんだか面白い状況だ。さっきまで鈴が俺に怒っていたのに、今は鈴が自販機の前で俺に遠慮している。コロコロと表情が変わる奴なんだなとは思っていたが、三年でさらに進化を遂げたらしい。

「じゃ、じゃあこれ」

「丁度いい。俺もそれでいいや」

鈴がコーラを選んだので、俺も続けてボタンを押す。なぜか鈴の顔が赤くなっているが、熱でもあるのか？

よし、ここは一つアレでも試してみるか。

「ほれ、じゃあお詫び。これで勘弁してくれな」

「ふ、ふん。私はべつに　ひゃあっ!？」

そつぽを向いていた鈴の赤くなった頬に、冷たいコーラをそつと押しつけてみた。案の定な反応を見せてくれた鈴は、恨みがましい目線で俺を睨む。

あれ、一夏が筈とかにやった時の反応が鈴から返ってこない。やはり俺じゃだめか。

「ホント、変わらないわね。春馬は」

「お前もな。じゃ、行こうぜ」

俺は鈴にそのままコーラを手渡しすると、鈴の前を歩きはじめる。

「へ、どこに?」

「どこって、決まってるんだろ。受付だよ、総合事務受付」

俺の記憶はなんともし便利で、結構な文章量を暗記できたりする。親が親だからか、それともまた転生した時のオプションか。

鈴が自分の目的を思い出したようで、すぐに俺の隣まで歩いてくる。歩きたびに揺れるそのツーサイドアップは、本当に鈴のキャラを表しているよな。

「んで、やっぱり目的は一夏か?」

「は？」

お、ビックリして歩いてた足が止まってる。自販機から離れたから暗くて表情は見えないが、おそらく真っ赤なんだろうな。一夏のフラグを確認っと。

「いや、一夏だよ。織斑一夏。テレビで見てこっちに來たんじゃないのか？」

これは原作ではなく、コミックの知識だ。そんな描写があつた気がしたので、念のために確認してみる。

「な、なんでここで一夏がでてくるのよっ！」

お、ビンゴ。景品がもらえるな。とりあえずこれ以上一夏フラグを確認するのはよそう。俺が空しくなってくる。

だってそうだろ。周りは全員が女子。でもその注目は全て一夏に向いている。一般男子なら一夏への嫉妬で怒り狂っているな。俺は一夏の友人だからしないぞ。本当だぞ。

ちくしょう……。

「ま、応援してるからさ。そうだ、アイツ俺のクラスの代表なんだよ。鈴木クラス代表になれば、接点が増えるぜ？」

それでも、サポートはする。一夏が羨ましいのは歪めないが、やはり友人だ。ここは小説の世界ではなく、俺の暮らす世界。転生前に暮らしていたであろう世界となんら変わらないはずだから。

「お、応援つて。私は別に一夏が、その……」

「まあそう恥ずかしがるなって。ここは俺の言うとおりにしてみろよ」

今の状況は原作の流れからは随分と離れてしまっているし、このままだと鈴が二組のクラス代表になるかどうか危うい。そうするとこの先の展開が予想不可能なので、ダメもとで頼んでみた。

「うう。あ、春馬がそこまで言うなら、それでいいわよ……」

よし。結構手荒だが、修正は成功だ。鈴の反応がよく分からないが、まあ鈴の性格からしていつものことだろう。誰かの言うことに従うって感じじゃないし。

一夏は多分、別だな！　ちくしょう……。

「じゃ、俺は寮に戻るから。この道を真っ直ぐ行けば受付だ」

なにかブツブツ言っている鈴にそう言って、俺は別れた。ティナにさっさとココアを渡して、『アズールラミティ』を起動してみるかな。アリーナ、まだ開いてるといいが。

俺は小走りに寮へと向かった。

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

パン、パンパン。クラッカーが乱射される。俺の頭に乗ってきた紙テープは、重く俺の心にのしかかっていた。

今は夕食後の自由時間。寮の食堂に俺のクラス、一組全員が集まって各自飲み物をてにしてわいわいがやがやしている。

「人気者だな、一夏。やっぱりイケメンは違うなー？」

いつの間にか隣に立っていた春馬が、このこのと俺のわき腹を肘

で小突いてくる。本当にそう思っているのなら春馬は眼科かどこかにいった方が良くかもしれない。

「そういう春馬だって十分イケメンだろ。箒もそう思わないか？」

「ふん」

箒は鼻を鳴らして手に持っていたお茶を飲む。春馬と箒は仲が悪いわけじゃないんだが、会話があまり続かない。というか箒が一方的に会話を切っている。

「は、鼻で笑われた……。まあ、俺なんてそんなもんさ。一夏様とは違いますって」

ケラケラと明るく笑うその表情を見た何人かの女子が顔を赤らめているのだが、伝えた方がいいのだろうか。本人は全く気づく様子がないし。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしました〜！」

おお〜と一同が盛り上がる。おお〜じゃねえよ、おお〜じゃ。

「あ、私は二年の黛薫子。まゆずみかおるこよろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

受け取って、その名前を見る。画数の多い漢字だ。書く本人は大変に違う。

「随分と画数が多い名前なんだな。大変でござんしょう？」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

名刺から視線を離して上を向くと、春馬と薫子さんがなにやら手を擦りながら怪しい笑みを浮かべていた。というか馴染むの早いな春馬。その春馬のボケに乗る黛先輩もノリがいいというか。

「さて、ではではずばり織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーをずずいと俺に向ける黛先輩は、無邪気な子供のような瞳をしていた。

「えーと、なんというか……。まあ、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。俺に触るとやけどするぜ、とか！」

「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ、とかいいんじゃないか？」

どこの反逆者だそれは。おれはあんなに頭はよくないし、そう言う春馬の方が近いだろ。

「じゃまあ、適当にコメントは捏造しておくからいいとして。セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったものはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか言いつつ、満更でも無さそうな……というか、結構近くに控えてたな。心なしか髪の毛のセットに気合が入っている気がする。写真対策からだろうか。

「と思ったけど、長そうだしいいや。写真だけちょうだい」

「なっ、わたくしはまだ何も……！」

「いいよ、適当に捏造^{ねつ}しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

ポツと赤くなるセシリア。きつと怒り心頭なのだろう。よし、ここは援護射撃だ。

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そうですわ！ 何を持って馬鹿としているのかしら！？」

え、あれ。なんでセシリアが怒ってるの？ ていうか睨むなよ、怖いです。

「はいはい、とりあえず並んでね。写真とるから」

「えっ？」

意外そうなセシリアの声。でもどこか喜色を含んでいて弾んでい

るようにも聞こえる。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらっよ。あ、握手とかしてるといいかもね」

「あ、あの、黛さん？ 俺も専用機持ち……」

春馬がおずおずと手を挙げているが、華麗に無視された。食堂の隅で地面に『の』の字を書く春馬を、小柄な銀髪の少女がその肩をポンポンと叩いて慰めていた。

「あの、撮った写真は当然いただけますよね？」

「そりゃもちろん。はい、さっさと並ぶ」

そういうと、黛先輩は俺とセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持っていく。随分と強引な先輩だなあ。

「？ なんだよ」

「べ、別に、何でもありませんわ」

こつちをじろじろ見てくるので何か用でもあったのかと思ったが、違ったらしい。紛らわしいな。

「……………」

「なんだよ、箒」

「何でもない」

「こつちをじろじろ以下同文。」

「くつくつく……」

「こつち見んな」

いつのまにか復活した春馬が何か面白がるように見てきたので、
思ったことを言っておく。すると春馬は食堂の隅で以下略。

「それじゃあ撮るよー。 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「え、えつと……2？」

「74・375！」

「お、正解っ！」

なんだそりゃ。

パシャッとフラッシュがたかれてデジカメのシャッターが切られる。
……て、おい。

「なんで春馬たち全員がいるんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの周りに集結していた。あ、筈までいる。春馬はさっきまで食堂の隅にいたじゃないか。どんな瞬発力だよ。

「あ、あなたたちねえ！」

「いや、俺はやめようと言ったんだがな」

春馬がそういうと、その後ろにいたクラスメイトが春馬に続く。

「でもセシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん？」

「ねー」

口々にセシリアを丸め込むようなことを言っていた。何で？

「う、ぐ……」

「まあセシリア、一夏の友人として俺もサポートしてやるからさ」

苦虫を噛み潰したような顔をしているセシリアの肩をポンポンと叩きながら、春馬は俺のほうを見てにやにやと笑っていた。サポートってなんだよ。

「そう不思議そうな顔すんなよ。じきに分かるって」

そういつて春馬はさきほどとは違う明るく笑う。そしてまた数名の女子が顔を赤くして目を逸らす。

「何のことか分からないけど、お前もじきに分かるかもな」

「なんだそりゃ」

「こつちの話さ」

ともあれ、この『織斑一夏クラス代表パーティー』は十時過ぎまで続いた。

第十四話 鈴、来日。（後書き）

鈴音！ 鈴音！ どうも玉露飴です。

今回は鈴の話と一夏のクラス代表パーティーの話です。あと春馬。そういえば春馬とセレナも専用機持ちなんですよー。知ってましたか？

次回はもちろん鈴の回。一夏の役目を春馬が代わっている感じです。一体どうなるやら。

誤字脱字、ご意見ご感想などなんでもお送り下さい！ 待ってますよー。

でわまた ノシ

第十五話 それは日常の話で（前書き）

はやくセレナとラウラの話をしたいなーと思う今日このごろ。

セレナの専用機もロールアウトしたくてうずうずしています。

1月30日、一部の文章を修正しました。

第十五話 それは日常の話で

「ほら遅いぞ、一夏！」

「お前が早すぎるんだろっ！」

つい先ほどセシリアに教えてもらった瞬間加速を使い急接近してくる一夏を、俺は通常の加速でかわした。

かわしたところで俺はすぐさま体の向きを変え、同じく向きを変え瞬間加速の余速で突っ込んできた一夏が振るう『白式』の雪片式型をミストラルmk?で受け止める。これでもう何合目になるのだろうか。

「ISの性能に頼るからだ。もっとこう、感覚を頼れ！」

「無茶言つなよ、お前じゃあるまいし！」

ISのハイパワーで押し付けられる互いの得物からは、ガリガリと火花が散っている。顔に降りかかってくるが気にはしない。今、目を離せばあの刃は俺の体を袈裟斬りに切り裂くだろう。

ミストラルmk?の出力を上げて、なんとかして『白式』を押し返す。しかしここ数日のIS模擬戦闘で学習した一夏は、姿勢を大げさに崩すこともなく俺とのちょうど良い間合いに跳んだ。ホント、馬鹿げた学習能力だよ。

「よし、そろそろ決着と洒落込もうぜ。本気で来い、一夏！」

「ああ、俺が勝ったら夕飯はお前のおごりな。春馬！」

一夏の『白式』^{ワンオフ・アビリティ}が単一仕様能力である零落白夜を発動させた。雪片式型の刀身が二つに割れ、中からビーム状の刀身が姿を表す。

単一仕様能力とはISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する固有の特殊能力のことだ。たいていは第二形態^{セカンド・シフト}から発現するのだが、それでも能力が発現しないISがほとんどで、俺の『アズール・カラミティ』も未だ発現はしていない。

零落白夜。全てのエネルギー質のものすべてを消滅させる単一仕様能力。相手のシールドバリアーを切り裂き、相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる、『白式』最大の攻撃能力。その代わりに自分のシールドエネルギーを使うため、諸刃の剣と言ったところか。

「それ、お前が負けるフラグだからな！」

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は56秒です』

俺はミストラルmk?を構え、間合いを測る一夏に突貫する。ミストラルmk?のエネルギー循環刃が赤く光り、刀身を包むほどにまで達する。

『準備完了。Standby/Ready?』

刹那、『カラミティ』の背部ユニットである大型特殊推進翼からのエネルギー出力が爆発的に上昇した。通常の数倍以上に跳ね上がった^{スレド}通常速度で、一気に一夏とのその間合いを詰める。

「くっ」

脳より体が反応したのか、一夏が素早くミストラルmk?と自身の間に雪片式型を滑り込ませる。先ほどとは比べ物にならない衝撃に、ミストラルmk?と雪片式型を包む大気が震え、鉄を打ち据えるような鈍く重い音が轟く。

雪片式型の刃が、ミストラルmk?が纏^{まと}うエネルギー循環刃を食いつぶすように消していく。しかしCLB発動によって循環量、循環速度が上がったことで、消えた瞬間から回復していく。まさに一進一退の鏖迫り合い。

しかし、俺はこの鏖迫り合いを押し切る気はない。もとより、そんなことをしていたら互いにエネルギー切れによって引き分け。セシリア戦の二の舞を踏んでしまう。

そう、セシリア戦では当てられなかった“アレ”を決めることができないじゃないか。

大型推進翼が、その大きな翼を広げる。赤く透き通る光がその両翼に収縮し、小さい太陽のような輝きを放つ。

「うあ、しまった!」

「すまん一夏! 俺の夕飯はラーメンセットでよろしく!」

一夏が『白式』のハイパースコープと自身の肉眼で俺の大型推進翼の異状に気づくが、もう遅い。まんまと罠にはまってくれたお礼だ。ありがたく受け取っておけ。

「イノセンス・レイ 肅清の光、起動！」

轟！ と。赤く焼きつくような光が、アリーナの中心で炸裂した。

「よし、今日の俺のIS特訓はお終い。メシいくぜメシー」

アリーナの地面にめり込んでいた一夏を引っ張り出した後、ISの展開を解いて一夏とその取り巻きに話しかけた。

「あ、春馬さん。ちょっとやりすぎではなくて？」

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

身体も精神もボロボロになって地面で大の字になっている一夏を見て、セシリアと箒が各々の感想を述べる。確かに、最後に『イノセン 肅清ス・レイの光』を決める必要はなかったな。

「いや、俺はこうやってISに慣れていったし。ほら、次は誰が一夏の特訓をみるんだ？」

「それはわたしだ」「それはわたくしですわ」

すごいくらいに言った単語とタイミングが合った二人は、キツと相手を貫くようににらみ合う。うわぁ、俺すごく居づらい。

「い、一夏は大丈夫か？」

「すまんが先に食堂に行っていてくれ。まだ動けそうにねえ……」

仰向けになりながら、疲労困憊といった表情で答える一夏。だが一夏、お前にはまだ乙女心という二つの爆弾が、刻一刻とお前に近づいているんだぜ。

「了解。ま、せいぜい二人に労ってもらうんだな。このスケコマシめ」

俺はいつの日か模擬戦後に研究所の控え室に戻っていく時のティナをマネして、右手をヒラヒラと振りながらその場を去る。俺が戻るのはアリーナのピットだがな。案の定、後ろからは二人の甲高い

声と一夏の疲れた声が聞こえてきた。

「なんで俺が一夏の特訓をみてんだか。このイベントは一夏フラグ組の役割だろうに」

ピットに入ると同時、俺はため息と共にそんなことを口にする。

そう、これは俺が望んでいたわけではない。一夏から頼んできたのだ。なんでも「箒は大雑把すぎて、セシリアは細かすぎる」とのこと。美少女を二人も侍らせてその上何を言ってるんだか。俺には自慢にしか思えないぞ。

「あー疲れた。それにしても、本当に一夏の学習スピードはシャレにならん」

そう、一夏が俺との戦闘でどこどころ使っていた瞬間加速。あれはセシリアがつい先日に教えたものだ。それを一夏はまだ不完全ではあるが使いこなしている。やはり主人公つてすごいなと思う反面、俺の研究所でのIS訓練はなんだと泣きたくなった。

「おっつかれー春馬！ はいタオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

不意にピットの出入り口であるドアが、プシュツという圧縮空気が抜ける音と共に開く。そこにいたのはこれも先日にIS学園に転入を果たした中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音その人だった。

って、お前は一夏のピットに行かなくていいのか？ そのことが頭に浮かび、渡されたタオルとスポーツドリンクを受け取りながら口に出そうとすると、先に鈴のほうが喋りだした。

「この学園にいるからまさかとは思ってたけど、よもや春馬がアメリカの代表候補生なんてね」

そういえば今日のクラスで、例の鈴初登場のイベントは起きていた。とくに変わり映えは無かったので省いたが。

「まあ成り行きでな。それよりいいのか、一夏の所に行かなくて。今頃あの二人とイチヤイチヤしてんだろ」

実際は本人にイチヤついているという自覚がないので違うのだが、回りから見て（男である俺は特に）あれはカップル並みの絡みだ。そう断言できる自信がある。一夏へ想いを寄せる者が見たら思わず割って入るくらいには。

しかしそんな俺の懸念など思ってもいなかったのか、なぜか不思議そうな表情で鈴は首を傾げていた。おいおい、そんな悠長にしていたら一夏が獲られちまうぞ。

「なんで？ 別に一夏は一夏でいいじゃない。他人の恋路に手を出すで大変だって言うし」

「な、なんと……」

これは由々しき事態だ。俺はおもわずベンチに座りながら頭を抱えこんだ。

この世界は原作とは少し違う平行世界だ、とあの神は言っていた。ならば鈴がここまで恋愛に不器用でも不思議ではない。

一夏を想っている事実は明白だ。原作から察するにそれが覆るこ

とはないだろう。しかしそんな大切な想いを箒やセシリアという存在に遠慮して胸に秘めたままにいる。これはいかん。

いや、お前のことだよ鈴。不思議そうに俺の顔を覗きこむな。

「……よし、分かった。俺に任せろ！」

「え、ひやいつ!？」

俺の顔を覗き込んでいた鈴の肩をガツシリと掴み、そのまま正面を向かせる。もちろん正面には俺の顔。説得するには人の目をみて話すのが基本ってな。

そして鈴は突然に俺が肩を掴んだことにびっくりしたのか、顔を赤くして目を丸くしている。若干なにかを期待するような目線を感じるところ、やはり俺の考えていた通りだな。

「俺も友人の端くれだ。その友人が困っていたら助ける。だから鈴、俺がお前の一夏への恋路をサポートしてやる」

「へ?」

あれ、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているがなぜだろう。鈴はサポートを求めていたんじゃないのか？

とりあえず鈴の肩から手を離して、これからどうサポートしていくか考える。っていうか考える必要もないな。今、一夏は箒とセシリアの二人とイチヤイチャしている。これに割って入ることがまず最優先だ。

「んじゃ、そうと決まったら即実行だ。早速だが一夏を夕飯に誘ってみよう。鈴が」

「……ええ、あ、私!？」

まだ顔が赤いのは鈴が一夏のことを好きだということに気づかれたからだろう。そりゃ誰だって恥ずかしいよな。俺だって「〇〇のこと好きだろ? ならサポートしてやる」と言われたら恥ずかしくてそいつを殴るかもしれない。

「とりあえず俺は着替えるから、鈴は先に一夏の所に行っていてくれ。もうピットには入っているだろうから」

「い、いや、私は別に一夏のことは……!」

「ほら、ツンツンしてないで行って来い」

とりあえず俺が着替えることができないので無理やりにドアの外へ追いやる。ドアの外からは何かブツブツと聞こえるが、無視。恐らく俺への文句だろうし。

「……それにしても、男にとってはホント生き地獄だよな」

クラスメイトは一夏に釘付け、ISも最強というわけではないし、これから転入してくるであろうシャルルやラウラも全て一夏フラグ建設予定者だ。

そうすると、やっぱり部外者な俺はIS関連しか打ち込むものがないわけだ。

「……放課後は、一人でIS練習するか」

なんかものすごくどんよりとした空気で、俺は着替えを始めた。

そして今は夕飯の席。一夏との約束通り俺はラーメンセットのトreyを持って、先に座っていた一夏たちのテーブルに着く。

一夏の隣には箒、セシリア。向かい側に俺、鈴と言った配列だ。鈴はどうやら夕飯に誘えたようだが、席の取り合いには出遅れたようだ。俺の隣に座っても嬉しくないだろうに。

「そういえば鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？
いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、何IS使ってるのよ。ニコ
ースで見た時びっくりしたじゃない」

おお、鈴と一夏の会話が目の前で。俺にとっては日常風景なんだ
が、IS学園でされるとなんか感動するな。

そして、鈴を敵視したらしい筈とセシリアが一夏に説明を要求し
ている。ま、俺には関係ないがな。それにしてもやっぱりこのメ
シは旨い。チャーハンもパラパラしていて美味だ。

「あれ、セレナじゃんか。今から夕飯か？」

日替わり定食のトレイを持ったセレナがキョロキョロと席を探し
てさまよっていたので、声をかけてみた。このごろ俺を見ると顔を
赤くして逃げていくので、多分俺が何か知らないうちに失礼なこ
とをしたんだろう。

なにせ年頃の女の子と同室なのだ。乙女心なんて分からない俺は
その可能性が高いと考え、こうしてわだかまりを解くタイミングを
待っていたのだ。

「あ、は、はい。ハ、ハルもですか？」

「え、現在進行中で食ってるんだが？」

いや、食堂に来たら普通はメシを食べるだろう。ていつか俺の前
のテーブル一目みたら分かるはずだぞ。

セレナはぎこちなく「そ、そですよ。何聞いてんだろ……」と言って俯く。うーん、これはまた俺が悪いのか？ 困ったな。

「とりあえず座れよ。こんな俺の横でよかったらな」

その瞬間、俯いていたセレナの顔がガバツと上がる。うお、びっくりした。今のは軽くホラーだったぞ。

「ほ、ホントですかっ。では失礼して……」

「あら、セレナさん。今から夕食でして？」

一夏グループと色々喋っていたセシリアが、俺の横に座ったセレナに気づいたらしい。そういえばセレナはセシリアの後ろの席だったな。友好関係にあっても不思議ではない。

「え、はい、そうです。ちょっと報告……いやいや、電話が長引いてしまっ」

セレナは一瞬しまったという顔を見ると、すぐさま自分の言葉を言い直す。その時にはすでに先ほどまでと同じ表情で、まるで何もなかったかのように感じさせた。

「電話……ねえ」

俺にはその“電話”がどんなものか、大体の予想はついている。前に何度か、悪いとは思っていながらこっそりと盗み見させてもらった。といっても実際はたまたま部屋に戻ったら“電話”の真っ最中だったという話なのだ。

もちろん、そんな俺はすぐにセレナに気づかれてしまいその“電話”は終わってしまったが。

セレナ・ボーデヴィツヒ。やはりその“電話”の相手って

「それで、セレナさんはどうして春馬さんを？」

「いえだからっ、私は違うと言ってるじゃないですか！」

なんとなくその思考の結末を見出しそうな時に、ふと耳から女子二人の片方楽しげな、片方必死な声が聞こえてきた。どうやらセシリアとセレナの二人で女子バナを開始したらしい。

今のセレナの必死さを滲^{にじ}ませる大きな声のおかげで、先ほど出かけた解に疑問が浮かび上がった。さすがにそれは安直すぎるか？

しかしあの時の、セレナの右目。あの金色に輝く目は恐らく、IS用補佐ナノマシンを移植された影響だろう。そしてボーデヴィツヒという姓。原作と違うドイツ代表候補生。

（シュヴァルツェ・ハーゼの隊員だろうな、やっぱり。そうしたら、やはり“電話”の相手は……）

ここで『シュヴァルツェ・ハーゼ』の説明をしておこう。

『シュヴァルツェ・ハーゼ』、ドイツのIS配備特殊部隊のことだ。通称『黒ウサギ隊』。ドイツ国内にある10機のISのうち、3機を保有している名実ともに最強の部隊。全員が肉眼へのIS用補佐ナノマシン移植者で、また全員が眼帯を装着している。

解説終了、まる。

「セレナはどこで春馬と知り合ったんだ？ アイツ、知らない相手は相手が喋りかけるとかしないと関わらないんだぜ」

「そ、それは……。く、空港で迷っていたのを助けてもらって……」

いつのまにやら、一夏がその二人の会話に入っていた。って、俺以外の全員じゃねえか。

「荷物まで持ってもらって、あの時は本当に助かりましたよー」

そう語るセレナはほにやらと笑い、顔は少し赤くなっている。なんだ、酔ってるのか。いや、さすがにそれは無いか。自分が空港で迷ったことをみんなに話して恥ずかしがっているのだろう。

いい加減に俺だけがこの輪に入らないのも寂しいな。考えるのは寝る前にでもできる。今は夕飯で、その場に合ったことをするか。

というわけで、俺も混ぜろー。

「ま、流されるがままにつてな。部屋も一緒だったのは意外だったが」

「……は？」

と、意気揚々にみんなの会話に入ろうとしていたら、俺の左隣の方から鳩が豆鉄砲と喰らったような気の抜けた声が聞こえた。なんだ、今日はよく鳩が狙われる日だな。平和の象徴をあまり粗末にしちゃあかんだろ。

「あ、春馬！？ 部屋が一緒ってどういうこと！？」

「いやどうって、一夏に聞かなかったか？ 俺たちの入学ってかなり特殊なことだから、別の部屋の確保が間に合わなかったんだと。それで今はふたり部屋に」

「そ、それってその子と一緒に寝食共にしてるってこと！？」

「はい、そうですね。そうなりますが？」

鈴が急に質問ラッシュを始めると、突然セレナが俺が答える前に肯定していた。いや、待て。なんでセレナはそんな自慢げなんだよ。そして鈴はなんで自慢げなセレナを見て唸ってるんだよ。

「な、なあセシリア。これってどういう」

「……一夏さんが一夏さんなら、春馬さんも春馬さんですわね」

なぜかため息を吐かれた。いや、質問に答えてくれよ。今俺の両隣ではなぜか冷戦が勃発してるんだからさ。

「ほ、箒さん？」

「……朱に交われば赤くなる。いや、類は友を呼ぶ、か」

え、何それ。そのことわざ達は一体何のことを指しているんですか？ お願いだから不機嫌そうに顔を背けないで。

「あ、あたしだって春馬に案内してもらったし！」

「私は春馬さんに勉強を手伝ってもらいました！」

「そんなことあたしは小学校の時に何度もしてくれたわよ！」

「じ、じゃあ私はバスで寝ていた私を春馬さんがそつと起こしてくれました！」

「ぬう、それならあたしは」

「な、ならば私は」

拝啓、アメリカにいる両親へ。いつのまにか冷戦は激戦に変わっていたようです。敬具。って、ボケてるところじゃないな。

最後の皆である友人、一夏へと助けて欲しい旨の視線を送る。すると一夏はコクッと頷いて見せた。さすがは主人公。察しがいいな。今度は俺がおごつてやろう。

「二人って春馬のことが好きなのか？」

「え？」「へ？」

瞬間、二人以外にもその場の空気が凍りついた。時間も凍りついたようで、その一瞬だけ時が止まったように感じられた。というか一夏めよくもやってくれたな。核弾頭を投げて戦争を終わらせるとは血も涙もないやつめ。

とりあえずはこの凍ってしまった空間を解凍しなくては。このままだと一夏の言葉の核弾頭が発する放射線で周りのみんなが誤解し

てしまう。

「んなバカな。そんなわけないだろ」

「バカって何よバカって!」「バカとはなんですかバカとは!」

うお、なんで。俺は当たり前なことを言っただけなのに、両隣の二人は怒気を含んだ声音で俺の両耳を殴るように叫んだ。

「一体、なんなんだよお……」

俺はすでに食べ終わっている空になったラーメンのどんぶりを見つめながら、深くため息を吐いた。

第十五話 それは日常の話で（後書き）

後半、内容薄くなってるんですよね？ 玉露飴です。

ちょうどこの小説とアニメのISが同じ、いや抜かれた？ くらいの流れです。アニメでのシャルル、ラウラ登場は再来週くらいですかね。

それよりも鈴ですよ。鈴。すげえ、動いてる。喋ってる。感動。

次の更新日は都合により活動報告にて連絡します。思い出したら見に来てやってください。

誤字脱字、ご意見ご感想などお待ちしております。

でわまた次回 ノシ

第十六話 心変わってにゅーげーむ（前書き）

アニメの鈴が可愛すぎて死ぬる。

第十六話 心変わってにゅーげーむ

『登録操縦者、神城春馬を認識。アズール・カラミティ、起動します』

もう何回も聞いたカラミティから響く聞きなれた合成音声と共に、俺の体に合わせてカラミティが展開される。光の粒子が形を作っていくようなISの展開は、何度見ても不思議でたまらない。

「展開速度は0.5秒か……。比較対象がないから早いのか遅いのか分かんねえな」

『ハイパーセンサーと操縦者の脳波を同調開始。チューニング終了。各部位と生体電気との同調開始。チューニング終了。ハイパーセンサーを展開します』

ぶつぶつ呟いている俺など構いもせずに、『カラミティ』はハイパーセンサーを起動させる。視界は一気に広がり、正面を見ている背後にあるアリーナの出入り口が確認できるほどだ。

『カラミティ、操縦者を中心に展開完了。各部位をチェック。終了。不良部位は見当たりません』

軽く右手を開いたり閉じたりしてみろ。その動きにタイムラグはなく、ピッタリと俺の動きに『カラミティ』が反応していることが確認できた。

「うし……じゃ、始めますかね」

ハイパーセンサーから投影されるホログラムの中から、モード『Practice』を選択する。すると画面がフワリと変わり、『Practice』についての細かい設定を求められた。

「モデルはラファール・リヴァイブでいいよな。戦闘傾向は全距離^{オールレンジ}で、シールドエネルギーは」

『Practice』とは、俺の両親が研究所でのISについてのデータ取りに使っていた仮想戦闘シュミレータだ。ただでさえ数が少ないISは、おいそれと気軽に戦闘などできない。一つの研究所に2機のISがあつたウチの研究所は特殊なほうだ。正確には護衛用に配備されていたISも含め3体だが。

今日の放課後、俺が一人で練習できるように忙しい所に電話で頼んでこの仮想戦闘シュミレータを送信してもらった。後に俺が『力ラミティ』にインストールし、現在活用中だ。

『設定変更を確認。仮想敵^{エネミー}を構築します』

目の前に浮かび上がる、ホログラム状態の『ラファール・リヴァイブ』。その手には2丁のライフルが装備されている。俺が選択したのはその2丁のライフルと近接ブレード、追尾ミサイルだ。

『設定難易度をHardに設定。Are you Ready?』

俺は右手にミストラルmk^{エネミー}?を展開し、構える。そんな俺の動きにあわせて相手の仮想敵も両手のライフルの銃口を俺に向けた。

『3、2、1、Start』

瞬時、俺はもといたその場からブーストして離れる。案の定、開幕して初っ端から叩き込まれた銃弾の嵐はその場所を豪雨のように穿っていた。

避けたことに安心しながら、俺はすかさずに^{エネミー}仮想敵の背後を獲ろうと加速する。それを察知したのか^{エネミー}仮想敵はライフルから近接ブレードへと武装を変えて、接近する俺に向かって斬りかかった。

ガン、と鉄と鉄がぶつかる甲高い音を短く響かせながら、俺と^エ仮想敵は何度も刃切り結ぶ。お互いに背後を獲ろうと動いているためか、クルクルと上に向かって回転しながら戦う様はまるで竜巻が上へ上へと上っているようにも見える。

4、5回切り結んだぐらいに^{エネミー}仮想敵が一際大きく切りかかり、ミストラルmk?で受け止めた俺ごと後方へと吹飛ばす。

「ハッ、距離をとって使う武装といえば……」

俺が吹飛ばされたときに少し乱れた体勢を整えている隙に、^{エネ}仮想敵が^ミ近接ブレードの展開を解除。交代するようにその両肩に^{ミサ}6連装^{イルボッド}自動追尾弾頭が現れる。

もちろん、左右合わせた12個のミサイルは全て俺狙いだ。アラームが先ほどからうるさいくらいに鳴っている。

ロックを済ませたミサイルから次々と、俺に白煙を巻き上げながら肉薄してくる。俺は一発目が発射されたのを確認する前に、ミサイルを撒くべく後ろを向いて加速する。

『アズール・カラムיתי』の通常時の最高速度は時速1530k

m。IS素体で出せる速度としては最高速度だ。パッケージなどを含むとそれほど早いわけでももないが。

仮想敵がミサイルを全弾放ち終えたようで、今度はライフルを構えて俺に狙いを定める。……そろそろ使うか。

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は2分04秒です』

2分4秒は俺のシールドエネルギーが無傷の時に使える、いわば最大稼動時間。まあまだ初めて3分くらいだから無傷で当たり前か。

なんて、言えるようになったのは随分最近の話なのだが。

大型特殊推進翼から発せられるエネルギー粒子の量が格段に増し、それに伴い『カラミティ』の通常速度も上昇する。普通に加速したら時速2670kmくらい。最大はまだ測ったことはない。

すこし加速をするくらいで、ミサイルはもう追いつけなくなる。それを俺はミストラルmk？から双短銃、ツイントルネードに持ち替えて何とか追ってくるミサイル達を迎撃する。

半分くらい打ち落としたところで俺はすかさず真下に加速。刹那、その上を仮想敵の近接ブレードが横薙ぎに振られていた。

真下から斜め上に無理やりに加速し、背後から仮想敵をCLBによって威力を増したミストラルmk？で切り裂き、ついで連撃。

『バリアー貫通、ダメージ437。シールドエネルギー残量、138。実体ダメージ、レベル大』

物理シールドを切り裂き、左腕部のアーマーを吹飛ばす。もちろん相手は^{エネミー}仮想敵、ホログラムなので容赦などない。本気の一撃だ。

仕上げに垂直に振り下ろしたミストラルmk？によって叩きつけられた^{エネミー}仮想敵はそのまま慣性の勢いでアリーナの地面へと墜落する。ドンという大きい音がするが、アリーナの地面には穴は出来ていない。

それがこの仮想戦闘シミュレータのいいところだ。ハイパーセンサーに^{エネミー}仮想敵を表示させ、実際に操縦者が感じる衝撃はそのままに^{エネミー}仮想敵がいくら暴れまわっても辺りに被害は及ばない。操縦者とISの全力のデータを取り出すために作られただけはある。

^{エネミー}俺は仮想敵が動かない間にCLBの展開を解く。結構シールドエネルギー^{エネミー}使っちゃったな。まあ、もう相手も虫の音だし問題ないか？

^{うちがね}次は打鉄に^{エネミー}仮想敵を設定しようかな、とか考えていると、突然足元から銃撃が始まった。流石に油断しすぎたか、突然の弾幕に切羽詰まってしまう。

「ぐっ……」

仮想敵からの射撃攻撃を、真横の方向にブーストして鋭角機動で避ける。

しかしその避けた先には、いつの間にか撃っていたのか先ほど避けた仮想敵の銃弾と同じものが“置いてあった”。ブーストの余速を殺しきれなかった俺は、堪らずに被弾し体勢を大きく崩す。

『バリアー貫通、ダメージ36。シールドエネルギー残量、312。実体ダメージ、レベル中』

「ぐあ、銃弾一発で実体ダメージが中までいくか……」

俺は頭を抱えなくなる衝動に駆られるも、なんとか崩れた体勢を立て直して、再び^{エネミー}仮想敵が放つ銃弾からの回避行動を再開する。

俺の愛機、『アズール・カラミティ』は近距離強襲型。それも超高速戦闘を想定して最軽量フレームで構成された、いわば超音速戦闘機みたいなISだ。もともと『カラミティ』の開発コンセプトは新システムCLBを搭載した試験機であるので、詳しい意味では戦闘機とはちがうが。

まあ、それでも『カラミティ』を構成するフレームは最軽量ないし軽量化が成されているものばかりであるため、圧倒的なスピードを持つ反面に防御面が別の意味で圧倒的なのだ。その証拠に、先ほどの銃弾を一発を食らっただけで肩のアーマーはボロボロになってしまっている。

あの“置いてあった”銃弾が実弾ではなくさらに高威力のセシリアのBT兵器であったならば、今頃俺は顔面からアリーナの地面に墜落していることだろう。

……なんか想像しただけでゾッとしてきた。

「お返し、だッ」

俺は地面から2丁のライフルで銃撃している^{エネミー}仮想敵に向けてツイントルネードの弾幕を返す。先ほどの攻撃で反応が鈍っていた^{エネ}仮想

敵は、避けることが出来ずに全て被弾する。

ツイントルネードの集中攻撃で中破まで追い込まれた^{エネミー}仮想敵は、ライフルから6連装自動追尾弾頭に展開する。だが、遅い。

俺はそれよりも早くツイントルネードからミストラルmk?に持ち替え、そのまま振りかぶる。

「飛んでつけエー！」

そしてそのまま、ミストラルmk?^{エネミー}を仮想敵に向けて投合した。真っ直ぐにミストラルmk?は仮想敵に伸びていく。

斬^{エネミー}と。仮想敵の腹を貫くようにして突き刺さったミストラルmk?の後に、ビー、という頭に響くうるさい電子音が響いた。

『Practice終了。及び、操縦者の危険因子を含んだ行動を認識』

「ぬあ、分かってるって。気分だよ、気分……」

「その貴方の気分で腹を刺されるの？　ぞっとするわね」

声のした方を振り向くと、そこにはISスーツを着たティナが呆れながら立っていた。俺はティナに弁明すべく、すぐに反論する。

「いや、今はシュミレータだったからで……。いや、言い訳になつてないか。だからつまり」

「いいわよ、別に。春馬の攻撃が通るのはシュミレータぐらいだし」

そういうティナに、俺は少しムツとした。いや別に最後にミストラルmk? 投げる攻撃を注意されたことは別にいい。それよりも俺が少し気に食わなかったのは。

「じゃあ俺の攻撃を全部避けれるのか、ティナは」

「当然。春馬は頭はいいくせに感覚で戦うんだもの、動きが読みやすいことこの上ないわ」

そう言って肩をすくめてみせるティナ。多分俺に対する挑発なんだろうが、暇なのか？ ISスーツを着て俺が練習しているアリーナの中に入ってきたということは、後は何をするかなんて分かりきったことだ。

「じゃあ試してみろよ。俺の攻撃に一切当たらずに倒せるか？」

「私は倒せると言っていたつもりだったんだけどね。食後の運動にちょうどいいし、付き合っただけだ」

ティナはそういうと、瞬時にその身体が光の粒子に包まれる。その粒子はティナの身体を中心に形を作っていく、次第に霧散する。

「ホントはラファールの方が良かったんだけどね。これしか許可が下りなかったの」

そう言っただけで片手に持つ刀型近接ブレードを軽く振る。ティナが展開したISは『打鉄』。ちょうどいい、次に俺がシュミレータで戦おうとしていたISだ。

「別にいいじゃん。どっちみち俺が勝つんだしな」

「そうね、春馬にはいいハンデってところ？」

俺は地面で待つティナと対峙するように間合いをとって降り立つ。同時にティナが片手で弄んでいた刀型近接ブレードを、腰の横にマウント部分に接着する。

「ティナは俺の攻撃に当たらずに俺を倒す。俺はどうしたら勝ちなんだ？」

「そのままフツーに戦えばいいじゃない。春馬にハンデなんて言葉は数年早いよ」

「へいへい、了解したよ」

ティナの相変わらず辛口な言葉を流しつつ、軽い返事をして俺もミストラルmk?を構える。先ほど消費したシールドエネルギーはシュミレータの中だけなので、現実では減っていない。これでハンデを持っているのはティナだけだ。

軽く息を吐き、ティナの姿を見据える。研究所ではいいサンドバツクだった俺が、どこまで成長したか教えてやろっ。

「つつおおおおお！」「つやあああああ！」

誰も合図するわけでもなく、俺たちは同時に地を蹴り、模擬戦闘が始まった。

ティナの抜刀を横に構えたミストラルmk?でいなし、そのまま

の勢いで斬りかかる

「俺が勝つたらチャーハンおごりな!」「私が勝つたら一ヶ月アイスおごりね」

えっ、マジ?

「助かるわー。これぞ有効活用つてものよ」

「俺はお前の財布かなにかなのか……」

『カラムティ』の展開を解き、俺はアリーナの地面に横たわる。ティナとの戦闘に疲れてではない。これから一ヶ月間湯水のごとくに流れ出るであろう俺の貯金を想像して、だ。

まさか本当にティナが条件を満たして勝つとは思わなかった。ミストラルmk?の攻撃は全てかわすか刀型近接ブレードで防がれ、ツイントルネードの射撃は面白いように外れていく。たまに当たったとしてもそれはティナが刀型近接ブレードで兆弾させたものだ。

CLB中はティナは攻撃をしてこず、俺の攻撃をただ淡々と避ける、防ぐを繰り返す。『イノセンス・レイ 粛清の光』は発動することさえ出来なかった。『イノセンス・レイ 粛清の光』は発動まで若干のラグがある。それは大型特殊推進翼にエネルギーを溜めているせいで、その途中に攻撃されるとエラーを起こしチャージを中断してしまう。

ティナは俺が『イノセンス・レイ 粛清の光』を発動しようとする度に威力が高い刀型近接ブレードの抜刀を抜き放ち、体勢を崩した俺からまた逃げるように後退していく。

「一撃離脱は基本中の基本よ？ 単発での攻撃力なら『うちがね 打鉄』でも負けないし」

「要するに俺はまだ未熟と。そう言いたいんですねティナさん」

「そゆこと」

俺は地面で大の字になってうなだれる。そういえば一夏も俺の特訓のあとこんな感じで倒れていたか。俺にラーメンセットをおご

る羽目になったアイツは、こんな気持ちだったのかね。合掌。

「じゃ、私は帰るわ。……向こうで春馬を待ってる人もいるみたいだしね」

「待つてる人？」

いつものようにヒラヒラと手を振りながら去っていくティナの向こう、アリーナのピット入り口付近に人影が見えた。今日の俺の練習は誰かに教えた覚えはない。誰だろうか。

ひとまず俺は立ち上がり、ISスーツについた土ホコリを払う。俺のISスーツは両親が作ってくれた特注だ。まず男のISスーツなんてあるわけがないし、『カラミティ』ほどの超高速機動にも耐えられるISスーツも、あまりないからな。

「一人で黙々と練習しようとしたつもりが、一ヶ月の手痛い出費を負うことになるなんてな……」

とりあえず遠くにいるその人影を目指して俺は歩を進める。しかしその歩みは俺がこれから氷河期に突入する財布の中身を想像してか、随分と弱いものだった。

「だから、なんでアンタまでここに居るわけ!？」

「む、別にいいじゃないですか。私がどこで何をしよう!」

……なんかピットの入り口前で、女の子2人が口論している。しかも両方とも知った声だ。

「そういえば、アンタは前まで春馬を避けてたみたいじゃない？」

「そ、それは……。ハルの顔を見たら、何故だかドキドキして、ソワソワして。それで」

とりあえずそのままだと俺がピットに入れないので、まだちょっと遠いが声をかけてみることにする。言い合いをしてるみたいだから聞こえるといいんだが。

「おい、その2人。何してんだ？」

「春馬っ！」「ハルッ！」

同時に俺の名前を呼び、また同時にキッとにらみ合う2人。というか鈴とセレナだ。

あの夕飯で会って以来、互いに顔を合わせると誰かに仲裁をしてもらうまでこうやって口論している。そんなに馬が合わなかったか？俺の記憶にある鈴とセレナの性格では、そんなに対立するほど悪いはずはないんだがな……。

俺は少し小走りになって、2人が待つピットの入り口までくる。すると今までにらみ合っていた鈴とセレナは途端に顔をほころばせて、スポーツドリンクを鈴が、タオルをセレナが渡してくれた。

……なんで鈴とセレナのどっちかがまとめて渡さないんだ？よく分からん。

「やっぱりISの練習してたんだ？探してもいないからそうかなーとは思っただけさ」

「悪いな、鈴。俺に用事があるなら先に言っておいてくれればよかったのに」

「いや、あー、その。……ちょっと顔を見たかっただけだから」

後半は声が小さくて聞こえなかったが、今の俺にそのことを言及する体力はない。もう風呂入ってメシ食って寝たい。ティナと模擬戦闘をすると毎回こんな状態になるから、研究所にいた頃は睡眠不足になったためしがない。

「セレナは？ 俺にやっぱ用事があったか？」

「ああ、いえ。そのう……、そう！ お風呂、私が先に入ってもいいですか？」

「え、ああ、構わないけど。でも俺も早く入りたいから、いつもの長風呂は勘弁な？」

「ふふつ、りょーかいです」

なんだかいつものご機嫌2割増しのような声音で敬礼の真似をするセレナをジト目で凝視した鈴が、俺の方を見た。なぜだか羨ましげなのは、俺の目の錯覚か？

「ほんとに相部屋なんだ……。はあ、あたしも早く来てればなあ」

「いや、別に俺といて得なことなんてないぞ？ あるとしたら勉強を見てやるくらいしかないし」

「ハルはすごいですよー。5桁の暗算とかやつちやいますし」

なんでお前が得意げなんだ、セレナ。鈴もそれを見て悔しがるな
って。

「あたしも小学校のころに一夏と見てもらってたから知ってる。あの時はありがと、春馬」

「おう。俺も嬉しかったしな、鈴と一夏と居れて」

あの時は小説のキャラクターと喋ったり遊んだり勉強したりなん
ていう、非現実が現実になったことに軽くハイになってたしな。文
字通り俺にとって、毎日がお祭りだったぜ。

「嬉しい……、うん、あたしも嬉しかった！」

若干頬を赤く染めながら、鈴が元気よく首を縦に振った。その動
きに合わせて鈴のツーアップテールがフワリと踊り、かすかに女の
子特有の香りを感じた。

ここで年が過ぎるのは早いんだなと思う俺は、オヤジ臭いだ
ろうな。

俺が初めて一夏や鈴と会った頃を思い出していると、鈴がなにや
らもじもじしている姿が目に入った。なんだ、トイレか？ って、
これは一夏っぽいな。

「足がしびれたのか？」

「ち、違うわよ！ えと、その。……春馬は約束、覚えてる？」

セレナが俺たちの会話に入れずに悔しい旨の視線をぶつけてくるが、とりあえず無視。鈴が言う“約束”について思い出す。

……までもないな。“鈴”“約束”で引つかかるものといえは一つしかない。

「ああ、確か鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を」

「あ、それ！」

鈴が一瞬で笑顔になる。その表情は年齢とはにつかないほど子供っぽく、無垢なものだ。

「おごつてくれる、だろ？」

「……………はい？」

俺の言葉を最後まで聞いた鈴の顔が、ピシッと写真で撮ってあるかのように動きを止める。あれ、俺なんか地雷ふんだ？

「え、だから昔に鈴とそんな風の約束をしたんじゃないかったか？

なあ、セレナ」

「ふえっ！？ いや、私に聞かれてもシラネーヨってわけなんです
が……………」

なんか俯いてしまった鈴から発せられるオーラに居たまれなくなつて、知るはずが無いセレナに確認をとってしまった。おかしい、俺の中にあつた記憶通りに喋つたはずなのに。

とりあえず肩を小刻みに震わせて、俯いたままでいる鈴の肩に手を置こうとした時だった。

パアンッ！

「……………え？」

いきなり頬を叩かれた。乾いた音を鳴らした平手打ちによって、段々と叩かれた俺の頬を中心にして痛みが伝わってくる。

いつの間にか上がっていた鈴の顔。その顔は今にも泣き出しそうな子供のように強張っていて、怒りに満ち満ちた眼差しを俺に向けて放っている。その目はなぜか、大粒の涙を溜めていた。

「最つつつ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ねっ！」

ダツと駆け出した鈴は俺の横を通りすぎ、ピットとは別の、アリナ出入り口の中へと消えていった。後には俺とセレナと、なんともいえない気まずい雰囲気とだけが残された。

「まさか、俺がこの役になるなんて……………」

誰にも聞こえないような声量で、そつと呟く。鈴さんよ、そんな態度をとってしまったら大きな声で言ってしまうているようなものじゃないか。

昔、鈴が俺に大して言ったのは『料理の腕が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』だ。そしてその言葉の意味合いが原作の通りだとしたら、それは『毎日味噌汁を』と同じ意味。

ようするに、鈴が好意を持っているのは一夏ではなく

「……最低だな、俺は」

「え、ハ、ハル? どうしたのですか、急に。鈴さんに叩かれておかしくなったのですか?」

よく考えれば分かることだった。ここはあくまで原作に“近い”世界。人が笑い、悲しみ、暮らす、血の通った世界だ。小説のような活字で構成された、乾いた世界ではない。

みんな食事をとるし、眠りだつてする。風呂に入り、勉強もする。……もちろん、恋だつて。

俺はどこか自分の中で線引きしていたのかもしれない。俺は違う。この小説のなかで自分が知っているセリフを言うようなヤツとは違う、と。それが正解だと勝手に完結させて。

「……俺は、男の風上より、人間の風上にも置けないやつだったのかもな」

その線引きは、いわゆる差別。

アイツらは全員作り物。でも俺は違う。だから俺はこうして達観する。そんなクソみたいな最低なことをしていたのかもしれない。

「……いえ、少なくともそれは違いますよ。ハル」

優しく。やわらかい声が俺の思考に入ってくる。いつの間にか俯いていた顔を上げると、そこには若干大人びたような、慈しむような表情のセレナが立っていた。

「ハルは、空港で迷っていた私を助けてくれた。荷物まで持ってくれましたよ?」

鈴の肩を掴もうと伸ばして、その行方を失った俺の右手が、そつとセレナの両手に包まれる。

「そんなおせっかいを焼く人が、人間の風上にも置けないやつなわけ、ないじゃないですか」

そういつて、セレナは微笑む。

白く可憐なユリのように。明るくやわらかなタンポポのように。

「……ありがとう、セレナ」

どうやら俺は、柄でもなくマイナスな方へと考えていたようだ。確かに今までの俺の考えは、あまり褒められたものではないかもしれない。

でも俺だって、もうこの世界の“人間”だ。間違えていたら、直せばいい。ただそれだけの話だ。

「い、いえ。あ、でも女の子との約束を守れないのは、許せませんね」

「う、いやあそれは……スイマセン。反省してます」

責めるようなセレナの視線に、俺は居たたまれなくなって頭を下げる。そんな俺の潔い行動に驚いたのか、俺の頭上からため息を吐く声が聞こえる。

「じゃあ、もう後に何をするか分かってますね？」

「ああ、鈴に謝ってくる。許してくれるかどうか分からないが、それでも謝るさ」

「じゃ、とつとと着替えてくれば？　いつまでそこで話してるのよ」

声がした方を振り返れば、もうすでに制服に着替えたティナが立っていた。片手にはカップアイスが握られている。

「あ、これの代金あとで私に払ってよね。580円」

「高ッ!？」

……とりあえずアイスのことは考えないようにして、セレナには先に部屋に戻っておいてくれと伝えて俺はピットの中へと入る。手早く着替えてしまおう。鈴は恐らく今、泣いているはずだから。

「うし」

これから謝りに行くと言うのに、俺の心の中は清々しい気持ちだった。霞掛かっていた何かがとれた感じ。これなら鈴と再び会っても顔向けが出来る。

「……許してくれるといいんだがなあ」

何か一気に心が霞んだ気がした。

第十六話 心変わってにゅーげーむ（後書き）

なんだこれ。どうも玉露飴です。

春馬くんの改心が完了。といってもあまり変わりませんが。これからの展開が楽しみですね（他人事）

家に帰ってくるのが予想以上に遅れ、更新もそれに伴い遅れてしまいました。申し訳ありません。

誤字脱字、ご意見ご感想など、容赦なくお送りください。誠心誠意、返信いたします。

次回更新はまた活動報告で。

でわまたゝ ノシ

第十七話 学園生活なんてそんなもの？（前書き）

このごろ『GONG』と『未来への咆哮』しか聞いていない……。

マブラヴがやりたい衝動を、にじファンの二次創作を読んで気を紛
らせる毎日です。

第十七話 学園生活なんてそんなもの？

「…………はあ」

「何も朝から溜息吐かなくてもいいじゃないですか。きっと今日は謝れますって」

俺たちの部屋からIS学園への登校路を歩いている途中、深く溜息を吐いた俺を隣を歩くセレナに慰められた。そりゃ朝から溜息も吐きたくなるだろ。謝る相手、鈴が見つからないんだから。

結局、あの後急いでISスーツから制服に着替えた俺は、鈴が走り去った後を追いかけた。しかし鈴を見つけることは叶わずに、一人悶々とした気持ちで眠れない夜を過ごしたのだ。

おかげで今、超絶に眠い。

「そんなに悪いと思ってるなら、なんで鈴さんの部屋に行かなかったの？」

「いや、それはちょっと…………」

俺も最初はそう思った。というかそうしようとした。夕食後、鈴の部屋を鈴のクラスメイトから聞き出し、部屋まで向かったまではよかった。問題なのは…………。

「あによ。うん、私の顔になにかついてる？」

「いや…………」

俺をはさんでセレナの隣をアイス舐めながら歩く、ティナの事だ。

あの時、鈴のクラスメイトに部屋を訪ねた時にコイツも同じ部屋だと聞かなかったら、俺は公開処刑に遭うところだったのだ。

鈴のことは俺が全面的に悪いとは思うが、俺は絶対、ティナの前で謝るということはしたくない。この後からかわれるのが嫌だとかそんなことではなく、もっとこう、本能的に危険を感じたからだ。

「……………」

「ん？」

金銭的な意味で。

「いーなーティナさんだけアイス買ってもらって。ハルは私の分も買いやがれって話ですよ」

「お願いだからティナのと同じのを買って、とは言わないでくれな……………」

ティナの右手には、俺が630円を払って買ったアイスが握られていた。

*

学園に着き、クラスが違うティナと別れた後に俺とセレナは自分のクラスへと向かう。そういえば、ずっと気になっていたんだが。

「なんでセレナが俺と一緒に登校してんだ？　いつもお前のほうが早く起きるのに」

「え、いやあそのう……」

歯切れの悪い言葉を言った後、ついに俯くセレナ。いや、別にふと気づいたことだし、言いくかったら言わなくてもいいんだが。

セレナはいつも5時くらいには起きている。目覚ましも何も使わずに、だ。まるでそれが当たり前のようにセレナは起きた後、ストレッチをしているらしい。本人曰く

『もうクセみたいなものですから。これやらないと朝が来たって感じられなくて』

と、とびきりフレッシュな笑顔で答えてくれた。まあ健康そうだなによりだ。

「ま、そんなことはどうでもいいとして。あの人だかりはなんだ？」

「む、どうでもいいって……。まあいいです、人だかりは多分、クラス対抗戦の対戦表が理由だと思いますよ？」
リーグマッチ

そうか、もうそんな時期なのか。本来ピンタをつけるはずの一夏

の代役を演じた俺には、そんなことを考える暇はなかったからな。

これから俺はどうしようか。もう俺は前の俺がしていた、『観覧する』ということは出来そうにない。あくまで自然体で、この世界の『人間』でありたいと思っている。

鈴に謝った後のことは　とりあえず保留だ。

俺はいままで通り、鈴とは友達でいたいと思っている。一夏やみんなどと一緒に騒いで、楽しくやりたいと願っている。

それに俺はまだ鈴の口から直接それを聞いてはいない。全て昨日の鈴の行動から察した推測であって、真実として確定づけるにはまだ早い。

俺は断るにしても断れない、そんな状況に立たされているのだ。

「……ル、ハルつてば、大変です！」

「ああ、どうしたんだセレナ……って、ちょっと待て引張るなっ」

思考の海への素潜りから帰ってくると、セレナがぐいぐいと俺の制服の裾を持って引張っていた。セレナの進行方向から予想して、向かう先はさっきの人だから……ってマジか。

「なんだよ、なんか面白い対戦カードでもあったのか？」

「面白いなんてレベルじゃないです！　見たほうが早いですから、こっち来て下さい！」

そういつてぐいぐい引つ張られていく。いい加減自分で歩けると言いたいところなのだが、なにやら興奮しているセレナの耳には届かないだろう。諦めて引つ張られることにした。

というかいつの間にセレナは対戦表を見に行つてたんだ？ ああ、俺が考えてる間にか。ホント俺のこれクセだよな。考え事をするとすぐに周りの音がシャットダウンされて、自分の世界に没頭するかどうか。あの両親からの影響か？

「あい、ちよつとごめんよー」

「え、神城くん？」

「ホントだー、神城くんだ〜」

「頑張つてね、神城くん！」

人だかり前でセレナから解放された俺は、言われた通り壁に掲示されているはずの対戦表へと向かう。言わずもがな全員が女子だったので割つて入りづらかったのだが、なんだかすんなり入ることができた。というか最後の「頑張つてね」ってなんだ？

「どれどれーっと。お、やっぱり一夏と鈴が当たるの……か……？」

俺はとりあえず一夏の対戦カードを見る。そこには予想通りのカードが。今頃一夏は教室でどう戦うか悶々としているんだろうな。後で助言をしてやろう。

そして今、俺の視線はある一点で止まっている。いや、正確にはせわしなく動いていた。左から右へ。右端まで行ったらまた頭の左

へと。

何度も何度も読み直していたその文章を、周りにいた女子達が追いつきとばかりに音読しはじめる。

「今回のクラス対抗戦^{リーグマッチ}を開催するにあたり、特例として開幕戦^{オープニングマッチ}を執り行う」

「これは今回特別に対抗戦^{リーグマッチ}を視察に来てくださる『神城絆』様のご要望であり」

「対戦カードはー、『神城春馬』及び『凰鈴音』の両名ー。開催式の後に行われる」

「母さん、何やってんの……」

俺は母さんの顔を思い出すと、自然にその表情が「えへ、来ちゃった」という悪戯が成功した子供のような笑顔に変わる。思わず眉間を指で押さえてしまった。

絶対に思いつきの行動だろう。こんな時期にIS学園に来ること事態が意味不明だし、俺のIS『アズール・カミティ』のデータを収集に来たと言えば真つ当っぽいけど、そんなことに開発者本人がいそいそ出てくる必要も無い。

『思い立ったが吉日』を地で行く人とは思っていたけど、まさかここまでとは。授業参観かなにかと勘違いしてないか？

「ねえねえー、絆さんってー、神城くんのお母さん？ 苗字も一緒だしー」

「……ああ。そうだよ」

「すごいよねー。夫婦でIS研究なんて！ 束博士の次に注目されてるんでしょ!？」

「……ああ。そうだよ」

「今は世界各国を飛び回ってるって聞いたけど、神城くんはどうなの？」

「……ああ。そうだよ」

「えと、神城くん、1 + 1は？」

「……ああ、そうだよ」

もう思考が回らない。自分が何を言われて、何と答えているかさえ分からない。これから心機一転して頑張ろう、と気合を入れていた矢先にこれだ。何かの作意があるとさえ思えてくる。

本当に母さん、今回だけは勘弁してくれよ……。

「ハル、見ましたか見ましたよね見たんですね!？」 オープニングマッチ 開幕戦ですよ

！すごいじゃないですか!」

「ああ……。ちょっとセレナ、先に教室行っておいてくれないか？ しばらく一人にしてくれ……」

「え、まあいいですけど……ハル？」

俺は思わず落としてしまっていた鞆を手に取り、よろよろとその場を後にした。

「まあ、鈴に謝る機会が出来た、と考えるしかないか……？」

俺は屋上で横になりながら、オープニングマッチ開幕戦と鈴についてのことを頭の中でまとめていた。

今までゴチャゴチャと考えてみてはいたが、結局なってしまった

ことは変えられない。ならもうスパツと切り替えて、前向きに考えるしかないのだ。そう結論つけた俺から出た言葉はこれだった。

ふと、右手につけてある待機状態の『カラミティ』を見る。俺と『カラミティ』のコンディションは良好。これなら勝てるかは分らないが、鈴と満足に戦うことは出来るだろう。

それより、やっと冷静になってきた俺が気づいた、新しい悩むべき問題は。

「来るのか……？ 所属不明機は」

原作では、クラス対抗戦で一夏と鈴が戦っている最中に所属不明機がアリーナに侵入してきた。そのシナリオ通りなら、一夏と鈴の対戦中に侵入してくるはずだから、開幕戦中には何も問題は無いはずだ。

だがこの世界は原作じゃない。俺やセレナ、……鈴の一件もある。原作からずれているのはもう明白だ。

なら、所属不明機の標的が変わっても、不思議ではない。

「その時俺は……守れるのか？ 鈴を、アリーナに閉じ込められたみんなを」

原作の一夏は『白式』の単一仕様能力、零落白夜と覚えてた瞬間加速で所属不明機を何とか退けた。だが俺はどうだろう。俺の『アズール・カラミティ』はまだ単一仕様能力は発生していない。あるのはそれに近いシステムのCLBだけだ。

「負けるな。このままじゃ」

対して所属不明機はセシリアのB-T兵器の威力を遥かに凌ぐ威力を持つビーム兵器を使う。『カラミティ』の紙装甲じゃ、当たったら一発でシールドエネルギー残量が0になる姿は火を見るより明らかだ。

こんなとき、『カラミティ』用のパッケージとかあったらいいのにと思ってしまうのは、別に悪いことじゃないと思う。でも母さんなら多分『それぐらい避けなさい。何のための高機動よ』と一蹴するだろうし。

「参ったなーこりゃ。……お」

「……あ」

俺は半ば諦めるように言い捨てて、ゴロンと完全に寝転がる。すると視界の先、屋上への昇降口から顔を覗かせていた鈴と視線が合った。

「……お、おっす。鈴、昨日は俺が悪かった。ホントすまん」

俺は起き上がり、遠くにいる鈴に向かって素直に頭を下げる。頭を下げているから鈴がどんな顔をしているか分からないが、それでも頭を上げるわけにはいかない。

シャツシャツと屋上に敷いてある芝生を踏む音が、段々と近づいてくる。そしてその音は俺の目の前で止まり

バシンッ！

「痛ったあ！？」

「これは昨日の分よ。……これでチャラにしてあげるわ、感謝なさい」

頭を叩かれた俺は思わず頭を抱えて上を見る。そこには不機嫌そうな顔でムスツとしている、見慣れた鈴の姿があった。

俺は少し痛みが引いた頭を片手でさすりながら、鈴の方へと視線を向ける。その顔の頬は少し赤く、目も少し赤く腫れているようだった。

「……本当、ごめんな。泣いてたんだろ？ 昨日からずっと」

「バツ……、違うわよ！ これは……そう、アレルギーよ！ 春馬アレルギーー！」

「どんなアレルギーだよ！？」

「うつさい、こっち見るな！ 身体が痒くなるっ」

「見るだけでもダメなのかつ！？」

身体を痒そうにさする鈴に合わせて、俺もオーバーに頭を抱えて身悶えする。そして、俺と鈴は一緒にタイミングで吹き出した。

もう、昨日のような重苦しい雰囲気などこの場にはいなくなっていた。

「くっふはははは！ やべ、止まんねっぶ、ぷはははははは！」

「ちよっ春馬っ、笑いすぎっふ、あはははははは！」

なんか笑っていたら立っていられなくて、そのまま二人して芝生の上に転がる。それでもこみ上げてくる笑いは抑えられず、笑い終わったのは結構経ってからだった。

どちらも無言で、でもその顔は晴れ晴れとした様子で、青空を眺める。

流れていく雲はいつもよりゆったりと漂っていて、それに伴って時間もゆっくり流れているように感じた。

遠くでキンコンカンコンと、一時限目を告げるチャイムが聞こえる。

「チャイム、鳴っちまったな」

「いいじゃない、今くらい。一時限目に間に合えば」

「一時限目はサボる気なのな」

「春馬ってそういうところ女々しいわよね。男ならドッシリしてなさいよ」

そう言っただけ俺の顔を見る鈴。ていうかお前、女々しいとか言っちゃだめだろ。ラーメンを食べる時も『女々しいからイヤ』と言ってレンゲとかは使おうとしない。

(鈴にはそういう『女らしさ』のサポートがいるかもな……)

と、俺が考えていると、突然何かを呟いた鈴が顔を一気に紅く染め上げる。瞬間沸騰のような出来事を目の前にして、考え事をしていた俺は案の定その鈴の言葉を聞いていなかった。

「え、何か言ったか？ 鈴」

「ななな、何でもないわよっ！ オープニングマッチ開幕戦、覚悟しておきなさいよっ春馬！」

「お、おう。 オープニングマッチ開幕戦とはいえ、お互い全力でな、鈴！」

「……ばか」

ザッと勢いよく立ち上がった鈴は、ズカズカと不機嫌そうに歩いて行ってしまった。やばい、俺が考えている間に何か無視しちゃマジイことを言っていたのか？ でも今更「もう一回言ってくれ」とは言えないしな……。

と、また考えていて「しまった」と思い周りを見渡すが、やはりというか、すでに鈴の姿は屋上にはいなかった。

……代わりにいたのは。

「こんなところで何をしている。1組は今、授業中のはずだが？」

「千冬……さん」

「先生だ」

スパアンツ！

またいつものように、関羽チョップが俺の頭に決まる。今日は俺の頭へのダメージが多い気がするな。俺は避雷針かなにかなのか？
こう、雷のような衝撃がスパアンツと。

スパアンツ！

「はい来たー2発目！」

「失礼なことを考えている気がしたのでな。で、お前はここで何をしていた？」

千冬さんは腰に手を当てながら、ふうと溜息を吐く。千冬さん、絶対俺のことを「面倒臭いやつ」と思ってるだろうな。大体合ってたから困り者だが。

というか千冬さん、鈴と交代するように来たな。そうすると結局、鈴も餌食になったのか。合掌。

「いや、鳳とは顔を合わせていないが？」

「本当に、千冬先生は読心術を習得してますよね……って、会ってないんですか？」

「ああそうだ。で、お前はここで何をしていたんだ？ 頭の良いからといって授業をサボって良い理由には成りえないぞ」

出席簿を肩叩き代わりにしながら、千冬さんは半分ドスが効いた

声で、俺に再度聞いて来た。とりあえず、本当のことは隠しておくか。

「いや、別に頭が良いからサボっていたわけでは……。あ、ただ」

「ただ、なんだ？」

でも、それで「授業を休む理由にはならない」と言われるのは癪しやくだな。俺はさっきのお陰で、鈴と仲直りすることが出来たのだから。

「ただ、授業をサボった甲斐かいはあった。……そう思ってます」

「……ふん、そうか」

千冬さんは俺の予想とは違って、それだけを言つと俺に背を向けて昇降口に向かって歩いていく。やっぱり、この人。

「というか、見てたんならそう言つてくださいよ。別になににも言いませんから」

「私は何も見てはいないさ。私が見ていたのは学校での日常風景、それだけだ」

「さつさと教室に戻れ」と言い残し、ついに千冬さんは屋上から消えた。なんというか、俺の周りには男勝りな女性ひとばかりなのか？ そんな疑念を俺に残して。

「日常風景、か」

そう俺が呟くと、突然フワツと風が俺の顔を掠めていく。俺の言の葉をさらうように吹いた風は、屋上の芝生の葉とともに青空へと昇っていった。

友達とケンカをして、仲直りをする。そんなこと小学校の時に何度も、性懲りもなくやった。その度に仲が良くなって行く。一夏と鈴、そういえば弾もそれに当たる。

「……いい天気だな」

今日は格別、楽しく過ごせそうだ。

第十七話 学園生活なんてそんなもの？（後書き）

次回はクラス対抗戦^{リーグマッチ}の話です。ま、ここだと開幕戦^{オープニングマッチ}ですけどね
^ ;

アニメでのシャルを見て「やべ、シャルも良いかも……」と心揺ら
いだのは私だけではないはず。そう信じてる。

でも鈴への想いは揺るがない！ 異論は認めん！

誤字脱字、ご意見ご感想など、お待ちしておりますよ。ティッシュ
を取るようにお気軽にどうぞ。

ではまたー ノシ

第十八話 決戦！ クラス対抗戦、開幕戦！（前書き）

想ったより時間が出来たので、書き溜めた十八話を更新。

連続投稿なんて、久しぶりです。

第十八話 決戦！ クラス対抗戦、開幕戦！

クラス対抗戦^{リーグマッチ}当日、見物に来たお偉いさんとかの長いお話も終わり、ついにこの時がやって来た。

アリーナはもちろん満席。というかその席の間の通路までもが埋まっていて、会場入り出来なかった生徒や関係者は別室に設置されたりアルタイムモニターで鑑賞するほどだ。なんかもうワールドカップ並みの盛り上がり方に、俺は若干気圧されてしまっている。

「さて、行くか『カラミティ』」

『登録操縦者、神城春馬を認識。アズール・カラミティ、起動します』

ISスーツに着替えた俺の体に沿うように、光の粒子が包みこみ、一瞬で弾ける。そこには専用機『アズール・カラミティ』をまとう俺の姿があつた。

頭の中に直接響いてくるような『カラミティ』の合成音に意識を傾けつつ、俺はそのまま歩いて電磁滑走路^{レールカタバルト}へ向かう。その途中、聞きなれた『カラミティ』の台詞の中に違和感を感じ、なんとなく展開可能装備一覧を開く。

「……はあ、そーかい。母さんの目的はこれか？」

俺は目の前に表示されている違和感の正体を確認してから、ホログラムを閉じる。各スラスタが正確に動くか機動だけ確かめて、^{レールカタバルト}電磁滑走路に着く。

『戦闘待機中のISを感知。操縦者、凰鈴音。ISネーム『甲龍』。戦闘タイプ近接戦闘型。特殊装備有り』

「オーケー。鈴はもう待ってるのか。ならさっさと行かないとな」

『電磁滑走路との接続終了。^{コネク}カウントダウンタイミングは操縦者に譲渡されます』

いつもの通り、発進前に深呼吸。これは俺のクセになりかけている。というか、これをやるのとやらないのでは結構違う。多分俺だけだ。

よし、これで戦闘用に頭が切り替わった。^{オープニングマッチ}開幕戦は勝っても特に何もないが、やっぱり勝つことに越したことはない。

『^{アンノウン}所属不明機が来ないことを願いつつ」

『カウントダウン開始。3……、2……、1……』

「全力で戦っただけだ！」

GO！と目の前に表示されたホログラムを潜り抜け、俺は鈴の下へと飛び出した。

鳳鈴音。中国の代表候補生で、専用機持ちだ。その専用機の名前は『シェンロン甲龍』。第3世代型ISであり、燃費と安定性を第一に設計されている。機体色は赤み掛った黒といったところか。

その『シェンロン甲龍』と鈴は、俺の視線の先で試合開始の合図を静かに待っていた。俺も鈴と対角線上になるように移動し、しっかりと、その機影を見据える。

やたら攻撃的な姿をしている肩の横に浮いた非固定浮遊部位、アンロック・ユニット棘ス付き装甲には第3世代型の特殊装備『龍咆』が備わっている。
バイク・アーマー

龍咆とは空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲だ。砲弾だけではなく、砲身すらも目には見えないのが特徴で、しかも砲身の稼動限界角度がない。ようするに死角がなく、目に見えない砲弾が飛んでくると考えて良い。

（そんなん避けれるわけないじゃんか。発射する時の砲身が向いて
いる角度から計算しても、砲弾が見えないんじゃない……）

『アズール・カラムティ』にも最初はアンロック・ユニット
ファースト・シフト非固定浮遊部位があつた。
しかしそれは初期設定だったようで、一次移行の過程で無くなつて
しまっている。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

あれ格好良くて気に入ってたのに、と一人頭の中で呟きながら空
中で鈴と再び向き合う。その距離は約5メートル。お互いリラック
スした様子で、オープン・チャネル開放回線で挨拶代わりの言葉を交わす。

「アンタの母親、来てるんでしょ。無様な格好を見せるんじゃない
わよ」

「お、それって俺に花を持たせてくれるってことか？ 悪いな」

「そんなわけないじゃない。この前の分、たつぷり痛めつけてあげ
るわ」

「いや、それはこの前チャラにしてくれたんじゃない……」

なんか話が違ふ気がする。それはまあ、根に持たれても仕方が無
いことをしたと自覚しているし、反省もしている。だけどこの前そ
れは俺をぶつことでチャラにしてくれたんじゃないかったのか？

……というかまさか、まだ怒ってらっしゃる？

「言つとくけど、ISの絶対防御は完璧じゃないのよ。“シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる”」

「え……つと、鈴音さん？ それはどいう……」

もう嫌な予感しかない。絶対鈴はキレていて、尚且つおれをボコす気満々だ。さつきから嫌な汗が流れていて止まらない。

ちなみに鈴の言ったことは本当だ。噂ではあるが、IS操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備もあるらしい。もちろんそれは競技規定違反で、何より命に危険が及ぶ。

だがそれは同時に『殺さない程度にいたぶることは可能である』ということだ。

俺も鈴も、それを実行することは可能だ。代表候補生クラスである以上、逆にそれくらいの腕前がないと候補生にはなれない。あ、俺は特例だが。

『では両者、試合を開始してください』

不安要素たつぷりなまま、ビーツと試合開始を告げるブザーが鳴り響く。その音が切れる瞬間、俺と鈴は動いた。

斬、と鋭い音を立ててアリーナの中央、ちょうど始めに俺と鈴が向き合っていた距離の真ん中で俺のミストラルmk？と鈴の双天牙月 二基ある内の一基 とが火花を散らしながら鏖迫り合う。

「へえ、『甲龍^{シエンロン}』と真つ向から勝負する気？ でも……」

鈴は双天牙月に込める力を強めて、俺を後ろへと吹飛ばす。俺は崩した姿勢を何とか整え、地面との接触を免れると、視界の先には双天牙月のもう一基を展開した鈴がいた。そのまま俺へめがけて突進してくる。

初撃をなんとかミストラルmk？でさばき、追撃を身を捻らせて避ける。しかしそんなことは気にしていないとでも言うように、鈴は両手に持つ双天牙月をバトンでも扱うかのように縦横斜めと自在に角度を変えながら斬り込んでくる。しかも高速回転している分遠心力によって一撃の重みが増し、ミストラルmk？でさばくのも一苦労だ。

（このままじゃ流れを持っていかれる、一旦距離を置いてから態勢を）

「甘いッ！」

パカッと鈴の肩の横に浮いたアーマーがスライドして開く。中央の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃を受けて回避方向とは違う方向に『殴り』飛ばされた。

俺は真っ白になりかけた頭の中を落ち着かせようと、鈴の姿を捉えるために崩した姿勢のまま鈴に振り向く。

「今のはジャブだからね」

「っ！ やば」

俺は鈴の肩の横に浮いているアーマーの角度から計算して回避行

動をとろうとするが、崩した姿勢からではそれは叶わない。

ジャブ
牽制の後、本命と相場は決まっている！

先ほどよりも大きい衝撃が全身に伝わり、完全に姿勢を崩した俺と『カラミティ』はそのまま地表へと激しく打ち付けられた。ズキツとした痛みが、シールドバリアーを貫通して痛覚に訴えかける。

ダメージは106も喰らってしまった。幸い実体ダメージは少ないものの、最悪なスタートダッシュだ。

「でも今のでっ、大体分かったっ、気がする！」

俺は全身に感じる痛みを振り切るようにして、すぐにその場から離脱する。すると俺が飛んだ後、そこから衝撃音が鳴り響いた。鈴の龍咆による追撃が外れた音だ。

それを俺は確認することなく、地表を滑るようにしてそのまま加速する。その後を鈴の龍咆による攻撃が絶え間なく打ち貫いていく。

「へえ、よくかわすじゃない。砲身も砲弾も見えないでないくせに」

「まあな。でも、発生源である砲台はきっちり見えてるぜ」

ハイパーセンサーから送られてくる空間の歪み値と大気の流れの情報は、いささか遅すぎる。ならば、“俺がそれより早く察知すればいい話”だ。

「今ので砲弾の発射から着弾までのおおよその速度は分かった。後は砲台の向きから着弾地点を予測すればいい」

「アンタ、さらつと当たり前みたいに言ってるけど、そんなの出来るわけ無いじゃない」

「なら来いよ。百聞は一見にしかずってな」

右手の指でクイクイと鈴を挑発してみる。すると鈴は間髪いれずに俺に向けて龍咆を放ってきた。

（俺の足元っ、次は続けて左、俺、右、足元ッ！）

ズドンと足元の地面が抉り取られて、破片がパラパラと降り注ぐ。俺はその土煙を纏いながら鈴がいる空へと飛び上がり、ミストラルmk?で斬りかかる。

本当に避けられるとは思っていなかったのか、焦るようにして双天牙月を構える鈴に、俺はそのまま突撃する。

ミストラルmk?からツイントルネードに展開武装を切り替えて。

「きゃあっ!?!」

ツイントルネードからの銃撃が、双天牙月を構えたままの鈴を襲う。しかし当たってはいるものの、大したダメージにはなっていないだろうな。

と考えていたら、砲台がこちらの方向を向くのが見えた。とつさに展開武装をミストラルmk?に切り替え、初撃を避ける。

（いけるか？ 避けるだけじゃ突破できないしなっ）

俺は避けた後にすぐさまミストラルmk?を空中に向かって振るう。しかしそこには確かな手応えを感じ、そのまま袈裟斬りに振り切る。

ブワツと、圧縮された空気が霧散するような音と共に、飛んできていたはずの砲弾^モが掻き消える。

「ふう、やってみれば出来るもんだな。人間ってのは」

「なっ！ まぐれ当たりでいい気になるんじゃないわよっ！」

言葉に明らかな焦りを滲ませた鈴は、両手に持っていた双天牙月の柄の部分を接続させる。頭上で軽く振ってみせた鈴の様子からして、使い慣れた武器のようだ。これは龍咆より手ごわいかもしれない。

「はあああああ！」

「ぐうつー！」

さきほどよりも早い回転速度で襲い掛かってきた初撃を、俺はなんとか受け止める。その後に素早く追撃が入るが、それはミストラルmk?でなんとか弾くことで防いだ。

「くつ、防ぐんじゃないわよバカッ！」

「無茶苦茶言っんじゃないやねえよ！」

そんなの無防備^{ノーガード}で受けたら、俺は多分もう立ち上がれないと思う。

シールドエネルギー的にも、身体的にも。

「それが鈴の本気ってなら、俺も本気でいかしてもらっぜ」

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は1分37秒です』

「かかってらっしゃい！ 返り討ちにしてあげるわ！」

特殊推進翼から溢れんばかりの赤いエネルギー粒子が流れ出る。
ミストラルmk？のエネルギー循環刃もその循環スピードが上がり、
大きさも1.5倍程に大きくなった。

俺と鈴は同時にその場から飛び出す。俺は大きくミストラルmk
？を振りかぶり、渾身の一撃を放てるよう構えた。鈴もそれを避ける
ような素振りは見せず、迎え撃つように同じく双天牙月を構えて
いる。

（さあ、これで決着をつけてやる）

「うおおおおおッ！」「はあああああッ！」

そして、その刃が激しくぶつかろうとしたその時。

何者かから放たれた高出力ビームが、アリーナの遮断シールドを
轟音と共に貫く

開戦の、合図だった。

第十八話 決戦！ クラス対抗戦、開幕戦！（後書き）

なんというかすごい気になるような部分で切っちゃいました。次回を乞うご期待！

そして、前話についての報告です。2月11日20時に更新する予定だった第十七話が、なぜか入力したすぐ後に更新されてしまいました。読者様を騙したように感じられたので、ここに謝罪を申し上げます。申し訳ありませんでした。

さて、そして次回はついに一巻くらいが終了する……かもしれない。今回みたいに切れてしまったら思い切るかキレてくださいw

誤字脱字、ご意見ご感想をお待ちしております！ 友達を殴り飛ばす感覚で、気軽にどうぞ

でわまた〜 ノシ

第十九話 嵐の戯曲（前書き）

一卷くらい、これにて完結！

第十九話 嵐の戯曲

「なんだ、地震か!？」

「システム破損! “何か”がアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいです!」

アリーナの管制室が突然の下から突き上げられるように激しい揺れに襲われる。私は転倒しそうになったところで椅子に手をつき、黒煙と砂煙によって会場の様子が見えなくなってしまったリアルタイムモニターを睨む。

先ほどまで私と“偵察”目標である織斑一夏、セシリア・オルコット、篠ノ之箒、千冬教官、山田先生はこの管制室のリアルタイムモニターでハルと鈴さんの開幕戦を見届けていた。
オープニングマッチ

正直ハルと彼女の戦いぶりにはそれほどまで関心するような事項はなく、よって私は純粹に二人の戦いを楽しんでいたのだ。もちろん、織斑一夏の行動はすべて監視しながら。そして試合もそろそろ佳境に入ってきたというタイミングでの何者かの襲撃。

奇襲なんて、そんなに珍しいことでもない。私やお姉ちゃ……ラウラ少佐はいついかなる戦況でも対応出来るように教育されてきた。こんな事で動揺するのは平和という温室で育ってきた凡人か訓練所がっこうで軍人を気取っている新兵バカぐらいだろう。

案の定、織斑一夏はその前者に入るようだ。仕方ないと言えばそうだが、情けないと言えば情けない。

山田先生が必死に今アリーナに起きている状況を把握しようとする目の前のコンソールを叩く。それを確認するよりも早く、千冬教官が管制室からアリーナに通信を繋いだ。

「試合中止！ 神城、凰！ 直ちに退避しろ！」

さすがは千冬教官。他のスタッフが目の前で起きていることに呆然と立ち尽くしているのとは違い、すぐに状況を把握し、迅速かつ的確な指示を飛ばしている。……ラウラ少佐があそこまで心酔するだけはある。

「な、なんだ！？ 千冬姉、一体なにが起こってるんだ！？」

「今それをお前に説明している時間はない。観客席の防壁を下ろせ！」
シールド

「はいっ！」

千冬さんが指示すると同時、すぐにアリーナの観客席を覆うように防壁が上下からせり上がる。

「奇襲、ですね。アリーナの遮断シールドを破るということは、そこそこの攻撃力を持つIS……」

そのISはどんな形状で、どんな攻撃手段を持っているか。どういう局面で真価を発揮し、どのような戦術を弱点に持つか。パイロットの錬度は？ そのパイロットの出身国は？ どのような思想で動いている？ それに有効な攻撃手段は？ 味方の予想被害は？ 勝率は？

「あの……セレナさん、どうしまして？」

「え？」

セシリアさんに声をかけられ、ハッと我に返る。いつのまにか目の前のリアルタイムモニターの端から端まで移っている爆炎と砂煙が混ざる向こう側に居るはずのISについて考えていた。

（職業病かな。少なくとも歳相応の考え、では無いですね）

「あ、いえ……。大丈夫ですよ、心配には及びません。私は生徒の避難誘導をしてきます！」

「え、ちょっと、セレナさん！？」

セシリアさんから遅れて聞こえてきた驚いた声を無視して、アリーナの管制室から緊急警報が鳴り響く廊下へと飛び出した。

「ごめんね、ケーニツヒ。今はまだ我慢してね。ラウラ少佐の、命令だから」

『私が現地に到着するまで、貴様のISの使用を禁止する。これは隊長命令であり、上官命令だ』

ラウラ少佐の冷たい、押しつぶすような視線に怯えて復唱してしまった、過去の自分を悔やんだ。姉妹であり、共に辛い過去を歩いた私が止めてあげなければいけなかったのに。一時的な恐怖心に負けた私は、もう彼女を食い止める術を持たない。

私はいつも流され続けている。そこに必要なのは遺伝子強化素体、アドヴァンスド

セレナ・ボーデヴィツヒ　大尉　であり、今も　大尉　として動いているに過ぎない。

結局私という個人は、どこへ流れてしまったのだろう。

「はあ、やっぱり来ちゃうよなあ。大丈夫かな俺」

隣で呆然と黒煙と砂煙が交じり合いながら吹き上がっていく厚い爆煙を見つめている鈴に聞こえないように、そつと愚痴るように呟いた。さっきまで頭の中を駆け巡っていたアドレナリンはなりを潜め、今は疲労と不安が頭の中を満たす。

「鈴、どうやら決着はお預けだ。今すぐピットに戻れ！」

「な、何言ってるのよ！？　まずこの状況を説明してよ！」

「知るかバカ！　とりあえずお前は下がってろ、こういう面倒事は男の役回りだ！」

とりあえず発動しているだけでシールドエネルギーを食ってしまったうCLBは緊急停止ストップしてある。今はその緊急停止によるシステム負荷で復旧のインターバルが発生しているが、そう時間が経たないうちに再起動するだろう。

元々の大きさ、循環スピードに戻ってしまったミストラルmk？を構え直し、鈴の前に立つ。もうこうなっちまったらやれるかどうかは関係ない。やるしかないんだ。

『ステージ中央より熱源。所属不明のISと推測。ロックされています』

ハッ。そうそう、お前は俺だけを見てれば良いんだ。最悪なことにアリーナアリーナには母さんが居る。今のアリーナが原作と近い状況なら、コイツはすでにアリーナの遮断シールドレベルを4に、全隔壁を口ツクしているはずだ。

「鈴、早く下がれ！」

「アンタはどうすんのよ！？」

少し切羽詰まったような鈴の声が解放回線から聞こえる。いやあどうしよう。いや本当に、そこが今の俺の問題ですよはい。アリーナの遮断シールドはISと同じものが使われている。よってコイツの攻撃には“それを貫通するだけの威力を持った武装を装備してい

る”ということ。

俺の『カラムティ』じゃ掠ったら確実に実体ダメージ大、直撃なら瞬殺だ。操縦者である俺も無事で居られるという可能性は薄い。

「まあとりあえず俺が適当に時間を稼ぐ。お前はさっさと逃げろ！」

「逃げるって……、アンタ、そんな紙みたいな防御力のISで何言ってるの!？」

う、やっぱり無謀ですかね？ いやいや、でもヤバイのは“当たたら”の話。当たらなければ、どうということは無いじゃないのか？

さっきみたいなバカ威力のビームを撃たれたらキツイかもしれないが、それ以外だったならいけるかもしれないな。

「大丈夫だって、当たりやしないさ。俺もヤバくなったら避難するし、あの威力の前じゃ鈴も」

『敵ISより熱源反応を感知』

俺は言い終わる前に『カラムティ』の警告音を聞いた瞬間、鈴に向かって飛び、そのまま抱きかかえてさらう。その直後に鈴が居た空間をエネルギー状の砲弾が飛び去ってく。

「うわ、こりゃ掠っただけでもヤバイな。確実にアーマーを持っていける」

ハイパーセンサーの熱源から計算したおおよその攻撃力数値を見

て、俺は思わず引きつつた笑みを浮かべる。なんだこのバカ威力。ISはいつ艦載兵器になったんだよ。

「……っ！ や、ちよつと離しなさいよ馬鹿！」

「のわバカ、暴れるな。つつか殴るな！」

ダメージこそないものの、『カラミティ』のシールドエネルギー消費を少しでも減らそうとする機能によって、シールドを張る必要もないと判断されたらしい鈴のパンチが、もろに俺の顔面に降り注ぐ。

ばっかやろ、身体ダメージも考えてくれよ『カラミティ』さんよ……。

「だ、大体なananなんでお、おおお姫様抱っこなんて……」

「っ！ 飛ばすぞ鈴、しっかり掴まってるよ！」

先ほどの砲撃はこちらの動きを掴むための牽制だったのか、そのままビームを掃射砲のように連射してくる。俺はそれを『カラミティ』の猛スピードと急停止、急反転、急加速を繰り返しかわして行く。

別に何も考えず避けているわけではない。アンノウン所属不明機から放たれるビームの衝撃により大気が流動し、段々と所属不明機が纏っていた煙が晴れていく。アンノウン

そして完全に所属不明機から煙を引き剥がすと、そこには俺の思惑とおりの機影が立っていた。

深い灰色をした機体色。そしてその身体から伸びる腕は以上に長く、腕の先にビーム発射口がある影響なのか手先に行くにつれて太くなるアンバランスな形状だった。そのまま振り回せばそれだけで結構なダメージが出そうなほど。

そしてISには珍しい『全身装甲^{フル・スキン}』。間違いない、原作で最初に一夏に立ちはだった敵、無人ISだ。

「初めまして、とても言っておこうか？」

「……………」

無言、だよな。当たり前か。原作でもコイツが喋っているところなんてなかったし、第一返答してきても俺が困る。

とりあえず今の標的は一夏ではなく俺のようだ。まだ鈴に興味を抱いていない今なら、比較的楽に鈴を退避させることができる。

『春馬くん、鳳さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！ すぐに先生たちがISで制圧しにいきます！』

「そうしたいのは山々なんですけど、どうやら俺、完全に注目^{ロック}されたみたいで。無理なんですよね」

目の前で沈黙を守ってきた無人ISが、静かに一步を踏み出す。そしてまた一步、もう一步。

「それに、母さんを放って逃げるなんて出来ませんし。あのISのビームなら、観客席を覆ってるあの防壁^{シールド}でも貫くと思うんすよ」

自分でも驚くほど、頭がが冷静に、意識が戦闘に集中していくのが分かる。まだあの無人ISはこちらにビーム砲撃を放つ気配はない。やはり人間の会話に興味があるのだろうか。

「鈴、今ならまだ間に合う。早くピットに」

「なにアンタだけ格好つけようとしてんの。そ、それよりいい加減離しなさいよ……」

「お、おう。わり」

俺はそつと腕を離すと、鈴が俺と若干距離を置いて並ぶ。何か小声で呟いているが、この混乱で生じたらしいノイズに混じってしまつて聞き取れない。

未だ山田先生の半ば叫ぶような声が通信回線から聞こえてくるが、とりあえず無視。もう俺は完全に戦闘モードだ。この目の前にいる無人ISを倒すために脳がフル回転している。

そんな俺の覚悟を感じ取ったのか、無人ISもビーム砲台である片腕を振り上げ、その砲口を向けてくる。

「……あ、私もロックされたわ。向こうはやる気満々みたいね」

「はあ、もうどうなつても知らないからな、鈴」

俺は溜息を吐きながらも、頭の中で作っていた戦術の内『鈴が撤退して1対1になった時』のパターンを抹消する。これで残るパターンは26通り。そのどれもが成功率30%未満だ。

「鈴。俺が突っ込んで注意を引くから、好きなように援護してくれ」
「こういう時に頭の回転が速いヤツって便利よね。いいわ、任されてあげる」

鈴も持っていた双天牙月を構え直し、臨戦態勢を作る。いや、俺が言いたかったのは援護であって、一緒に前衛に出るってわけじゃなかったんだが……。ま、「好きなように援護しろ」と言っただのは俺だし、しょうがないか。

無人ISの腕についている砲口が火を噴くと同時、俺たちは無言のまま飛び出した。

「もしもし！？ 春馬くん聞いてます！？ 凰さんも！ 聞いてますー！？」

山田先生が必死に叫ぶも、どうやら春馬と鈴は無視を決め込んだらしい。最後に山田先生の通信に返事をしたのが確か5分前だったから、もう5分間くらい叫んでいることになる。絶対喉を枯らすな山田先生。

「本人達がやると言っているのだから、やらせてもいいだろう。春馬^{やっ}のことだ。何も策を考えていないわけでもあるまい。だが……」

そこまで言って千冬姉が言葉を切る。その視線につられて俺もリアルタイムモニターを見ると、そこにはもう5度目になる攻撃をかわされて回避に集中している春馬と鈴の姿が写っている。

誰がどう見ても劣勢だった。

「千冬姉！ なら俺を、俺を春馬達のところに行かせてくれ！」

「そうしたいところでもあるが、 これを見る」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。それは様々な数値がグラフのように並んでおり、『第2アリーナのステータスチェック』という表示に気づかなければワケが分からない物だった。

「遮断シールドがレベル4に設定！？ 隔壁も全てロックされて……。あのISの仕業ですの！？」

「レベル4つて 要するに入れないってことか？」

「そうだ。避難すること、救援に向かうことも出来ない」

実に落ち着いたような調子で話す千冬姉だが、俺の目にはしっかりと苛立ちを滲ませるようにせわしく画面を叩いているのを捉えていた。

「で、でしたら！ エマージェンシー 緊急事態として政府に助勢を」

「やっている。現在も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

ついに言葉の端々に苛立たしさを込め始めた千冬姉の眉がピクツと動く。まずい、今の千冬姉に逆える気がしない。でも、今の瞬間にも春馬や鈴は窮地に立たされているのは火を見るより明らかだ。このまま放っておくなんてこと、俺は出来ない。

「一夏っ！ どこへ行くつもりだ！」

出口へと駆け出した俺に気づいた筈がよく通る声で呼び止めた。俺ははやる気持ちを抑えながら、とりあえず今からする目的だけを簡潔に話しておく。

「春馬と鈴のところに行く！ 戦力は多い方がいいだろ！」

「ならわたくしも！ すぐにも出撃する準備は整っていますわ！」

「いや、お前達はここに居ろ。遮断シールドを解除したとしても、突入隊に入れることはないから案ずるな」

千冬姉の口から出た言葉に、思わず怒鳴りそうになる。しかしその役は先にセシリアが獲られてしまった。

「な、なんですって！？ 先ほどの一夏さんの案は妥当のはずですわ！」

「今の織斑の実力では戦力にすらならん。せいぜい足手まといになるだけだ。それにオルコット、お前のISの装備は1対多向きだ。多対1では、むしろ邪魔になる」

「そんなことない！ 俺はあれからISの特訓をして」

「ではその特訓で連携訓練はしたか？ その時のお前の役割は？ 零落白夜をどのタイミングで使う？ 味方の構成は？ 敵はどのレベルを想定してある？」

「わ、分かった！ 俺の考えが甘かったよ……」

「ふん、まだ自分のことで精一杯のお前が他者の心配をするんじゃない」

出口へと向けていた足並みを、煮え切らない思いで元居たベンチの傍まで向ける。こういう時に言い返せない自分が情けない。セシリアも同じような気持ちなのか、悔しそうな表情を浮かべた後に深い溜息を吐いていた。

「春馬……」

今の俺には、こうしてリアルタイムモニターに穴が開くほどに春

馬達の動きを目で追うことしか出来なかった。

「ああっクソ！ ビーム怖エんだよバカ野郎！」

無人ISは俺達の攻撃をのりくらりとかわし、隙を見つけるやいなやその高威力のビーム砲撃をかましてくる。ひじょーに厄介な相手だった。

「春馬、上！」

「えっ、ぐあ！」

鈴の指す方向を見るが、少し遅かった。無人ISが力任せに振り下ろしたチョップを喰らい、姿勢を制御できないまま地面へと叩きつけられる。

一瞬意識がブラックアウトしかけるが、『カラムティ』がそれを強引に引つ張り上げて阻止する。ティナとの模擬戦から何度も経験してるが、慣れるなんて無理だな。口に入った砂利を吐き捨て、無人ISを見やる。

「インファイト白兵戦もできますよ……と」

「馬鹿言っでないで、離脱！」

俺は地表に叩きつけられた衝撃でクラクラする頭を無理やり働かせて、その場から回避する。案の定俺が元居たそこにビーム砲撃が撃ち込まれ、爆音と砂煙を撒き散らす。

これで攻撃に失敗したのは8回目。残る無人ISの攻略パターンは18通りだ。でもそれを満足にこなせるほど、俺たちの体力とシールドエネルギーは残っていない。

「鈴、エネルギー残量は？」

「220つとところ。ちょっと厳しいわね……、このままの火力でアイツのシールドを突破して機能停止ダウンさせるのは、確立的に一桁台じゃない？」

「まあな。今の俺と鈴の体力とシールドエネルギーから計算して、残り18通りある攻略パターンも成功率が9%以下に落ちてる」

このままじゃまず、防御が薄い俺が初めに落とされる。『カラミティ』は短期決戦用のISだ。持久戦に持ち込まれると攻撃の要であるCLBの特性が裏目に出始める。今だってCLBの稼動限界時間は、

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は12秒です』

この通りだ。次に使うとしたら必ず仕留めなくてはいけない。そこで仕留め損なったらゲームオーバー。シールドエネルギーが無い丸腰の俺は、あのバカ威力のレーザー砲撃を喰らって丸焼きだ。

……そろそろ大詰めだな。この話題を振ろう。あくまで“今気づいた”という風を装って。

「なあ、鈴。あのISの機動を観察してて思ったんだが、機械じみて感じないか？」

「こんな時に何よ？ ISは機械じゃない」

「あーいや、そうじゃなくて。あれは本当に人が動かしている様に見えるか、と聞きたかったんだ」

「は？ 人が乗らなきゃISは起動しない」

と、そこまで言った鈴が俺の言葉の意味に気づいてくれたらしく、そこで言葉が止まる。鈴は少し考えるような素振りを見せると、小さく首を振ってからその考えから出た可能性を否定する。

「うつん、でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶

対に動かない。そういうものだもの」

俺の『カラムティ』も、俺が乗るまでは絶対に起動しなかった。それは鈴が言った言葉を証明するに足りえる事だろう。でも“そんな常識を覆せる技術”があつたとしたら？

科学は常に進歩している。このISがその確固たる証拠だ。俺の両親はそんなことを研究するような人ではないが、この世界には俺の両親のような研究者ばかりとは限らない。

ありえないことはありえない。つもりはそういうことだ。

「あれが無人機だと仮定する。そうすると新しいパターンが出来るんだが、どうだ？」

「何よ、そのパターンなら勝てるって言うの？」

「ああ、少なくとも他のパターンよりかは随分とマシだぜ」

そう言つて俺はミストラルmk？の展開を解く。そして、開幕戦オープニングマッチの出撃前に確認した違和感の招待を呼び出す。コール

それはIS一機の大きさと並べてみても見劣りしない、長大にして巨大な大剣だった。その刃はミストラルmk？と同じくエネルギー循環刃だが、あれとは違って両刃剣で厚さも一回り大きかった。

「母さんが新しく作った武装なんだと。名称はテンペストなまえ」

「それなら勝てるっていうの？ あんなに避けられてたのに」

「当たるさ、必ず当てる」

俺はそのミストラルmk？とは格段に違っずっしりとした手ごたえを胸に、無人ISに向けて構えをとる。

「……時々春馬は頭が良いのか悪いのか分からなくなるわ」

そういつて鈴も自分の得物、双天牙月を軽く振ってから構える。

鈴なりの気合の入れ方なのだろう。その目には再び戦う意思が灯る。

「構えてるとこ悪いが鈴は龍咆を撃っていてくれ！ まんべんなくなっ」

「えっ、ちよつと！ ああもう、撃てば良いんでしょ撃てばさあ！」

突然そう吐き捨てて飛び出した俺の後ろから、呆れたような怒っているような声が聞こえてくる。そんな声も今は推進力とするように、俺はグングンと無人ISに向けて加速する。

（砲撃の構えを取ったな、そう来てくれないと！）

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は12秒です』

「いづくぞおらあああああああー！！」

今までの回避行動で酷使したせいかボロボロになった特殊推進翼から、破裂させんばかりの赤いエネルギー粒子が舞い散る。それは紅い翼のように伸びて、俺と『カラミティ』の速度を数倍にまで跳ね上げた。

両手で持ったテンペストにもCLBの効果に移り、そのエネルギー循環刃の循環速度と効率が爆発的に上がる。そしてそんな勢いに形状を保っていらなかったのか、剣先が先へ先へと伸びていく。

「ハッ、嬉しい誤算じゃないか！」

無人ISからのビーム砲撃が放たれる。それを俺は速度を損なわないように、わずかに横にずれることで回避するが、特殊推進翼の片方を持っていかれた。シールドエネルギーを展開するのも惜しいでも、この速度ならそれももう関係ない。

「肉を切らせて」

無人ISの手前まで迫り、残った片方の特殊推進翼で無人ISの頭上へと跳躍する。^{ジャンプ}それを打ち落とそうと無人ISが腕を振り上げるが、それを鈴が放った衝撃砲が阻止した。

「骨を断アアアアアアアアアッ！！」

その大きく鋭い、嵐のように荒れ狂う凶刃を無人ISに振り下ろす。

金属が引き裂かれる甲高い音を響き渡らせながら、テンペストが無人ISの装甲を^{ボディ}袈裟斬りに切り離れた。

無人ISが、膝からゆっくりと後ろに倒れこんでいく。

その時の反動で横から飛んできた、無尽ISの拳は予想していなかったが。

「づあつ!？」

そのまま俺は成す術もなく殴り飛ばされ、ゴム毬のように地表を数回転がってから止まった。半ばクロスカウンターみたいになつてしまったが、アレだけ盛大にぶった斬つたんだ。これで所属不明機事件はお終い

「春馬ツ! アイツまだ動いてる!」

「なつ、嘘だろ!? カラミティ!」

『シールドエネルギー残量0。行動不能。著しいシステム損傷により、機能停止します』

俺の無茶な行動が祟^{たた}つたのか、『カラミティ』の機能がすべて停止^{ウト}してしまった。まずい、アイツの砲口は、こちらに向いているというのに

一夏の時のようにセシリアの狙撃は恐らく来ない。あるとしたら俺はすでにセシリアがアリーナに待機していることに気づいているはずだからだ。

一夏本人が来る可能性も同じ。千冬さんに説き伏せられた後、俺のこの有様を見て今更に出撃じゃどちらにせよ間に合わない。

鈴とも随分と離れてしまっている。『カラミティ』ならともかく安定と効率をコンセプトにした『甲龍^{シエンロン}』の速度^{スピード}じゃ間に合いそうもない。

『カラムティ』の生命維持装置も、あの砲撃じゃ役に立たないだろう。人間は全身の内半分を火傷しただけでも助かる確率は低い。ましてやそれが全部だとしたらまず助からない。

「なんだ、随分と早い幕引きだな……」

目の前で収束していく光が、段々とゆっくりに、鮮明になっていく。うわ、本当にお終いかよ。ついてないなあ。これならテンペストを最初から使っておくべきだったか。

「春馬ッ！ 春馬アアアアアアアッ！」

オープン・チャネル
解放回線からではない、俺の鼓膜を直接震わして鈴の悲壮な叫び声が響く。

うるさいぜ、鈴。まったく、最後まで静かにしてくれよ。

そしてその声も、俺の視界もろとも白い光りが塗りつぶして行き

「うおおおおおおおおおおー!!」

その塗りつぶされた白の中に、さらに純白の何かが飛び込んでくる。

光の刃が、その白の世界を切り裂く

体が、重い。

俺は死んだのか？ それとも助かったのか？ 出来れば後者であつて欲しいなと思う。死ねば、またあの神と顔を合わすだろう。あれ、それはもう無いんだっけ？

「春馬……」

ん、なんだろう。随分と近くに鈴の声が聞こえる。とりあえず鈴の声が聞こえるということは生きているということではないのか？ 何にせよ、良かった。

さて、何か呼ばれてるみたいだし、返事をしてやらないと。俺はカラカラに乾いて固まった口を何とか開いて言葉を發した。

「……鈴？」

「っ！？」

そして重い脛を何とか押し上げて、声のする方を向く。までも無かった。鼻先3cmほどにその目的の人物の顔があつたのだから。つか体が重い原因はお前が俺の体によっかかっているせいかな。納得。

「どうしたー鈴……。あー、なんか頭がボーっとするな」

「お、おおお起きてるなら最初から言いなさいよっ馬鹿！」

鈴は瞬間移動でもするかのように俺の顔から離れ、脇にあっただらしいパイプ椅子に座る。

いや、それは無理難題ですよ鈴さん。今さっき起きたばかりの俺にそんな行動は取れないって。というか、ここは医務室か？ ベッドに寝かされてるし。

「生きてる……んだよな、俺。やったー生きてるぞー」

「言葉の意味とは裏腹に嬉々とした感情が伝わって来ないわよ……はあ」

だってさ、声を出すと頭に響いて痛いんだぜ？ 叫びたくても叫べない俺の気持ちは分かりますまい。

「あの時、ISの絶対防御を切ってたんでしょ？ なんでそんな特攻みたいなこと……」

「それでもしないと、CLBが12秒しか持たなかったからな。途中で攻撃も食らっちゃったし、それでもしないとエネルギーが足りなかったんだよ」

あの時はアドレナリンが溢れていたせいかなそんなに危ないとは思わなかったが、落ち着いた今思い返してみると結構命知らずなことをしてたな。俺は。

「……あのISは、どうなったんだ？」

「春馬が動けなくなった時一夏がアンタとあのISの間に割って入った。文字通りビームを斬り裂いて春馬が入れた“切れ込み”をもう一度斬って、それで終い。今は先生達がアリーナに残ったISを回収して調べてる」

「それは、まあ……ご苦労なことで」

俺は今頃あのISを解析して、その解析結果に首を捻っている先生たちの姿を思い浮かべて、心の中で合掌した。

「春馬のお母さんは『カラミティ』の修理とそのISの解析に手間取ってるみたいよ。後ろで見てたけど、盛大に壊してたしねーアンタ」

「う、……それは仕方ないだろ。鈴とみんなを守るのに必死だったんだし」

母さんには迷惑をかける結果になってしまったが、それでもみんなを守ることは出来たんだ。そう思っておかないと、後で母さんにどやされた時に俺の心がもたないし。

『カラミティ』は大丈夫だろうか、流石にやりすぎた感が歪めない。あれ、ISの起動に不具合が出るのって損傷レベルいくつの時だっけ？

「で、でもあんな捨て身みたいなことしなくてもいいじゃない！……てつきり本当に死んじゃったかと思っただわよ」

「……ごめん」

鈴の言っていることは、半分合っている。あの攻撃は無人ISに当たれば必殺のはずだったものの、避けられてしまうと目の前で行動不能するという一か八かの攻略パターンだったのだ。

成功確立は……ま、結果的に倒せたと問題ないだろ。

「でもな、鈴。別に俺は死ぬ気なんてサラサラなかったさ。言うたろ？ 必ず当ててるって」

「……はあ、もういいわ。なんであたしまで疲れなきゃいけないのよ」

「とりあえず、一夏には借りが出来ちまったな……。今度なんか奢ってやるか」

このごろ俺の財布への風当たりが強い気がする。母さんも今近くにいることだし、借りてこようかなあ……。

とりあえず俺は上半身だけベッドから起こすと、すでに日が暮れて夕陽が差し込んでいる窓に背を向けて真っ直ぐに鈴の目を見る。

一夏にもそうだが、鈴にも借りが出来ちまったからな。後で色々言われる前にちゃっちゃんと俺から進言しておこう。

「鈴、今回はありがとな。お陰で助かったわ」

「な、なな何を言い出すかと思えば！ ベベ別に助けた覚えは」

鈴の声が明らかに動揺している。照れているのか、それとも俺だ

けに見せてくれているものなのか。それはまだ確定付けるには早い。

「と、とにかく！ さっさと怪我治しなさいよね！」

「ああ、分かってるさ。それでな、鈴」

いつかそれを確定付けることが出来る日が来るかも、誰も分からない。

「今度の休み、どこか遊びにでも行くか。鈴と俺で」

「え、ええ……。へ、えええええ！？」

「いや、だって借りを作ったのはお前と一夏だし。あ、この際一夏も呼んで両方チャラに」

「いいいいいや！？ あ、あたしはその……ええと、春馬と二人の……方が……」

でも、まあ

「了解。どこ行くかは俺が決めていいか？ 大してまだ駅周り見てないんだろ？ 結構変わったぜここ」

淡い期待を抱いている分には、別にいいだろう？

「ま、怪我が治っても暫くは母さんにこき使われて遊べないがな！」

俺が笑顔でそういうと、真っ赤に顔を染めた鈴の拳が俺のわき腹に突き刺さった。

くー巻くらしいー
E N D

第十九話 嵐の戯曲（後書き）

あれ、何か鈴のルートみたいになってる。おかしいなあ玉露飴です。

皆様、一応言っておくとこの二次創作は『ヒロイン複数』というタグが付いていることを忘れずに。お前もだ、作者。……はい。

次回からはついに原作2巻！ アニメでは5話辺りですね。に突入です！

ついにスポットライトが当たる五反田兄妹！ ラウラとセレナの姉妹関係の行方は！？ セレナの専用機は！？ そしてなにより、ラウラやシャル、蘭のフラグ配分は！？

ここで皆様に質問なのですが、オリジナルISについての機体設定は更新したほうが良いのでしょうか？ お待ちしております。

誤字脱字、ご意見ご感想など、こちらでも常時お待ちしております。

でわまたー ノシ

第二十話 始まり始まり（前書き）

一巻あたりが完結し、一種の燃え尽き症候群にかかっていた状態から復帰。

頑張るぞー！。

第二十話 始まり始まり

五月末、日曜日。

うららかな陽射しがIS学園の屋上を照らし、絶好の昼寝場所となった芝生の上に俺はごろんと横になる。うん、気持ちいい。これならもう3秒で眠りに落ちれる自信があるね。

転落防止用フェンスに止まっていたスズメが、可愛らしいさえずりを残して飛び去っていく。その飛影は果てしなく広がる青空へと吸い込まれていき、あっという間に溶けて消えた。

暖かい、柔らかな風が頬を撫でる。決して体を冷やすことの無い、けれどスツと爽やかなこの風の中を飛んでいたら、どんなに気分がいいだろうか。

俺はゆっくりと上半身を起こし、軽く背伸びをして眩しく輝く太陽を眺める。

あれから軽度の打撲と打ち身、鈴の過剰な看病という攻撃による精神的疲労により3日間タツプリと医務室のベッドを堪能した俺はようやくこうしてIS学園内を動けるまで快復した。

昨日まで包帯と湿布が巻かれていた両腕を見て、自然と笑みがこぼれる。

俺は守ることが出来た、この両手で。厳密に言えば一夏がケリをつけたのだが、突破口を開いた俺も十分守れたと言っていはいはずだ。頑張った、俺。えらいぞー、俺。

このまま横になっていると本当に寝てしまいそうなので、芝生に手をつけて立ち上がる。再びそよ風が吹き、暖かな空気をさらっていく。

「あー、カラミティで飛びたいなー」

「なら、さっさと修理に戻るわよ。休憩したいって言ったのはハルなんだから」

「ぐわ……。分かっていたとはいえ、やっぱりキツイな」

俺の願望は、屋上へと上ってきた昇降口の壁によっかかって缶コーヒーを飲んでいる女性によって一蹴されてしまった。

そう、今俺の専用機『アズール・カラミティ』は絶賛修復中だ。無人IS戦で受けたダメージはアーマーの損傷の他にもCLB緊急停止によるシステム負荷、想定連続運転時間を超えたために発生したエラー、CLB用の開発された馬鹿みたいに複雑な構造の特殊推進翼の半壊

などなど、挙げたらキリが無いくらいに問題が発生している。試験機だから仕方が無いとはいえ、やはり量産型の『ラファール・リヴァイブ』などの構造が簡略化されたものより遥かに修復に時間が掛かる。これは専用機に課せられた逃げられない問題でもある。

「せっかく仕上げたテンペストもうボロボロだし、特殊推進翼も片方を損失。どのくらいのお金がかかるか分かってる？」

「……ホント、すみませんでした」

「だいたいね、ハルは一つのことに集中すると周りが見えなくなるのよ。分かってる？ 研究所にいたころだってカラミティの資料作成に夢中で栄養失調になりかけたでしょ？」

「いや、それなら母さんだってアラクネのエネルギーワイヤー開発の時に脱水症状でぶっ倒れたじゃないか」

「……それは、ごめんなさい」

ちなみに俺の栄養失調は、資料作成の時間を少しでも増やすために食事の時間を短くしていたらいつのまにか飯を食わなくなっていたせいで起きた。母さんの脱水症状は同じような理由で給水をしていなかったからだ。

その時の研究所専属の医師に「本当に、親子なんですなー」と怖いくらいの笑顔で感慨深げに言われた。その時から俺と母さんは互いに一定のタイミングで「母さん、水飲んだか？」「ハルも、ご飯食べた？」と言葉を交わすようになったとさ。

父さん？ あの人には過度の睡眠不足で色々とヤバかった。それこそ栄養失調とか脱水症状なんて比にならないくらいに。そのせいで2ヶ月間入院していたのは研究所のみんなだけの内緒だ。

母さんはその事実を忘れていたのか、少し口ごもる。そしてそれを振り払うように一つ咳払いをすると、飲みきったらしい缶コーヒーの空き缶をリサイクルボックスに投げ入れた。お、ナイスシュート。

「と、ともかく！ 早くカラミティで飛びたいんでしょ？ ならー

層手伝うこと！ 分かった？」

「分かってるって。……それに鈴とのこともあるしな」

最後の部分は母さんに聞かれると色々と面倒なので小声でボソボソと呟いた。案の定母さんは気づく素振りも無くさっさと昇降口の中に消えていった。俺も後を追うとしよう。

一応一夏には俺が休んでいた3日間分のメシを奢って借りを返したことにしてもらった。命を助けてもらった割りに軽いと言われるかと思っただけで内心ビクビクしていたが、我らが一夏様は違ったな。

『そんなの当たり前だろ。それよりもう大丈夫なのか？ 何かあったら俺に言ってくれよな』

などと言ってくれたものだから、その優しさに思わず殴ってしまった。それか、それがお前のフラグ建設方法なのか！ なら、その幻想を俺がぶち殺して……いやムリか。

本当に、一夏はいい奴だなと思った瞬間だったさ。アイツなら自信を持って“親友”と言える。

「ねえハル、この学園はどんな感じ？」

「んあ？ ああ、そりゃ 楽しいさ。これ以上ないってくらいにな」

「この前みたいながあったのに？」

「そんなこと、ここの生活と比べりゃ一つのイベントでしかないさ。」

「ここでの日常ではな」

「……そう」

母さんはそう短く答えると、喋るのをやめてしまった。学園側から貸し出してもらっている母さん専用の研究室までの廊下を、お互いそれ以上喋ることも無く歩いていく。

と、その途中に予想外の人物に出くわした。

「おりよ、ハルじゃないですか。朝から見かけないと思ったらこんな所をほっつき歩いてたんですね」

「誰がほっつき歩いてた、だ。セレナこそ、休日だったのにこんなところで何をしてんだ？」

「課題で出されていた数学のプリントを、先生にわざわざ渡しにくところですよ」

廊下と階段の踊り場付近でセレナと出くわした。セレナはトコトコと下りかけていた階段から上ってくると、俺の前まで歩いてきた。ほらほらと手に持っていたプリントをヒラヒラと主張する。

「というか休日なのに制服なのな。まあ今日初めて見たってわけじゃないけど、やっぱり休日にクラスメイトが制服で過ごしていると違和感を感じるよな。」

そして俺の前を黙々と早歩きで歩いていたはずの母さんが、いつの間にか俺の隣まで戻ってきていた。怖っ！？音もなく近づくとか千冬さんかよ……。

「あれゝ？ ハル、見かけない子だね。もしかして、彼女ー？」

このこの、とわき腹を肘で小突いてくる母さんはとても悪戯そうな笑顔をしていた。本当に息子で遊ぶのが好きな人だな。父さんにもそれぐらい構ってやれよ、あの人の背中が日に日に小さくなつてく姿は同じ男として同情を禁じえないぞ。

「いや、違う違う。こいつはただのルームメイトだつて。セレナ、この人が俺の母さん、神城絆」

「……………どうも、“ただの” クラスメイトのセレナ・ボーデヴィツヒです」

あれ、なんかセレナの口調がさつきと違って素っ気無い。それに、どこかむくれたような表情をしていた。あれか、セレナって意外と人見知りだったりするのか？

少し不思議に思った後セレナから母さんに視線を移すと、今までに無いくらいに俺に向けてニヤニヤと嫌な表情を浮かべていた。うわぁ、これ絶対「いいとこ見ちゃった」ていう時の顔だよ。あの人の頭の中でどんな考えが巡ったんだか、俺には分かりそうも無い。

「セレナちゃんね……。ん、了解了解。それじゃ会ったばかりで悪いけど、ちよつと手伝ってもらってもいいかな？」

「え、……はい、構いませんけど？ じゃあ先に先生にプリントを渡してきますね」

「急がなくていいよー。それじゃハル、セレナちゃんについて行っ

てあげて」

「いいのかよ、手伝わせて。一応機密事項だろ？」

「ハル、一点集中もいいけど、たまには周りを見渡してあげなさい。新しい発見があるかもよ」

じゃね、とウインクを飛ばして廊下の向こう側に駆けて行く母さんの後姿を呆然と見つめる。なんなんだ、突然。内の母親も束さんに負けず劣らず突拍子もないことがすきだな。いや、まだ実際に束さんには会ったことないから分からないけど。

とりあえず取り残された俺とセレナで、職員室に向かうことにする。未だムスツとした表情を崩さないセレナを急かしながら職員室までの階段を上り始める。

「で、セレナ。そろそろ不機嫌な理由を教えてくださいませんか？」

いつもならペラペラと喋るセレナが今回はどうも黙ってしまった。いるため、俺はなんとかこの気まずい沈黙を破るためさっきから疑念に思っていたことを質問してみた。

下を向いて淡々と階段を下っていたセレナが顔を上げてこちらを見る。お、話題振り成功、と思った俺がバカだったなあホント。

「よくもまあそんな気安く喋りかけてこられますね。私が不機嫌？いえ、これ以上ないくらい絶好調ですよ。ええ、今すぐにも電磁投射砲をぶっ放したいくらいに、は！」

「脛ッ！？」

今この瞬間、千冬さんの関羽チョップにも負けずとも劣らない衝撃が全身を電撃よろしく走り回った。しかもそれは駆け抜けていくことはなく、足の主に脛の部分为重点的にこれでもかというくらいに周回している。

たまらずしゃがみこんでその場でもんどり打つ。ここが階段と階段の間の踊り場でよかった。もし段を上っている時にやられていたら、間違いなく転落コース一直線だった。再びあの医務室のお世話になる日は意外と近いかもしれぬ。

「通路の邪魔だ、どけ」

「こんどは頭ッ!？」

今度は、もう何回も食らってもはや馴染みまで覚えてきてしまった脳天への衝撃。もんどり打っていた俺の体はピタリと止まり、母親の腹で眠る胎児のように丸くなって痛みに耐えるために震えている。

もうそろそろ、IS学園にも一集中治療室（ICU）が必要かもしれない。後で先生に進言してみようかな。

「さ、さすがは千冬さ……先生。容赦、ないっすね」

「ああ、このごろ神城を叩いていないような気がしてな。機会に乘じさせてもらった」

「なにその理不尽極まりない理由っ！ アンタはそんな人だったのか!？」

「アンタじゃない。織斑先生だ」

パンツッ！

「先生はそんなお人柄だったでしょうかあああ……………」

「千冬教官、授業の課題を持って参りました」

「うん、了解した。そしてセレナ、私は先生と呼べと言ったはずだが？」

もはや耐えられる痛みの負荷限界を突破しぐったりとしている俺を尻目に、自然な様子でやりとりを交わす教師と生徒。これは立派にイジメって呼べると思うんだ。ダメ、ゼツタイ。

そして千冬さんは何事も無かったかのように俺たちの横を通り過ぎ、階段を降りていった。くそう、このままじゃ叩かれっぱなしだ。次からはなにか対抗策を講じなければ俺の身体が……いや、脳細胞がヤバイ。千冬さんの関羽チョップで俺の命がヤバイ。

「ほら、いつまでも寝てないで立ってください。私は絆さんの居場所が分からないんですから、そのためについてきたのでしょうか？」

「ええ、そのとうりでございますよーだ」

俺は半べそをかきながら立ち上がり、服についてしまったホコリを軽く払ってから歩き出す。セレナもそれに伴って俺の半歩下がった後ろの辺りを付かず離れずの位置で付いてきた。

なんか、日本古来の理想の夫婦の図みたいだな。

「なんで後ろについてるんだ？ 隣を歩きゃいいだろうに」

「な……！ そ、それは通行の邪魔になるじゃないですか！」

「いや、そりゃそうだけど。今日は休みだからほとんど人いないぞ？」

まあ無理にとは言わないけどな。と付け加えて俺は階段を下りきる。後はもう道のりは簡単だ。さっさと歩いていくことにしよう。

と、俺が若干歩く歩幅を広くし早足になると、後ろから懸命についてきていたセレナから声があがった。

「ちょっと、ハル、歩くの早すぎ、ですってえ！」

「お、そうか。悪い」

そういえばセレナがついて来ていたことを忘れていた。というか、やっぱり後ろに居られるとセレナがどのくらいの間隔でついて来ているのか分かりにくい。今俺が振り返ったら、結構な距離が開いてしまっていたし。

「やっぱ隣歩いてくれよ。そしたら俺がセレナのペースに合わせられるからさ」

「む、そんな気遣い、無用です。私を、ナメないで、ください」

「いや、そんな息が上がりながら言われても説得力ないからな」

とりあえずセレナの呼吸が落ち着くまで待つて、再び歩き出す。
と、やはりというかなんというかセレナはまた俺の斜め後ろについてしまった。

ああ、なんかもうまだるっこしいな。こうなれば、強行手段だぜ。

俺は歩いていた足をピタッと止め、セレナがそれに合わせて止まるのを確認するまでもなくその手をとって、俺の隣へと引っ張ってきた。

うし、いささか強引ではあったがこれでペースアップが図れるぜ。
と、若干苛立っていた心がスッキリしたのを感じるた後、何回目が分からない再出発をしようとして。

繋いだままの手に引かれて止まってしまった。

「……セレナ？」

「ッ！？ な、何かあったハル！？」

「いや、歩こうよ。もうすぐそこだし」

「あ、は、ふあいつ！」

なぜかもうこれ以上ないくらい顔を真っ赤に染め上げたセレナは、
いっぱいいっぱいのような返事を返すとすぐに歩き出す。それは初
め早歩きだったが、段々と速度が下がってようやく普段と同じ足取
りになった。

やっぱりすこし強引すぎたか？ 俺がちょっと苛立っていたから
やっちゃったとは言え、年頃の女の子の手を急にとったことは失礼
だったかもしれない。

ならばさっさと離れたほうが良さそうだな。と思って手に入れて
いた力を放すが、その手から温かい感触が消えることはなかった。
むしろ熱いくらいかもしれない。

「手、繋いじやった……」

「おい、セレナどうしたんだ？ 手がすごい熱いんだけど？」

「な、なんでもないですっ！ と、というかいつまで手握ってんで
すか！」

ようやく俺の手がセレナの手から解放される。というかセレナさ
ん貴女がいままで離そうとしなかったんじゃないですか？

そしてなんで離れた後に若干寂しそうな表情になるんだよ。……
本当に女の子ってわっかんないなあ。

「ああゝもう！ 走るぞ、セレナ！」

「わあっ!？」

なぜか寂しそうな顔をしたセレナを見ていてどうしようもない罪
悪感に襲われたので、時間的にも精神的にも追い詰められた俺は走
ることにした。そうだ、始めから走ってればよかったじゃん。なに
やってるのか俺は。

再びとったセレナの手のひらは、やはり熱かった。

「え、手伝い？ もう済んじゃったわよ」

「へ？」

無数の機材のモニタが明滅する光とそれらから発せられる熱によってサウナ状態になった母さん専用研究室（仮）の全ての窓を全開にする。このままじゃ中にいる人も機材も熱で参っちまいそうなくらい暑かったからな。

そして今、全ての窓を開け終わって母さんの所に戻ってきた俺たちを迎える言葉は、そんな母さんのストレートな物言いだった。

「セレナちゃん達来るの遅いんだもの。もともと私とハルで大変な部分は修復出来てたし、それに私には他にも優秀な側近達がいるもんね！」

「……、……………」

今、もうほとんど屍と化している母さんの下で働いている研究員達が返事をしたような気がしたが、サーバーが動く音によってかき消されてしまった。本当に虫の音なのだろう。母さん人使い荒いからなあ。ご愁傷さま。

「手伝いとは、何かの修理だったのですか？」

「そ。ハルのカラミティの修復をちーっと手伝ってもらおうと思っただけだけど、ごめんね？」

「な……、いえいえ。そんなことは」

セレナもまさか他国のISの修復なんて重要機密レベルの出来事に軽く付き合わされるなんて思っていなかったのか、呆気に取られてしまっている。ま、こういう性分なんだよね母さんは。

自分が好きなことに思う存分打ち込む。それさえクリアできれば他の事が目に入らないから、こうやって本来なら考えられない『他国に技術をばらすような真似』をするのだ。本人はいたって無自覚、天然の犯行なのだが。

「じゃ、その机にカラミティを待機状態にしといたから、持っていて。私も少し眠るわ」

「ああ、お休み」

「ん」

俺の言葉に小さく首肯すると、すぐに静かな寝息が聞こえ始めた。これもいつもの通り、母さんや父さん共通の行動だ。こうして眠りについた母さんと父さんはいくら起こしても目は覚まさない。一回死んだんじゃないかと思って鼻と口を塞いでみたことがあったが、その時は二人にむせながら怒られた。

「すまん、こんな親で。迷惑だったら謝るよ」

「いえ、そんなことは。いいお母さんじゃないですか」

「……まあな。こんな人だけど、なぜかそう思えるよ」

待機状態のカラミティを腕に通し、一通り見た目に異状がないか確かめた後にセレナの方を向く。そこにはなんとも言えないような表情で、静かに寝息を立てて眠っている母さんを見つめるセレナの姿があった。

「お母さん、か」

セレナはそう一言呟いてさっさとその場から去っていった。その背中はとても寂しそうでもいつもより小さく見えたが、今の俺にどんな表情をみせたセレナに掛ける言葉は持ち合わせていなかった。

まるで泣き出しそうな、痛みに耐えるような、そんな表情だった。

俺は母さんに毛布を掛けた後、セレナとは別の方向の出入り口から研究所を出る。すでに太陽は西に傾いており、陽射しも白く輝いていた昼のものから赤く燃えるような夕方のもに変わり始めている。

「……ボーデヴィツヒ、か」

俺はその夕陽に向かって待機状態となっているカラミティをはめた右腕を突き出し、太陽を掴むように手を握る。

無人ISが終わった後に待っているのは、憎悪に駆られ周りが見えなくなってしまった少女と、企業という家柄に振り回されても逃れることが出来ない少女。

「掛かって来いよ。こっちはもう準備できてるぜ？」

なあ、そうだろ？ 一夏。

第二十話 始まり始まり（後書き）

セレナと春馬がイチヤイチャする話です。あとお母さん。どうも玉露飴です。

この話から二巻目、“二巻あたり”開始！ 頑張ります！

誤字脱字、ご意見ご感想を随時お待ちしておりますよっ！

でわまたゝ ノシ

第二十一話 シリアスは、まだ早い（前書き）

地震発生直前に書き上げていたものです。

次話更新は地震が落ち着いてからになるかもです。

第二十一話 シリアスは、まだ早い

「そついえば母さん、この後はアメリカに帰るのか？」

「そつねえ、新しい試作ISの開発も任せられちゃったし。そうなるわね」

手荷物のトランクの金属探知機によるチェックの順番が回ってくるまでの間を埋めるため、俺は母さんに話題を振ってみた。

今俺と母さんが居るのは空港、俺とティナがIS学園に来る時に降り立ったあの空港だ。ロビーで銀髪少女に遠慮なく跳ね飛ばされた記憶も、今思えば懐かしく感じられる。

俺の用は無論、予測不能の事態のせいで中止になったクラス対抗戦^{ツチ}をデータ収集、もとい観戦しにきていた母さんの帰国を見送るところだ。もつとも、母さんは各国のISデータ収集はできずに、俺の無茶な戦闘に付き合わされて中破したカラミティの修復作業を行うという目的に変わってしまったが。

その点に関しては、まあ申し訳ないなと感じております。

「新しい試作IS？ アメリカはまあ頑張ってるのな」

「本当、実際に作る研究員^{リサーチ}の声なんてそつちのけで。言うだけの方は気楽で良いわよねー」

「試作ISなんて、俺のカラミティがあるじゃないか。なんでまた

？」

そう、今俺の手首にはアメリカの技術の粋^{すい}を集めて開発された最速のIS『アズール・カラミティ』が待機状態で収まっている。それにさらに試作ISを開発するなんて、とてもじゃないが非効率的だ。

開発費も馬鹿にならないし、それに関わる研究員、開発者、設計者などの人件費。それを行う研究所や、さらにそれを警備するための人件費。神城絆（母さん）という篠ノ之東博士に次ぐ天才研究員がいるアドバンテージを含めて考えたとしても、全く理解できない。

そうして俺がうんうんと唸って答えを求めて脳細胞を働かせていると、そんな思案に暮れる俺の様子がおかしかったのか母さんはクスツと笑って、答えを提示してくれた。

「【第三世代型量産化計画】、通称【セイヴィア計画】。一応は国家機密なんだから、ナイショにしてね」

「国家機密って、おいおい……。こんなトコで言っているのかよ」

母さんも一応は他者には聞こえないようにヒソヒソ声で俺に耳打ちしてきたが、その顔は内緒話を楽しむ子供のように笑顔だった。政府もこんな人にそんな大層なことを任せるんだから、心配で仕方がないだろうな。

それにしても、だ。その【セイヴィア計画】というバックがあったとしても、何か腑に落ちない。もっとこう、何か大切なことを忘れているような

あ、分かった。もしかして、もしかすると。

「母さん、その試作ISの名前とか愛称とかって決まってる？」

「え、ええ決まってるわよ。確か『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルだったかな。広域殲滅を目的とした、『セイヴィア計画』の足がかりとなるISね」

めまい
眩暈がした。まさか、『アラクネ』もそうだったけど、『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルまで手がけていたなんて。どんだけ規格外なんだよ、母さん。

いや、まだ篠ノ之束博士の方がおかしいに違いない。そう俺は信じている。

「で、でもそれって共同開発じゃなかったっけ？ アメリカとイスラエルの」

「共同開発？ そんな話は聞いてないよ。それにしても、今は内戦が大分落ち着いてきたイスラエルとの共同開発か。内戦鎮圧にアメリカも結構出資したし、借りを返させる意味では中々いい考えね」

「え、い、いやあ、それほどでも」

なんか分かんが感心されてしまった、ってそうじゃなくってだな。

「開発費もワリカンして、ISパイロットをアメリカ人にすればもう開発し放題で実質アメリカのISってワケね。やるなあーハル、この腹黒め」

「腹黒は余計だ。それよりも、本当に母さんが『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルを開発

してるのか？」

「だからそう言ってるじゃない。あ、やっと順番が回ってきたね、ハル、トランク持って」

その母さんの言葉でハツと我に返る。あ、そうだった。母さんが
シルバリオ・ゴスベル
『銀の福音』を開発しているって言うからすっかり自分の居る状況がすっぱ抜けてしまっていたらしい。

俺はまだ聞きたいことを喉の奥に飲み込み、母さんの方をみながらトランクを金属探知機をかねているベルトコンベアの上に乗せる。この後は搭乗者待機のロビーまで移動して、アメリカ行きのを待つだけだ。

ベルトコンベアに母さんの荷物のトランクを乗せた後、移動用のスロープに掴まりながら先の話を掘り返す。これは思っていないチヤンスだからだ。やはり原作知識と相違しているものの、情報があるのと無いのではやはりその時に対しての対策が立てやすい。

よって俺は、母さんから聞けるだけの情報を聞き出すことにする。
アンソウン
所属不明機のことに関しても、それとなく。

「あの手長エビエスのこと？ ふふん、さあだろうね。分かっている、これは流石にハルでも言えないわ。」

あっさり撃沈してしまった、まあそうだろうな。鈴も言っていたが、なんせ本来エスは人が乗らないと動かない機械だ。搭乗者と一緒に成長すると言っても、植物だって太陽が無ければ枯れてしまうのと同じだ。最初は芽が出たとしても、白く弱い茎では自身を支えることも出来ない。

アンノウン
所属不明機のことを聞き出すのは諦めて、先に言っていた聞き捨てならない計画の情報を求めてみた。

「まあそっちはいいかな。ハルも少なからず協力してるからね」

「協力？ 俺が？」

「まーまー落ち着いて。あ、足元をつけてね」

俺は母さんの言葉に反射的に反応し、足元に迫っていた段差を回避する。ちょうどスロープの終わりまで乗っていたようだ。速やかに次のスロープに移動して、話の続きを促す。

「『アズール・カラムיתי』のその驚異的な速度と運動性、そしてCLBはともじゃないけれど他のISでは搭載は不可能。これは前に言ったよね」

「ああ、俺がカラムיתיの一次移行を済ましてから出たデータを集めて計算した結果だっけか」

通常のブーストは従来の第三世代型ISの瞬間加速にも負けずとも劣らない速度を持ち、そんな速さを制御し、標的に正確な銃撃をするための運動性。ISのシステムに高負荷がかかるCLBなど、とてもじゃないがアメリカが現在保有しているISに、転用など不可能なものばかりだった。

だからこのじゃじゃ馬ともピーキーとも言えるIS『アズール・カラムיתי』は神城春馬という代表候補生と共にIS学園に託され、ひとまずはデータ収集に努めることになったのだ。

「間違いなくカラミティは全ISで最速。でも、そんな速さを実現しているのは何のお陰だと思う？」

「……まさか、特殊推進翼が？」

「そうー正解、CLBもあの推進翼が頑張っているお陰で成せる技なの。ここ重要」

そういつて母さんは右手の人差し指をピツと立てる。なんか段々ノリノリになってきてないか？

「でも特殊推進翼はあのままのスペックで量産するのは不可能。なにせ構造が複雑だから。でも、我々人類には素晴らしい技術があるのよ」

「一部の機能の簡略化、もしくは破棄だろ？」

「そ、また正解。これで特殊推進翼の量産の目処が立ったわよね？」

「ああ、そうなるな……。え？」

俺は驚きのあまり、その大変な事象に気づくのにワンテンポずれてしまった。それってまさか、劣化版カラミティがいつでも作れるということなのか？

ここでまたスロープが途切れ、俺たちは動かない空港の床に降り立つ。しかし今度は次のスロープには乗らずにそのまま傍にあった長椅子のフロアに向かった。ここの近くに母さんの乗るアメリカ行きの便の搭乗口があるのだ。

何台もある長椅子の内が一番搭乗口に近い椅子に腰掛ける。母さんは軽く回りを見渡してから、話題を再開した。

「といつても、ここで『アズール・カラミティ』の量産をしてもなんのメリットもないの。したとしてもそれは少し早くてエネルギー効率が極端に悪い、欠陥機だからね」

「だから『銀の福音』^{シルバリオ・ゴスベル}なのか。特殊推進翼を組み込んだ『アズール・カラミティ』の変異型として開発するために」

「そうね、そうともとれる。でも本質はそこじゃないの」

ここからはアメリカの国家機密だからねーと、母さんは対して無駄話をするような、軽い態度で一応な釘を刺す。まあ俺は誰かに喋るうなんて思っていないからいいけどさ。

「さっきも言った【セイヴィア計画】は、二つの『柱』に支えられて進行してる。一つの『柱』はさっきも言った私が今開発してる試作IS『銀の福音』^{シルバリオ・ゴスベル}。それでもう一つの『柱』が」

「特殊推進翼、か」

「そう。簡易型CLBを可能とした、第三世代型量産機。それが【セイヴィア計画】の目的よ」

後付武装^{サハヤリコ}による多目的運用、量産機ならではのコストパフォーマンス。そして人知を超える性能を持ったCLBの使用。おそらく今まで世界で運用されてきた量産機では、歯が立たないこと必至だろう。

CLBはシールドエネルギーを消費し、攻撃用のエネルギーに転化させる。『アズール・カラミティ』はその恩恵を存分に受けていると言っているだろう。ミストラルmk？やテンペストのエネルギー循環刃の循環速度、効率は爆発的に上がり、先日アンソウンの所属不明機戦ではテンペストの循環刃が巨大化するという副産物を生んだ。

これは『アズール・カラミティ』が近接武器を主に使用しているから得られたものだ。これが電磁レールガン投射砲やプラズマ砲など攻撃用のエネルギーを使用する遠距離武器に作用すれば、それは脅威以外の何者でもない。

出力は何倍にも増し、射程距離、初速度なども上がるだろう。それが量産できるなんて……。

「なんか、世界征服できそうな勢いだな。こりゃ」

「世界征服ねえ。それは、篠ノ之博士が居ることを含めて考えた結果？」

「……そうでした、忘れてたよ」

あのビツクリ博士なら、そんな化け物ISを簡単に制圧できるISとか開発しそうだな。それも楽々と。俺はそんなイメージが簡単に浮かんだので、思わず頬を引きつりながら苦笑した。

ちょうどよく、アメリカ行きの便が搭乗者受付を開始したようだ。よく響くアナウンスがロビー全体に響き渡り、周りに座っていた同じく便に乗るらしい人達が立ち上がり、搭乗口に列を成していく。

「さて、だいぶ話も終えたし、私は行くわ」

「ああ、疲れてるところありがとな、母さん」

立ち上がった母さんに合わせて、自然と俺の腰も上げる。情報を提供してくれた御礼としてはあれだが、しっかりと礼の言葉を告げた。人に世話になったらお礼を言うのは常識だしな。

「構わないわよ、お礼なんて。だって、ハルと私は家族じゃない？」

そんな、不意を突くような言葉が飛んでくるとは思ってもいなかったが。

「……本当にスイマセンでした」

「うるさい、このマザコン」

只今現在、俺こと神城春馬はご機嫌斜めなお姫様……もとい、小学校からの友達である凰鈴音フアン・リンインの後ろをよろよろと危ない足取りで歩いている。

別に風邪をひいて頭が痛くてふらついているわけじゃない。確かに色んな意味で頭は痛いが、そんな内動的なことではなく、もっと外動的なことでふらついている。

正直言おう、前が見えない。

手に持った箱という箱で前が全くもって見えないのだ。大小に形が様々に包装された商品を両手で抱え、その両腕にはさらにビニール袋や紙袋がこれでもかというほどにぶら下がっている。俺はそんな状況でなんとかバランスをとり、手に持っているカラフルなピサの斜塔が崩れぬよう歩いているのだ。それも目隠し同然の状態で。

なあすごいだろ、すごいと言ってくれ鈴。

「あ、こっちも新しいお店がある！ ほら春馬遅いわよ！」

「ちよっ……おまつ……まだ回るのかっ……」

「当たり前じゃない。女の子との約束を放って母親の見送りに行くなんて、罰を受けてトーゼンよ」

「ちくせう……」

これで何件目だろうか、いや、もう数えるのも億劫だ。考えないようにしようと俺は折れそうな心に決めて、少し早めた歩みで鈴に何とか追いつこうと試みた。

前に俺は鈴と「駅周りを一緒に見る」という約束をしていたのだが、カラミティの修復の協力やら事件時の山田先生の指示を無視したことに關する反省文やらその他ＩＳの絶対防御を一時的に切ったことへの各先生の説教＆反省文で、時間が全くとっていいほど取れなかったのだ。

千冬さんには「詰めが甘いな」と言われ、一夏には「頑張れよ」と励まされ、篤さんには「己が招いた結果だ」と冷たくあしらわれ、セシリアには「まあ、仕方ないことですわね」と呆れられ、セレナには「バーカ、ハルのバーカ」と罵られた。

無論、最後の方のヤツには拳骨で頭グリグリの刑で報復したが。逃げたとしても住んでいる部屋は一緒なのだから捕まえることに障害はなかったし。

そして今日ようやく訪れた日本全国共通の休み、日曜日。そこに母さんの帰国が重なったせいで俺はそんな『忘れたらヤバそうな』鈴との約束をすっかり記憶から抜け落ちてしまっていたのでした。ちゃんちゃん。

「はいこれ、ちゃっちゃと持ってよね。時間は有限なんだから」

「ちょっと待て、まだ回るつもりなのか？　　というかそ流石にそんな駅周りに新しい店は増えていないはずなんだが……」

俺が半ば仰け反るようにして持っているピサの斜塔の頂上に、鈴はその新しく買ってきた物を器用に投げて乗せた。もちろん、その買ってきた物のお金は俺の財布から出ている。

「男は女と出かける時、決して荷物を持たせずお金も男が払う。それが甲斐性つてもものよ」とは鈴の言葉。甲斐性と言われてはこちらも首を横に振るわけにもいかず、こうして理不尽な出資と労働を課せられているというわけだ。

チラッと、目の前の包装の壁から周りの景色を見やる。

明らか異様な今の俺のこの状態を見ても、横を通りすぎていく人々は何も言ってこないし、ましてや、「それが当然」というような目線でさえ見られるほどだ。これが、現代男子の扱いである。納得なんて、さらさら出来ないが。

道端を歩けば突然女性に「奢れ」と言われるご時世なのだ。それを断れば勝手にセクハラを犯したと通報され、容赦なく逮捕される。治安なんて言葉は女性にだけ適用されるものに昇華してしまったらしい。

鈴はそんなことはしないが、今は大分似通った状況だ。男性から同情の目線で見られるのが唯一の救いだったりする。

「仕方ないじゃない。春馬の財布の中身、中々カラにならないんだ

もの」

「そりゃ生活費を全部財布に入れてますからねえ！　って何してんのおー！？」

「あ、そうだったんだ。そりゃあれだけ入ってたワケね」

納得したかのような声をあげると、鈴が居る方から再び足音が聞こえてきた。またどこかの店に寄るつもりだろうか。そうなれば、俺が危ない。体力的にも、なにより財布の中身的にも。

ということで、俺はダメもとで次の移動先を提案することにした。あそこなら安く済みそうだし、なによりそろそろそんな時間だ。旧友との再会も望める。

「なあ、鈴。腹へって来てないか？」

「そうねえ、結構歩いたし。じゃ、あそこのお店で」

「いや、俺おいしいところ知ってるから、そこに行くぞ！　さあ、ほら、すぐっ！」

両手が荷物でふさがっている状態では鈴の手を引っ張っていくことは出来ないが、その荷物を今持っているのは俺だ。そのアドバンテージを生かして俺はそのまま鈴が進む方向とは別の道のりを歩いていく。

「あ、ちよつと！　あたしの荷物もって勝手に動かないでよね！」

案の定、自分の荷物を追ってついて来たようだ。このままついて

来るがいい、何者でもない、俺の財布のために！

「アンタの財布の中身、本当に使い切っちゃうわよー！」

しまった、そんな人質があつたとは……。

* * *

「……で、なんでここが『おいしいお店』なのよ」

「スイマセン、正直もう辛かったんですハイ」

余りある荷物を座った横になるべく他の人の邪魔にならないように置いた後、俺は綺麗に土下座した。もちろん相手は鈴である。

その鈴方はハアッと疲れたような諦めたような意味を感じとれそうな溜息を吐き出すと、そのまま静かに席に着いた。以外だな、もうちょっと殴る蹴るとかあるかなあと覚悟してたのに。

というか鈴、実際ここは『おいしいお店』だろ。少なくとも俺はそう思っている。

「あれ、春馬さん？ それに鈴さんも」

ようやく土下座状態から解放された俺が席に着くと、注文を取りに来た店員が驚きの声をあげた。そりゃまあ驚くか。何も連絡なんて入れて無かったのだから。

「おっすー蘭ちゃん。久しぶりー」

「え、ああはい……って、ええ？ どういうこと？」

どうやら当の本人、店の手伝いをしているらしい五反田蘭ごたんだらんは、突然現れた俺達のせいで混乱してしまったようだ。手に持った注文表と鉛筆を頭に当てて、グルグルと目を回してしまっている。

まあ、この手の処理も面倒になってきたし、試しに放置して進めてみよう。

「鈴は注文どうする？ 俺はやっぱり業火野菜炒め定食にしようと思っただが」

「あたしもそれでいいわよ？ それより、これ放っておいていいの？ 注文聞いている風には見えないんだけど……」

しまった、混乱しているところに注文言っても無駄じゃないか。結果、人が混乱している時は速やかに処置すべしと。また俺は成長した……。

「悪い悪い、驚かせたな。訳あって帰ってきたんだよ、だからまずは落ち着けて」

「ああ……ハイ。まだよく分かってないですけど、そうします」

フラフラと倒れそうになっていた蘭ちゃんが、テーブルに手をつけてようやく落ち着く。さっと手に持っていた注文表と鉛筆を持ち直す、それでもやはり気になるようだ。

それにしても、昔とあまり変わらないなあ彼女は。頭の大きいヘアバンドのせいかもしれないが、ラフな格好から窺える雰囲気も、そのまま大きくしましたって感じた。

「鈴さんも、お久しぶりです」

「ああ、そうね。久しぶり、元気してた？」

「おかげさまで。で、注文はどうします？」

やっぱり聞いていなかったらしい。まあ当然と言えば当然か。俺は再び注文の品の名前を口にする、注文表に書き記した蘭ちゃんはそのまま腑に落ちないような表情で厨房の方へ下がっていった。

そういえば軽くスルーしてたけど、蘭と鈴の仲がそれほど悪くないみたいだな。やはり恋敵という間柄がない状態では、普通の友達として接していけるようだ。一夏を賭けて火花を散らす2人が見れないのはそれはそれで残念だが、こうして仲良くしているのを見るのも、悪くない。

注文した料理が運ばれてくるのを待っている間、暇なので鈴に話題を振ってみることにした。

「なあ鈴、この後はどうするんだ？ もう回るところは無いはずなんだが……」

「うるさいマザコン」

「ぬあ、悪かったって。だからその不名誉な呼び方を改めてくれ」

頼む、と俺が両手を合わせて頼むと、鈴はしぶしぶと言った様子で首を立てに振った。良かった、公然のところでもマザコン呼ばわりは精神衛生上よろしくないからな。俺は虐められて悦ぶ人種ではない。あ、喜ぶじゃないぞ。ここ重要。

「ま、その荷物を私の部屋まで持ってきてくれたら、それでいいわ」

「……へい」

恨めしげに、俺の横に高々と積まれた荷物の山を見あげる。とうかこれを見て蘭なんにも言わなかったな。まさか、これが日常茶飯事なのか？ 解せぬ。

「はい、業火野菜炒めです……って、この荷物どうしたんですか？」

「ああ、ありがと蘭ちゃん。って、気づいてなかったのか？」

「初めに春馬さんと鈴さんに目が行ってしまったので……」

まあ、それなら仕方がないか。今まで行方知れずだった俺と、母国へ帰っていった鈴が一度に現れたら、そりゃあ周りが見えなくなるよな。一夏も同じような反応だったような気がするし。

「それで、お二人は付き合ってるんですか？」

「はあ？」「はああ!？」

おい、何か俺の反応よりすつげえ温度差を感じる声が聞こえたぞ。俺の目の前に座る人物から。あ、もうテーブルに手をつけて立ち上がってるから、俺の前の前にある席から立ち上がった人物か。

「ま、付き合ってると言ったら付き合ってるな」

そう言っただけ俺はテーブルの端にあった割り箸入れから一つ取り出し、パチッと二つに割る。ああクソ、また変に割れたか。

「え、それ本当ですか!？」

「なになに何を急に言ってるのアンタは!？　そういうのは時と場所を考えて」

「いや、付き合ってるだろう？　買い物に」

ま、実際俺が提案したから付き合っているという表現は微妙に違うんだが。ほかほかと湯気が立つご飯を片手に持って、早速野菜炒めに箸を伸ばす。うん、美味い。やっぱり美味い。

「……変わりませんね、春馬さんは」

「……期待したあたしが馬鹿だったわ」

野菜炒めとご飯を頬張り幸せに浸っている俺とは反対に、背後に

暗いオーラを纏った二名が深い深い溜息をついた。なんだよ、そんな暗い雰囲気じゃせつかく美味しい料理も不味くなっちまうぞ。

「私はお兄を呼んできますね。……鈴さん、ファイト」

「……ありがとう」

なんとも重い空気を纏いながら、鈴がゆっくりと席に座り直す。蘭もそんな意味不明な言葉を残して店の奥へと下がっていつてしまった。

「なあ、鈴。俺なんか悪いことしたか？」

「うるさいマザコン」

「何故か復活してるっ!？」

「うるさいマザコン」

「いや、そんな理不尽なことを言われても言い返しようが」

「うるさいマザコン」

「と、とりあえず飯を食おうぜ。冷めたらもったいないからな!」

「うるさいマザコン」

「……」

「うるさいマザコン」

「……」

「うるはいまさほん」

あずま は あまりの せいしん だめーじで しんでしまった
！

* * *

「……何このフルぼっこ。つか最後は食べながら言っただろ」

「うるさいマザコン」

「解せぬ」

「あれ、鈴。それに春馬も」

ついに力尽きてテーブルに伏した俺の背中から、聞きなれた声がかかった。間違えようの無い、俺の命の恩人である織斑一夏の声だ。

一夏は声をかけてもなぜか伏したままの俺の肩を叩き、どういことだと首を傾げると同時に鈴と視線があった。プイツと不機嫌そ

うに顔を背けた鈴は、黙々と目の前に置かれた業火野菜炒め定食を食べ進めていく。そこから大体のことを察したらしい一夏はおもわず苦笑いした。

「鈴、お前春馬に何したんだよ……」

「べつつにー？ ご飯たべてるだけよ」

それを一夏の横から見ていたらしい友人、五反田弾ごたんだたんが呆れ半分で聞くと、鈴はその不機嫌そうなオーラと表情のまま箸を休ませようとしなかった。いまだ突っ伏したまま復活しない春馬の定食の皿から時々野菜炒めをさらうと、それを何食わぬ顔で食べていく。

「大丈夫か、春馬」

「当分、放っておいてくれ……。あれは関羽チョップよりキツイかもしれない」

「そ、そうか」

一夏はひとまず頷くと、そのまま弾の後に付いていく。あの状態の春馬は自然治癒を待つ以外に回復方法を持たない。それまでそつとしておくのが経験則にのっとりた行動だ。

「うげ」

「ん？」

「……………」

明らかに弾がイヤそうな声を出したので、何があったと一夏は後ろから覗き見た。そこには一夏達の昼食が用意してあるテーブルがあるのだが、そこに座っている先客がいたのだ。

「なに？ 何か問題でもあるの？ あるならお兄ひとりで外で食べてもいいよ」

「聞いたか一夏。今の優しさに溢れた言葉、泣けてきちまうぜ」

先客は弾の妹、先に春馬達の注文を取っていた蘭だった。涙を拭く弾をよそに、一夏は周りの客のことを考えてとりあえず席に着く。

そこで蘭の姿がちらりと視界に入るが、そこで違和感を覚えてもう一度みる。蘭の方は一夏のそんな視線に気づいたのか、居心地が悪そうにそわそわと身なりを確認する。

「蘭さあ、着替えたの？ どっか出かける予定？」

「あつ、いえ、これは、その、ですねっ」

身なりに意識が傾いている時に一夏に声をかけられたので、蘭の思考が本日2度目のパニックを起こす。その蘭のファッションは一夏の言うとおり先ほどとは違い着飾っているように見えた。

髪はヘアバンドから下ろされて本来のロングストレートの姿を露にし、服装は6月という時期のせいか半袖のワンピース。薄手のそれを身に纏い、その裾からは十代少女特有の躍動感溢れる脚が伸びている。そしてその脚の曲線美を強調するかのように履かれた、わずかにフリルのついた黒いニーソックスがワンピースとの間にわずかな領域を作っている。

しばらくそんな蘭の姿を見て考えていた一夏は、ある答えにたどり着いて声をあげた。その頭の上で電球が回りそうなくらいな様子に、蘭は頬を紅潮させた。

「デート？」

「……」

なんとも言いがたい雰囲気、蘭の周囲に舞い降りた。誰のために着替えたかなどということを蘭は言うに言えず顔を俯かせて黙り込む。

そんな様子を見かねたのか、いまだ復活しない春馬の定食の分までしっかりと完食した鈴がガタリと席を立つと、そのまま蘭の傍まで歩みより、その肩にポンと慰めるように手を置いた。

「……蘭、ファイト」

「……ありがとうございます」

「？」

その二人の様子が分からないのか、当の本人である一夏は助けを求めて弾の方を見る。しかし、弾は呆れたような疲れたような表情で首を振るだけだった。

テーブルに置かれた一夏達の昼食であるカボチャ煮定食が、ホクホクと湯気と甘い香りを漂わせていた。

第二十一話 シリアスは、まだ早い（後書き）

私は好きです、野菜炒め。どうも玉露飴です。

にじファンを時々覗くとかならず各作者様の二次ISが更新されている程、『インフィニット・ストラトス』の二次が増えてきましたね。嬉しい限りです。

こちららも更新は遅々としたものですが、しつかり1話1話更新していく予定です。

誤字脱字、ご意見ご感想など随時お待ちしておりますよ！

でわまた ノシ

第二十二話 転校生は……まずい……（前書き）

なんだかねで更新再開。

アニメも終盤戦に差しかかり、こちらも頑張らなくては！

第二十二話 転校生は……まずい……

さて、まずは現状を確認しようか。

あの理不尽なまでに言葉の暴力という圧倒的な火力に晒された俺は、ボロボロになりながらも（メンタル的に）なんとかIS学園寮に戻ってきたのだ。

あれは本当に忌まわしい出来事だった。いや、財布的な意味で。これじゃ当分学食で選べるメニューは限定されること請け合いだ。ゲームで言う「所持金が足りません」「レベルが達していません」とかで選択した武器が灰色で暗くなっている状態だな。

まあ、生活費なんて大切なものを銀行に預けずに財布に全部ぶっこんでいた俺に非が無いわけではないのだが。それでもまさか友人に奪われて中身を抉り取るように使われるなんて、誰が予想できようか。いや、出来るわけが無い。反語表現。

もちろん鈴にはそれなりの報復を予定中だ。なぜ今すぐ実行しないかって？ そりゃアレだよ。何事にもタイミングっていうものがあつてだな……。

そんなこんなで俺はすっかり軽くなった財布を制服のポケットに押し込んで、置き勉しているお陰でこちらも軽くなった鞆を片手に引っ掛けて寮部屋を出る。

ちなみに俺はあまり朝食というものは摂らない。なんというか、食欲が湧かないのだ。前にそのことを知った一夏と篤夫妻……ゲフンげフン。一夏と篤さんに無理やり食堂に連れ込まれて食べさせら

れたこともあったっけか。

一夏は朝から夕飯みたいな量を食べるからな。ただでさえ食欲が湧かないこちらとしては、その様子を見ているだけで腹が膨れる気がする。おお、新しいダイエット方法じゃないか。別に体重なんてきにしていけないけど。

いや、この頃というか専用ISを与えられてからは意識するようにはしているが。放課後に学園の中をジョギングしてみたり、寮部屋に持ち込んだトレーニング器具とかをちよくちよく活用はしている。

俺のIS『アズール・カラムティ』は超高速戦闘型。いくらISのサポートで筋力はどうにかなっても、体重はどうにもならないのだ。身体に異常が出ない程度に軽くしておかないと、コンマ一秒の差で勝負の分け目がつくこともある近接戦では命取りになることもあるのだ。

まあ、だからひよろひよろのモヤシがいいのかと言われればそうでもないのだが。ってああもう、何を俺は説明してるんだ。この前の鈴との買い物の件が大分効いているらしい。

とりあえず俺はいつものように登校し、食堂で朝食を摂って来た一夏やクラスの面々といつものように駄弁ってSHRの開始を告げるチャイムが鳴る。そんないつもの日常。

今日は二組との合同でIS模擬戦だったけかと、そんなことを考えながらボーっとしていた時だった。

目の前で色々と連絡事項を伝えていた千冬さんが山田先生とその

役割をバトンタッチ。眼鏡を拭いていたらしい山田先生はわたたと慌てながら教壇の上に立つ。毎度思うけど、先生というより研修生だよなあ、あの雰囲気。

しかしてそんな俺ののんびりとした思考回路は、次に山田先生が発した言葉によってショートすることになる。

* * *

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかもしれませんが、みなさんよろしくお願ひします」

俺の座っている席は黒板に一番近い席、ようするに一番前にあり、しかも一夏のとなりである真ん中に隣接しているので、必然的に教壇にも近くなる。

そうなるとどうなるか、それは至極簡単なことだ。教壇に立つ人物との距離が一番近い。これは睡眠学習を主とする学生にとっては重大な問題である。俺はしないが。

まあつまり、目の前でにこやかな笑顔で一礼している人物が机を挟んだ目の前にいる、ということだ。

『シャルル・デュノア』と自己紹介した“彼”は、人懐っこい笑顔を保ったまま、キヤアキヤアと黄色い声をあげるクラスを見つめている。

礼儀の良い立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。濃い色の金髪を首の後ろで丁寧に束ねてある。華奢とも言えるスマートな体つきと、しゅっと伸びた脚は十分美男子と分類される人種だった。

そんな美男子が突然白馬に乗って（彼女達にはそう見えるのだろう）現れたのだ。騒ぎ立てないわけがない。

今、俺の顔はそれはそれは分かりやすーいぐらいに引きつっていることだろう。そんな俺の様子を見つけた彼は、不思議そうに首をかしげた。

だってそうだろう？ そろそろ来るだろうなとは目星を立てていたのだが、さっきまで俺の心はこの前に負った傷を癒そうと全開でのんびりモードだったのだ。思考なんて大分前にリタイアしてしまったさ。

とりあえず人の顔を見て顔を引きつらせるのも失礼なので、俺は何事も無かったかのように無理やりな笑みを浮かべる。すると彼は安心したようにまたニコツと笑顔で答えた。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんからー！」

山田先生の困ったような声がクラスに広がる。そこでようやく追いついてきた思考で、その彼の横で静かに腕を組んでクラスを見渡していた。しかしその目は卑下するような、そんな見下すような色合いを含んだものだ。

俺はこの人物を知っている。いや、転生している身として知っているのは当然なのだが、そう意味ではない。態度こそ違うものの、この容姿には見慣れているような感覚を覚えたのだ。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ザッと佇まいを正し、驚くほどに素直な返事を返した彼女にクラスの様子は一変。ぱかんと呆気にとられたように静まり返った。

組んでいた腕を体の真横に合わせ、足をかかとで合わせて背筋をピツと伸ばす。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「ああ、セレナに似てるん……じゃ……」

思わず出てしまった俺の声がだんだんと語末に進むにつれしぼんでいく。何せ、今まで起きた出来事には何かしらのアクションはとってきていたクラスなのだ。それがノーリアクションで沈黙している。

静かな重圧、とでもいうのか。それに俺はあっという間に押しつぶされていた。

「あ、ああ確かに！ 春馬の言うとおりセレナに似てる……な……」

そんな俺の様子を見かねた一夏が沈黙したクラスを元に戻そうと

フロアにまわってくる。がそれも束の間の期待に過ぎなかった。
一夏もまた沈黙という重圧に押しつぶされて、無理やりな笑顔のまま固まってしまった。

くそ、空気が死んでいやがる。早すぎたんだ。（混乱中）

と、そんな感じで俺の思考がまた置いてけぼりを受けようとしていた時に、それは起きた。笑顔で固まっていた一夏とラウラの視線が合う。その瞬間にラウラが纏っていた空気ががらりと変わった。

それは、怨敵と遭遇した時のような。大切なものを奪っていった者に向けるような、どす黒い敵意。

「ッ、貴様が」

バシンッ！

「……え」

つかつかと一夏の目の前に歩み寄ったラウラはピタッとその場で静止すると、高く振り上げたその右手を振り下ろした。無駄のない、完膚なきまでの平手打ち。

その皮膚を打ち付けた鋭い音は、静かだった教室に木霊するようによく響いた。

「私は認めない。お前があの人弟であるなど、認めるものか」

ラウラは、あくまで淡々と語った。語尾に抑揚はなく、敵意も隠すなどしていないのかひしひしと伝わってくる。誰がどう見ても、一触即発の空気。

まずい、このままではまずいに決まっている。特に俺は一夏のすぐ隣なのだ。ラウラから漏れ出した敵意やらが俺にまで降りかかっていて、このままでは非常にまずい。

それに俺はこのクラスのムードメイカー的立ち位置だと思っている。まあ別に今はそれが自惚れでもいい。この目の前の軍人さんが作り上げた最低な雰囲気をなんとか立て直さなければ。

「な、なんだかよく分からないが落ち着こうぜ？ ラウラさんよ」

「なんだ貴様。不用意に喋りかけるな」

キツと鋭い眼光がこちらに向けられるが、全力で無視する。ここで怯んではダメだ。それでは相手の思うようになってしまう。とにかくこの空気の修復に努めるんだ。

そこでようやく自分が殴られたことを認識したのか、一夏が荒く席から立ち上がった。ラウラを睨む。おいおい、最悪のタイミングだよ。

「いきなり何しやる!」

「……ふん」

「一夏も、落ち着けよ。殴られて頭にくるのも分かるが、周りを一回見渡してから次の行動を考えてくれ。頼む」

俺の口調がいつものものと違うことを感じ取ってか、一夏がハツと我に返る。そしてこの耐え難い沈黙で暗い表情をしているクラスメイトを見て、おずおずと着席してくれた。すまん、一夏。後で愚痴は聞くから、ここでは抑えておいてくれ。

さて、どうやってこの場を治めようかと思案し始めた時、ぱんぱんと誰かが手を叩いた。それは一瞬で張り詰めていた空気を切り替えさせ、緊張の糸を緩ませる。

「あー……んっ、ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて、第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

千冬さんの声に合わせて、今まで座っていた席を離れて各々が準備に取り掛かる。今まで押し黙っていた面々のほっと息を吐く様子が見受けられた。

流石は千冬さん、俺がなんか頑張らなくても十分丸く収まった気がするなー、なんて考えていると、ちょうどそのご本人から声が掛かった。

いきなりで関係ないが、先生から「ちょっと来い」と言われると「あれ、俺なんかしたかなあ」と思うよな。うん、現実逃避だ。自重する。

「おい織斑、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。それと神城」

「はいはい、ここに居ますが？」

「ちょうど良い。お前はラウラの面倒をみてやれ。先の様子から、気にかけているのだろう?」

「あー、了解つす。……………は?」

え、今なんと? えーっと、一夏がシャルルの面倒で。俺がラウラの面倒を見……。

「どうせお前はISスーツはすでに着ているのだろう? ならさつさと脱いで、行動しろ。いいな」

そういい残し、さつさと教室から歩いて出て行ってしまふ千冬さん。山田先生も申し訳なさそうにその後を追って出て行ってしまった。

そんなあちよつと待つてくれよ。別に嫌だとは言わないぜ? 本人が目の前でめちゃくちゃ「不機嫌です」オーラを振りまいているし、小心者である俺はそんなこと言えない。でも少しくらいフオローしてくれたっていいじゃないか!

「第一、ここで着替えられるか! 一夏、一夏はどこへ行った!?」

「もうデュノア君と一緒に出て行っちゃったよー」

「ちくしょオーー! 不公平だあーー!!」

こうして俺の『IS学園受難生活』が幕を開けた。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同ともあって、出てくる妙に気合が入った返事も倍になっている。え、結局どうやって俺は着替えたって？……聞いてくれるな。

ちなみに、日が当たっていない廊下って春でも結構寒いよな。いや、こっちの話。

そうこうしている内に、千冬さんが今日の模擬戦闘について色々
と説明している。と言ってもまあ別にいつものようにすれば良いの
だろう。俺はそう高をくくって、横に立っている鈴に喋りかけるこ
とにする。

「アンタ、ここに来る時に誰か連れて来てたけど、例の転校生？」

「おう、伝達早いな。無理やりだが俺が面倒を見ることになったか
らな」

「本当に、なんだかんだで引き受けちゃうわよねー。春馬って」

「いやだって、放つては置けないだろ」

チラッと視線だけ動かして、列の端に立っているラウラの姿を見
る。今の彼女は千冬さんが話しているからなのか、背筋を伸ばした
綺麗な姿勢で、一字一句を聞き取っていた。

ちなみに俺がここに連れてくるまでの態度を説明しておこうか。
いやなに、単なる愚痴さ。

俺がどこで着替えようか焦っていると、「何をもたっている。
早くしろ」と紅い鋭い眼光で睨みつけられ。

俺がようやく着替え終わって、さあ移動しようかとラウラに声を
かけようとしたらすでに進んでいてしまっていたり。

それが明後日の方向だったので慌てて引き止めたり。

少し遅れ気味だったのていつかのセレナ同様手をとって引つ張って行こうとすると「気安く触れるな」と一夏のとあまり変わらないんじゃないと言っくらしいな威力で手を払われたり。

なんかもお、すでにいっばいっばいだった。

「辛いなら言えばいいのに」

「そんなこと言えないだろ。誰かの世話をしてて『辛い』なんて言ったら、俺がそいつを『嫌い』みたいじゃないか」

「……ホント、アンタってバカね」

「うるせえ」

鈴がなぜか不機嫌そうにそっぽを向いたので、そこで俺たちの会話は途切れた。しかし「辛いなら言えばいいのに」か。そんなこと言ったら、誰がラウラの世話を見る？

あんな態度を転校初日にとってしまったから、誰も進んで手を挙げはしないだろう。そんな様子をみたら、絶対に誰だって傷つく。例えそれに無関心であつても、見えない傷として心に残るのはずなのだ。

俺は誰かを傷つけてなんとも思わないほど、神経が図太くない。むしろ現在進行形で磨り減っていて、誰かに分けてもらいたいくらいだ。

そしてその言葉をかけてやる相手は少なくとも俺ではなく、あの

無理に笑顔を振りまいているアイツに対して言ってやるべきじゃないか？視界の端に写るラウラと瓜二つである銀髪の少女を見て、俺は人知れず溜息を吐いた。

「ちよつと、そんな深い溜息吐かないでよ。こっちまで気分が重くなるじゃない」

「なっ、いいじゃんか溜息くらい」

不機嫌そうにそっぽを向いていたはずの鈴が、何故か突っかかってきた。というかそれは不可抗力だ。溜息というのは生理的現象であってだな

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちよつと活力十分な十代が揃っていることだしな。 凰、神城！」

「なんで俺までっ」

これは良いとばかりである。きつと鈴が俺に喋りかけてこなかったら結果は変わっていたに違いない。選択肢でセーブするのは俺の習性。すぐにデータをロードしてやり直しを要求したい。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

「うへえーい」

「春馬のせいなのになんで私が……」

おい、なんか言っただか小娘。

「お前ら少しはやる気を出せ。　　そうだ神城、私は学食の引換券を持っているんだが」

「おっしやあ！　誰でもかかってこいやアーー！！」

「ホント、バカ……」

何か言ったか鈴？　すまん、今の俺は少しばかりテンションが高いんだ。これは多分「最高にハイってやつだ」という状態に違いない。

身体をほぐすために軽くジャブを始めてみる、ワンツーワンツー。何かみんな困ったような笑顔を浮かべているが、何かあったのか？　つか嬉しいだろ、食堂の引換券。特に今の俺にとっては。

そんな俺の様子をみて呆れたような表情をした千冬さんが、眉間に手を当てて首を振る。なんだ頭痛ですか？　あまり酷いなら病院で診てもらった方がいいですよ。早期発見は大切ですからね。

「全く本当にお前は……、まあいい。対戦相手は」

「ああああーっ！　どいてくださあゝゝい！！」

え、何。声が聞こえるんだが……空から？

不思議に思つて上を見上げると、太陽を背に何か黒い影がこちらに向かってきて……つか今の声山田先生っすか！？

どかーん。

その黒い影はそのままこちらに向かって突貫し、一組二組が列を成していた中心、まあぶつちやけ一夏の下へとダイナミック着地した。

爆撃とも受け取れるような轟音を響かせて、砂埃を立てながら一夏と山田先生らしい影が数メートルゴロゴロと転がってようやく停止する。

「ふう……。白式の展開が何とか間に合ったな。しかし一体何が」

砂埃の中から一夏の安堵したような声が聞こえる。あの声の調子だと怪我とかはしていないらしい。一応は安心した。つーかなんで不自然に言葉が切れたんだ？ やっぱり何か怪我を負ったんじゃない？ ……。

大分煙が晴れてきたかなと思っていると、突然こめかみに青筋を浮かべたセシリアがスターライトmk？を部分展開。そのまま銃口を一夏へと向けた。へ？

レーザー銃の独特な発砲音を鳴らして、レーザーが一夏へと伸びる。それをどう察知したのか知らないが、一夏は身体をそらすことで何とかかわしてみせた。

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

セシリアが一夏に銃口を向けるなんて、あの砂煙の中で一体何が起きているんだ？ 鈴も疑問を抱いたらしく『甲龍』のハイパーセ

ンサーを起動している。俺も見てみるとするか。

カラムティのハイパーセンサーを起動し、高画質ズームで砂煙の中の惨状を確認し……。ああ、なるほど。はいはいなるほど、そういうことですか。

「ブチコロシ確定DA」

俺のハイパーセンサーには山田先生のあの大きい胸を鷲づかみにしている一夏が写っている。何をやらかしてるんですかねエあのラッキースケベ野郎は。

うし、今確認した。つーか断定した。あれは男の、淡い期待を抱いている全世界への紳士達に向けての宣戦布告行為だと判断した。異論は認めん。

思い立ったら即実行。俺はカラムティを右腕だけに部分展開する。俺の右腕に纏っていた淡い光が飛び散ると、そこに現れるのは青い装甲と一振りの大剣。

アンソウン
所属不明機事件から得たデータで改修した『テンペスト改』を握り締め、そのギミックを解放する。

銃剣、というものを知っているだろうか。知らなかったらちょうど良い。あそこに口をあんぐり開けて呆けている良的があるからアレを使って説明しよう。

銃剣とは本来、短剣を銃の先端部に装着して槍のような戦い方ができるように工夫された武器のことであり、今では短剣に着剣装置をつけたものが一般的だ。歴史上、刺突に特化したスパイク状のも

のも多い。しかし俺の言っている銃剣とはこれとは違う。

テンペストの先端、そこがちょうど二つに分かれており、その割れた間に銃口が覗いている。引き金は柄の部分にあり、それを引くことで銃弾を打ち出すことが可能だ。

「いや、ちょっと待て春馬！　なんでその剣先をこっちに向けるんだ！？」

銃弾はもちろん実弾。しかしその威力は前にカラミティに内装してあったツイントルネードとは比べ物にならない威力を持つ。まあ銃弾と徹甲弾の威力を比べるのもおかしい話だが。

銃撃の反動はISが自動的に行ってくれるので、両手で構える必要はない。片手で持つて、無駄な力を抜く。そうしないと狙いがずれちゃうからな。

「実弾とは言え、初速度はセシリアのレーザーとあんまり変わらないぞいぞ」

「それってマジでシャレにならないって！」

的が山田先生から離れているが、特に問題はない。彼女に責はないのだからな。よって一夏、お前はこの手で葬ることとする。なに安心しろい。ISには絶対防御という便利な代物があるんだ。死にはしないさ。

ただ“シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる”ということさ。

ちなみに徹甲弾とは、堅固な装甲を持つ目標に使用する“極めて貫通力の高い”弾だ。やったね一夏君。また一つ君は賢くなったのだ。

どかーん。

再び一夏は、今度は別の轟音と爆風に包まれたのだった。

第二十二話 転校生は……まずい……（後書き）

次回は山田先生vs鈴&春馬ですかね、多分。

ちなみに徹甲弾は砲弾です。良い子は片手で打つような真似を絶対にしないで下さい。反動で骨折します。

誤字脱字、ご意見ご感想などお待ちしております。

でわまたゝ ノシ

第二十三話 少年よ、まあ大志を抱いとけ（前書き）

戦闘は軽めです。ここでガチ戦闘は違う気がしますし^^；

第二十三話 少年よ、まあ大志を抱いとけ

俺はゆっくりと息を吐き心を落ち着かせると同時に、思考を戦闘モードに切り替える。といっても俺は別に機械じゃないし、簡単に言えば戦闘に集中した、という言い回しの方が適切かもしれない。

右腕だけだったカラミティの展開を、全て展開する。俺の全身が一瞬眩い輝きを放ち、一気に弾ける。そこにはセシリアの『ブルーティアーズ』より少し深い青を帯びた『アズール・カラミティ』を起動した俺が立っていた。

右手はテンペスト改を握っていて手がふさがっているので、反対の左手を軽く動かして動作を確認する。次に各スラスター、シールドエネルギーに各武装のエネルギー。テンペスト改のエネルギー循環刃のステータスなど。

どうやら今日も絶好調のようだ。俺が満足げに頷いていると、すでに展開を終えていた鈴が『シエンロン甲龍』の開放回線を繋いできた。

うし、通信回路も正常だな。

「おっそいわよ。これから戦うっていうのに弾使っちゃってるし」

「うるせえ、アレは必要な行動アクションなんだよ。お前が男だったら分かる」

ちなみにさつきまで砂煙と爆炎に包まれていた一夏は、すでに復活して列の中に戻っている。絶対防御に感謝するんだぜ一夏。それでも戻る時のヤツは「どれだけ威力高いんだあの銃」とかブツブツ呟いていた。

そりやだつて徹甲弾だもの。ツイントルネードのように連射は出来なくても、それを補えるほどの威力を持つてるに決まっている。しかもあの時は直撃したので、突き刺すような痛みと共にゴツソリシールドエネルギーを持つて行かれていたに違いない。

ちなみにこのテンペスト改をカラムיתיに装備したため、ツイントルネードは外されてしまった。別に嫌だったわけではないが、やはり使い慣れた武器が装備一覧で出てこないと不安が残る。

どうやら山田先生の方の準備が整ったようだ。装備しているISは『ラファール・リヴァイヴ』。その手にしっかりと持っているのは五十一口径アサルトライフル レッドバレット だ。ちなみにアメリカ製である。

山田先生がいつもの雰囲気からは窺えないような真剣な表情で、俺たちと向かい合うようにレッドバレットを構えた。俺と鈴もその様子に触発されてか、自然と身体に力が入りそれぞれの得物を思い思いに構える。

「鈴、とりあえず最初は様子を見る。山田先生の戦闘形式が分からんからな」

「ホント、リーダー気取りよねアンタ。……まあ別に嫌ってワケじゃないけど」

「い、行きます！」

一つ間を空けて、牽制としてテンペスト改の徹甲弾 ブラックゲイルを放つ。レーザーのように山田先生のリヴァイヴに伸びたそ

れは、空中回避によって難なく避けられた。

「鈴、龍咆！」

「命令してんじゃ、ないわよっ！」

空中回避によって出来た一瞬の隙を突いて、発射までのタイムラグがある龍咆の见えない砲弾が食いつく。一瞬動きに躊躇いがあつたものの、山田先生はそれをスラスターを真横に吹かすことで避けてみせた。

しかしやはり弾が見える见えないでは差があるらしく、リヴァイヴの多方向加速推進翼にその砲撃の余波を食らい、山田先生の姿勢が後ろに引つ張られるように崩れる。

「もらつたあああ！」

「ひゃあっ!？」

これは完全なる攻撃チャンスだ。それを俺は見逃すことなく、カラムィティの特殊推進翼を大きく広げて急加速する。瞬間加速に似て非なるものによって飛び立ったカラムィティが、コンマ1秒以下の速さで音速に達してテンペスト改を携え突貫する。

山田先生は可愛らしい悲鳴を挙げたものの、体はすでに俺に対応しようと動いていた。本来『打鉄』に装備されている近接ブレードに持ち替え、俺の振り上げたテンペスト改のエネルギー循環刃を流すようにして防ぐ。

そして身を捻るようにして一回転すると、それによって生み出さ

れた遠心力と自らの体重を加えた重く鋭い斬り返しを放ってきた。

全くの予想外だった山田先生の反撃に若干反応が遅れた俺は、この攻撃を無理やりに防いだ代償として後ろに大きく吹飛ばされるという大きな隙を作ってしまった。

無論、そんな好機を山田先生が見逃すはずが無い。再びレッドバレットを装備すると、その銃弾を惜しげもなく降り注いだ。

「何やられてんのよアンタ！」

しかしその弾幕は俺に襲い掛かることはなく、横から割って入ってきた鈴が連結させた双天牙月を振り回してそれらを一掃する。どうやら助かったようだ。

「サンキュ鈴。礼は言わないぜ！」

『操縦者よりCLBの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりCLBの最大稼動時間を解析。使用可能時間は1分48秒です』

特殊推進翼から紅い粒子が噴出する。翼のように伸びたそれは青い装甲のカラミティの相反して突き刺すように輝いていた。

そしてやはり、供給されるエネルギー量が増えたことによりテンペスト改の刃が長く伸びる。威力も鋭さも増したそれは、もはや業物。

俺は自然と不敵に笑って、今度は動きを読まれないようにジグザグと鋭角に動きながら山田先生のリヴァイヴに接近する。ロックオンカーソルがついて来ていないのだろう。明らかに動揺しているそ

のようすに、反撃しようとする意思は見られない。

いや、その意思が合ったとしても、それが脳から脊髄に伝達され、さらにそれが身体に神経を渡って伝達される前に。

「一刀両断だアアアア！」

紅く猛々しい刃が、袈裟切りに飛び掛った。

しかしこの時、俺は油断していたのだ。でもそれはそれは仕方の無いことだろう。なに、簡単なことさ。

“俺の攻撃は確かに強烈だ。しかしそれが一撃必殺ではなかった”ということ。

「あの……」

近接戦闘型に見られる特有の、そして絶対に避けられない致命的で絶対的な隙。それは自分の得物を振りぬいた瞬間だ。今の俺も例外なくテンペスト改を袈裟切りに振りぬいていて、両手ともそのテンペスト改を握り締めていた。

ハッと俺が顔を上げた先には、困ったように笑う山田先生がいた。俺もつられて、困ったように笑う。いや、困りすぎて笑ってしまった。

「ハハハ……。ラファールって、案外固かったんだなあ」

「もう少し斬るところを考えた方がいいですね。春馬君」

と、大変貴重なご教授をしてくださった山田先生が繰り出した打鉄の近接ブレードの抜刀をモロに食らった俺は、CLBでガンガン減っていたシールドエネルギーも相まって一瞬で沈黙した。

鈴のほうか？ そりやもう、これも大変貴重な山田先生とのサシによつて俺が撃墜されてから30秒後には俺と同じ場所に吹飛ばされてきたさ。

もちろん、お互いにシールドエネルギーは空っぽで。

「ぐおお……。まさか山田先生にやられるとは……」

「あ、アンタねえ……。『最初は様子を見る』とか言っておきながら何突っ込んでんのよ！」

「お、俺はとりあえず斬ってから考えるんだよ！」

「何それ！？ アンタ頭いいんだから少し考えて行動しなさいよ！」

「お前こそ、本当に様子を見てないで少し攻撃してくれよ！」

「それはアンタが言ったからでしょ！」

撃墜された恥ずかしさも相まって、何故か鈴との口ケンカが勃発する。お互いのISはシールドエネルギー切れで動かないので、手は出せないからだ。

しばらく睨みあつてから、弾かれたようにお互い顔を背ける。そのタイミングが一緒だったことが気に食わなかったためか、再び鈴と俺の口論が開始される。

「い、いいの一夏？ ケンカ止めなくて」

「ん、ああ。あれは小学からずっとだから、その内終わるさ。ほら言うだろ？ ケンカするほど仲が」

「良いわけあるかつ！」「良いわけないでしょっ！」

ああっクソツ。なぜこうもタイミングが重なるんだっ。

と、再び口火が切られるかというところで、千冬さんパンパンと手を鳴らして注目を集めた。その表情はさも疲れた、というように眉間にシワが寄っており、小さく溜息を吐いてからいつもの顔に戻る。

「さて、これでIS学園教員の実力は理解できただろう。以降も敬意を持って接するように」

俺と鈴は千冬さんに促されるがまま、倒れていた状態から立ち上がってISの展開を解いて列に戻る。しかしその戻った列は元々いた場所ではなく、列の最前列だ。ということは、またすぐに動くことになるのだろう。

「専用機持ちは織斑、神城、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、^{ファン}凰だ。では出席番号順にグループに分かれて実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること、いいな？」

そこで千冬さんの言葉が終わると思いきや、突然俺の方を向いた。え、何？ 今はちゃんと話を聞いてましたよ？ なんでそんなに口元が歪んでいらっしやるんですか？

「神城、お前はボーデヴィツヒの班に入れ。何、気負いすることはない。アイツのフォローをしてくれれば、それでいい」

うへえ、そう来ますか。いや待てよ、ということは俺はリーダーやなくて良いって事じゃないか。ならやろっ、喜んで！俺は面倒が嫌いなさっ。

「分かりました。……それでの、引換券は」

「では早く分かれる。もたつくようならISを担いでグラウンド百周させるからな！」

「いやあの、引換」

「なんだ神城。そんなにISを担ぎたいのか？ そうだな……お前のISは軽量機だ。それならもう一体くらい造作もないだろう？」

「ほら、早く並ぶぞ！ リーダー、リーダーどこだあ！」

もたもたするのはよくないからな！ 時間は有限、時は金なり。キビキビ動いて有意義に使うぜ。昼飯も今日は時間を有意義に使うために抜くとするか！

……ちくせう。

* * *

「……………」

「「「……………」」」

前略、どうやらこれはリーダーをするより面倒くさいかもしれない。
い。

別に何か問題が起きているわけじゃない。いや、起きているといえ
ば起きているのだが。原因もすでに特定済みだ。ラウラから発せら
れる張り詰めた空気、コミュニケーションを拒絶するようなオー
ラ、俺たち生徒への軽視を込めた冷たい眼差し。

そして腕を組んで口もつぐんでいれば、その左目につけている黒
い眼帯の効果もあってさながら独裁者のようだ。俺たちは言いたい
ことをいえない民衆と言った所。

ちなみにさきほど山田先生が訓練機を一体取りにくるようと言
っていたので、俺らの班は打鉄を用意していた。もちろん俺が一人
で。

班の女子達一（というか女子しかおらず）はいつもの爛漫な明る
さはどこへやら。すこし俯いたまま押し黙ってしまっている。現在
進行形でテンションが大暴落だ。

（鳴かぬなら、いろいろ試すさ、ほっとけないし）

お、何か良い感じでゴロにはまった気がする。どうでもいいか。

「……よし！ このままじっとしていても仕方ないし、さっさと始めて終わらせるぞ！ な、ラウラ」

「気安く話しかけるな。敗者の分際で」

声をかけただけで向けられたその軽蔑とも言える視線に、俺は思わず顔を引きつらせた。別に頭にはこない。多分、彼女はこういう性格なのだ。諦めるな俺。

「ま、それは事実だし。開き直った者勝ちさ。ラウラもそうむくれていないで、笑ってみたらどうだ？」

「はっ、軽薄だな。この時にナンパか？ 流石、アメリカの代表候補生とでも言っておこうか？」

「俺は日本人なんだが……。まいいや、出席番号順に行こう。一番目は誰ー？」

「あ、はいはいはい。私だよー！」

俺の意図を汲んでくれたのか、見た目活発そうな彼女が無駄にデション高めな反応で返事をしてくれた。うん、やっぱりこの生徒はいつも元気だ。元気が一番ってな。

とりあえずその彼女、入江さんと言ったか。入江さんをきっかけにしてこの死んでしまった空気を立て直しながら、やって行きますかね。ラウラは黙って腕を組んだままだし、俺一人で。

あれ、これって実質はリーダーは俺がやってるんじゃない……。ええい、この際関係ない。やってやるさ、やるしかない！

そう自分の心を鼓舞し腹を括ると、打鉄の前で俺の指示を待っていた入江さんの顔を見る。……なんというか、犬みたいな雰囲気だな、この人。

「じゃ、ぼちぼち始めますか。ISには乗ったことあるよな？」

「うん、授業だけなら」

まあ、そりゃそうか。IS学園と呼ばれているんだから今日までISに乗ったことがない方がおかしい。

「んじゃ、装着と起動までしてくれ。その後はまた指示だから」

「分かった！」

俺の出した指示に元気よく頷くと、彼女は跪つひまくように搭乗者を待っている打鉄を装着、起動していく。

それはまあいいんだが。俺に返事をする度にその可愛げなお尻で尻尾が元気よく揺れているような幻覚をみるのだ。まずい、いくら雰囲気がそれっぽいからって、幻覚をみるとは。もう休んだ方が良くないか、俺。

「起動し終わったよ。それで、次は？」

ほら、今だって彼女の頭の上であるはずもない犬耳がピコピコ動いているような幻覚が……。ぐう、気にしたら負けだ。ツツコこん

だら負けだ。

「そ、そうだな……。お、一夏の班はISで歩行させてるのか。じやあ俺たちもそうしよう」

周りを見渡すと、他の班も大体そうしているようだ。なら俺たちだけ別なことをする必要もあるまい。俺は入江さんが乗る打鉄の横に立って、歩くように促した。

バッシフ・イナーシャル・キャンセラ

ISは基本的にPICによって浮いている。今はそれを切ってあって足が接地している状態だ。のっしのっしと打鉄がグラウンドの地面を踏みしめる度に、小さい揺れが感じられる。

とりあえず俺たちがいる班の周りを一周して、そこで入江さんに打鉄から降りてもらった。さて、次の人に交代だな。次はえーつと

「フン、ISの装着と起動、歩行だけにどれだけ時間をかけているんだ。高い倍率から選ばれた優秀生、か。聞いて呆れるな」

打鉄から降りて待っていた班の仲間達に駆け寄っていた入江さんに、ラウラの冷たい声と評価が下される。それは独り言などの声量ではなく、次の人のために打鉄の設定をしていて少し離れていた俺にも十分聞き取れるほどだ。

ようするに、班にいる生徒もしくはその近くにいる人間全てに向けられたものと言うこと。これは黙って見ているわけにはいいかない。

「そう言ってやるなよ。代表候補生と生徒では経験が違うのは当た

り前だ。比較するのはおかしい話だぜラウラ」

「それでも、IS訓練の内容がこれだけとはな。ISで運送業でも始めるつもりか？」

そういつて嘲笑うラウラ。どうしてそんなに歪んだ考えしか出来ないのか疑問に思ったが、ここで俺がキれるのも場違いだ。恐らく排他的になっている彼女には、そんなもの逆効果だ。

「違うさ。誰だつていきなり銃を持たされて的を狙って撃て、なんて無理だろ？ 最初は銃の持ち方、体の構え、照準の合わせ方、撃った後の処理方法とか。だから最初に手順を無意識に出来るまで身体に染み込ませる。次に的を狙って撃てと言われたときに、余裕でやってみせるためにな」

自然と、自分が言っている言葉がラウラを諭すような口調になってくる。それが気に食わないのか、ラウラの表情に苛立ちの色が刺していた。

「何をそんなに苛立ってるんだラウラ。俺たちは別にお前が嫌いなわけじゃない」

「私はお前達が嫌いだ」

「なら、俺が変えてやる。ここみんなは優しいんだ。そんなに鬱陶しげにしないでくれ」

そう言つて俺は設定を終えた打鉄から離れて、班のみんなから少し距離をとっていたラウラのところに歩いていく。腕を組んだ様子は変わらなかったが、その目の鋭さと殺気は変わらないいまま。随

分と俺の言葉が気に入らなかつたらしい。

ふうつと俺は息を吐くと、その組んでいた腕を掴んでぐいぐいと引っ張っていく。

「な、なんだ貴様つ。離せ！」

「うーし、まずは基礎の基礎！ 仲直りの挨拶だ！」

掴まれた自分の腕から俺を腕を離そうとして殴ってくるラウラを無視して、後ろに引きずられていたラウラの肩をポンと押し出す。少しバランスを崩したラウラは何とか踏みとどまって、すぐに俺に激昂した。

「貴様、何のつもりだ！」

「何つて。挨拶だよ、挨拶。ほら、入江さんに『ごめんなさい』って言え」

「断る」

「ほう？ そうか……なら、こうするまでだ」

普段はしないドスを効かせて、ラウラの頭をがちりとホールドする。これで逃げ場はなくなったぜラウラさんよ。いつもセレナに食らわしているこの技、同じ血をひく者だったのなら効果の程は予想できるからな。

「おら、謝つとけこの野郎くっッ！」

「なっ！ 痛ッ！？」

俺の十八番、『頭を拳骨でグリグリする』刑だ。これは頭を直に
圧迫される痛みと、その痛みに悶える姿を公に晒すという精神的痛
みも合わさった、一石二鳥（？）な攻撃技だ。

そしてなぜか、セレナはこの攻撃に非情に弱い。なら多分、姉妹
であり姉であるラウラにも効果はあるはずだ。

「やめっ、くそやめろっ、この変態がつ、貴様っ、やめると、言っ
ているっ！」

「俺はっ！ ラウラがつ！ 謝るまでっ！ グリグリをやめないっ
！」

「分かった！ 分かったからやめてくれ！」

同意が得られたので頭のホールドを解き、素直に解放してやった。
ようやく頭蓋骨の圧迫から逃れたラウラは頭を抱えながらヨタヨタ
と数歩よろめくと、キツと恨めしげに俺を睨む。普段の彼女なら威
圧感が半端ないだろうそれも、いつのまにか目元に溢れた涙によっ
て威力が激減している。

あれ、こうしてみるとコイツ可愛いな。

「ほら、約束通り謝れよな。次の人詰まってんだから」

「ぐうっ。この私を子供のように……」

「もう一回、イットく？」

「いや。不本意だが、約束は約束だ」

お、俺の必殺技を恐れたか。そうそう、最初からそうしておけば良かったものを。

ラウラは終始俺のほうを恨めしげに射抜くように睨みつけながら歩いていき、この状況に戸惑っている入江さんの前に立つ。そして、本当に不本意というように入江さんの顔を見ると、もごもごと口を開いた。

「……………すまなかった」

「…………え、あ、うん！ 私は気にしてないよー？」

エヘヘーと朗らかに笑う入江さんを見て俺はホッと胸を撫で下ろすと、いまだ惴然としてそこに突っ立っているラウラの所に歩み寄り、強引に頭を撫でた。

「…………貴様、何のつもりだ」

「何って、褒めてんだ。よしよしよしー」

「私を子供扱いするなっ！」

「あっ！ 私も撫でて欲しいなー」

身をよじって俺の手から逃れようとラウラの頭を、これでもかと言うほどに撫でまくる。いや入江さん、これはラウラの性格を矯正させるための、いわば嫌がらせみたいなので…………て、ああ。頭を

こっちに向けていらっしやるし。

「あ、ああ……こうか？」

「えへへー」

ほにやら、と入江さんがやわらかく笑うと、やはり彼女の後ろで揺れる犬の尻尾が見えた気がした。

「あ、入江さんだけずるいー！ 春馬君、私も撫でてー！」

「私も私もー！」

「いつそ体を撫で回してー！」

うわ、なぜみんな俺の周りに群がる。つか最後のなんだ！？俺は絶対やらないからな、絶対だからな！

「……………お前達、一体何をやっている」

そしてすぐ後、千の冬を関する修羅の手によって、俺たちの頭に耐え難い一撃を食らうはめになったのは、言うまでもない。

第二十三話 少年よ、まあ大志を抱いとけ（後書き）

ちなみに私は猫派です。パジャマ姿のラウラは致死量の毒だと思います。私に盛ると一瞬で倒れるよ！

鈴？ それは私の活力剤です。とても元気になります。最高にハイ
って（ry

誤字脱字、ご意見ご感想などお待ちしております。

でわまた ノシ

第二十四話 あんぱんは好きですか？（前書き）

更新が遅れてしまい、すいませんでした。

第二十四話 あんぱんは好きですか？

「よお、ラウラ。今から昼でもどうだ？」

「……何のつもりだ、貴様」

なんだかんだあった午前のＩＳ合同実習もようやく終わり、今は昼時。いつもなら俺は一夏達と昼飯を食べに食堂へと向かうのだが、今日は少し違う。

実習から教室へと戻ってきた生徒が思い思いに過ごす中、そこだけぽっかりと空いたラウラの席の前に俺は立つ。先の事件のせいであつたら完全にクラスから浮いてしまったらしい。まあ、無理もない話だが。

と、そんなどうでもいいことを考えてから、先から俺を視線で射殺せんと睨みつけている新しくクラスメイトになった転校生にいつもの調子で話しかける。

「何のつもりって、昼でも一緒に食べないかと誘っているんだが？」

「断る」

そういつて俺から視線を逸らすと、机の脇にかけていた鞆から何かを取り出した。それはよく薬局やコンビニで見かける『十秒でチャージ出来そうなゼリー状の携帯食』だったり、『ブロック状のやたら腹が膨れる携帯食』だったり。お前はそんなに食事を早く済ませたいのか、と思うほどのものだった。

おそらくラウラは『これがあるからいい』という意思表示なのだろう。目の前に立っている俺には目もくれず、取り出した携帯食の束に手をつける。

「まあまあそんなつれないこと言うなって。そんな合成食品の山じや体に悪いぜ？」

「別に、問題ない。私はそういう風に訓練されてきたからな」

ラウラは十秒で『チャージ出来そうな携帯食』を手に取り、慣れた手つきでその飲み口をあけると、無言でそれに口をつけて飲み始めた。

このままではちが明かなそうだ。俺は仕方なく力を貸してくれであるうクラスメイトでありルームメイトである彼女を呼ぶことにする。どうせラウラを誘った後セレナも呼ぼうとしていたのだ。順番が逆になっただけで特別に問題があるわけじゃない。

「セレナ、飯行こうぜー？」

「セレナさんだったら、さっきセシリアさんに連れられて一夏くん達と屋上に行ったよ？」

「なん……だと……？」

ここでまさかの事態発生。そうか、セレナは一夏達と食べにいったのか。これでラウラを釣る唯一にして最後のカードを失ってしまったわけだ。まずい、どうしよう。

正直に言うと俺は別にラウラとどうしても昼飯を一緒に食べたい

とか、そういうことは考えていない。ふと思いついて、上手くいけばクラスに馴染んでくれるかもと思ったまでだ。

今がダメなら次がある。今回は俺の負けと言うことにしておこうと、俺は教室を出て一人で食堂に向かおうとラウラの席から離れようとした時、体が後ろから引つ張られているような違和感を感じた。

不思議に思つて後ろを振り返ると、恐らくこの違和感の原因であろうラウラの右手が俺の制服の裾を握っていた。口に咥えていた『十秒でチャージできそうな携帯食』を握っている反対の手に持ち、キツとした視線で俺のことを見上げる。

「気が変わった。良いだろう、その話に乗ってやる」

「あ、ああ。そりやどうも……」

その俺の体を射抜くような視線と、すでに半分まで飲み干された携帯食を片手に持っているというギャップで、俺は随分と気の抜けた返事をするしかなかった。

なにはともあれ、ラウラが昼飯の誘いに乗ってくれたのだ。そうと決まれば話は早い。早速、一夏達の所に行こうと歩き出した。つてやべ、俺自分の昼飯買ってないじゃん。

ラウラが席を立って廊下で待つ俺のところに来るのを待つて、とりあえず食堂に俺の昼を買いに行く。ついでにラウラの分も買っておこうか。まあ、鬱陶しがられるだけかもしれないが。

そんなことを考えながら歩いていると、口にさっきまで飲んでいた携帯食の空を咥えたまま歩いていたラウラが話しかけてきた。

「お前、さつきセレナのことを馴れ馴れしく呼んでいたが……どういうことだ？」

「え、そりゃ友達だからな。呼ぶのは当然だろ？」

あえてここでは『実はルームメイトでもある』という事実は伏せておいた。こんなことを打ち明けてしまつたら確実にまたいざこざが起こる。このことはまた今度でも良いだろう。

俺の返事を聞いたラウラは「報告ではそんなこと……」と何かブツブツ呟いていたが、その度に上下する空になつた携帯食が気になつて仕方がなかった。確かにあれは何か口に咥えて膨らませたりして遊んだりするが。

そして案の定、ラウラは手持ち無沙汰になつたのか、口に咥えていた空の容器で遊び始めた。膨らましてはしばみ、膨らませてはしばむ。風船ガムかそれは。

「よっ」

「……何をする」

とりあえず取り上げてみた。だけなのになんでそんな怖いくらい睨むんですかラウラさん。そんなに俺のことが気に食わないのかね。

「いや、隣でプクプクさせてたから」

「意味が分かん。まあいい、その処理は任せた」

「へいへい」

ちょうどよく食堂に着いたので、近くにあったダストシュートに投げ入れる。俺の手元から放たれたそれはダストシュートの口に吸い込まれるように入っていった。うし、今日も絶好調だな。

「んじゃ俺はなんか買ってきて来るけど、ラウラはどうする？」

「ここで待っているが？　ついて行く義理はないしな」

「ういいうい」

昼休み開始から少し経っていたので、中はそんなに混んでもいなかった。俺は適当に昼飯を見繕うと、すぐにラウラが待っている食堂入り口に戻る。なんかパシリに遣わされてる気分だが、気のせいだということにしておいた。

ラウラは俺の姿を確認するなり一人で歩き出した。どうやら食べる場所は彼女が指定するらしい。俺は出来れば一夏達と食べたかったが、今のラウラがわざわざ自分から一夏のところへと向かうことはないだろう。

ラウラの後を追って着いた先は、あまり人気もない遊歩道に備え付けてあるベンチだった。そこにラウラはどっかりと座り込むと、俺の方を見て視線だけで座るよう促す。

「まったく随分遠くまで来たな。教室に戻る時は結構面倒だぞ」

「そんなことはどうでも良い。早く隣に座れ」

聞き方によればツンデレにも聞こえなくもないが、その語気は冷たく乱暴だ。しかも言っている本人はラウラなのだから、まずその考えはおかしいと判断できる。

とりあえず言われた通りに隣に座り、袋に入っていた買った昼飯を取り出す。ふつつふ、聞いて驚け、今日の俺の昼飯はなんと……。

「定番の焼きそばパンだぜー！」

「……………」

「出来ればツツコむなり罵るなりしてくれないか？　すごく空気がキツイ」

無理にテンションを上げようとしたのが裏目に出ってしまったらしい。というかそもそも、このラウラ相手にボケるのが間違いなのだ。何故気づかなかったし、俺は。

とりあえず立ち上がって宣誓のポーズをとっていた俺はソロソロと座りなおし、軽く咳払いをしてから焼きそばパンの包装を破る。そのタイミングと同時に、ラウラが口を開いた。

「貴様、先ほどセレナとは友人だと言ったが、どういうことだ？」

「んあ？　どういうことって……。普通に友人だぜ？　喋ったり、ふざけあったりする」

「あのセレナが、か……………」

「そういうラウラはセレナとどういう関係なんだ？」

「お前には関係ない」

何か意味深なことを呟いていたが、それを言及する前に会話を寸断されてしまった。仕方なく手元に持っていた焼きそばパンを一口かじる。口の中に焼きそばのソースの香りとパンの触感が広がり、非常に美味だ。

何口か食べた後、ラウラが黙って何かを考えているような素振りをしていたので、俺はダメもとで話しかけてみることにした。

「どうしてラウラはあの時、実習の時にあんなことを言ったんだ？」

「別に、どうでもいいだろう」

「俺にとってはどうでもよくないな。これでもそれなりにIS学園を気に入ってる、それを貶^{けな}したんだがな。ラウラは」

「まさか、謝れとでも？」

「いや、それは俺にとってはどうでもいい。確かに謝るのも大事だが」

そこで俺は一旦話を切り、視線をラウラに向ける。鋭い紅色の眼光、形の整った顔の輪郭、陽射しに輝く銀色の長髪。その全てが視界に収まってから、再びゆっくりと言葉を続ける。

「ラウラの場合は何か違う……、何かに苛立つてものに当たっているような感じがしてな」

「……ハッ、思い込みもいい所だな。私を貴様達と一緒にされては困る」

「そうか、ならいいんだけどな」

フウと俺は肺に溜まっていた空気を吐き出し、鼻から新鮮な空気を吸う。陽射しによってほのかな暖かさを持った空気が胸の中を満たす。

手元にあつた焼きそばパンを食べるのに食べ盛りな名高校生男児にかかれば雑作もない。もちろん一個で腹が膨れるとは思っていなかったで、俺は袋の中からもう一つのパンを取り出す。こちらは名前を忘れたが、惣菜系のパンだったはずだ。

そしてそれを袋から出す時、一緒に買っておいたパンの存在を思い出した。まだ昼休みに余裕があるので、早いうちに渡しておこう。

「なあ、ラウラ」

「気安く喋りかけるな」

「まあそう言わず。ほれ、昼に付き合ってもらったお礼だ」

手渡ししようと思ったのだが、いかんせんラウラが腕を組んでいてさらにその体勢を崩そうとはしなかったので何となく頭に乗っけてやる。ちなみにそのパンはあんぱんだ。ラウラの好みが分からなかったので、女の子は甘いものが好きなのだろうという俺の愚直な発想で選んだものだ。

「別にいらん」

「食わなくてもいいから、とっておけて。俺の自己満足みたいなもんだからさ」

「なんなんだ、貴様は……」

ものすごくムスツとした表情でラウラは自身の頭の上に置かれたあんぱんを手取る。するとラウラは一瞬頭の上にハテナなマークを浮かべたような素振りを見せた後、それを手に持ったまま物珍しそうな目であんぱんを見つめていた。

「……まさかとは思うが、あんぱんを見るのはこれが初めてだったり？」

「煩い。貴様は黙って昼食を摂っている」

俺の言葉には答えつつも、視線はあんぱんに釘付けになっている。なんだ、一夏への復讐心ばかりかと思っていたが、俺の想像よりはまだマシな状態のようだ。

とりあえず目の前の光景が面白すぎるので、このままラウラで遊んでみることにする。

「ところでラウラ、お前はあんぱんの正しい食べ方って知ってるか？」

「なんだそれは。そもそも、パンを食べるのに正しいも何もないだろっ」

「え、知らないのか？ 俺たちは普通に知ってることなんだが……」

「ぐ、し、知っている。貴様らが知っていて私が知らないわけないだろう」

よし釣れた。ラウラのプライドで遊ぶような気がしなくもないが、ここは罪悪感には引っ込んでいてもらおう。さて、次はなんて言うか……。

「じゃあ教えてくれないか？ 実は俺、知らなくてさ」

「お、教える？ 私が、か？」

「ああ、頼む！ この無知なワタクシめにどうか一つ、ご教授を！」

「な、何で私が貴様なんかに教えなければならない！ 用は済んだ、私は行くぞ」

怒っているようにも焦っているようにも見えるラウラの様子に、俺はしめたと確信してさらに追い討ちを放つ。遊んでいることがバレた時が怖い、とりあえずカラミティもあるし大丈夫だろう。

「あれ？ まさかラウラ、本当は知らないんじゃないか？ 散々偉そうにしているこんなことも知らないなんてな」

「……貴様、今なんと言った？」

あ、ヤバイ。ちょっとやりすぎたかもしれん。だいぶ先が見えなくなってきたので、俺はそろそろウソだと明かす準備とすぐに走れるよう心構えを済ましておくことにした。さて、なんて切り出そう

かね。

と、俺が思いついた言葉を口に出すより先に、ラウラが手に持っていたあんぱんを胸の前に突き出して怒鳴るようにまくし立てた。

「いいだろう、この私が教えてやる。正しいあんぱんの食べ方をな！」

「え、ちょっとラウラさん？」

「まず袋を両手で持って口を　　なんだ、質問なら後にしてくれ」

「いや、質問も何も全部まるっとウソなわけなんだが……」

そして舞い降りる沈黙という名の垂れ幕。耳を澄ませば木魚のポクポクポクという音がどこからか聞こえてきそうだった。ラウラの方は驚きというかこの状況がよく分からないと言った様子で目が点になってしまっている。

あ、まずい。ラウラの思考が戻る前に逃げておかないと。

「まあ、あんぱんは普段パンを食べるやり方と同じで良いと思うぞ？　じゃな」

そして俺は颯爽とその場から駆け出した。恐らく数秒後には爆心地になるであろう遊歩道のベンチに心の中で合掌しつつ、密かにセレナも同じウソを言ってみようと頭の片隅で考えておく。

「ふ、ふざけるなアーーーーー!!!!!!」

俺が走り去ってから数秒後、文字通り爆発音のような音と共にそんな叫び声が遊歩道辺りからあがったと言う。

「なあセレナ、ちょっといいか？」

「ほえ、なんですか？」

そして午後のIS実習が終わった夕飯時、被害者がもう一人増えていたことはある一人を残して知られることはなかった。

ちなみに、彼女の解答は「まず両手で袋をもって口を」から始まったそうだ。

第二十四話 あんぱんは好きですか？（後書き）

なんぞこれ。どうも玉露飴です。

大阪行きの夜行バスでウトウトしながら書いていたので、なんか色々アレですね。でも個人的に面白かったんで乗せてみます。どうも2巻は話の内容的に重くなりそうなので、ここでコメディ分を補給という算段です。

誤字脱字、ご意見感想などお待ちしております。

でわまた ノシ

第二十五話 空を覆う灰色（前書き）

なんとか更新。お待たせしました。

第二十五話 空を覆う灰色

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応分かっているつもりなんだが……」

「いや、相手が銃を構えているのに真っ直ぐ突っ込んで行くお前に言われてもなあ」

シャルル・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒの二人がIS学園に転校してきてから五日経って、今日は土曜日。俺と一夏、そしてシャルルは今アリーナの中で各々のISを展開して、回線チャンネルを使わず素の声で話している。

IS学園では午前中に理論学習を行い、午後からは完全なる自由時間となっている。ようするに、部活に励むのもよし、勉学に励むのもよし、寮に帰って寝るのもよし、ということだ。土曜日の授業が早く終わる所は日本の他の学校と一緒になんだな。まあ俺は別に構わないが。

しかしここはIS学園。驚異的な受験倍率を潜り抜け、見事その席を勝ち取った猛者一（？）達が集う場所。放課後にはもちろん部活と同じような頻度でISがアリーナの中を動きまわっている。

ちなみに土曜日の午後はこの自由時間に合わせて全アリーナが完全開放されているらしい。まあこうまで来ると「午後は各自で実習に励め」と言われているもんだよなあ。

そして俺たちは無論、その「午後は各自で実習に励む」組に入っているわけだ。

「うーん、確かに春馬君が言う通りかも。多分、一夏は知識としては知っていても、実戦で生かしきれてないんじゃないかな？」

「シャルルに良いように振り回されて、間合いを詰め切れなかったみたいだしな」

「う、確かに……。瞬間加速も読まれてたしな……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだしね。より射撃武器の特性を知っておかないと対戦では勝てないよ。特に一夏の瞬間加速は直線的だから」

「直線的かあ……。ん？ 春馬のISはジグザグ動いてるが……？」

おう、中々鋭いですね一夏君。ご褒美に飴ちゃんをやろう。……なんてバカなことを考えていないで、ここは真面目に答えておくか。中々危ないしな。

「ああ、それが『アズール・カラムティ』の仕様だしな。独立したPICがあつちこつち付いてるから、急加速、急停止とか、結構ハードな戦闘軌道^{アクション}がとれる。CLB発動中なら、それが数倍近くの速さになるし」

「でも、一夏は瞬時加速中は無理に変えたりしないほうが良いよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷が掛かると、最悪の場合骨折したりするからね」

「……分かった」

この独立したPICを搭載しているのは、今は奪取されてしまった『アラクネ』に用いられていた技術を流用したからだ。だからといって『アラクネ』もこんな軌道が出来るわけじゃない。元々『アラクネ』は戦闘目的に造られたわけじゃないし、パーツの耐久性も低い。もし瞬時加速中に急反転などしようものなら空気抵抗と圧力による高負荷で、空中分解すること必至だろう。

まあこの『カラミティ』だって過度な軽量化と高出力を追及したお陰で防御面が涙目なので、この高機動を生かして敵の攻撃を避けなければ、それが致命傷になるわけだが。

もしかすると防御面だけなら、『打鉄』や『ラファール・リヴァイヴ』の方が頑丈かもしれない。ハハ、冗談に聞こえねえや。

「そういえば、春馬も近接武器オンリーだよな？」

「ん？ ああ、一応『ブラックゲイル』があるから一概にオンリーとは言えないが……。プレイスタイル戦闘形式は近接格闘だな」

「なら一度、シャルルと戦ってくれないか？ 立ち回りの参考とかにしたいし」

「……は？」

おい、ちょっと待て。原作はこんな流れは無かったぞ、話がちがうじゃないか！ ……ってまあ、俺という存在が居る時点で狂ってきてるのは分かってるけどさ。

ということはこのままの流れだと、シャルルと手合わせすることになるのか。ISの相性は悪いとは言わないが、これは結構辛いと思うぞ。俺の経験値的な意味で。

「シャルルはどうだ？ 無理にとは言わないけど」

「そうだね……、僕は構わないよ？ 春馬君はどうする？」

「シャルルが良いのなら、俺も構わないぜ？」

相手が良いと言っているのなら、潔く受けるのが礼儀というものだ。って父さんが言ってた。本当はシャルルが良いって言ってしまったお陰で逃げ道が断たれて仕方なく、なんて言えない言えない。

「とは言っても、この混み具合でどれくらい動けるか……」

「何か、さっきより人が増えてきちゃってるみたいだね……」

先も言ったが、土曜日は自由時間であり、アリーナは全開放。となると、IS学園生徒がアリーナに殺到するのは自然な流れというもの。俺たちが居る第三アリーナも例に漏れず絶賛混雑中だ。

『アズール・カラムティ』は超高機動のISだ。戦うフィールドはやはり広い方が良くに決まっている。こうも人が多いと、間違つてぶつからない様に注意しつつ、シャルルとの戦闘に集中しなければならなくなる。こうも行動的、思想的に縛られてくると、俺が満足に戦えるかどうかは結構疑問だ。

それをシャルルは把握しているらしく、自分よりも俺の方を心配してくれているらしい。いやホント、出来た人ですよシャルルさん

はよ。

「まあ一応やってみるか。んじゃシャルル、よろしくな」

「うん、分かった。出来るだけ抑え目でいくよ」

俺とシャルルは軽く握手を交わした後、軽く飛んで距離をとる。初期配置はここいら辺でいいかね。シャルルは周りで自主訓練していた生徒に、これからここで模擬戦闘をする旨のことを伝えているらしい。本当に律儀というか、抜け目ないというか。

「ちょっといいかな？　ここで今から模擬戦をしたいんだけど」

「え？　うん、別に構わないよ。って、貴方確かこの前転校してきたシャルル君よね！？」

「え、ええと……うん。そうだよ、初めまして」

どうやら開放回線を開いているらしい。これなら一々周りの人に伝えなくても、一言話せば伝えたい全員に伝わるな。流石シャルル、手回しが良くて羨ましく見えてくるぜ。

「うわー！　すごい、一夏君や春馬君以外で男の子でIS使える子に話しかけられちゃったー！」

「あ、あの」

「ねえ、誰と戦うの？　すごい見たいんだけど、観戦していい！？」

「ぼ、僕は別に……。春馬君もいいよね？」

「ん？ あ、ああ」

何となく聞き手に徹していたが、どうやら話のペースを相手側にとられてしまったらしい。どうやら相手側から発せられる雰囲気戸惑っているらしく、さっきまでの抜け目ないシャルルはどこへやら、と言った感じだ。

そんな俺も、急に話を振られたので思わず返事をしてしまったので、あまり人のことを言えないが。

「まさか対戦相手って春馬君！？ これは見逃せないわ……。おい、みんなー！」

え、ちよつ、おまつ。なんで第三アリーナ全体に呼びかけるんだ、俺たちが動き回るだろうスペースを空けてくれればそれで良いのに。

……。まあ、大体の予想はついてるけどな。

「……何か、すごいことになってるな……」

「言いだしっぺのお前が言うなよ、一夏」

こうなったらしょうがない。やってやろうじゃないか！ 結果がどうなるかは別としてな！

* * *

「……まるで決戦だな」

「あはは……」

結局、俺とシャルルが模擬対戦を行う旨の連絡は第三アリーナにて自主訓練をしていた生徒全員に伝わり、どういう訳かみんながみんなアリーナから引っ込んでしまった。そして代わりに観客席が満席になる始末。どうしてこうなった……。

ハイパーセンサーで一夏の位置を確認する。といっても一夏は観客席には行っていない。この対戦の提案者として、この対戦が一番よく見えるであろうピット脇にて『白式』を展開したまま待機である。

「用意はいいか？ 一夏」

「ああ、こっちは大丈夫だ。よろしく頼むぜ、二人とも」

「じゃあ、始めるよ」

シャルルが駆る第二世代型IS、『ラファール・リヴァイヴ・カ

スタム？』の安全装置セーフティが解除されたのを、『カラミティ』のハイパーセンサーが俺へと伝えてきた。

こちらコールもそれに合わせて右手に唯一の得物である『テンペスト改』を呼び出し、その手にしっかりと握り締める。

「ここまで来ちまったからには、本気でいかなとな。シャルル」

「うん、お互い頑張ろう」

そして俺とシャルルはどこからか鳴り響いたブザーの音を合図にして、ほぼ同時にその場から加速した。

スピード速度ならこちらに分がある。俺はそれを活かしてシャルルとの初期配置によって出来ていた間合いを一気に詰める。

「先手必勝っ！」

「そうはさせないっ！」

シャルルは胸の前に両手を突き出すと同時に、淡い光と共にその手には六二口径連装ショットガン　レイン・オブ・サタデイ　が一瞬で姿を現す。

（迎撃してきたか……なら！）

俺の頭の中ではすでに“初撃を避けられるパターン”、“迎撃されるパターン”、“攻撃に成功するパターン”を組んである。そして一番起きる確立が高かった“迎撃されるパターン”を軸にして、アクションそれに対応した行動を思考する。

ショットガンは面制圧。横に回避したとしても、こちらに流れはやってこない。ならやることは決まっている。

俺は レイン・オブ。サタデイ が火を噴く直前に、地面を蹴って空中に身を投げ出す。ちょうど全身が2mほどジャンプした後に、その下を銃弾の雨が通り過ぎた。

「おらっ！」

「ぐっ！」

シャルルの目の前に着地すると同時に両手で持っていた テンペスト改 を振り下ろす。しかしそれはシャルルが後ろにステップしたことで避けられ、エネルギー循環刃がアリーナの地面に突き刺さり、地面の破片を激しく散らす。

懐に入ってきた俺にシャルルは焦る様子もなく、後ろにステップした勢いのまま後退しつつ レイン・オブ・サタデイ で牽制をかけてくる。それをこちらでも冷静に避け、時には テンペスト改 で兆弾させながら接近し、いつか出来るであろう隙を窺う。

しかしやはり、専用機持ちという肩書きは伊達ではない。中々隙を見せないシャルルと止むことのない牽制射撃に痺れを切らした俺は、目の前に迫っていた散弾をエネルギー循環刃で溶かすことで無効化すると、体勢を思い切り低くして加速した。

（こいつを、試してみるか？）

手元には テンペスト改 が握られている。そして、これには以

前には無かった新たな使い道カードを持っている。

「ブラックゲイル！」

刀身を二つに分けるようにその銃身を除かせる　ブラックゲイルの銃口から、薬莢から発せられる発砲音と共に徹甲弾を一発だけ放つ。それはまるでビームのように真っ直ぐと『ラファール・リヴアイヴ・カスタム？』の右手に伸びていき、その次の瞬間にはその右腕が後ろに引っ張られるようにして弾かれ、手元から　レイン・オブ・サタデイ　が零れ落ちる。

今まで射撃武器なんかはティナとのアメリカでの模擬戦闘ぐらいでしか使っていなかったが、その時の勘はまだ生きていたらしい。これを好機として俺はその構えのまま滑るようにして再びシャルルに接近を仕掛ける。

するとシャルルも空となった右手に近接ブレード　ブラッド・スライサー　を瞬時に呼び出し、そのまま振り構える体勢に入る。そして俺が袈裟斬りに放った　テンペスト改　のエネルギー循環刃と切り結んだ。互いの得物の接点から弾け飛ぶ火花が飛び散り、金属が激しく擦れあう音が耳を劈くつんざ。

「もらったよ！」

「させるかよっ！」

シャルルは左手に持つ　レイン・オブ・サタデイ　の引き金を引いた。その前に俺は後方へと加速して回避を図ったが、やはりショットガンの特徴である面で飛んでくる銃弾が肩のアーマーを掠った。シールドエネルギーの消費は微々たるものだが、これで再び間合い

が開いてしまった。

「押したり引いたり……、これが『ミラーージュ・デ・ザイト砂漠の逃げ水』ってヤツか」

シャルルは俺の様子から目を離さずに、今まで持っていた近接ブレードとショットガンが消え、両手に五五口径アサルトライフルヴェントが現れる。そしてその銃口は俺の方へと向き、間髪入れずに銃弾が降り注ぐ。

それをP I C特有のスケートで滑るような滑らかな動きでかわし、シャルルの周りを円を描くようにして周回する。俺が通り過ぎた後を追うようにしてアサルトライフルの銃弾がアリーナの地面を穿つ。

「でも、突破するしかねえよなあ！」

『操縦者よりC L Bの使用申請。受諾。現存シールドエネルギーよりC L Bの最大稼動時間を解析。使用可能時間は1分59秒です』

俺が駆る『アズール・カミティ』の背中から生えている特殊大型推進翼から、圧倒的な密度で紅い粒子が放出される。ハイパーセンサーに示される各部位へのエネルギー供給率が大幅に上昇し、テンペスト改が纏まとうエネルギー循環刃が大きくその刀身を伸ばす。循環する効率が上がったことでそのスピードも増し、刃が帯電しているように紅い電磁波を放ち始める。

「それがC A R I B E Rシステム……。でもっ！」

「うおおおおおッ！」

テンペスト改を両手から右手に持ち直し、軽く振った後に一

気にその場からシャルルの懐へと向かって加速する。コンマ数秒と経たずに『カラミティ』は音速の壁を突き破り、ソニック・ブーム衝撃波と共に飛翔する。

文字通り一瞬でシャルルとの間合いを詰めた俺は、ここまでの勢いを全て テンペスト改 に乗せて、シャルルへと振り下ろした。

恐らくハイパーセンサーが無ければ反応出来なかったであろう、瞬間移動してきたとも思える俺と『カラミティ』にシャルルの反応は若干遅れ、それでも『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』が装備しているシールドを自身と テンペスト改 の間にすべりこませた。

ズガンツとシールドと テンペスト改 のエネルギー循環刃がぶつかり合う大きな音がアリーナ全体に響き渡る。しかしシャルルを守るシールドの表面は テンペスト改 の荒ぶる刃によって段々と削りとられていく。

テンペスト改 のエネルギー循環刃はその名の通り、刃がエネルギー質で出来ている。そしてそのエネルギーは常に刀身の中でチエーンソーの刃のように循環していて、“食い破る”ようにして対象を斬り裂く。

そしてついにシールドの耐久率が限界を向かえ、その表面を テンペスト改 が食い破った。その衝撃でシールドは高々と弾き飛ばされ、その下にあった グレースケール灰色の鱗殻 が姿を露にする。

「っ！」

自分が押されていることを感じているのか、シャルルが両手に持

つアサルトライフルを至近距離から放つ。俺はそれを“横にステップすることで全て避け切り”、そのステップをした時に生まれた運動エネルギーを殺さないようにして体を捻り、横から叩きつけるようにして テンペスト改 の刃を抜き放った。

……ピットに控えていた一夏をめがけて飛来してきた砲弾に向けて。

「ぐうつ!?!」

「うわあっ!?!」

砲弾は真つ二つに横に裂け、一瞬の間を置いた後に爆発。斬った本人である俺とその近くにいたシャルルは、この爆発の余波を受けて別々の方向へと吹き飛んだ。

何とか空中で体勢を立て直し、砂煙を立てながら地面へと着地する。咄嗟のことだったので、殺し切れなかった勢いで着地地点からすこし滑ってから完全に止まった。とりあえずCLBを強制終了させ、すかさずハイパーセンサーで発射地点であろう向かい側にある電磁滑走路の方を見やる。
レールカタバルト

「ほう、今の攻撃に反応するとは。一応、口だけではなかったというとか」

「……ラウラ」

俺の周りを漂う砂煙を越えた向こう、電磁滑走路の末端部分にそれは居た。漆黒色に輝く機体、間違いない、第三世代型のドイツ製IS『シュヴァルツェア・レーゲン』だ。

そしてその右肩に装備されている大型のレールカノンから、薄く煙をあげた薬莢が排出される。恐らく先の砲弾はあれから発射されたものなのだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

吹き飛ばされたシャルルも上手く着地できたらしく、その視線は油断なくラウラへと注がれている。この思わぬ光景に出くわした観客席にいた生徒達も、わずかにざわめき始めた。

「別に貴様達のお遊びの横槍を入れに来た訳ではない……。織斑一夏、貴様も専用機持ちだそうだな」

「……それが、なんだよ」

「なら話は早い。私と戦え」

「嫌だ、理由がねえよ」

そう言って一夏はラウラの対戦申し込みを断るが、その両目はいまだラウラを捉えたまま、普段は余り見せないシリアスな雰囲気を纏って相対する。

「貴様にはなくても、私にはある。貴様が居なければ、教官が大会二連覇という偉業を成し得ただろうことは容易に想像がつく。しかし貴様がそれを――」

右目に紅く鋭い眼光を収める顔が、内から湧く憎しみによって歪む。右肩の大型レールカノンに砲弾が装填され、その砲口が再び――

夏がいるピット脇へと向けられた。

そしてラウラから、以前に俺へと向けていた鋭い眼光とは別種の、怨敵にむけるような憎しみや恨みがこもった殺意さえ感じられそうな物が一夏へと注がれる。

ラウラ・ボーデヴィツヒがここまで一夏を恨む理由は、一夏の姉であり、ラウラの教官でもあった千冬ゆえんさんに大きく所以する。

あの黒い眼帯に覆われている左目はセレナの右目同様に、ISとの適合性を上げるために『ヴォーダン・オージェ』が埋め込まれている。擬似ハイパーセンサーとも言すべきそれは、移植後に何故か起動状態のままカット出来なくなり、IS訓練で遅れをとるようになった拳句、『出来損ない』の烙印を押されてしまう。

そんな時に彼女の前に現れたのが千冬さんだ。そんな失意の底に埋もれていたラウラを引っ張り上げ、再び部隊の中で最強と呼ばれるまでにした彼女に、ラウラは心酔した。そしてラウラは知ったのだ。千冬さんの栄光に影を落とした者がいた、と。

誘拐された一夏を救う為に、大会二連覇という偉業を蹴ってしまったことを。

「私は貴様という存在を認めない、認めてなるものか！」

「ぐ、させるかよっ！」

大型レールカノンから放たれた砲弾、対ISアーマー用特殊徹甲弾が一夏に届く前にその射線軸間に割ってはいり、再び横合いから斬り裂いた。今度は爆発に巻き込まれるよりも前にそこから離脱し、

そのままラウラと対峙するように空中で止まる。

「くっ、貴様ア、邪魔をするなァッ！」

「悪いが、それは無理だ。友人を見捨てるなんて真似を、俺は出来ない人間なんぞでな」

右手に構えている『テンペスト改』をゆっくりと下ろし、こちらモラウラの眼光に押し負けないように真っ直ぐとその目を見る。左目は眼帯に覆われて見えないが、紅い右目の方からは色々な感情が滲みでていた。怒り、憎しみ、恨み、負の感情が渦巻くその瞳は、痛々しいほどに紅く濁っていて。

「なあラウラ。どうしても一夏と戦いたいなら……まずは俺と戦って勝ってからにするんだな」

「なっ、おい春馬!？」

後ろにいる一夏から驚いたような声が上がるが、今は無視だ。俺がでしゃばって良い問題なのかは分からない。でも放っておいても良い問題ではないことは何となく感じられる。

俺は右手の テンペスト改 をゆっくりと両手に持ち直すと、ラウラに刃を向けるようにして構える。

「なら、望むようにしてやるッ!!」

ラウラの声色は怒気が混ざり、普段の冷徹なものから激しいものに変わっている。右肩に装備されている大型レールカノンが折りたたまれ、代わりにその両手からプラズマ手刀が出現し、そのまま空

中にいる俺に向かって飛び出す。

俺はそれを避けるつもりは全くない。たとえこれが間違った選択でも、ここで避けることは何か違っていると俺の勘が伝わってくるのだ。だから、俺はそれを迎え撃つ為に テンペスト改 を振りかぶって

突然目の前に現れた、大きな黒い壁によってそれは防がれた。

「ッ！ そこをどけ、大尉！」

テンペスト改 のエネルギー循環刃がこの黒い壁を食い破ろうと唸るが、激しく火花を散らすだけでびくともしない。全く微動だにしない黒い壁の向こう側から、ラウラの物と思しき怒声がかかる。

俺はこの黒い壁を突破するのは難しいと悟って、一旦その場から後ろへと跳んで距離をとる。俺が離れたのを感じ取ったのか、黒い壁はゆっくりと横にスライドするように動いて今まで見えなかった向こう側を晒す。

「少佐、この第三アリーナに教師が接近してきています。このまま乱闘騒ぎに持ち込むのは得策ではありません」

その声は抑揚がなく、ひどく無機質で冷たく乾いていた。でも、その声を、その声色を、俺は知っている。いや、知らないわけがない。

「以上の理由より、一時的撤退を提案します。よろしいですか？」

「……ッ、了解した」

ラウラは渋々と言った様子でこの場から離れていく。そして残されたのは『カラミティ』を纏う俺と、『黒い鎧』を纏う銀髪碧眼の少女。

「初めまして”。私の名前はセレナ・ボーデヴィツヒ、階級は大尉であります」

俺の方へと向き直った少女は、確かにそう言った。驚きによる衝撃で頭の回転が完全に止まってしまっている俺へ、容赦なくその冷たく乾燥した口調が降り注ぐ。

「そして、私が駆るIS『シュヴァルトツェア・ケーニツヒ黒き王』です。以後、お見知りおきを」

そう言って少女は、恭しく礼をした。

第二十五話 空を覆う灰色（後書き）

誤字脱字、ご意見ご感想などお待ちしております。

それでは ノシ

第二十六話 三人集えば姦しい、実際は騙だが。(前書き)

このごろvirgin's high!を聴きながらプロットを作っています。

ISとぴったりな曲だと思うので、皆様もよかったですらどうぞ^^

第二十六話 三人集えば姦しい、実際は鬨だが。

「セ……レナ……？」

「はい、パーソナルネーム個体識別名前はセレナ・ボーデヴィツヒ。遺伝子強化試験体C-0038です」

あくまでも無機質に。その少女は俺でも無意識に出た言葉に反応し、まるで電子機器か何かのような応対を試みせた。これは一体どういうことだ？ セレナの身に何があったんだよ。

そして、あの見たこともない黒いISは何なんだ。

機体色は漆黒、ところどころ『シュヴァルツエア・レーゲン』に似ているような部位があるから、姉妹機だということは分かる。異なっているといえば、そのISの周りを囲うように浮いているセシリアのビットのような物と、右肩に大型バス程はあるかというくらいに巨大な物が付いていることが。両手にはラウラの『シュヴァルツエア・レーゲン』の大型レールカノンと同じものが銃のように握られていた。

「ハ、ハハハ……冗談きついで、セレナ？」

「冗談ではありません。ここで起きている状況は、全て事実です」

「春馬君ごめん、大丈夫？」

思考がすでに使い物にならなくなってきた俺に横から話しかけてきたのは、さっきまで模擬戦に付き合ってもらっていたシャル

オープンチャンネル
ルだ。開放回線で俺の名前を呼び、俺の真横まで上がってきたらしい。

「春馬、どうなってんだよこれは……」

「俺が聞きたいくらいだつて」

シャルルから少し遅れて、ピット脇で待機していたはずの一夏もこちらにやってきていた。動揺を隠せない俺たちに対して、依然セレナは様子を変える感じはない。気持ちの悪い空気が重くのしかかってくるだけだ。

「今日は『シュヴァルツェア・ケーニツヒ』の紹介と、それに伴う宣誓をしにただけですので戦う意思はありません。どうしても、というのなら話は別ですが」

「シュヴァルツェア・ケーニツヒ……」

シャルルがその名前をセレナから聞いた途端、なにか頭の中で引っかかったらしい。ぼそりとその名前を呟くと、咀嚼するように口の中で再度呟きながら何かを思い出そうとしている。

「お前も、ラウラと同じ仲間だったってことか？」

「はい、仲間という分類カテゴリに入るかは疑問ですが。ラウラ少佐は私が所属する『シュヴァルツェハーゼ』の隊長です」

一夏が自然とその体勢を雪片式型を構える、臨戦態勢のそれへと変わる。しかし、それを見たセレナは顔色一つ変えることはなく、ただ周りに浮いていた鈍重なビット5枚が急に動きを変えて、セレ

ナの腰の部分にマウントされた。

「質問は以上ですか？ では、もう一つの目的であった“宣誓”をさせていただきます」

セレナは様な反応を示す俺たちを見回し、それからゆっくりと自身の『シユヴァルツェア・ケーニツヒ』のフレームで覆われた右手で指差した。

その鋭く尖った指先は、まっすぐと俺の方向を指差していた。

大分落ち着いてきた俺は、代わりにまっすぐとセレナの目を見る。いつもは透き通るような碧眼は、今日は荒れた海のように濁っていて不透明だ。虚ろまでとはいかないが、生きた者の目としてはあまりにも冷酷で、乾燥している。

そこに葛藤の色は見当たらなかった。

「神城春馬、私はあなたを否定する　　！！」

そして静かに、“宣誓”の音がアリーナの中で響き渡った。

「いやーなんか、大変なことに巻き込まってしまったな。悪い」

「いいさ、困った時はお互い様だろ？」

「僕も、嫌だとは感じてないよ」

あれから場所は変わって、今は食堂。絶賛夕飯中だ。あんなにシリアスだった空気はどこへやら、今の俺たちを包む空気は厨房から流れてくる熱気も相まって、ほのぼのと温かい。

といって、何も考えずほのぼのしているわけではない。シャルルがセレナから発せられた単語『シュヴァルツェア・ケーニツヒ』に思い当りがあつたらしく、その調べた結果を報告したいからということが集まったのだ。

ちなみに、今日の俺の夕飯はチャーハン定食である。チャーハンにご飯が付いてるって、なんというかなあ。

「どこかで聞いた名前だなんて思ってたんだけど、アレはドイツの第3世代型ISみたい」

「じゃあやつぱり、『シユヴァルツェア・レーゲン』の姉妹機か？」

「……うん、その通り。あれ？ 実はもう春馬ってケーニッヒのこ
と調べてあるの？」

「いや、推測だよ。機体色も、ボディフレームも似た雰囲気があつ
たからな」

シャルルにはついさっき「俺のことは呼び捨てで呼んでくれ」と
頼んである。その前に「好きなように呼んでくれ」と言っていたが、
まさか“君”付けだとは思わなかったし。シャルルは快く了解して
くれて、これからは一夏と同じ呼び捨てで呼んでくれるそうだ。

「相変わらず頭の回転はやいな、春馬は。俺は状況がよく掴めなか
ったぜ」

「そういえば、模擬戦の時もすごかったね。苦戦するかもとは思っ
てたけど、まさか追いつめられるなんて」

「ああそれは……いや、なんでもない。まああれだな、日ごろの鍛
錬の賜物ってことだな！」

顔に一瞬出かけた陰りがばれないように、わざと大きな声でおど
けて見せる。シャルルと一夏は苦笑した後、各々の夕飯に手を付け
た。どうやら上手くごまかせたようだな。

（まさか シャルルの動きがゆっくりに見えた　なんて言えないよな）

これは別に例えでもなんでもない、“ 実際に見えた ” ことだ。シャルルの行動が時々ひどくスローモーションに見え、それを避けようと思えば何故か避けれている。

最初の『レイン・オブ・サタデー』の攻撃を跳んで避けたのだった、いつもの俺であれば当たっていた。しかしあの時は発射されたはずの散弾が止まったように見え、見事にかわすことが出来た。

これは別に今起きたことじゃない。アメリカでティナと模擬戦をしていた時だって、IS 学園に来てからもそんな事は時々起きていた。

（このごろは頻度も増えてきてるし、どういうことだ？）

今までは一戦で起きるか起きないか、くらいだったのに対し、今回のシャルルとの戦闘ではほぼ全ての攻撃に対して起きている。

（今度、母さんか父さんに相談してみるか）

待機状態の『アズール・カラミティ』を横目で見やり、視線を目の前に座る二人に戻す。

「……さて、そろそろいいかな？」

「俺は構わないぜ。春馬は？」

シャルルと一夏の前には空になった皿とトレーが置いてあった。

俺が思考に没頭している間に食っちゃったらしい。ずいぶんと食うのが早いな、おい。

俺は止まっていた手を動かし、チャーハンを口にする。うん、旨い。軽く咀嚼した後に飲み込み、一夏への返事として首肯をする。

「分かった。じゃあ、『シュヴァルツェア・ケーニツヒ』が『シュヴァルツェア・レーゲン』の姉妹機さっき話したよね」

「ああ、ドイツの第3世代型ISだっけか。そこまで聞いたな」

「うん、『レーゲン』が高速戦闘型、『ケーニツヒ』が広域殲滅型。姉妹機だから、やっぱり二機で連携がとれるようになってる」

シャルルはそういうと、自分のポケットから携帯端末を取り出してテーブルの真ん中に置く。そこからホログラム投影されているのか、テーブルの上に何かの資料のような立体映像が投射された。

「これは？」

「ドイツが公開してる資料だよ。自力で調べたから信憑性は薄いけど」

「十分だ、さんきゅ」

シャルルにお礼を言った後、その資料に目を通す。ホログラム投影とはいえ、何の問題もなく文字が読めるその画質からこの携帯端末は中々に高いものと推測した。……ってちげーよ、資料を見ないと。

「A I C……？ ああ、アレか。両方とも積んでるってことは、結構に厄介だな」

「この姉妹機は火力が高いからね。特に片方はあの『ケーニツヒ』だし」

「あの『ケーニツヒ』？ シャルル、その『ケーニツヒ』ってI Sは有名なのか？」

「一夏は知らないの？ 現存しているI Sの中で“最強”のI Sだよ」

「“最強”……？」

俺はシャルルの口から出た言葉に、思わず首を傾げる。たしかI Sで最強なのは、この学園の生徒会長である更識盾無さうしきたてなしじゃなかったか？ まだ会ったことはないが。いつになったら会えるのかなあ、やっぱり銀の福音戦後なのか？

「うん、スペック上は。他のI Sとは比にならない火力と防御力。3000を超えるシールドエネルギーを持った、化け物I Sで有名なだよ」

「3000……！！ しかもA I C付きだろ、勝てるかそんなもん！」

ちなみにI Sのシールドエネルギーは大抵800くらいが平均値だ。それのおよそ3倍強ということは、それだけタフなI Sだということになる。

A I Cとはアクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称で、もともとI Sに搭載されているP I Cを発展させたものだ。発動すると、対象の動きを任意に停止させることができるという理不尽極まりないシステムだ。

逆に欠点としては使用する時に多量の集中力が必要で、その集中的な意味で複数相手や、物体ではないエネルギー兵器などには効果が薄い。『カラミティ』は『テンペスト改』のエネルギー循環刃があるが、剣であるがゆえに手元を停止されたらどうしようもない。『ブラックゲイル』は実体弾なので、止められてしまうのが目に見える。

「あとシールドビットなんて変わったものがあるみたい」

「シールドビット？」

「うん。ほら、一夏が構えた時にセレナさんが収納してたものだよ」

セシリアのビットみたいだなと思っていたが、どうやら間違いではなかったらしい。シールドビットなんて言う名前から攻撃目的ではなさそうだ。

「後、『ケーニツヒ』は実験機として陽電子砲を装備してる。連発は出来ないみたいだけど、多分、当たればどんなI Sでも一撃だと思っ」

「今、A I Cで動きを止められてその陽電子砲で焼かれる未来が見えたんだが？」

「あはは……」

シャルルは困ったように笑うだけなので、実際にあり得る話なのだろう。ちくしょう、セレナが専用機持ちだったってことでなくても驚きなのに、それがしかもこんな化け物ISなんて、どんなチートキャラだよ。

「でも、陽電子砲って直進しないんじゃないか？ 重力かなにかの影響で」

「そこまでは僕もさすがに……。まさかIS学園に『ケーニツヒ』がいるなんて思わなかったし……」

「そうか……。ありがとな、本当は俺自身が調べないといけないことだったのに」

「いいよ、僕が勝手に調べただけだし」

「ふ、二人とも、サッパリ話が分からないんだが……」

その弱々しい声がする方向に振り向くと、一夏がテーブルに突っ伏すようにして倒れていた。どうやら彼には理解が及ばない領域の話だったらしい。このごろIS制御の成長が目覚ましい一夏も、理論学習のほうは相変わらずのようだ。

「そこらへんは部屋に戻ってシャルルから聞けばいいんじゃないか？」

「さりげなく僕に丸投げしたね、春馬……」

「はっはっは、ばれたか」

そういえば、部屋にもどったらセレナはそこにいるのだろうか。
……いや、いないな。こういう時は大抵、そう都合のいいことが起こるはずはない。

「あ、春馬！ やつと見つけた！」

「ん？ おう鈴、お前もう飯食ったのか？」

「食ったのか？ じゃないわよ！ 見てたんだから、第3アリーナ
！」

第3アリーナということは、俺たちが今日使っていたアリーナだ。ということはバッチリあれを見られていたらしい。あの時はシャルルとの模擬戦とかで色々といっぱいいっぱいだったからな。気づかなかった。

「……どうすんの？ まさかあんなことになるなんて思ってたけど」

「どうするったって、また体張って解決するしかねーだろ。所属不
明機の時みたいに」
アンノ

「それで、また死にかける……と。まあ私は別に困らないけど」

そうやって茶々を入れてきたのは、このごろ影が薄い……もとい、カップアイス片手に鈴の横に立つティナだ。またカロリー高そうなもの食ってるなお前は。

「あ、でも財布が無くなるっていう点では困るかも」

「……今、人のことを財布扱いしなかったか？」

「あ、これおいしい」

「聞けよ」

俺の声を完全にスルーしたティナは再び手元のカップアイスに手をつける。もういやだこの人。まあアメリカの居た頃からもう慣れたが。……なんか悲しくなってきた。

「……ま、とりあえず頑張なさいよ」

「口の中にもものを入れながら話すことじゃないよな……それ」

ティナはそれだけいうと、いつものように片手をヒラヒラ振りながらさつさと食堂から出て行ってしまった。結局何がしたかったんだ？ ティナは。

「……でも頑張るんでしょ？ 春馬は」

「当たり前だろ、セレナもラウラも友人だしな」

「友人って……ラウラなんてめっちゃめっちゃ嫌われてたじゃない」

「別に嫌われてたって友人なんだよ。第3アリーナにいたなら知ってんだろ？」

俺は呆れたといわんばかりに肩をすくめる鈴に対して、にっと不敵に笑って見せる。そうだ、セレナの様子なんて関係ない。困って

いるのが分かれれば助ける。それが俺という、神城春馬という人間の習性じゃないか。

「友人を見捨てるなんて真似、俺は出来ない人間だからな」

そして、こんだけ騒がしい一緒に居て楽しいこの場所にあの困った姉妹を招待してやろう。そう心の中で決めた俺は、右腕につけてある待機状態の『カラミティ』を見て、「頼むぜ」と呟いた。

第二十六話 三人集えば姦しい、実際は鰯だが。（後書き）

ゴールデンウィークなんてなかった。どうも玉露飴です。

早くも二巻あたりも中盤戦です。ケーニツヒの仕様は私が一晩で考えてみました。もちろん弱点とがありますよ。でもそれは戦闘中に見つけていくのがロマンというものじゃな（ry

誤字脱字、ご意見感想などお待ちしております。

でわ ノシ

第二十七話 雨は降れども（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

第二十七話 雨は降れども

「……おい」

「はい、何でしょうか。ラウラ少佐」

織斑一夏に宣戦布告してから、今は夜。私は学園に転入した際に使用許可が下りた自室で愛用のナイフを研いでいる。私は使う武器など選ばないし、そのように訓練を受けてきた。がやはり、長く使っていると愛着ぐらいは人並みに湧く。このナイフはその唯一の本だ。

そして、そんな私の横。真新しい椅子に腰かけて、電池が切れたようにピクリとも動かずに虚空を見つめ続けている者が一人。

「アレはどういうことだ、大尉」

「アレ……ああ、私が神城春馬に仕掛けた件くだんですね」

「そうだ。私は貴様にあんなことをしろと命令した覚えはないが？」

「はい、私もそのような命令を受けた覚えはありません」

「どういうつもりだ」

冷たく、簡潔に問う。私は“軍人”ラウラ・ボーデヴィツヒであり、この“部下”セレナ・ボーデヴィツヒの上官なのだ。命令以外の行動など許されるものではない。そして現に今、セレナは自身が勝手に行動したことを認めた。

故に私は上官としてけじめを、つけてやらねばならない。

相手が反応するよりも先、私は座っていた椅子から飛び出すように立ち上がり、横に座っていたセレナの右肩を左手で掴んでからそのまま壁に押し付ける。ダンツと鈍い音が、静かな部屋の中で染みるように響いた。

そしてセレナの首元には、私がつい先ほどまで研いでいたサバイバルナイフを突きつける。右手で握っているそれはセレナの頸動脈のほんの少し手前で止まっている。

「何をするのですか、少佐」

少し私が腕を突き出せば、この部屋に紅い華が咲くことになるだろう状況であるのに。私とური二つの姿を持つ目の前の彼女はひたすらに平坦に、それこそ生氣すら感じさせないほどに感情のない声で訊ねてくる。

こんな所業、よほど修羅場を潜り抜けてきた英兵か、それともクスリで恐怖心を消している者ぐらいしか出来ないだろう。自殺を選んだ人間でさえ、首を吊る手前で死に恐怖するというのは。

「やはり……貴様、『ヴォーダン・オージエ越界の瞳』を発動しているな」

「……………」

「……黙秘、か。まあいい、貴様の都合など私には関係ない。ただ命令に従えばいいのだから」

私はそう言っていると壁に押し付けていた右肩を放し、突きつけていたナイフも首元から離す。もし“アレ”をセレナが発動しているのなら、脅迫や尋問の類は意味を成さず、彼女の目にはただの目の前で怒鳴り喚き散らす人物が映るだけだ。

拘束から解放されたセレナは若干みだれた服装を正す気配もなく、壁に押し付けられた拍子に倒れてしまった自身が座っていた椅子を起こして座り直す。その顔に表情はなく、どこまでも無。私と違い、青いその瞳は深海のように光を失い、眼帯に覆われた右目も相まつてまるで機械のような雰囲気をもとっていた。

「ドイツの人形か。確かに、貴様にはピッタリな称号だな」

そんな私の嫌味にも、セレナはまるで聞こえていないかのように全く反応しない。口は閉じられたまま、ただひたすらに虚空を見つめ続けている。

チクリ、と。胸のどこかが痛んだ気がした。

「元より、貴様が『怖い』などと言うからだ。自業自得だな、同情しても良いくらいに」

ああ、何をしているんだ私は。この状態のセレナには、私がどんなに彼女を貶しても応えが返ってくることは無いというのに。

「だが、皮肉なものだな。そんな貴様の『越界の瞳』は無事に動かし、私のものは不調を来すなど」

私の声に戻ってくるのは、空しい空白だけ。時折に外で風が窓を叩く音が聞こえてくるくらいだ。

私は右手に握っていたままだった、丹念に研ぎ上げたサバイバルナイフをホルダーに収め、ベッドの枕下へと放り投げる。放物線を描いてベッドの柔らかな上へと落ちたそれは、軽くバウンドして静かになる。

「そつえば、貴様も神城にからかわれたようだな。本当にアイツはうざったい奴だ」

“神城”という単語が私の口から出た瞬間、僅かに、本当に僅かだがセレナの表情が揺らいだ気がした。長い間彼女の無表情を見てきたから分かる、感情の揺らぎ。

私の口は自然と、その小さなきつかけを逃さまいと饒舌になっていった。

「休み時間になる度に私の席にくるんだ。まさか、私に気でもあるんじゃない」

「就寝時間になりました。では少佐、命令通り今夜はこの部屋のベッドを使用して睡眠を摂ります」

私の言葉を押し切り、揺らりと椅子から立ち上がったセレナはそのまま目の前のベッドへと潜りこみ、そのまま動かなくなった。

それとほぼ同時に静かな寝息が聞こえ始める。まるで機械かのような切り替えの早さだ。

「機械……か」

ベッドの上で奇妙なほどに綺麗な姿勢で眠るセレナを見届けた後、私は椅子から立ち上がって今までずっと閉めていたカーテンを開く。いつの間にか外は雨が降っていたらしく、それほど激しくもない雨がしとしと月明かりもない闇夜を埋めている。

おもむろに私は右手で戸のガラスに触れる。そこは雨で冷えてしまったのか、ひんやりとしていて、それは手のひらの温度を奪っていく。

「なあ……。私が、悪いのか？」

後ろを振り返れば、先と変わらずにベッドで眠っているセレナの姿がある。でもこのセレナは私の知っているセレナではない。少なくとも“顔に眼帯が巻かれる前”のセレナでは、決して。

「私が一人で……、一人で生まれてくれば、お前は」

試験管ベビー。遺伝子強化素体としてDNAをいじりまわされた私は、顕微鏡の下で命を授けられ、ヒーターの温もりで成長し、遺伝子強化試験体C-0037として生まれ落ちた。生まれるはずだった。

しかしいつからか、同じ鉄の子宮のなかで私と同じ姿をした者が現れた。それは想定外の何物でもなく、処理しようにも出来ないまま私とその者は“双子”として登録された。

生まれて、成長し、戦うための知識を脳に押し込まれ、攻撃するためだけの技術を身体に染みこまされた。

私はそれに苦を感じたことはなかった。むしろ喜びを感じていた

のかもしれない。一日、また一日と経つにつれて確実に強くなっていく自分。いつの日か『成功作』と呼ばれるようになった私は、ふと自分にうり二つの人物を思い出した。

性能は平凡。強化されているにも関わらず常人と同じレベルの技術。覚悟も平凡、精神も平凡、判断力も平凡。彼女は『失敗作』と呼ばれていた。

そんなある日、彼女はついに言うてはならない言葉を口にした。それは狙撃銃による狙撃の技術訓練の時。狙撃銃を握った彼女は、当時の教官の目の前で呟いたのだ。

怖い、と。

銃を握る自分が怖い。銃で狙う自分が怖い。引き金を引く自分が怖い。引き金を引いた後に来る充足感に酔いしれる自分が怖い、と。

彼女には『改良』が施されることが決定した。徹底的に『恐怖心を消し、『命令』に忠実に動く駒として。彼女は生まれ変わった。

淡々と銃を放ち、淡々とナイフを振るい、淡々と各兵器を操っていく。その上官の号令一つで動くその姿をみた同期達が、いつの間にか彼女を 人形 と呼ぶようになった。

そして現れた、ISという名の存在。圧倒的にして絶対的、現存兵器を鉄クズ同然にするその力の前に世界は恐怖し、その力を手に入っていた。

そして 人形 はもう一度『改良』された。『越界の瞳』と呼ばれるそれは、ISとの適合を高め、さらに自身を強化するもの。常

人では反応できないものにも対処し、常人では不可能なものにも対応する。それは私が求めていたものでもあった。

でも、世界は思う様には回ってくれなかった。

「いや、私が居なければ、お前が私として居たのかもしれないな」

戸のガラスに触れている右手は、とうに冷え切っている。それでも私はそこから手を離せなかった。目の前で眠っているセレナに、私は静かに語り続ける。

「お前は……、私をどう思っている？」

「……………」

「やはり、憎んでいるのだろうか？ それとも、恐れているのだろうか？」

「……………」

「どちらにしろ、好かれている、とういうことはないのだろうか」

「……………」

無音。外から聞こえてくる雨音が、枕もとのランプのオレンジ色の灯りと共に部屋を包む。私はようやく戸のそばから離れ、カーテンを閉め直す。するとついに雨音もさえぎられて聞こえなくなる。そして聞こえてくるのはセレナの静かな寝息だけ。

どうせ起きないのだろうが、私は静かにゆっくりとセレナのベッ

ドに腰掛けた。キィとベッドのスプリングが軋む音がやけに大きく感じられる。

「お前は今、どんな夢を見ているんだ？　それとも、夢も見れなくなっているのか？」

そつと私の右手がセレナの髪に触れる。先ほどシャワーに入ってからだろうか、フワリとシャンプーの匂いが鼻をかすめる。

それからゆつくりと、撫でるようにして髪を梳く。すると私はなぜか自然と頬が緩み、心に冷たい感触が湧き出てくる。

「本当にお前は私にソックリだな。廊下で何回間違えられたか数え切れないぞ」

私が『失敗作』と罵っても、上官に『役立たず』と怒鳴られても、同期の兵士に『平凡』と馬鹿にされても。彼女は笑顔だけは絶やさなかった。どんなに泣いても落ち込んでも疲れ果てても。最後には必ず、華のように笑うのだ。

私がこの学園に向かうように命令した時も、最初は怯えていたくせに、結局は笑ったのだ。

「了解」と、そう言って笑ったのだ。

「私は……ダメだな。上官としても」

お前の、姉としても。

私の右目からはいつの間にか、その冷たい感触が零れ落ちていた。

* * *

「よお、昨日ぶり」

「……何の用だ」

「いや、昨日の今日で何の用だつて。決まってるだろ？」

今日の分の授業が終わり、放課後。部活動というものにまだ所属していない俺達は、大抵の場合は解放されたアリーナでISの自主演習を行う。もちろん俺のその一人であることは、前にも言った気がするな。

「今日は先生に無理言つてアリーナ借りてきたんだ。制限時間付きだけだな」

「知らん。貴様に構う時間など私には」

と、そこでラウラの言葉が唐突に途切れた。そしてなぜか俺の顔を凝視し始めた。何だ、一体彼女の中で何の考えが巡っているんだ？ さっぱり見当がつかん。

「いや、気が変わった。いいだろう、特別に相手をしてやる」

「お、おう」

ラウラそう言うなり、すぐに教室を出て行ってしまった。さっきのは一体なんだったのだろうか。今までみたいにただ睨みつけていた訳でもなさそうだったし、何か見定めるような、そんな真剣さが垣間見えた気が……。

「見定める……？」

一体俺の、何をだろうか。ダメだ、やっぱりさっぱり分からない。ラウラ程の実力ならば、俺なんかの実力を測るなんてことはしなくても勝てるはずだろうし。

「そつだ、今は戦いに集中しないと」

俺は頬を軽く叩いて、もやもやとした考えをとりあえず追い出す。先の行動がなんだったにせよ、考え事をしながら勝てる相手ではない。むしろ俺が挑んでいるようなものなのだし。

「真実は戦いの中に……てか」

教室の窓を見れば、さっきまで降っていた雨は止んで雨雲の切れ目から夕日が差し込んでいた。それは地上へと突き刺さり、まるで天からの光の剣のようにも見てとれる。

「正義を気取るつもりはないが、『友達』ぐらいならいいよな?」

これは道を外れてしまった友人を引き戻すための、絶対に負けてはならない、勝たねばならない戦い。幕開けは、もうそこまで迫っていた。

「準備はいいか? ラウラ」

「ふん、貴様は自身の心配をすべきだな」

私の目の前に自身の専用機『アズール・カラミティ』を纏い立っている男の名は、神城春馬。両親にIS研究者を持ち、そのどちらもが天才と呼ばれるに等しい人物だ。彼が纏っている専用機も両親によるハンドメイドらしい。

しかし、今の私にはそんなことは関係ない。この無駄としか思えない戦闘に参加したのも、ふと私の頭をよぎった考えの答えを見出すため。

昨晚、セレナにしゃべりかけていた時にふと漏れた『神城春馬』の名前。その時、確かにセレナは僅かながらに反応したのだ。『越界の瞳』によって心を押しつぶされているはずのセレナが、たったその言葉だけで、あの深海のように黒ずんだ目に光が一瞬だけ灯っ

たのを、私は覚えている。

（織斑一夏への制裁も最優先。だが……）

この第3アリーナにはセレナの姿は無い。今頃私の部屋でまた椅子に座って虚空を見つめ続けているのだろう。魂が抜け落ちてしまったかのような、“ただそこに在るだけ”のような姿を思い浮かべて、胸の中でチクリと何かが痛んだ。

（こいつが、セレナの中で何か特別なものであるなら）

右肩の大型レールカノンの安全装置を解除。セーフティ アンロック 初弾を装填し、砲口を敵ISへとロックする。

（こうしていれば何らかの進展があるはず　　！）

恐らく私は昨夜の内に耐え切れなくなったのだろう。散々心の中で渦巻いていたどす黒い感情が、セレナのたった短い冷淡な言葉一つで霧散し、代わりにどうしようもない胸の痛みに襲われる。それがひどく怖くなったのだろう。

（怖い……か）

“セレナ”が言った、最後の言葉。今ではもう聞くことはないだろうその言葉は、いつの間にか私に移っていたらしい。

「制限時間は1時間だ。それまでにどちらかが倒せば勝ち。逆に倒されれば負けだ」

「1時間……長いな。貴様には3分で十分だ」

「おう、本気でいい」

それにしてもなんなんだ、こいつは。自分の実力の程が分かっているのかのようなことを言えば、今のうちにさも自分の方が上かのようなことを言ってるのける。

挑発にしては安く、強がりとしては堂々としている。

「答えは戦いの中に……か」

昨夜はあれだけ雨が降っていたというのに、今は夕焼けなんてものが射している。燃えるような赤色に染められた第3アリーナは、何か物憂げな表情をしていた。

「今さら姉を気取るつもりはないが、『同期』としてなら構わないだろう?」

アリーナに響き渡った試合開始の合図とともに、青と黒の影がぶつかりあった。

第二十七話 雨は降れども（後書き）

更新おつそい割に進んでない……。どうも玉露飴です。

次回は春馬vsラウラ。お互いの思いがぶつかりあう、大事なシーンですので、上手く書けたらいいなあ。

それでは、また ノシ

第二十八話 夜の帳が下りる前に（前書き）

大変おまたせしました！

第二十八話 夜の帳が下りる前に

「どうした、全IS中最速ではなかったのか？」

「甘く見るな、よっ！」

迫りくるワイヤーブレードを春馬は地面スレスレまで身を屈めることで^{かわ}躲し、そこから弾けるようにして空中にいるラウラに向かって肉迫する。

「ふん、そんな直線的な軌道で私に近づけるとでも？」

しかしラウラはどうやらこの行動を^{ムフ}先読みしていたらしく、さすが別のワイヤーブレードがラウラが纏うIS『シュヴァルツエア・レーゲン』から放たれた。まるで意思を持っているかのようなそれは、大気を引き裂きながら向かってくる。

（大丈夫、俺なら“見える”！）

避けることは不可能と思われたそれは、しかし空中で体を捻らせることによって回避された。ワイヤーブレードの刃先が春馬の纏うIS『アズール・カラミティ』のアーマーを掠り、小さく火花を散らして春馬の後方へと飛んでいく。

「何！？」

「もらった！」

ラウラの懐に入り込んだ春馬はすかさず両手で握っている得物、

テンペスト改で袈裟斬りに斬りつけた。

だがそれはラウラのプラズマ手刀によって遮られ、激しく火花を散らしながら鰐迫り合いへと持ち込まれる。

「ぐ……う……！」

「こ……の……ッ」

テンペスト改を握っている両手に力が入る。それはISのパワーアシストが掛った強力なもので、しかも『アズール・カリミティ』は近接強襲型というタイプ柄、パワーアシストの付加値パラメータは高い。

だが、鰐迫り合いになっているところから察するに『シユヴァルツェア・レーゲン』も負けず劣らず付加値は高いのだろう。

どうやらラウラは春馬のテンペスト改を抑えるので手一杯らしく、AICを発動させる気配はない。

春馬は両手に込めていた力をさらに強め、テンペスト改のエネルギー循環刃とラウラのプラズマ手刀との鰐迫り合いによって生じる火花の量が増す。エネルギー刃同士がぶつかることで起きる、悲鳴のような音が互いの耳を劈くつんざく。

「もらったぜ、ラウラ！」

「貴様、何か忘れてないか？」

春馬がいけると思ったその矢先、ラウラが嘲笑う（あざわら）かのような口調で話しかけてきた。春馬は思い当たりがないらしく、

疑問を抱くように首をかしげる。

「貴様が避けたと思っていた先の攻撃だが」

「ッ！？ まさか！」

春馬はラウラの『先の攻撃』でハッと気づき、思わず後ろを振り返る。そこには先ほど避けたはずのワイヤーブレードがまだ収納されずに伸びていた。

「あれは牽制だ」
フヘイン

クイクイ、とラウラのプラズマ手刀を発生させていない手の人差し指が動き、その動きに合わせてワイヤーブレードの刃先が再び春馬の方を向き、突進を開始する。

「回避……」

「させてやるとでも思ったか？」

春馬はスラスターを逆噴射してラウラとの鏖迫り合いを抜け出し、ワイヤーブレードを捌こうと加速する。しかしこれでラウラを縛っていた拘束はなくなり、当たり前だが自由に動けるようになった。

ラウラがまだ加速しきる前の春馬に向かって片腕を突き出す。そこから念動力のような見えない波が発せられ、春馬を捕えた。

「ぐっ、A I Cか！？」

「何だ、知っていたのか。だが対処できねば意味がないな！」

A I Cによつて動きを封じられた春馬の体は、指一本ピクリとも動かせない。それでも何とか抜け出そうと試行していると、間もなく春馬に向かつてきていたワイヤーブレードによつて両手両足を拘束された。

「どうだ？ 身動きをとれない気分はッ！」

ラウラは言い切ると同時に、A I Cを発動させていた腕を思い切り横薙ぎに振るつた。それと連動するかのように春馬もその方向へと飛んでいき、ワイヤーブレードに振り回される。

「ハハハッ、無様だな！ 最高に無様な姿だ！」

ワイヤーブレードで手足が拘束されている為に抜け出すことも出来ず、そのままブンブンと振り回される。

「落ちろッ！」

何秒か振り回された後、今まで横回転だったものが縦へと変わる。しかしそれは振り回す角度を変えるだけが目的ではない。目の前に広がるのはアリーナの夕日に照らされた地面。これだけでこの先ラウラが起こす行動は予測できる。

ズドオオオオン！！

ワイヤーブレードに振り回されたことによつて生まれた遠心力と、叩きつける時の加速度によつて生まれた破壊力はアリーナの地面との衝突時の爆音とそれによつて出来た砂煙が物語っていた。

それでもラウラは油断なく、右肩に装備されている大型レールカ
ノンの照準を目の前で濛々と上がっている砂煙へと向ける。

「終わりだ」

ドオオオオン！

大型レールカノンから放たれた砲弾によって、再びアリーナに爆
音と、こんどは黒煙が吹き荒れる。火の粉が飛び散り、黒煙と共に
空へと昇っていく。

ラウラが纏う『シユヴァルツェア・レーゲン』の漆黒のアーマー
がその火の粉の灯りを照り返し、さながら『悪魔』のような雰囲気
を醸し出していた。

「ふん、大層な御託ごたを並べた割にはこの様か。まあいい、これで邪
魔が消えたと思えば」

「誰が……消えたって？」

『敵IS、エネルギー出力上昇を確認 警告！ エネルギー出力
上昇を確認 警告！』

ラウラの『シユヴァルツェア・レーゲン』から、敵IS『アズー
ル・カラミティ』のエネルギー出力が上昇していると警告が響く。
それが示していることは、一つしかない。

「ほう、それがCLBという奴か？」

「まあな。まだ終わらせるわけにはいかないんだ」

春馬は口の中に混じった砂利をつばと共に吐き出し、キツと鋭い眼で空中に浮くラウラを見据える。片手でもったテンペスト改を握り直しすと、それと合わせて背中の翼から紅い粒子が爆発するようにあふれ出た。

「だから……悪いが、まだ付き合ってもらっぜ」

刹那、『アズール・カラミティ』はアリーナの地面を蹴り飛翔した。

* * *

（あー、ヒヤッとしたー）

ラウラのワイヤーブレードに思い切り叩きつけられた後、『アズール・カラミティ』のハイパーセンサーから伝わってくるロックオン警告にすかさずCLBの『イノセンス・レイ 肅清の光』を発動させたのが良かったらしい。

結果として爆発は防げなかったものの砲弾は相殺され、直撃はま

ぬがれた。ホントにヒヤツとしたぞ。寿命が縮むかと思ったくらいだ。

「ふっ！」

「ぐう……」

流れてCLBを発動させてしまったが、持って行かれていた流れを奪い返すにはちょうどいい。パワーもスピードも強化されている今ならば、さつきみたいに罅迫り合いからカウンターに持って行かれる心配もなくなる。

俺はラウラに休みなくテンペスト改を振るい続ける。どうやらラウラはそれを防ぐので精一杯らしくワイヤーブレードやAICを仕掛けるような気配は感じられない。

「調子に、乗るなア！」

ラウラは今まで片手のプラズマ手刀で防いでいたが、限界を悟ったのかプラズマ手刀を両手に展開して、挟み込むようにテンペスト改のエネルギー循環刃を受け止める。

「おっと、形勢逆転だぜ？」

「どこが、だ。貴様も、両手が、塞がっている、だろうに！」

「何だ、CLBを知ってるならこれも知ってると思ってたよ」

刹那、俺の思考を感知した『アズール・カラムティ』にシールドエネルギーが集中していく。それに気が付いたのか、ラウラは警戒

するような表情を浮かべるが、その場からは動くことは叶わない。

「この至近距離で食らったなら、まず助からない。意味は分かるか？」

「知るか、私は、お前を、倒す！」

「……そうか、分かった」

もうすでに、エネルギーチャージは終了している。後は放つだけ。だが、何故かその行為がとても罪深い行為なように思えて、なかなか発動することができない。

「なあラウラ。お前は今、誰の為に戦っているんだ？」

「そんなもの、決まっている。全て、織斑一夏を、この手で潰すためだ！」

「それは、本当に本心か？」

「……何が、言いたい」

ラウラは俺の質問に、ときれときれで答える。こうして話している間にも鏢迫り合いは続いているのだから、普通にしゃべっている俺がおかしいのだが。

「セレナの、ことだ」

「ッ！」

「あの態度の変わりよう、明らかに不自然だ。何か心当たりがあるんじゃないか？」

「……私には関係ない」

「関係ないわけない。妹なんだろう？ セレナは」

「……関係ないと、言っているッ！」

突然、ラウラが纏っていた雰囲気が変わった。今まで纏っていた廠かで高圧的な雰囲気から、まるで癩癩でも起こしたかのように、周りに当たり散らすような荒々しいものになっていく。

「本当になんなんだ貴様は！ 私の邪魔ばかりして、何が目的だ！」

「目的つて。俺はただ、ラウラとみんなが仲良くしたかっただけだ」

「それがお節介だと、不愉快だと言っている！」

「それでも俺は、ラウラとみんなが笑って喋っている姿が見たいんだ」

「そんな自分勝手に、私を縛ろうとするなッ！」

確かにラウラの言うとおり、俺のこんな考えは自分勝手の何物でもないだろう。それをお節介、不愉快だと言われても、仕方はない。俺もそれは自覚している。

「じゃあ、ラウラ。なんでお前は泣いてるんだ？」

「!？」

夕日に照らされているラウラの頬を伝う、一筋の雫。しかしその存在を、そんな自分を認めないと言つようにラウラは激しく首を横に振り、無理矢理に涙を払った。

飛び散った涙が空しく宙を舞い、下へと落ちていく。

「今のラウラは、本当に一夏を倒そうと思ってるのか？」

「うるさい、口を利くな！」

「今のラウラは、本当にみんなが嫌いなのか？」

「黙れ、黙れ黙れ黙れ！」

ラウラは俺の言葉に、まるで泣きじゃくる子供のような態度で返す。その語調には普段は感じられる冷たさなどは一切感じられず、代わりに助けを求めるような様子さえ感じられる。

「今のラウラは、本当にセレナを何とも思わないのか？」

「……ッ！」

もしも今までのラウラが、ただ一夏への恨みや憎しみだけで動いていたというのなら、こんな表情をする理由が、こんな寂しそうな表情をする理由がない。

（そつだよ。何で気づかなかったんだ）

ラウラとセレナは姉妹であることは、すでに千冬さんから聞いている。そしてその仲が、余り良くなかったことも調査済みだ。

（ここではラウラは姉妹なんだ。一人ぼっちじゃなく、家族がいるんだ）

『仲間という分類^{カテゴリー}に入るかは疑問ですが』

セレナはそう言っていたから、てっきりラウラもそう思っているものだと思っただけで勘違いしてしまった。普通に考えれば当たり前なことだったのだ。

（家族を本当にどうでもいいなんて思っている奴なんて、いるわけがない）

きっとラウラは接し方が分からなかったのだ。本来ならばいるはずがない“妹”という存在。それがひどく愛おしくて、恐ろしくて、きっとラウラのことだから、自然とぶっきらぼうになってしまったのだろう。

（俺は本当に、馬鹿野郎だ）

ここは紛れもない現実で、一夏も、鈴も、ティナもシャルルもセシリアも、みんな血が通った人間なで。そうなんでも自分に言い聞かせて来たはずなのに、それでもまだ心のどこかで『原作』という枠に囚われていた。みんな『原作』と同じだと思い込んでいた。

それが、すくなくともこんな事態へと導いた原因なんだとすれば。

それは愚劣にも程がある。

「もう、時間だ。ラウラも、もういいだろう?」

「ふざけるな! こんなところで私は……っ」

「分かってるさ。だから、安心しとけよ」

『アズール・カラムティ』の特殊推進翼から放出されていた紅い粒子が、俺とラウラを包むようにして収束する。それは宇宙のガスや塵から出来る超新星のようで、その密度はさらに濃く、大きくなっていく。

「何を……」

「言っただろ? 友人を見捨てるなんて真似、俺は出来る人間じゃないって」

「それが、なんだと、言うのだ」

「俺は絶対にラウラを見捨てたりしない。セレナも、いつものセレナに戻してやる」

* * *

「俺は絶対にラウラを見捨てたりしない。セレナも、いつものセレナに戻してやる」

「あ……」

この目の前の男は、何を言っているのだろう。

さっきまでまるで私のことを知っているかのような態度で、しかし今はひどく優しげな表情をして私に話しかける。

本当に食えない奴だ。セレナの過去も、何もかも知っているわけではないはずなのに、すでにそれを知った上で喋っているかのようにみせるなど、普通の人間じゃない。

（コイツは、何者なんだろうか）

このIS学園に転入してから、私に事あるごとに絡んでくる、面倒な奴。

私をからかって笑う、不愉快な奴。

私に注意をして謝罪を促す、お節介な奴。

誰も話しかけてこない私に、変わらない雰囲気で笑いかけてくる、おかしい奴。

そして今、私の心の中にずりりとしてきて、明りを灯した。

いつも通りなら跳ね除けていた。普段通りなら鼻で笑っていた。でも今は、何故か出来ない。代わりにどうかしたんじゃないか、というくらいに、目頭が熱い。

止めると念じても止まりはしない、逆に溢れかえるそれは視界を滲ませ、目の前にいるアイツの姿を歪ませる。それは何故かあの時の、私が初めて見た時の千冬教官の姿と被って見えた。

（お前は、何者なんだ……）

『俺か？ 別に何者でもないさ。俺は俺、ただそれだけだ』

（それでは、質問の答えになってないぞ……）

『そうか？ ま、強いて言うなら、怖がりだな』

（怖がり？ お前が？）

『ああ、そうだ。周りの誰かを失うのが怖い、どうしようもない臆病者だ』

(なら、なぜ臆病者らしくしない？　なぜ立ち向かう？)

『当たり前だろ。そんなことをしたら、絶対に誰かを失う。それなら、怖いのを歯を食い縛って我慢して、失わないようにした方がマシだからな』

(それは、矛盾しているぞ)

『逆に矛盾しないで生きるほうが、辛いと思うぜ』

(辛いことは、慣れている)

『辛いことに慣れる人間なんて、いねえよ。慣れたと思っていても、心のどこかで悲鳴をあげてるもんだ』

(……………)

『そして俺は、偽善者おごうだからな。悲鳴を聴かないフリして通り過ぎるなんて、出来ない』

(なら、どうするんだ？)

『どうするって。普段通りに話かけて、どうでもいい事を駄弁って、
傍そばにいてやる。励ましたらはいさよなら、じゃ寂しいだろ?』

(……お前は、強いんだな)

『強くあろうとするから、強いんだよ。強くなけりゃ何も出来ない。
俺はもう十分、守ってもらったからな。守られてばっかじゃ、カッ
コつかないだろ?』

(それは……)

『だから今は、お前を守ってみせるさ。ラウラ』

ああ、そうか。お前は

アリーナを中心、中空で浮いていた紅い球体が、何もかも吹き飛ばすかのように破裂する。それは夕日の赤すら塗りつぶし、上書きし、押し広げていく。

空の向こうから迫っていた、夜の帳を払うかのように。

第二十八話 夜の帳が下りる前に（後書き）

これにてラウラVS春馬戦は終了。次回からはようやくセレナを軸としたストーリーを展開していきます。

といってもだいぶセレナの状況は放出してしまっているので、そう長引かないと思いますが。

ご意見やご感想、誤字脱字などお待ちしております！

でわまたゝ ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8368o/>

IS インフィニット・ストラトス ～紺碧の烈風～

2011年6月15日20時42分発行